

吉川英治文庫

邂逅。 行く木曽路、 その人々が、 蔵 なしてゆく。 お杉婆であり そしてまた、 吉 に多大の自信とそれ以上 岡一門との決闘を切り抜けたことは、 山ならば三合目と言ったが それは 著者は 今後 遙 大勝負の後 宿命 かな剣聖を思い、 お 0 武 通 「風 の人 蔵 であり、 に訪 · 小 の巻」を終るにあた の運命 の自省を与えた。 次郎 れたゆくりなき を微 叉八であ お通を案じ であっ いま武蔵 妙に n) た。 織 武 n

風を孕

み、

四

一合目

の急坂に

かかか

る。



第1刷発行 昭和50年8月1日 昭和59年1月20日 第22刷発行

吉川英治文庫52 宮本武蔵缶 定価480円

Ш 英 古 治 著 者 集 編 株式会社 六興出版内 吉川英治文庫刊行会 藤 勝 発行者 久 加 株式会社 講 談 発行所 東京都文京区音羽2-12-21 振替東京8一3930 電話東京03(945)111(大代表)

Printed in Japan c) 吉川文子 1975 (文2)

凸版印刷株式会社 製本所

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り ください。送料小社負担にてお収替えします。

ISBN4-06-142052-6(1)

印刷所

吉川英治文庫

52

宮本武蔵(五)



空 の 巻 (つづき)

さしえ

石 井 鶴 三矢 野 橋 村

宮 本 武

蔵 (五)



朝念観世音

……常楽我常

……与仏有縁

風 の巻 (つづき)

菩提

刀き

「……与仏有因の芽時を――ここ無動寺の林泉は寂として、雲の去来のうえにあった。の芽時を――ここ無動寺の林泉は寂として、雲の去来のうえにあった。がらに見える。三界のほこりや芥の大河も遠く霞の下に眺められ、叡山の法燈鳥語もまだ寒い木がらに見える。三界のほこりや芥の大河も遠く霞の下に眺められ、叡山の法燈鳥語もまだ寒い木大四明峰の南嶺に高く位しているので、東塔西塔はいうまでもなく、横川、飯室の谷々も坐な大四明峰の南嶺に高く位しているので、東塔西塔はいうまでもなく、横川、飯室の谷々も坐な

風 卷 0

……念々従心起

……念々不離心」

無動寺の奥まった一間のうちから、誦すともなく唱うるともない十句観音経の声が 無動寺の奥まった一間のうちから、誦すともなく唱うるともない十句観音経の声が

うよりは自ら出る呟きのように漏れてくる。

墨で洗ったような大床の廻廊を白い衣を着た稚児僧が、粗末な御斎の膳を眼八分にささげ、そ その独り語は、いつのまにか、われを忘れたかの如く高くなり、気がつくとまた、低くなっ

の経音の聞える奥の杉、尸の内へ持って入った。

「お客様」

稚児僧は、膳を隅へおいた。

そしてまた、

「……お客様」

膝をついて呼んだが、呼ばれた者は、後ろ向きになったまま背をかがめており、彼の入って来

たのも気づかない様子なのであった。

数日前の朝 見るかげもない血まみれな姿して、剣を杖に、ここへ辿りついて来た一修行

この南嶺から東に降れば、穴太村白鳥坂に出るし、西に降ればまっすぐに修学院白河村一といえば、もう想像がつこう。

あ

の雲母坂や下り松の辻につながる。

「……お午餐を持ってまいりました。 お客様、ここへお膳をお置きいたします」

やっと、 知ったように、

「オウ」

武蔵は、背をのば Ļ 振りかえって膳と稚児僧のすがたを見ると、

「おそれいります」

坐り直して、礼儀をした。

その膝には、 白い木屑がちらかっていた。 細 か い木屑は、 **畳や縁にもこぼれている。栴檀かな**

にかの香木とみえ、微かににおう心地がする。

「すぐ召しあがりますか」 「はい、戴きます」

「じゃあ、お給仕申しましょう」

柄と彼が今、膝のうえから下ろした五寸ほどの木材をじっと見ていたが、 | 飯椀をうけて、武蔵は食べにかかる。稚児僧はその間、武蔵のうしろにキラキラ光っている小「憚りさまですな」

「お客様、なにを彫っておいでになるんですか

「阿弥陀様?」「仏様です」

いいえ、観音さまを彫ろうとしているのです。けれど、鑿の心得がないので、なかなかうまく

彫 手をだして、指の傷を見せると、稚児僧はその指よりも、 れない。 この通り指ばかり彫ってしまう」 武蔵の袖口から見える肱の白い繃帯

に眉をひそめて、

「脚や腕のお怪我は、 どんなでございますか」

「……ア。その方も、お蔭でだいぶよくなりました。 御住持にも、どうかお礼をいっておいてく

様がありますよ。 「観音様をお彫りになるなら、中堂へ参りますと、誰とかいう名人の彫ったという作のよい観音 御飯がすんだら、それを見に行きませんかっ

「それはぜひ見ておきたいが、中堂まで、道はどれほどあろうかな

稚児僧は、答えていう。

「ハイ。ここから中堂までの道は、 わずか十町ほどしかございません」

「そんなに近いのか」

そこで武蔵は、食事が終ると、そのお小僧に伴われて、東塔の根本中堂まで行ってみるつもり

で、十幾日目で、久しぶりに大地を踏んだ。

にうけた傷痕にも、山風が滲み入るここちがする。 もうすっかりよくなったつもりでも、上を踏んで歩いてみると、左の脚の刀痕がまだ傷む。 腕

けれど、颯々と、鳴りゆらぐ樹々のあいだに、山桜は散って飛雪を舞わせ、

空はやがて近い夏

ようとして熄まないものに、卒然と、筋肉がうずいてくるのを覚えた。 の色を湛えかけている。武蔵は、萌え出る植物の本能のように、体のうちから外へ向って象われ

お客様」

と、稚児僧は、その顔を見あげーー

「あなた様は、兵法の修行者でいらっしゃいましょう」

「そうだ」

「なんで観音様なんか彫っているんですか」

「お仏像を彫ることを習うよりも、その暇に、なぜ、剣の勉強をなさらないのです?」

童心の問いは時によると、肺腑を刺す。 武蔵は、脚と腕の刀痕よりも、その言葉に、ずきんと胸の傷むような顔をした。

そう問うこのお小僧の年頃も十三、四。

下り松の根元で、闘いに入ろうとするや否、真っ先に斬り捨てたあの源次郎少年と――ちょう

ど年ばえも体の大きさも似て見える。

あの日。

幾人の傷負いと、幾人の死者を作ったろうか。

武蔵は、今も、思い出すことができない。――どう斬ったか、どうあの死地を脱したのか、そ

れもきれぎれにしか、記憶がない。

ただあれから後、眠りについても、ちらついてくるのは――下り松の下で、敵方の名目人であ

る源次郎少年が、

----怖いっ)

(仮借はいらぬ、斬れ!) な空骸だ。 と、一声さけんだのと、松の皮といっしょに斬られて大地へころがった、あのいたいけな可憐 という信念があったればこそ、

武蔵は断じて真っ先に斬ったのであるが――斬ってそしてこう

して生きている後の彼自身は、

(なぜ、斬ったか)

と、そぞろに悔い、

(あれまでにしないでも)

と、自分の苛烈な仕方が、自分でさえ憎まれてならない。

われ事において、後悔せず

旅日誌の端に、彼はかつて、自分でこう書いて心の誓いに立てていた。 ――けれど源次郎少年

のことだけは、いくらその時の信念をよび返して心に持ってみても、ほろ苦く、うら悲しく、心

が傷んでたまらなかった。剣というものの絶対性が――また修行の道というものの荊棘には、か かることも踏み越えてゆかねばならないのかと思うと、余りにも自分の行く手は蕭・条 としてい

(いっそ、剣を折ろうか)る。非人道的である。

とさえ思った。

とだよし

養のためというよりは、彼自身が自身のたましいに対する慚愧の菩提行であった。手脚の傷の癒える日を待つつれづれに、ふと、観音像を彫りかけてみたのは、酒 か から醒め、 ら醒め、われとわが身に回ってみると、彼の胸には、菩提を生じないではいられなかった。殊に、この法の山に分け入って幾日、迦陵頻伽の音にも似た中に心耳を澄まし、血しおの酔い 源次郎少年の供

Ξ

---お小僧」

んあるが、あれはどういうものだろう」 「じゃあ、源信僧都の作だとか、弘法大師の彫りだとか、この御山にも聖の彫った仏像がたくさ武蔵はやっと、答える言葉を見つけ出していった。

「そうですね」

「そういえば、 稚児僧は首をかしげて、 お坊さんでも、 絵をかいたり、彫刻をしたりするんですね」

書を習うんでも然り、各~、仰ぐ月は一つだが、高嶺にのぼる道をいろいろに踏み迷ったり、他はり無我の境地から、弥陀の心に近づこうとするためにほかならない。――絵を描くのも然り、 の道から行ってみたり、いずれも皆、具相円満の自分を仕上げようとする手段のひとつにするこ 「だから、剣者が彫刻をするのは、剣のこころを琢くためだし、仏者が と、得心したくない顔つきをしながら、頷いてしまう。 刀を持って彫る のは、 4

型::

に落ちかけると、 お小僧はおもしろくなくなったとみえ、小走りに先へ駈けて、草むらの中

の一基の石を指さし、

「お客様、ここにある碑は、 慈鎮和尚というお方が書いたんですって

と、案内役の方に移る。

法の水。あさくなりゆく近づいて、苔の中の文字を訓んでみると、

末の世を

比叡の山かぜおもへばさむし

が、今なお、法師のうちには、飛刀横行の遺風が残っているし、座主の位置をめぐって、相剋のの五山は、政治や特権から放逐され、今では寂として、元の法燈一穂の山に回ろうとしているうおそろしく破壊的でまた建設者があらわれて、この比叡山にも大鉄槌を下したため、それ以後武蔵はじっとその前に立ちつくしていた。偉大な予言者のようにその苔石が見える。信長とい武蔵はじっとその前に立ちつくしていた。偉大な予言者のようにその苔石が見える。信長とい

権謀や争い事はやまないと聞いている。 経済の習慣によって生きているという現在の風を思いあわせると-俗生を救うためにある霊山が、人を救うどころか、却って俗生の人に飼われて、 無言の予言を聞かないではいられなかった。 武蔵は無言の碑の前にあっ からくも布施

「サ、参りましょう」

無動寺の仲間僧である。 先をうながして、お小僧が歩みかけると後ろから手をあげて、呼ぶ者があった。

「オイ清然、おまえは一体、お客様をご案内して、どこへ行くつもりじゃっふり顧る二人の前へ、その仲間僧は駈けて来て、まず、お小僧に向い、

「中堂まで行こうと思って」

「なにしに」

ら、それなら中堂に、 「お客様が、毎日観音様を彫っているでしょう。ところが、巧くほれないと仰っしゃるもんだか むかしの名匠が作ったという観音様があるから、それを見にゆきませんか

といってーー」

「では、きょうでなくても、 いいわけだのこ

「さ、それは知らないが」

武蔵へ憚って、あいまいにいうと、武蔵はそれを引き取って仲間僧へ詫びた。

「御川もあろうに、無断でお小僧を伴れまいって悪いことを致したな。元より、 きょうとは限ら

ぬこと、どうぞお連れかえりください」

っていただきたいと思いまして」 「いいえ、呼びにまいりましたのはこの稚児僧ではなく、あなた様におさしつかえなければ、戻

なに、拙者に?」

「はい、折角、お出ましになった途中を、なんとも恐れ入りますが**」** 拙者を訪ねて来た者でもあるのでござるか」

それが一かたまり、

5 呼び戻して来いというて、頑として動かないのでございます」 一応は、留守と申しましたが、いや今ついそこで見かけた、どうでも会わねば なら

幻

か

はて誰だろうか、武蔵は小首をかしげながらともかくも歩み出した。

四

111 法師の横暴ぶりは、政権や武家社会からは、完全に追われていたが、尾羽打ち枯らしても、

雀百までの喩えのとおり、未だにすがたも革まらないで、高木履をはき、大太刀を横たえていまだ山法師そのものの棲息は、この山に残存していることは勿論である。

るのがあるし、長柄刀を小脇に持っているのもある。

ざっと十名ほど、無動寺の門前で、

待ちかまえていた。

「……来た」

あれか」

風

僧と、その二人を迎えに行った仲間。僧のすがたとへ、じっと、視線をそろえた。「年打ちし合いながら、朽葉色の頭巾や黒衣の影が、もうそこに近く見えて来た! 武蔵と稚児

(何用だろうか?)

迎えに来た者が知らないのであるから、武蔵には元よりわかっていない。

て知合などはいそうもないのである。
ただ東塔山王院の堂衆だということだけは途中で聞いた。しかしその堂衆のうちに、一人とし

「大儀じゃった。おぬしらに用はない。門内へ退ッ込んでおれ」

ひとりの大法師が、長柄刀の先で、使いにやった仲間僧と稚児僧とを追い払った。

そして武蔵へ向い、

「そこもとが宮本武蔵か」

と、訊ねた。

先が礼を執らないので、武蔵も直立したまま、

「されば」

と、頷いてみせた。

「中堂延暦寺の衆判により申しわたす」すると、その後ろから、ずいと・足進み出した老法師が、

と奉書でも読むような口調でいった。

?....?

武蔵は、啞然として、相手の厳めしさをながめていた。

無動寺では念のため、中堂の役寮へ届けを出して、 なぜだろう。不審なわけだと思う。初めこの無動与へたどりついて、身がらを依頼した折に、

(さし閊えない)

という許可をうけ、その上で、自分の滞在を許してくれたのであった。

ば、明朝、発足つかまつりましょう。それまでの御猶予を」 仰せの「趣」は承知いたしました。支度もととのわず、今日はもはや明るい間も乏しゅうござれそれを急に、罪人でも追うように追い立てるには、なにか、理由がなくてはならない。

武蔵は一応、そうおとなしく受けておいて、

か。先に、無動寺よりの届けには、滞在のこと苦しからずと、おゆるしあったものを、遠かな御 しかし、これはなにか、司直のお指図でござろうか、それとも当山の役寮の沙汰であろう 甚だその意を得ぬが」

突っ込むと、

いろと悪評が伝わり、御山に匿まい置くべからず――という衆議になったからじゃ」 一名で相手にしたさむらいと、おてまえに、満腔の好意をもっていたのであるが、その後、いろ「おう、そう訊くならばいって遣わそう。役寮においては最初、下り松にて吉岡方の大勢をただ

一……

鯴

いるか――想像するに難くないからである。 武蔵は、さもあろうことのように頷いた。その後の占岡方が、世間でどう自分をいいふらして

ここで、そんな噂をまた聞きした人々と、 なにをかいい争おう。

武蔵は冷やかにもういちど、

「わかりました。否やもござらぬゆえ、明朝は、必ず立ち退きまする」 答え放して、門内へはいろうとすると、その背へ、唾するようにべつの法師たちが口々に罵っ

「聞えたか」

「羅·見 利*よ と !

Ŧi.

「なんじゃと」 憤っとしたに違いない、武蔵は足を止め、そして自分に嘲罵をあびせた堂衆をねめつけた。

ざとそれがしに喧嘩でも売ろうと召さるか」 「み仏に仕えるわれわれ、喧嘩など売る気はみじんもないが、 「役寮の命とあるゆえ、神妙に仰せごとを受け申しておるに、 役寮の命とあるゆえ、神妙に仰せごとを受け申しておるに、口ぎたない罵詈は心得申さぬ。こういったのは今、武蔵のうしろから、外道と呶鳴った法師だった。武蔵は心外そうに、 自のすか 。 ら喉を破って、 今のような言

わ

葉が出てしもうたのだから仕方がない」

「天の声だ」

すると、他の法師も、

「人をもっていわしめたのだ」

かし、いかにも自分に挑むような彼らの態度に、固く自分を、警戒して黙っていた。蔑みの眼と――嘲罵の唾とが、武蔵の身にあつまった。武蔵は、耐えられない恥辱を感じた。加勢するように、喚きかかった。

生徒である。生意気ざかり、知識自慢、頭でっかちの街気紛々なのが揃っているのだった。この山の法師といえば、舌長いことでは古来から有名である。堂衆というのはいわゆる学 じゃ、腹でも立てて来ることか、碌に物もいえんではないか」 「なんじゃ、里のうわさが大きいので、然るべき侍かと思うたが、こう見たところ、つまらぬ奴 堂衆というのはいわゆる学寮の

黙っていればいるで、なお、毒舌をふるうので、武蔵もやや色を作した。

「人をしていわしめるといわれたな。天の声といわれたな」

「そうだ」

傲然と、いい押してくる。

「それは、なんの意味か」

「わからんのか。 山門の衆判をいい渡されても、まだ気がつかんのか」

「……分らぬ」

「そうか。いや汝の神経ではそうもあろうて。愍れむべき男は汝だ。 だが、輪廻はやがて思

い知るであろう」

「武蔵。……そこ許の世評はひどく悪いぞ。下山しても気をつけろよ」

「世評など、なにものでもござらぬ――いわしておけばいいのだ」

はない」 「正しい! 「正しい!」おれは寸毫も、あの試合において、卑劣はしていない。……俯仰して恥じるところ「ふふん、なにやら、自分が正しそうなことを」 と対に称われるさむらいといえるかどうじゃ」

「待て。そうはいわさん」

「どこに武蔵の卑屈があったか。 卑怯未練をしたというか。 剣に誓う、 おれの戦 いに 微塵

邪 はない!」

「天晴れ顔して、大きくいいおるわ」

「ほかのことなら、聞き流しもするが、 批者の剣にかかわって、 あらぬ誹謗をいいたてると、 許

さぬぞっし

か、生命知らずなところだけは大いに買おう。えらいと称えておいてもいい。――しかし、なに目にも余る大勢であった。敢然、一人であたって戦いぬいたそこ許の元気というか、暴勇という がゆえに、 「然らば、いおうか。この問いに対して明答できるものなら答えてみい。—— まだ十三、四歳の子供まで斬ったか。 あの源次郎とよぶ幼少を、無残にも斬り伏せた なる程、 古岡

かー

武蔵の面は、

水をあびたように悄然と、

血のいろを失った。

様なのだ。……いかに武道の上とはいえ、 様なのだ。……いかに武道の上とはいえ、血も涙もない仕方ではあるまいか。外道、羅刹の名をといえば……あの幼少源次郎しかないのだぞ。源次郎を斬ったのは、吉岡家に断絶を与えたも同 もってして、まだいいたらぬ気がするわ! 「二代目清十郎は、片輪となって遁世し、 血も涙もない仕方ではあるまいか。外道、 舎弟伝七郎も、汝の手にかかって果て、後に残る血筋 それでもおぬしは人間か、いや、この国の山ざくら

じっと、さし俯向いて沈黙しつづけている武蔵に対して、

少を、敵の数に入れて斬った武蔵の心はゆるし難い。この国のさむらいとは、そんなものじゃな もののあわれを知っているもの……。叡山は、汝を追う! 一刻もはやく、この御山を出て失せ 「山門の憎しみもそのいきさつが知れて来たためじゃ、他のいかなる事情を酌んでも、あんな幼 もっと、強ければ強いほど、傑出していればいるほど、優しいもの、ゆかしいもの、また、

いっし

あらゆる罵詈、あらゆる嘲蔑――武蔵の胸には少なくもそう応えた――を堂衆たちは彼に浴び

せかけて、ぞろぞろと帰って行った。

風

甘んじて、武蔵は、その笞をうけ、ついに黙りとおしてしまった。

――が、しかし、それに対して答えがなかったのではな

(おれは正しい! おれの信念はちがっていない! あの場合、ただ、 あれ以上に出るしかおれ

の信念を徹する仕方はなかったのだ)

彼は、心のうちで、いいわけでは決してない! では、なぜ源次郎少年を斬ったのか。 ――今もこの信条は取ってうごかないのである。

(敵の名目人とあるからには、それは敵の大将である。 それに対して、彼は自分の胸のうちでは、 明らかにいい切れる。 三軍の旌旗である)

あの際、

斬っても、残り五十人は、後で凱歌をあげるだろう。 斬れば、善戦したものといわなければならない。だがもし、吉岡の遺弟ばかりを、たとえ二十人 にも、 (敵は、 な ――全軍の護っている中心の象徴に、自分の一撃を下しておきさえすれば、たとえ、自分が 誰よりも真っ先に敵方の旌旗であるところの大将首をまず先に挙げておく必要があったの 七十人からの人数であった。 それを斬って悪いか。また、こういう理由もある 斬り死にしても、後に、 、自分の勝利は証拠だてられる) いかに、 自分が舎利となって戦っても、そのうち、十名も ――だから自分が、 勝名乗りを揚げるため

もっと、もっと、彼をしていわしめるならば、剣の絶対的な法則とその性質からでも、理由は

なお幾言もいうことができる。 けれど武蔵は、堂衆たちの面罵に対して、とうとう、それを一言もいわずにしまった。

い寝ざめの悪さし 寝ざめの悪さ――傷ましさやら慚愧やらを――彼ら以上に、生々しく胸にもって傷んでいるかなぜなら、それほどの理由をかたく信念しても、他人でない彼自身の胸のうちに何ともいえな

「……ああ、修行なんて、もう止 めようか?」 らである。

うつろな眼をあげて、武蔵はなお、門前に立ちつくしていた。

も、その花びらのように霏々と砕けて宙にさまよう心地がする。 **暮れかかって来る夕風夕空の中に、白い山ざくらは散りまよっている。きょうまでの一心不乱**

「……そして、 お通さんと」

彼はふと、町人の気楽さを思いうかべた。光悦や紹由の住んでいる世間を考えた。

大股に、

彼は、無動寺の中へ姿をかくした。

や!

外にかがみこんだ者があった。

り上げて、この寺に遺してゆこう) 、巧拙は問うところでない、供養の心もちが、菩提へとどけば足りるのだ。 武蔵は、短檠の下に坐った。

部屋にはもう明りがともっていた。ここも今夜かぎりに去らねばならない。

今夜のうちに彫

はじめた。 そして彫りかけの観音像を膝の上に抑え、 と、戸締りもない無動寺の大郎下へ、そっと這いあがって、 彫刀を把って、一念にまた、 のろまな猫のように、 新しい木の屑を散らし 部屋の

風

丁字を剪る。 短檠の灯が繋くなる……

宵のうちすでに、山は、深沈とふかい静寂に囲まれていた。サクリ、すぐ、武蔵はまたかがみ込んで、彫刀を把る。 サクリと彫刀の鋭利な先

ちに没頭しきってしまう。今――刀を把って観音像を彫りにかかっているのを見ても、体がへと 『武蔵はまったく彫刀の先に没しきっていた。彼の性情はなにへ対しても、一度それに向うと直で木を削いでゆくのが微かに雪の積むほどにひびく。

とになりはしないかと思われるような情熱に燃えきっている。

に声を落し、また、燭を剪っては、一刀三礼のこころを像に向って凝らした。 のうちで唱えていた観音経の声が、我を忘れて次第に大きな声になってゆく、気がつくと急

「……ウム、どうやら」

背を伸ばした時は、 東塔の大梵鐘が、二更を報じていた。

く、自分の憂愁とともに、源次郎の霊を弔ってもらおうと発願したものであった。 もって、亡き一少年の冥福を祈りつつ彫りあげたものなのである。それを寺に遺しておいて、 「そうだ、挨拶もせねばならぬし、この像も、今宵のうちに、住持におねがいしておこう」 ざっとした荒彫ではあった。けれど武蔵にとっては、 自分のたましいを打ちこめ、慚愧の涙を 永

して夜具までのべた後、箒をかついで庫裡へ戻ってゆく。(彼が去ると間もなく、入れ違いに稚児僧がはいって来て、部屋の中の塵を箒で掃き出した。そで。――彼は彫り上げたそれを持って、やがて部屋を出て行った。

――すると、誰もいないはずのそこの障子が、その後で、 ズズズと静かに、すこし開いて、 ま

た閉った。

やがてのこと---

の具を枕べにおき、短檠の灯を消して、寝床についた。武蔵はなにも知らす帰って来たのである。住持から受けて来たらしい餞別の笠、武蔵はなにも知らす帰って来たのである。住持から受けて来たらしい餞別の笠、 戸閉りはしないので、風はじかに四方にあたる。外の星明りに障子は蒟蒻色に明るくて、樹々 旅

0 ……かすかな鼾声になってゆく。武蔵は眠りについたらし影が海原の荒びを思わせる。

眠 りのふかくなるほど、寝息も長く数えられた。 ح ا 隅の小屛風の端がすこし動き、ず……

- ふと、武蔵の寝息が休むと、人影はぺたっと、布団より薄べたくなり、じっと寝息の深度を測と猫のように背の尖った人影が膝で這い寄って来る。

りながら、根気よく大事をとって機を待っている。

――突然! ふわりっと、黒い真綿でもかぶさるように、武蔵の上へその人影がのしかかった

のである――と見えたかと思うや否や、

「うっ、うぬっ。思い知れやっ!」 いきなりー ---脇差の切ッ先であった。寝首の喉へ、力まかせに、キッと走る。

と横手の障子に、その人間は飛んで

すると、その切ッ先の行方も分らぬほどし だあんっ

行った。

重い風呂敷づつみのように投げつけられた人間は、 ひッと一声呻いた限り、障子とともにもん

どり打って、外の聞へ転がり落ちた。

者なのである。それに布で顔は包んでいたが、髪の毛も麻のように白かったし……。 投げつけたせつな、武蔵はその曲者の体重が軽いのではっと思った。猫ほどしか重量のない曲 だが、彼はそれには一顧もしないですぐ枕元の太刀をかかえ、

「待てっ」

と縁を飛び降り、

「折角の訪れ、ご挨拶を申すであろう。 お返しなされ」

いいざま、大股に駈けて、闇の跫音を追いかけた。

嗤ってすぐ引っ返して来た。 しかし本気で迫う気ではないらしく、乱れあって彼方へ散って行く白い刃影や法師頭巾の影を

って来たとは知ったが、逃げることも起つこともできなかった。 投げつけられた弾みに、ひどく体を打ったのであろう、お杉婆は大地に呻いていた。武蔵が戻

゙.....アッ。おばばではないか」

武蔵は抱き起こしてみた。

自分の寝首を狙いに来た首謀者が、吉岡の遺弟でも、この山の堂衆でもなく、老いさらぼうた

同郷の友の母であったことは、彼にも意外であったとみえる。

ない。 は、おばばであったのだな。健気な老婆のことばと聞き、堂衆たちは一も二もなく信じたに違い「ああ、これで解けた。中堂へ訴え出て、わしの素姓や、わしのことを、悪しざまに 告 げ た 者 また、同情もしたであろう……。その結果わしを山から追うことに決め、夜陰に乗じて、 た者

おばばを先達にここへ加勢にきたものとみえる……」

「……ウウム、くるしい、武蔵、もうこうなる上は、ぜひもない。本位田家の武運がないのじゃ。

ばばの首を討て」

苦悶しながら、お杉はやっとそれだけいった。

り、足腰が懶かったりして、とかく健康もすぐれなかった揚句である。たに違いないが、もう三年坂の旅籠をたつ頃から、お杉は風邪をこじらしていて、微熱があったしきりと藻がくのであったが、武蔵の力を拒むだけの力すらないのだった。打ちどころも応え

その上、下り松へ行く途中、 ああして又八から棄てられてしまったことも、さすがに老いの心

へ大きな傷手となり、体にも利いていたに相違ない。

「――殺せっ、この上は、ばばの首を斬れ」

対ぶ捨てばちな狂言ではなく、真実、事ここにいたったと知って(もうこれまで)という観念の 下に、いっそ早く死にたいと願って、正直に喚いたものかも知れなかった。 と今、彼女がもがいていうのもそういう心理や肉体の衰えを考えてやると、あながち弱者のさ

だが武蔵は、

「おばば、痛いのか、……どこが痛い? 両の腕に、軽々と、彼女のからだを乗せ、自分の寝床の中へ運んで、その枕元に坐り、 ……わしがついているゆえ案じぬがよいぞ」 夜の明

けるまで、看護していた。

夜が白みかけるとすぐ、 お小僧が頼んでおいた弁当をつつんで持ってきてくれた。

方丈からは、

こしも早く御下山をねがいます」 「お急き立てするようですが、昨日、 中堂からやかましくいい渡されておりますゆえ、今朝はす

という催促。

もとより武蔵もそのつもりなのである。 すぐ旅装して立ちかけたが、さて困ったのは病人の老

婆だった。

これを寺に計ると、寺でも、そんな者を残されて行っては迷惑といったような顔つきで、

「では、こうなされては如何です」

便宜をとってくれた。

牛は大津の渡船場なりあの辺の問屋場へなり置いて行ってくれればいい――というのであった。 にまわっているから、その牛の背を借りて、病人をのせ、大津へ下山されたがよかろう。そして 大津の商人が荷をのせて来た牝牛がある。その商人は牝牛を寺にあずけたまま、丹波路へ用達

乳

四明ケ岳の天井を峰づたいに歩いて、山中を経て滋賀に下りてゆけば、「常、帝 ちょうど三井寺のうし

ろへ出ることができる。

「……ウウム……ウウム」

婆は時々、陣痛をこらえるように、牛の背で呻いていた。

その婆を乗せた牝牛の手綱を持って、武蔵は、牛の先に歩いてゆく。

振顧って---

ば

武蔵は、 慰めていう。

「苦しければ少し休もうか。 おたがいに急ぐ旅ではないからな」

(なんの、汝れなどに、不愍をかけられて、怨みを忘れるような婆ではないぞ――)で――武蔵が優しく劬われば劬わるほど、に、こういう世話になるのを好まない性来の勝気が――むしろ無念そうに顔の底に潜んでいた。 牛の背に俯ッ伏したまま、 お杉婆は無言だった。その無言のうちには、仇と思う人間の ため

と、強いて憎悪に努め、よけいに反感を昂めるのだった。

それほど強い憎みも敵愾心も持たなかった。けれど、まるで自分を呪うために長生きしているかのようなこの老婆に対して、なぜか武蔵は

計られたり、陥 行為であった。 うことができないのであ 力と力との対立では、余りに弱過ぎる敵であるせいもあろうが、その実、きょうまでの間 ――にもかかわらず、どういうものか、武蔵にはこの年寄りを、心から敵だと思 れられたり、武蔵が一番苦しめられた敵は、この最も腕力のない年寄りの敵対 る。

れほどこの老獪なばばのために、事を邪げられたり、脛を掬われるような思いを嘗めさせられて境内では、群衆の中で、唾せんばかり罵倒されているし――その他、きょうまでというもの、どでは、まったく、眼中にないのかといえば、故郷ではひどい目に遭わされているし、清水寺の

いるか知れないので、その折々には、

(おのれ、どうしてやろう)

自分の寝首を搔かれ損なってみても、心底から、と、八つ裂きにしてもあき足らないほど、憎くも思い、 憤りもするのであったが、さて.―

(悪婆!)

と、怒りにまかせて、この細ッこい皺首を捻じ切る気にはなれなかった。

ばかりいるし、辛辣な毒舌も振わないので、武蔵は一しお不愍になり、はやく体だけでも丈夫にそれに今度は、お杉婆その者もまた、いつになく元気がない、ゆうべの打身を痛がって呻いて ゆうべの打身を痛がって呻いて

してやりたいがと思うのだった。

朝から弁当も食べていないが、腹は空いていないかな。……水でも飲みとう は な い か。……な「おばば——牛の背も辛かろうが、大津まで行けば何とか思案がつこうで、も少しの辛抱。……

この峰づたいの天井から眸を四顧にやると、北陸の遠い山々から、琵琶の湖はいう まで も なに? ……要らぬ……そうか』 く、伊吹もみえ、近くは瀬田の唐崎の八景まで一つ一つ数えられる。

「休もう。 武蔵は、牛の手綱を、 ――おばばも牛の背から降りて、すこし、この草の上に体を横にしてはどうか」 樹につないで、お杉婆を抱いて下ろした。

ア痛」

お杉婆は顔をしかめ、武蔵の手を拒んで、草の上に俯ッ伏した。

振って、水もいらぬ、食べ物もほしくないという。 武蔵はしきりと案じて、その背を撫でてやりながら訊ねたが、強情な婆は、頑なに、首を横へ「おばば、水は欲しゅうないか。……なんぞ、食べ物でも少し口へ入れてみる気はないか」 皮膚は土色に、髪はそそけ立ち、このまま、 ほっておけば絶え入りそうな重態にも見える。

「弱ったのう」

武蔵は途方に暮れ---

じゃないか。……おばば、 「ゆうべから、水一滴口に入れず、 せめて、わしの弁当を半分ほどでも食べてくれぬか」 薬をやりたいとは思うが人家もなし……疲れてしまうばかり

「けがらわしい」

「なに。穢らわしいと」

「たとえ、野末に行き倒れて、鳥や獣の餌食になろうとも、仇と狙うおぬし如き者から、飯など

もろうて口に入れようか。馬鹿な――うるさいッ

背を撫でている武蔵の手を、

「ウム」

だ嘆息されるのであった。 本的な誤解さえ除くならば、 武蔵は、腹が立たなかった。 自分の気持も婆によく分ってもらえるであろうにと、それだけがた むしろ婆の気持に共感ができるのである。この婆の抱いてい

うな根気をもって、 自分の母の病のように、 武蔵はなにをいわれても甘んじて受け、そして病人の駄々を宥めるよ

「でも、 おばば、 このまま死んでしまっては、 つまらないじゃないか。又八の出世も見なければ

なにをいう!」

噛みつきそうに、婆は歯を剝いていった。

「そ、そのようなこと、おぬしの世話にならいでも、又八は又八でいまに一人前 に なって 行 く

「……それは成って行くだろうと俺も思う。だから、おばばも元気を出して、ともどもに、彼の「

「武蔵! ……汝れは、似非善人じゃの。そのような甘い言葉に騙かされて、怨みを解くような息子を励ましてやらねばなるまい」

わしではないぞ。……無駄なこと、耳うるさいわい」

まおう。武蔵は、黙然と立って、婆と牝牛をそこに残し、婆の眼にふれないところへ去って、弁 とりつく島もない血相なのだ。たとえ好意にせよ、これ以上はかえって逆らうことになってし

(柏の葉で巻いてある握り飯であった。飯の中には黒い味噌が入っ てい る。武蔵には美味かっ当を解いた。 りの少しをまた、柏の葉でつつんで懐中に残しておいた。 た。その美味さにつけても、どうかしてこれを半分でも婆が喰べてくれればよいがと思い

無造作に油けもなく束ねて肩へ垂げている。 岩の蔭から振向いてみると、通りかかった里の女房であろう、大原女のような山袴を穿き、髪岩の蔭から振向いてみると、通りかかった里の女房であろう、大原女のような山袴を穿き、髪 すると、婆のそばで、話し声が聞える。

牝牛の乳をやったらなおよくなろうと思うのさ。ちょうど壺を持っているし、この牝牛の乳をす こし搾らせてくれまいかのう」 「なあ、お婆さんよ、わしの家にも、この間から病人が泊っていての、もうだいぶ癒いが、この

女の話が、高声にひびく。

婆は顔をあげて、

は、 と、武蔵に向ける時とはちがう眼ざしを耀かして、そう訊ねていた。ほ、牝牛の乳が、病によいとは聞いていたが、その牛から乳がとれる 、牝牛の乳が、病によいとは聞 その牛から乳がとれる

酒壺の中へ白い液を懸命に搾り取っていた。山家の女はなお婆となにかいい交わしている間に、牝牛の腹の下にかがみ込んで、抱えていた。

「有難うよ、おばあさん」

牝牛の腹の下から女は這い出した。搾った乳の瓶を大事に抱えて、礼をいうとすぐ去りかけた。

「ア。——待たしゃれ

お杉婆は、呼び止めた。ひどく慌てて手をあげたのである。

「女子。……わしにも、その牝牛の乳をくれぬか。ひと口、飲ませてくれまいか」(紫)そして辺りを見廻した。武蔵のすがたが見えないので、婆は安心したもののように、

お易いことですと、女が乳の瓶をわたすと、婆は、瓶の口へ唇をつけて、眼をつぶりながらそ渇き切ったような声をふるわせていう。

れを飲んだ。 唇の端から流れた白い汁が、胸を垂れて、草にもこぼれた。

胃に満ちるまで飲んでから、婆は、ぶるっと身をふるわせ、すぐ吐きそうに顔をしか

「……ああ、なにやら不気味な味よの。したが、これでわしも、達者になれるかも知れぬ

「おばあさんも、どこか体がお悪いのかえ」

「なあに、大したことはない。風邪熱のあったところを少し手ひどく転んでの」 いいながらお杉婆はひとりで起ち上がっていた。牛の背に乗せられて、ウンウン呻いていた病

「女子……」態はその時少しも見えなかった。

声をひそめて、寄り添いながら、もいちど鋭い眼を、武蔵のために配って、

「この山道を、真っすぐに行ったら、どこへ出るのじゃ」

「三井寺の上に出るがな」

「三井寺といえば、大津じゃの……。そこより他に、裏道はないか」

「ないこともないが、おばあさんは一体、どこへ行きなさるのじゃ」

「四、五町ほど先へ行ったら、北へ降りる小道があるで、そこをかまわず降りて行けば、大津と 「どこへでもかまわぬ。わしはただ、わしを捕まえて離さぬ悪者の手から逃げたいのじゃよ」

坂本の間へ出るがな」

そうか……」 と、婆はそわそわして、

巻 風 の 「峠茶屋か」

に、先へ駈け去ってしまった。 いい捨てると、婆は、怪訝な顔しているその女の歩みを追い越して、跛行の蟷螂が 急 ぐ よ う「では、誰か後から追いかけて来て、お許になにか訊いても、知らんというてくれよ」

問わないうちから、なにも知りませんと答えそうな顔つきをした。 瓶を抱えてゆく女房のうしろ姿が先へ見えた。武蔵が呼びとめると、武蔵は見ていた。苦笑しながら岩蔭を起ってしすかに歩き出した。 女は立ち竦んで、 なにも

だが武蔵は、そのことには触れないで、

「おかみさん、おまえの家は、この辺のお百姓か、それとも木樵」

「わしの家かえ? わしの家は、この先の峠にある茶店だが」

「ヘエ」

「ならば、なおのこと、都合がよい。おまえに駄質をやるが、洛内まで一走り、使いに行ってく

れないか」

「行ってもよいが、家に病人のお客人がいるでの」

行ってくれれば、陽のあるうちに帰って来られよう」 「その乳は、わしが届けてやった上、 おまえの家で、返事を待っているとしよう。ここからすぐ

「それやあ造作もねえこったが……」

「案じるな。わしは、悪者でもなんでもない、今の婆どのも、あの元気で走れるようなら心配な

くれ。返事はおまえの茶店で待っている」 いから拠っておくのだ。……今ここで手紙を書く。 それを持って、 洛内の烏丸家まで行って来て

四

武蔵は、矢立の筆を抜いて、すぐ手紙を認めた。

お通へ――である。

無動寺にいた幾日かのあいだにも、折あらば ―と機を心がけていた彼女への便りを、

「では、頼むぞ」

と今、女に渡し、自分の牛の背にまたがって、そこから半里ほどを悠々と牛の歩みにまかせて

歩いた。

ほんの走り書きの一筆であったが、使いに持たせてやった自分の手紙の中の文言を 思 い 泛 べ

「二度と、会えようとは思わなかったが」――それを受けとるお通の胸をも想像して、

と、呟いた。

彼の笑顔には、明るい雲が映えて見える。

生々と夏を待つ地上の何物よりも、晩春の碧落を彩る虚空何物よりも、 彼の顔一つが、いちば

ん楽しそうであり、また、潑剌としていた。

ら、すぐ起きて、城太郎とふたりして追いついて来るだろう」 「……この間のあの容態では、まだ病床にいるかもしれない。でも、わしのあの手紙 が届 い た 風

牝牛は時々、草を嗅いで止まった。草の白い花も、武蔵には、星がこぼれているよう に 見 え

た

楽しいことだけしか考えられない今の武蔵であったが、ふと、

「おばばは? ……」

と、谷間を見渡し――

「一人でまた、仆れたまま苦しんでいるのじゃないか?」

もし人に見られたら恥かしいと思ったが、お通へやった手紙の中に、彼はこういう意味のこと などと心配してみたりする。 ――それもこれも、今なればこそある余裕だった。

を書いたのである。

花田橋のときは、そなたが待った

こたびは、わたしがそなたを待とう

唐橋に牛をつないでいるひと足先に、大津へ出、瀬田

くさぐさの話、その節

のたねまで今から胸に描いている。 彼は、そう書いた自分の文言を詩のように、 口のうちで幾たびも暗誦し、さて――くさぐさの

峠の背に、旗亭が見えた。

「……あれだな」

と思う。

近づいて、彼は牛の背から降りた。手にはここの女房からの届け物である乳の入っている瓶を

持っていた。

「ゆるせ」

軒先の床几を占めると、土泥竈にせいろうをかけて、木を燃やしていた老婆が、 ぬるい茶を汲

んでくる。

乳の瓶をも渡そうとすると、 武蔵は、その老婆に向い、ここの女房に逢って、途中から使いを頼んだ仔細を告げた。そして

「へえ、へえ」

とばかり聞いていた老婆は、耳が遠いのか、その瓶を持たされると、

「これはなんでござりまするか」

と、不審った。

にこれへ搾ったものだから、すぐその病人へ与えるがよかろうと、いい聞かせると、老婆は、 武蔵が、これは自分の曳いている牝牛の乳で、ここの女房が病人の客とやらへ飲ませたいため

「ほう? ……乳でござりまするか……ほう?」

まだ分ったやら分らないような顔つきして、両手に瓶を支えていたが、やがて、処置に窮した

ように、

えか分らんがな」 「――お客さあっ、奥のお客さあっ、ちょっくら米ておくんなされや。わしにゃあ、どうしてえ 狭い小屋の奥をのぞいて、唐突にどなった。

五

老婆に呼びたてられた奥の客なる者は、奥にはいなかった。

ーおう」

と、返事の聞えたのは裏口のほうで、やがてのそっと、一人の男が、茶店の横から 顔 を出

て、

「なんだい、婆さん」

老婆はすぐ乳の瓶をその男の手へ渡した。けれど男は、その瓶を持ったまま、老婆の話を聞こ

うともしないし、乳をのぞいて見るでもない。

男を見ている―― 放心した人間のように、眼を武蔵の頬へ射向けているのだった。武蔵も亦、凝然として、その

「……お、おうっ」

風

の

卷

と、いった。

どっちからともなくこう呻いた双方の足が前へ出ていた。

そして顔と顔とを接し合って、

「又八じゃないかっ!」

武蔵がさけんだ。

その男は、本位田又八だったのである。

変らない昔の友の声に耳を打たれると、又八もわれを忘れて、

「――やっ。武やんか!」

彼もむかしの呼び慣れた名をもって呶鳴った。 武蔵が手を伸ばすと、又八も、うつつに抱

瓶は砕けて、白い液が二人の裾へ刎ねかかった。えていた乳の瓶を思わず手から落して抱きついた。

「関ケ原の戦――あれからだ「ああ!」何年ぶりだろう」 ---あれからだ! あれから会っていないのだ!」

「……すると?」

「五年ぶりだ。——おれは今年二十二になったから」

「わしだって、二十二だ」

「そうだ、同い年だったなあ」

抱き合っている友と友を、牝牛の甘い乳の香がつつんでいた。幼 心 を二人ともそれにも思い

出されていたかもしれなかった。

も武蔵と呼ぼう。いつぞやの下り松の働き、その前のことども、噂は始終耳にしていた」 「偉くなったなあ、武やん。――いや今では、そう呼ばれても自分みたいな気がすまいな。 おれ

「いや、恥かしい。まだまだおれは未熟者だ。世間の奴が、余りにも不出来すぎるのだ。

が又八、この茶店に泊っているという客は、おぬしのことか」

「ウム……実は江戸表へ行こうと思って都を立ったが、少し、都合があって十日ばかり」 「じゃあ、 病人というのは? ……」

又八は口籠って、

――病人というのは、連れの者だ」

郎からおぬしの手紙を受け取ったが」 「そうか。……なにしろ無事な顔を見てうれしい。いつか、大和路から奈良へゆく途中で、城太

は、武蔵の前に、面を上げる勇気も出ない。あの時、手紙の中に、傲語して書いた言葉の一つでも、実行されていないこと を 思 う と、彼急に、又八は眼を伏せた。

武蔵は、その肩に手をかけた。

恣

ただわけもなく懐かしいのだ。

0

と打 打ち寛いで、心ゆくまで語りあいたいと思うのだった。五年のあいだに生じた彼と自分との人間的な差などは念頭にもなかった。折もよし、ゆっくり

「又八、連れというのは、誰なのだ」

風

「じゃあ、ちょっと、外へ出ぬか。ここで余り饒舌るのも悪かろうゆえ」「いや……べつに、誰という程の者でもないが、少しその……」

「ウム、行こう」

又八も、それを望んでいたらしく、すぐ茶店の外へ歩き出した。

蝶 と 風

「職業か」

「又八、

おぬしは今、なにをやって衣食しているのか」

ウムし 「仕官の口には外れるし、まだこれぞといえる仕事もしていないが」

「では今日まで、遊んで暮してきたのか」

大事な一歩を過った

ものだ」 'そういわれると思い出す…… その伊吹の麓が思い出されるような草原へ出ると、 俺はまったく、あのお甲のやつのために、

「坐ろう」

の弱気を、むしろ歯がゆく思った。 武蔵は、草にあぐらを組んだ。そして自分に対して、何となく、負け目を感じているような友

43 のは自分以外の誰でもない」 「お甲のためだというが―――又ハ、そういう考え方は男の卑劣だぞ。自分の生涯を創ってゆくも

と思うな」

わせないのだ。つい引き摺られてしまうのだ」 「それやあもとより、俺も悪い。……だがどういうのかなあ。俺は自分へ向って来る運命を、 か

腹の空いている人間が、眼を研いで集まっている新開地だ。とても人並なことでは立身も覚束な 「そんなことで今の時代をどうして乗り切るか。 たとえ江戸へ山てみても、江戸は今、諸国 から

「俺もはやく剣術でも修行すればよかったが」

かろうし

修行は人がらでない。学問をせい、そしてよい主君を求めて奉公の途につけ、それが一ばん 「なにをいう。まだ二十二じゃないか。なんだってこれからだ。……だが又八、おぬ しには剣の いい

「やるよ……俺も」

されてくる。 が、彼と自分と、こんなにも大きな差を作っていたかと思うと、堪らないほど、徒食の日が後悔 草の穂をむしり取って、又八は歯に咥えた。心から彼も自分を恥じるのだった。 同じ山間に生れ、同じ郷土の子に生れ、年も同じなこの友に対して、たった五年の歩みの違

友達らしくない威圧さえ彼から受けて、自分の影に負けめを抱かずにはいられない。そして常に 気地なさばかり、心の裡で責めるのであった。 胸に持っていた武蔵に対する反感も、気概も、 が、こうして五年ぶりで変った姿に出あってみると、いくら意地を張ってみても、又八はなにか 噂だけを聞 いて、武蔵にあわないでいたうちは、なんの彼奴がと、多寡をくくってい 自尊心までも同時に失って、ただ正直に自分の意

「なにを考え込んでいるのだ――。おいっ、慥かりしろよ」

っては、その五年の道草も、実は尊い修行であったかもわかるまいが」 「いいじゃないか、五年道草をくったら、五年遅く生れて来たと思うのだ。だが、考えようによ 武蔵は、友の肩を打って、叩いてみても手に感じられるような、その軟弱な意思を叱った。

「面目ない」

「……オオ、話に夢中になって忘れていたが、又八、たった今おれは、 おぬしの母親とそこで別

れたのだぞ」

「えっ、おふくろと、あったのか」

「なぜ、おぬしは、あの母親の強気と我慢を、も少し血の中に貰って生れて来なかったのだ」

この不肖な子を見ていると、武蔵は、あの不幸な母親のお杉婆を、哀れと思わずに いられ な

(なんたるやつだ)

と、腑がいない又八の銷沈している姿が、他人事ならずに、眺め

(幼少から母にわかれて、母のない俺のみじめな寂しさを見ろ)

抑み。と、いってやりたい。

お杉婆が、あの老齢をもちながら、求めて旅の空に惨苦を舐めているのも、 また、 自分を目し

の

て七生の仇敵とまで思いこんでいるのも、 その根本の原因はただ一つ、

「又八が可愛い」

という以外の何ものでもない。その他に原因はないのだ。 盲愛から生じた誤解であり、 誤解か

ら生じた執念でしかないのである。

淡い幼少の夢の中にしか母を知らない武蔵には、痛切にそれが分る。羨ましくてなら あの婆に罵られ、迫害され、謀られて、一時の憤怒から醒めた後では、かえって胸を嚙まれ

(――だから、婆の呪詛を和らげるには?)るほど孤愁の身にそれが羨まれた。

と、武蔵は今、又八の姿を見ているうちに胸の中で、独り問うて独り答えた。

誇ってくれたら、婆は、 (この息子が、偉大になってくれればいいのだ。武蔵以上の人間になり、俺を見返して、郷人に

そう考えると、彼の又八に抱く友情は彼が剣に対するように、彼が観音像を彫る時のように、こってくれたら、婆は、おれの首を討った以上、本望と思うだろう)

燃え上がらずにいなかった。

風

「なあ、又八。おぬしは思わないか」

その真実が、彼のことばを、友情の裡にも荘重にして、

親を尊敬しないということじゃないのだ。 はしないのだ。親のないおれから見ると、貴様は、勿体なさすぎるぞ。勿体ないということは、 の幸福を、余りにもおぬしは自分で踏みにじっている。——仮にだ、おれに今、あんなおふくろ 「あんないいおふくろを持って、おぬしはなぜ、あのおふくろに、欣し涙をこぼさせてやろうと 人間の子の最大な幸福を持たせられていながら、折角

握 又八が、じっと耳を傾けて聞いていてくれるので、武蔵も一息にそこまでいって、友の手頸をどこにもそれを語る者がいないということはその一瞬、実にさびしい心地の身になるものだぞ」 ろうが、こういう漂泊の空にある身でも、アアいい景色だなあと感じた時のような場合、 も、どんなに張合いが持てるか知れ が いうものじゃないか。 でくれるものは りしめた。 あったとしたら、 ないからだ。自分のしたことを、 おれの人生は、 ――それのある者には、陳腐な道義の受け売りをしているように聞えるだ ないと思うのだ。 何倍も暖かに膨らむだろう。身を研 共々欣んでくれる者があるのは大きな張合いと なぜならば、親ほど正直に、子の功を欣ん くにも、功を立てるに 側にも

策の巷を作っているのだぞ。その中で、克ちきる道は、自分を研くこと し か な い。……なあ又えるが、関ケ原の役は熄んでも、平和の裏の人生の戦はあんなものどころか、いよいよ修羅と術 時の気持を、もいちどお互いに呼び回して、勉強しようじゃないか。合戦は今、どこにもなく見だ。同じ郷土で育ったのだ。……なあおいっ、関ケ原の合戦を望んで、槍を担いであの村を出た 結び合っている二人の手へ、又八はぼろぼろ涙をこぼした。湯のようにそれは熱かった。 又八っ……。そんなことは、 3、偉くなってくれよ。貴様がやる気ならおれもどんな力でも貸す、貴様の奴僕になってもいもいちど槍を担いで出かける気で貴様も、真面目に世の中と取ッ組んでくれよ。勉強してく ほんとに貴様がやるという誓いを天地に立ててくれるならば――」 関ケ原の役は熄んでも、平和の裏の人生の戦はあんなものどころか、いよいよ修羅と術 おぬしだって、百も承知に違いない。 おれは、友達として頼 t

を励むことにする」

風

りで会った友の言葉には、強く本心を衝たれてつい涙すらこぼしてしまった。 これが母の意見だと、耳にたこという顔を示して、いつも鼻で嗤い返す又八であるが、五年ぶ

「……分った、分った、有難う」

繰返して、手の甲で眼を抑え、

から、江戸表へ行くなり、諸国を遍歴するなりして、そのうちに良師に出会ったら、就いて学問 「今日を心の誕生日として、おれも生れ直す。とてもおれは、剣で身を立てる素質はなさそうだ

いから、主人に仕えながらでも修められることだし」 「おれも、共に心がけて、良い師と良い主人を見つけてやろう。 なにも学問は閑でやるのじゃな

を怒らせた、 の身のためになることなら、どんなことでもきっとする。——それがせめて、おぬしのおふくろ 「なんだ。どんなことでも話してくれ、将来ともに、この武蔵にできることで、そして、おぬし 「なんだか、広い道へ出た気がする。——だが、困ったことが一つある……」 わしの罪の償いだから」

達の間に、なんの羞恥むことがあるものではない」「些細な秘しごとが、つい大きな暗い陰を作る。話「いい難いなあ」 つい大きな暗い陰を作る。話してしまえ……間のわるいのは一瞬だし、友

「……じゃあいってしまうが」

「茶店の奥に寝ているのは、女の連れなんだ」

かりが、この男に付くのは。

また、どうしてだろうか。お甲といい、朱実といい、選りに選って、そういう危ない道連れば

風

「朱実だよ」 武蔵は、はっと思った。

「はてな? ……誰だ一体」

「武蔵、気を悪くしないでくれ。

おめえも知っている女だから」

「男らしくない奴だ」

「それも、実は……。

アア、

やっぱりいい難いなあ

「女連れか」

扮装の前髪が、キッと、橋の袂から白い眼で睨めつけていたことなども思い出される。守然ので泣きながらそれを告白もしていたし、折からその朱実と、なにか関係のありそうな若衆すがって泣きながらそれを告白もしていたし、折からその朱実と、なにか関係のありそうな若衆 ほどにはまだ荒んでいないまでも、危険な火を咥えて飛んでいる鳥だった。あの時、自分の胸へ丘条大橋で会った朱実はもう以前の真っ白な野の花ではなかった。媚汁をたたえた毒草のお甲 りにも見えすいた不幸な道連れ をもっている女性と、この弱気な友との人生の旅が、どんな暗黒の谷間へ入ってゆくことか、余 武蔵が今、朱実と道連れと聞いて、友のためにハッと思ったのは、そうした複雑な事情と性格 ――と直ぐ思われたからであった。

武蔵の黙っている面を、又八は、又八らしく解釈して、

風

ば、いい気持はしないだろうからな」 「怒ったのか。……おれは秘していては悪いから正直にいってしまったが、おめえの 身に 取 れ

憐れむように、武蔵は、と、いった。

「ばかな」

と、顔色を払って、

「余りにも、不運に出来ているのか、不運を自分で作るのか ٤ おぬしのために、 おれは茫

ら、過ぐる夜、瓜生山で再び会って、ふと出来心のように、江戸へ駆落ちする相談を決め、連れ口惜しくすら武蔵は思って、そのいきさつを糺すと、又八は、三年坂の旅籠で出会ったことか然とするのだ。……お甲に懲りておりながら、なんでまた……」 の母親を捨ててしまったことまで、ありのままに話して隠すところもない。

だし、それからこの茶店でずっと寝込んでしまったというわけ。おれも後悔はしたが、もう追い 「ところが、おふくろの罰があたったのか、朱実の奴が、瓜生山で辷った時の打傷が痛いといい

その嘆息を聞けば、無理もない。火を咥えている鳥と、慈母の珠とを、この男は、取り替えてつかないことだしなあ」 しまったのである。

四

そこへ、のっそり、

風

模糊として風貌のどこかに耄碌した茶店の老婆が、両手を腰にまわし、「お客さあ、ここにいなさったのけ」

お天気でも見に来たよ

「お連れの病人は、一緒に来ていなさらねえのかよ」

問う如くでもあり、問わざる如くでもある。

うに空を見まわして、

又八は直ぐ、

「朱実か。— 朱実がどうかしたのか」

「寝床にいねえがな」 色を顔に出していう。

「いない」

「今し方までいただが」

武蔵には、なにか、説明はできないが、直感的に、 思い当るものがあった。

「又八、行ってみい」

ると、老婆のことばに違うところがない。 その又八に続いて、武蔵も茶店へ駈けもどり、彼女の寝床のあったという穢い一間を覗いてみ

「あっ、いけねえ」

「帯もない、履物もない。 又八は、きょろついて、叫んだ。 ――やッおれの路銀も」

「化粧道具は」

「櫛も、「釵」も。どこへ突っ奔って行きやがったのだろう。おれを置き去りにしやがって」 たった今、将来の発憤を誓って、涙をこぼした顔に、忌々しさを漲らしていう。

老婆は、土間口から覗いて、独り語のように、

そんな声には耳もかさない。又八は茶店の横へ出て、峰を蜿る白い道をぼんやり眺めていた。じゃのうて、仮病して、不貞寝していよったのだによ。老婆の眼から見たらようわかるがの」「なんたらことじゃ。あの娘ッ子はの、いうたら、お客さんに悪いかしらんが、ほん ま の 病 気 と欠伸啼きをする。 もう花も黒く散りしいている桃の樹の下に、寝そべっている牝牛が、思い出したように、長々

「又八」

「ウム?」 _____ っ お い し

風

「なにをぼんやりしているのだ。去った朱実が行く先、せめて少しでもよい身の落着きを得るよ

うに、二人して祈ってやろう」

「さっき、おれを欣ばしてくれた言葉。あれは、おぬしのほんとの決心だろうな」 弄。ばれながら、崖の下へ沈んで行った。 と、気のない顔の前に、小さな風の渦がながれていた。黄いろい蝶が一つ、見えない渦の中に

۲,

さらにまた、

廻れ。 ぞ。 「おぬしの行く道は、自然に拓けてきた。もう、朱実の落ちて行った方角がおぬだと遠くを見ている眸を奪い回すように、武蔵はぐっと彼の手を引っ張って、噛んだままの唇から、慄えを洩らすように、又八は呟いた。 「ほんとだ、ほんとでなくて、どうするもの おぬしはすぐ、これから足に草鞋をつけて、坂本と大津の間へ降りて行ったおふくろを捜し 眼につくそこらの草鞋や脚絆など、彼の旅具を取って、軒端の床几まで持ち出してやる。――あのおふくろを貴様は見失ってはならないぞ。さ、直ぐに行け」 カヽ 朱実の落ちて行った方角がおぬしの道じゃない

立てる気なら、おれも一先ず江戸まで共に行こう。また、おぬしのおふくろ殿には、改めておれ も心から話したいこともある。おれはこの牛を曳いて、瀬田の唐橋に行っておるから、 から連れ立って来いよ。 「金はあるか、 路銀は。 ……少ないがこれを持って行ったらどうだ。 いいか、 おばばの手を曳いて来いよ」 おぬしが江戸表へ出て志を きっと後

道き

武蔵は後に残って、黄昏れを待っていた、 いや使いの戻りを待つのだった。

寝ている牝牛にならって、武蔵も、茶店の隅の床几に横になってい午過ぎの小半日を、さて退屈に思う。日は長いし、飴のように体 午過ぎの小半日を、 飴のように体は伸びを欲する。 た。 緋桃の下に

はお通だと夢の中で思っている。連理の枝を繞っている。今朝は早かった、昨夜もろくに眠っていない。いつのま いつのまにか夢は二つの蝶になってい る。 羽

ふと眼をさますと、いつのまにか、 陽は土間の奥まで映し込んでおり ŋ, 寝ているうちに、

って八刻というと、ここへ甘い物をたべに来て、一頻り番茶を飲みながら饒舌を娯しむ。この下の谷間から石を切り出しているので、そこで働いている石切職人たちが、毎日の居場所でも変ったかと思ったくらい、この峠茶屋に騒々しい声がしていた。 毎日の例

「なにしろ、だらしがねえや」 吉岡方か」

「あたりめえよ」

風

「ひどく沽券をおとしたものだなあ。 あんなに弟子がいて、一人も刃の立つ野郎はいなかっ たの

な。二代となるともうそろそろ生温くなり、三代でたいがい没落「拳法先生が偉かったので、余り世間が買いかぶっていたのさ。かしら」 墓石のつり合っている奴アめったにねえ」 三代でたいがい没落、 なんでも偉いやつは初代に限る 四代目になっても、 てめえと

「おれなんざ、こう見えても、つり合ってるぜ」

みねえ」 石切だからよ。 おれがいってるのは、 吉岡家の話だ。 嘘だと思うなら、 太閤様の後を

れからまた、話はもどり、 下り松で果し合いのあった朝、 おれはあの近所だから見ていたと

う石切が現れ

その石切はまた、 自分の目撃談を、 もう何十遍も何百回も人中で聞かせているとみえて、 おそ

ろしく語ることがうま

百何十名の相手を敵にまわし、宮本武蔵という男が、こうやって、 こう斬りこんでと、 まるで

た。もし眼がさめていたら、噴飯に堪えないどころか、面映くてそこにいられなかったか隅の床几の上に寝ていた本人は、まだその話の 酣 な頃には、深く睡っていたので 倖自分が武蔵になった気かなにかで、おそろしく誇張して話している。 ったかも知れ

せだっ

ところが、それを聞いて甚だ面白くない顔をしている一組が、 その前から軒先のべつな床儿を

占めて聞いていた。

中堂の寺侍三名と、 その寺侍たちに、この峠茶屋まで見送られて来て、

(では、ここで――)

に、大太刀を背に負い、身の拵え、眼ざしや構え、なにしろ花やかに見うけられる。 と別辞を交わしていた好青年である。若衆小袖を旅扮装に凜々しく括り、 前髪の元結 も匂やか

り、また屢と武蔵の名が謳われた。にしていたが、下り松の後日譚は、そこへ移ってから、石切たちは、その風采に恐れをなして、床几を去り、 莚の方に番茶を運んで、無礼 の ないよう

いよいよ調子 づ い て 時々どっと笑った

黙って聞いているに堪えない虫気が起ったのであろう、 佐々木小次郎は、 石切た

ちの方へ向って、 「これ、 と、呼びかけた。 職人ども」

風采花やかな若衆武士が、先刻から側には中堂の寺侍を二、石切の職人たちは、小次郎のほうを振向いて、何事かと皆、 居住いを直した。 三名も据え、威風は辺りを払うが

「へい」

如く見うけられていたので、彼らは、

と一様に頭を下げた。

小次郎は、鉄扇をもって、彼らの頭を、麾、き、「これ、これ。唯今、知ったか振りして、喋舌っていた男、前へ出い」

「その他の者も、ずっとこっちへ寄れ。……なにも恐がらんでもよい」

「へ、へい」

「今、聞いておると、其方どもは、 口を極めて、宮本武蔵を讃えておるが、 左様な出たらめを申

「……は。……へい?」

し触らすと、以後承知せぬぞ」

佐々木小次郎もまた、当日の立会人として、親しくあの試合には双方の実情を審に検分いたして 「なんで武蔵が偉いか。其方どものうちにも、過日の件を目撃した者があるとのことだが、この



感想を演舌し、また、諸院の碩学たちの招請に応じても、自分のおる。――実はその後、叡山に上り、根本中堂の講堂にては、 自分の意見を忌憚なく述べてまいった。は、一山の学生を集めて、その見聞と

叡山の大講堂で演舌した意見が、皆、嘘のように相成ってしまう。 せてやるから、 わされて、武蔵如き者を稀世の人物だの、 「然るに― 汝らのいう誤った見方は、世上を害するものだ。 取るに 一其方たちが、 耳の穴を掘って聞け」 も足らんが、ここに居合わす中堂の方々にも一応聞いていただく必要がある 剣の何物なるか も知らず、 ように相成ってしまう。――無智な凡下どもの沙汰す無双の達人だのと申すが、それでは、この小次郎が、 ただ形だけの勝敗を見、 事の真相と、武蔵の人物をよう聞か 衆愚のうわさに惑

「 抑 ; } ; 「……へ。……は

風

売ったもので、吉岡はその図に乗せられて彼の踏み台になったものとわしは観る は武蔵の売名にやった仕事だ。 武蔵とはどんな肚の男か。あの試合を仕かけた彼の目的からそれを洞察すると、 自分の名を売るために洛内第一の吉岡家へ向って、 うまく喧嘩を あ

ないのは、 分っていたことなのだ。 なぜならば、 押 し倒し もう今日の兵法者の仲間では、吉岡の力など眼中にもない情勢にあったからと、 初代拳法時代のおもかげもなく、京流吉岡が衰えていることは、誰にだってもう たのが武 樹なら朽木、 蔵なのだ。 人間なら瀕死の病人にひとしい。拠っておいても自滅する ――そんな者を倒 す力は誰にでもあ るが、 それを敢てやら もう

を立て、巷の噂を高め、思うつぼに芝居を打って当てたのだ」う気持もあったに相違ない。それを武蔵は、わざと声を大にし、事件を拡大し、都の大路に高札 一つは拳法先生の遺徳を思い、さむらいの情けで、あの門戸ぐらいは見遁しておいてやろうとい

でも、伝七郎の時でも、一度として彼奴は約束の時刻を守った例がない。また、下り松の折など「その心情のいやしいこと、駆引の卑屈なこと、挙げていえば限りもないが、清十郎と立会う時 も、正面から堂々と闘わずに、奇道奇策を弄している」

負などは、わしの眼から観ればまるで児戯にひとしい。武蔵は飽くまで小賢しく狡く行動して、売名上手が潜んでおる。世の同情は彼の期したとおり、彼の一身に集まった。----けれどあの勝 げの達人』だ。逃げ足の迅いことだけは、確かに名人といってもよい」 いい汐時にさっと逃げてしまった。——しかし、或る程度までは、かなり野蛮で強いこと は強 い。だが、達人だなどいう評判は中らぬも甚だしい。――強いて達人というならば、武蔵は『逃 「成程、数の上で見れば、一方は大勢、彼は一人に違いなかった。しかし、そこに彼の狡智と、 ---けれどあの勝

とであろうと思われる。 て板に水を流すような小次郎の弁舌だった。叡山の講堂でも、この弁をふるって演舌したこ

素人考えだと何十人と一人の闘いは、容易ならぬものと思うだろうが、何十人の力は、

人一人の実力が何十倍となったものでは決してない」 ・専門的知識に

岡 という論法から、小次郎は当日の勝負を、 八目という立場からいえば ――武蔵のあれ程な善戦も、 かけて、 いくらでも非難すること が 舌にまかせて論

した。単なる罵倒にとどまらず、これを人道的に観て――また武士道の上から観て――剣の精神 次にまたこの小次郎も、武蔵が名目人の一少年までを討ったということを、 口を極めて、

のうえからもゆるし難い人間であると断じつける。

位田なにがしという老母があるはずだということにまで及んで、 さらに、彼の生い立ちや、郷里でやって来た行状だの――現に今も、 彼を仇とねらっている本

と狙われているような人物がどうして偉いか。うしろ暗い仇持ちの人間を賞め称え、それが世道しくその老母とも会って聞き取ったことなのだ。もう六十にもなろうという純朴な老婆から、讐「偽りと思うならば、その本位田の老母に聞いてみるがよい。わしは中堂に泊っている間に、親

だ自分も剣を愛し、この道に身を研くものであるゆえ、正しい批判をするまでの者じゃ。――だ。――断っておくが、わしは吉岡方の縁者でもなければ、武蔵に意趣のあるわけでもない。 人心によい風を及ぼすであろうかどうか。そぞろ寒心に堪えないものがあるのでわしはいうまで

アア、だいぶ陽が傾いて来まし いい終って、さすがに喉が渇いたか、小次郎は茶碗を取って、がぶりと一口に飲み、 職人ども」 たなあ」

と、連れのものを顧みる。

中堂の寺侍たちは

「そろそろ、 山道で暗くなりましょう」

石切の職人たちは、どうなることかと一言もなく硬ばっていたが、と注意しながら、自分たちも、痺れのきれかけた床几を離れた。「そろそろ、お立ちにならぬと、三井寺までゆかぬうち、山道で暗く その機を見ると、 白洲から

解かれたように、われがちに起って谷間へ仕事に降りてゆく一

その谷間はもう紫ばんだ陽かげになり、 ひよどりの声がけたたましく谺を呼ぶ。

「では、御機嫌よう」

「また、御上洛の折には」

と寺侍たちも、ここに小次郎の旅先を餞別して、中堂の方へ帰って行った。

小次郎は一人残って、

「ばあさん」

と、奥へ呼び、

「茶代をここへおくぞ。――それから、途中で暗くなった時の用意に、火縄を二、三本貰って行

くからのし

老婆は、夕餉の物をかけた土泥竈の前にしゃがみ込んで、焚きつけにかかったまま、

「火繩けい。火繩ならそこの隅っこの壁にいくらでもかけてあるで、要るだけ持って行かっしゃ

と、いう。

小次郎はずかずか茶店の奥に入って、隅の壁にみえる火繩の束から二、三本引き抜いた。

風

上げて、どきっと、鳩尾に当身を食ったような衝動をうけた。初めて気がついた。その床儿の上に横たわっている人間の二本の脚元から― と、釘を外れた火縄の束が、ばさっと下の床几に落ちた。何気なく手を伸ばした時、 ―顔の方をずっと見

武蔵は、手枕の上から、眼を開けて、彼の顔を、まじまじと見ていたのである。

四

弾かれたように小次郎は跳び退いていた。ぱっと、
。。 無意識の敏捷さだった。

と、いったのは武蔵。「……おう?」

である。 白い歯を見せて、にやっと笑いながら、今眼が醒めたように、 やおらその後から身を起したの

やっと、床几を立ち上がった。そして軒先にいる小次郎の側へ歩いて来た。

を持ってそれに応えようとしたが、意思と反対に、顔の筋は妙に硬ばってしまって、笑えなかっ にこやかな唇元と、心の奥を見透すような眼とを持って、武蔵は立った。小次郎もまた、笑み

いていたに違いない――-と思い、咄嗟にその狼狽も胸を塞いだからであろう。に取れたからである。また、自分が、先刻から石切たちに向って演舌していた事々を、 無意識に跳び退いた自分の敏捷を一 - 必要のないあわて振りと——武蔵の眼が嗤っているよう 武蔵も聞

で――鬼に角、小次郎の顔いろと態度は、 すぐいつもの傲岸な風の裡へかえしてしまったが、

瞬は、 しどろもどろだった。

「……や。武蔵どの。……これにいたのか」

「いつぞやは」

武蔵がいうと、

「おう、いつぞやは、眼ざましいお働き、人間業とも思われなかった。 しかも、 さしたるお怪我

P なかったそうな。……祝着の至りです」

分で吐いた言葉を自分で忌々しく思った。 負け惜しみの底に、苦い矛盾を肯定しながら、つい、こう小次郎はいってしまった。そして自

たくなった。わざとのように慇懃に、 武蔵は、皮肉であった。なぜなのか、この小次郎の風采や態度に面と対うと、彼は皮肉を弄し

言を聞かしていただき、あれにて他ながら、有難いと思って聞いていました。――自分から「その節は、立会人として、なにかと御配慮を。かつまた、ただ今は、いろいろ拙者に対し ――自分から考え 間の声は聞か て苦

憶えておりますぞ」れない。それを其許が、昼寝の夢に聞かせてくれたと思うと、赤い心地がする。れない。それを其許が、昼寝の夢に聞かせてくれたと思うと、赤になれるとの世界のであるが、滅多にほんとの世界の -- 忘れずに

いるが、小次郎の胸に受けて聴けば遠い将来をかけて番えて来た挑戦として当然に響く。忘れずに憶えている―――彼の一句に、小次郎は全身が鳥肌になった。これは穏やかな挨拶に

(ここではいわぬが)

という含みも言葉の裡にある。

進する者の浄。行。とも堅く信じているのである。そこに一点の不徳、一毫の疚しさも抱いていなさい問題でもない。尠なくとも、武蔵にとって下り松のあの事は、畢生の大事業であり、道に参である。是非を舌の先で争ってみたところで、水掛論に終るしかあるまいし、それで済むほど小 おたがいが、さむらいだ。虚偽をゆるさないさむらいであり、曇りを捨ておけない剣の修行者

今いったような結論になる――とすると、この解決は、どうしても、武蔵が言外に含め たよう だが小次郎の眼からそれを観れば、あのような観察が起るし、小次郎の口からいわしめると、

風

(今はいわぬが、忘れぬぞ)

複雑な感情は働いていたにしても、佐々木小次郎もまた、まったく根底のない出たらめを放言 という、言葉の味をもって、未来を否えておく他にあるまい。

したつもりではない。彼は自分の観たところから公正な判断を下したまでだと思っているし、い かに武蔵の実力をあの程度に見ても、その武蔵が自分以上の人間だとは今もなお決して思ってい

ない彼であった。

れるなよ、武蔵」 「……ウム、よろしい。憶えているといった其許の一言、小次郎も慥に覚えておこう。きっと忘 「お通さん、ただ今」

武蔵は黙ったまま、 また微笑してうなずいた。

連ね 理り 0 枝え

柴折戸の入口から、 城太郎は声張りあげて、

と囀りながら、足を洗っている城太郎を見おろしていた。

「オオ、冷てえ。オオ冷てえ」

月のそれよりも冷たい。 この水はすぐそこの銀閣寺の苑内から流れてくる清冽なので、眉をしかめていながら、彼はいつまでも足を拭こうともせず、 洞庭のそれよりも清く、赤壁の足で水を弄っていた。

そこの家を繞っているきれいな流れの側に坐りこみ、ざぶざ

茅葺きの合掌に、木額の白い文字が仰がれる。燕の子が、 「おりた。」 は月庵。 というな。 といるな。 というな。 といるな。 とのな。 とのな。 とのな。 とのなる。 とのなる。 とのなる。 とのな。 とのなる。 とのな。 とのなる。 とのなる。 とのなる。 とのなる。 とのなる。 とのなる。 とのなる。 とのな。 と そこらに白い糞をちらし、

ピチピチ

う日月の下に生を享けている身のほどを、自で楽しんでいるらしく見える。 だが、土は暖かく、彼の腰の下には、花すみれが拉がれていた。城太郎は眼を細 めて、こうい

別当、某の閑宅であったが、ちょうど空いているというので、過ぐる夜の 全然で、濡れた足を草で拭いて、そっと縁側の方へ廻って行った。ここの家は、やがて彼は、濡れた足を草で拭いて、そっと縁側の方へ廻って行った。ここの家は、 武蔵と瓜生山で別の家は、銀閣寺の

で――お通は、あれ以来、ずっとここに病を養っていた。れたあの翌日から、烏丸家の口添えで、お通のためにしばらく借りうけたものだった。

往復して、手にとる如く、お通の枕元へそれを報告していたからである。 黄母衣組のお使番のように、あの日、城太郎は下り松の戦場と、こことの間を、勿論のこと、下り松における決戦の結果は逐一、ここにも伝わっている。 何十遍となく

城太郎はまた、彼女の今の体にとっては、薬餌よりもなによりも、武蔵の無事なことを伝え

「ああ、お腹が減った。――お通さん、なにしていたんだい」で死んでいれば気持だけでも、彼女もあのまま逝ってしまったに違いなかった。 その証拠には、お通は日増に血色を革め、今では机に倚って坐っていられるくらいにまでなってやるのが、最善な良法であると信じていた。 ている。——一度はどうなるかと、城太郎すら心配したほどであった。おそらく、 武蔵が下り松

「よく飽きないなあ 「わたしは朝からただ、 こうして坐っていた限り」

お通は、

彼の元気な顔を、眼に迎えて、

「体は動かさないでも、 心はさまざまに、遊ばせていますから。 それより城太さんこそ、朝

早くから、どこへ行ったんですか。そこのお重質の中に、きのう戴いたちまきが入っているから

「ちまきは後にしよう。お通さんに先に欣ばしてやることがあるから」お食べなさい」

「なあに?」

「武蔵様ネ」

「叡山にいるとさ」「ええ」

「ア……叡山へ」

するとね、きょう聞いたのさ。武蔵様は、東塔の無動寺に泊っているって」 「きのうも、おとといも、その前も、毎日のように、おいら方々聞いて歩いていたんだよ。

「……そう。……ではほんとに御無事でいらっしゃるのだわ」

ちまきを食べたら支度するから、お通さんもすぐ文度をおしよ。 「そう分ったら、一刻も早くがいい、またどこかへ行っちまうといけないからね。 ――直ぐ行こう、これから訪ね お らも今、

て行こう。無動寺へ」

じっと、 お通のひとみは、あらぬ方へ向いている。庵の廂ごしに見える空へ心を遠くしている

のである。 城太郎は、ちまきを食べ、持つ物を身に持つと、再び、

卷

と、促した。 「どうしたんだい?」 やや不満と不平をあらわして問い詰めた。 だが、お通が起つ気色もなく、いつまでも、坐っているので、

「城太さん、無動寺へ行くのは、止しましょう」 「ヘエ?」

少し、おひゃらかすように、城太郎は不審を口に尖らして、

「なぜでも」 「なぜさ」

る所が分ったとなると、今度はヘンてこに澄まして、止そうのなんのとしぶくるんだもの」 「ちぇッ、女って、これだから嫌になっちまう。飛んでも行きたいくせして、さあ、その人のい 「城太さんのいう通り、飛んでも行きたいほどですけれど」

「だから、飛んで行こうというのに」

これが今生の最後だと思って、ありッたけな心の裡を話してしまいました。武蔵様も、生きては 「けれど。……けれどね、城太さん。わたしはいつぞや瓜生山で、武蔵様とお目にかかった時、

「だけど、生きているんだから、会いに行ってもいいじゃないか」

再び会わないと仰っしゃいました」

けな

断ったと覚悟したのですから、たとえ、武蔵様の居所が分っていても、武蔵様のおゆるしがなけ しゃったお言葉もあるし、私も、必死で摑んでいたあのお方の袂を離して、もう、今生の恩愛を用心をして叡山に身を退いていらっしゃるのかそのお気持は分りません。――それに、私へ仰っ 用心をして叡山に身を退いていらっしゃるのかそのお気持は分りません。 「下り松の勝負はついても、まだ武蔵様の心としては、ほんとに勝ったと思っているか、どんな

れば……」

「じゃあ、このまま十年も二十年もお師匠様からなにもいって来なかったらどうする?」

「こうしています」

「ええ」 「坐ったきり、空を眺めて暮しているの」

「なにが

「わからないでしょ。……だけどわたしには分っているの」 「変な人だなあ、 お通さんという人も」

も、お互いの心は、比翼の鳥のように、連理の枝のように、固くむすばれているものと信じていどうだか分りませんでした。……今はもうそうではない。たとえ生きても死んでも、離れていて ど、ほんとに苦しい恋をつづけて来ました。けれど、武蔵様をほんとに信じていたかといえば、 のです。以前は、武蔵様を慕ってはいました。生命がけで思っていました。城太さんの前だけれ 「武蔵様のお心がです。――瓜生山で最後のお別れをする前よりも、あの後になってか わたしには武蔵様のお心が、ずっと深く分って来たからです。それは、信じるということな らの方

あった。

ますから、 ちっとも淋しくなんかない。……ただ武蔵様が、 武蔵様のお心のままに、

すすんでお出で遊ばすように、祈っているばかりなんです」

黙って、おとなしく聞いていたと思うと、城太郎はいきなり呶鳴るようにいった。 ――女って、嘘ばかりいってるんだ。 ---いいよ、じゃあもうきっとお

に会いたいといわないね! これから先はいくらベソを搔いたって、おいらは知らな 「噓いってらあ。 この数日の努力を、 無にされたように、城太郎は腹を立てた。そして晩まで口を き か な か 師

つ

宵に入ると間もなくであった。 庵の外に松明の赤い光が映し、 そこをほとほとと打叩くものが

「これは、

れたもの。 いで持ってまいったのでおざる。 で持ってまいったのでおざる。――併せて大納言様よりも体を愛しめとの御意、お伝え申しあたもの。――一応大納言様のお耳に入れると、すぐお通の許に届けてつかわせとのことに、急ごれは、お通どのが、まだお館にいられるものと考えて、武蔵どのが、使いに持たせてよこさ鳥丸家の侍は、一通の手紙を城太郎の手に授けて、

げまする

すぐ、使いは帰って行く。

城太郎はそれを手に、

お師匠様の字だ。 もし、 下り松で死んでいたらお師匠様ももうこの手紙は書けなかった

んだなあ。……お通どのへ、と書いてあらあ。 ……だが、城太郎どのへとは書いてない」

「城太さん。今、お館の人が持って来たのは、お通は、奥から立って来て、 武蔵様からの手紙ではありませんか」

「そうだよ」

城太郎は意地を歪げて、手紙を後ろにかくしながら、

「でも、 お通さんには、用はないだろ」

「おみせ」

「いやだい」

意地のわるい――そんなことをいわないで」

焦れて、泣きそうになると、城太郎は手紙を彼女へ突きつけながら、

我慢して、嫌に気取ってみたりして」「それ御覧な。そんなに、見たがるくせにして。それを、 おいらが会いに行こうといえば、 痩せ

短檠の下に繰りひろげている手紙と白い指先は、燈芯の火とともにおののいている。だだにはもう、そんな言葉を聞いている耳はない。

心なしか、こよいは、灯も鮮やかに、翳りなく点って、なんとなく胸も花やぐようなと、灯占のなしか、こよいは、灯も鮮やかに、繋りなく点って、なんとなく胸も花やぐようなと、灯点

をたてていたが

お許に待たせたが、花田橋では こたびは

風

しが待つであろう

田 の湖畔に

牛をつないで

と、武蔵からの便り。 まざまざと、その人の筆、 墨のに お

墨の光りまでが、 虹いろに見え、彼女のまつ毛には、 きらきらと、珠の涙が咲いていた。

夢かと思う。

あまりの欣しさに、 頭もだとして。 ――お通は、 なんだか、この世のことでないような心地が

歌の中にある、貴妃の驚愕と喜びの章が――そのまま自分のことでもあるように、お通は茫然とめ、遂に、海上の蓬萊宮中にその花貌雪膚の仙子を見出して、帝の意をつたえたというあの長恨め、遂に、魂魄をたずねさせ、道士はそれを、上は碧落の極み、下は黄泉にいたるまでさ が しも とじて、魂魄をたずねさせ、道士はそれを、上は碧落の極み、下は黄泉にいたるまでさ が しも と 安禄山の叛乱に、兵車の軌の下に楊貴妃を失った漢皇が、してならなかった。 のち貴妃を恋うのあまり、道士に命

して、短い手紙を、見も飽かず、繰りかえしていた。

「……待つ身となると、待つ間の時の長さ。そうだ、少しでも早くお目にかかって」 こう、城太郎へ向って、語りかけているつもりではあったのだが、もう彼女の歓びは彼女を顚

手紙にのこし、もう、足拵えまでして、先に戸外へ出た。 手早く身支度をし、庵の持主や、銀閣寺の僧や、世話になった人々へは、一筆ずつ礼の辞を置倒させている。——相手へいったつもりでも、それは独り語の独り合点をしていたのである。 そして、家の中にぶっ坐って、膨れ顔している城太郎に向い、

「城太さん、 、おまえはもう、先刻お支度をしていたからそれでいいんでしょ。……さ、早く出て

おいで。後を閉めて行かなければならないから」

てこでも動く顔つきではない。城太郎は、すっかりお臍を歪げてしまった。「知らない、おいらは。——どこへ行くのさ」

四

「城太さん、怒ったの」

「怒ったさ! 当り前だい」

「どうして」

「勝手だから、 お通さんは。 おいらが折角捜し当てて来て、行こうという時には、行かない

「でも、その理由は、よく話したでしょう。ところが今、武蔵様の方からお便りがあったんですといっておきながら」

ものし

「その手紙だって、自分だけで見て、おいらには、読ませてくれないじゃないか」 「アアほんとに、それは悪かった。 御免よ、城太さん」

「もういいよ、もう見たくなんかない」

なんて、優しいことを仰っしゃってくれたのも、これが初めてです。――それからこんな歓ばし の武蔵様が、わたしに手紙を下すったことなんか、これが初めてです。また待っているから来い 「そう、ぷんぷん怒らないで、この手紙を見ておくれ。ね、なんという珍しいことでしょう。

て、私を瀬田まで連れて行ってください。……ね、後生だから、そんなに膨れていないで」いことは、私にとっても、生れて初めてではあり ま せ ん か。……だから城太さん、機嫌を直し

「それとも、城太さんは、武蔵様にもうお目にかかりたくないの」

「行くなら行くで、早くお出でよっ!」愚凶愚図してると、戸外から閉めてしまうぜ」、庵の外へ飛び出して、まごまごしているお通へ剣突くを食わせた。城太郎は黙って例の木刀を横に差し、先刻作っておいた風呂敷づつみを斜めに 背 負 ぽん

「行くなら行くで、早くお出でよっ!

「まあ、怖い人」

それから二人は、志賀山越えの道を、夜にかけ歩き出したが、先に怒った手前がある、 道は寂

L いが、城太郎は口をきかない。

風

歌を唄ってみたり、石を蹴ってみたり、なにか遺場のない気持を抱いているらしいので、お通がすたすたと、先を歩いて行きながら、そこらの木の葉を挘って、木の葉笛を吹いてみたり、俗

「城太さん、わたし、いい物持っていたのに、忘れていたのよ。あげましょうか」

「……なにさ」

「……ふん」

「おととい、烏丸様から、 いろいろお菓子を持たせてよこして下すったでしょう。それがまだ残

っているのだけれど」

くれとも、要らないともいわずに、城太郎が黙々と歩いて行くので、お通は、苦しい喘ぎを我

慢して、側へ追いつき、

「城太さん、食べない? わたしも食べよう」

「草臥れたろ、お通さん」「草臥れたろ、お通さん」、もう北斗は白く薄れて、雲は夜明けのたたずまいであった。志賀山越えを登りつめた時は、もう北斗は白く薄れて、雲は夜明けのたたずまいであった。それからやっと、城太郎の機嫌がすこし直った。

「ええ、登りばかりだったから」

「あれが鳰の湖ね。……瀬田はどの辺?」「もうこれからは、下り道だから、楽なものだよ。 ····・ああ、 湖水が見える」

「あっち」

と指さして、

「待っているといっても、お師匠様は、こんなに早く行っているかしら」

「でも、まだ瀬田まで行くには、半日以上もかかるでしょう」

「そうだ、ここから見ると、すぐそこのようだけれど」

「少し休まない?」

「休もうか」

すっかり気持も解けたとみえ、城太郎はいそいそ休み場所をさがし歩いていたが、

よう」 「お通さん、お通さん、この樹の下だと朝露がなくっていいよ。ここへお出でよ、ここへ腰かけ 二本の巨きな合歓の樹の下だった。と、手招きした。

五.

倚り合っている二本の喬木の下に腰をおろして、

城太郎がいう。

9

恣

「なんの樹だろ?」

「合歓の樹です」お通も、眸を上げながら、 と教える。そして、

風

樹がありましたっけ。六月ごろになると、糸のような淡紅色の花が咲いてね、夕月が出るころに「わたしや武蔵様が、まだ幼い時分によく遊んだことのある、七宝寺というお寺の庭にも、この なると、あの葉がみんな重なり合って眠ってしまう」

「だから、なむの木というのかしら」

「でも、文字で書くと、眠という字は書きません、合い歓ぶと書いて、合歓と訓むんですの」

「どうしてだろ?」

「どうしてでしょうね。きっと誰かが拵えた当字でしょう。……だけど、この二本の樹の姿を見

ると、そんな名がなくても、いかにも歓び合っているといったような姿じゃありませんか」

「樹なんか、歓ぶも悲しむも、あるもんか」

り楽しんでいる樹もあるし、独り傷ましそうに嘆いている樹もある。また城太さんのように、歌 「そういわれてみると、そんな風にも見えてくるなあ。――するとこの合歓の木なんか、どう思が聞けば物をいっているという位ですもの、なんで樹にもこの世の生活がないといえましょう」 を謡っているのもあれば、大勢して、世を怒っている樹の群れもあるでしょう。石でさえ、聞く人 「そういわれてみると、そんな風にも見えてくるなあ。 「いいえ城太さん、樹にも心があるんです。よく御覧、この山の樹々のうちにも、よく見ると、独

「わたしから見ると羨ましい樹に見えます」っているんだろう」

「どうして」

「長恨歌を知ってるでしょう。白楽天という人の作った詩」

「ああ」

うのじゃないかしらと、さっきから思っているんですの」 は連理の枝と為らん――という句があるでしょ。あの連理の枝というのは、こんな樹のことをい 「あの長恨歌の終りのほうに――天に在っては願わくは比翼の鳥と作らん、 地に在っては願わく

「連理って? ……何」

「なんだあ……自分と武蔵様のことをいってるんじゃないか」 「枝と枝、幹と幹、根と根、二つの物でありながら、一つの樹のように仲よく立って、天地の中、 春や秋を楽しんでいる樹のこと」

「長干行か」

「いけない、城太さん」

「勝手におしよ」 なんという美しい今朝の雲だろう」

「鳥がお喋舌をし始めたね。ここを下りたら、おいら達も、朝飯を食べようぜ」「――夜が明けてきた。なんという美しい今朝の雲だろう」

「城太さんも歌わない」

「なんの歌」

詩があったわね。覚えている? ……」 「白楽天といったので思い出したんです。いつか、城太さんが、烏丸様の御家米に教わっていた

「ええ、 あれ。あの詩を、 聞かせて下さいな。書を読むような節で結構ですから」

トラション・ トラション・ ボラグリー・ ボラガッテ門前ニ戯レー・ ボラ折ッテ門前ニ戯レー・ ボラ折ッテ門前ニ戯レー・ ボラが変数メテ額ヲ覆ウ

城太郎はすぐ口誦さんで、

「この詩かい」

「……同ニ長干ノ里ニ居リ『そう。もっと続けて』

「詩よりも、 詩よりも、おいらは、お腹が減っちゃったい。早く、大津へい城太郎はふいに起って、じっと聞き入っていたお通を促した。 **豊上ランヤ望夫台** 願ワクハ塵ト灰ヲ同ニ十五、始メテ眉ヲ展ベ 十六、君遠クへ行ク……」 常ニ存ス抱柱ノ信 -喚一トシテ廻ラズ頭ヲ低レテ暗壁ニ向, ダ常 テ開カズ 4

送 存しるん 娘?

大津へいって朝飯を食べようよ」

家ごとの炊煙は、曙けたばかりの町の上へ、戦のように立ちのぼっていた。まだ天地は濡れている。 大津の宿駅は、

湖

80 夜来、飽々するほど山道を歩いて来て――いや牛の歩みにまかせて来て、北から石山までぼかしている朝がすみと、その熾んな煙の下に見えてきた。 いる里に接した武蔵は、牛の背から思わず、 黎明と共に、人間の

「オオ」

と、眼を、拭って眺めた。

――同じ時刻に、 、お通と城太郎のふたりも、志賀山越えの道から、 この大津の屋根を眺め、 湖

- 峠の茶屋から峰を繞って降りてきた武蔵は、今、三井寺の裏山から八詠楼のある尾蔵寺坂にか畔へ向って、希望の足を躍らせているはず―― かって来たが、お通はどこの道から降りて来るのやら。

時刻も道も、ほとんど同じように辿って来たのであったが、武蔵の視野の前には未だ彼女の姿は 湖畔の瀬田で落ち合うまでもなく、ひょいと、そこらで打つかっても、そう偶然でないほど、

見えなかった。 の場所へ姿を見せるのが、今日の夕刻頃になるにちがいない。 であるし、女の事ゆえ、身支度もあろう。 は、烏丸家からお通の養生している先へこよいのうちに届けておくという消息であった。 その返事から考えると、自分の手紙が、お通の手にとどいたのは昨夜のうちとしても、あの体 烏丸家へやった茶店の女房の返事によれば、 ―といって、武蔵は決して、失望もしないし、会いそうなものだとも思っていなかった。 お通は烏丸家にいないということであり、 まず早くても、そこを立つのは今朝あたり、 約束

そう武蔵は、胸づもりに、想像していた。

と、つぶやいた。

それに今はまた、これぞといって、先を急ぐ何事も心にはないし―― 牛の歩みも遅いと思わ

なかった。

牝牛の巨きな体は、山の夜露に濡れていた。朝の草の色を見ると、牛は頻りに草を食った。け

----すると、民家と向い合っている伽藍の辻に、なんとか桜と、名所名にでもありそうな桜のれど武蔵は、それも牛の意のままにまかせていた。

老木があって、その下の塚に、歌を刻んだ碑が見える。

誰の和歌か。――思い出そうともせず、武蔵は、そこを二、三町行き過ぎてからふと思い出し

「そうだ……太平記の中で」

太平記は、彼の少年の頃の愛読書の一つだったので、或る箇所は、暗誦している くらい だっ

で――今見かけたその和歌から、少年の頃の記憶が、難って来たのであろう。緩々たる牛の背

い、妄想起りて、多年の行徳も潰え、火宅の執念に一切を喪い給う……念じたもうに、折りふし、京極の御息女所、志賀の花園の帰るさを、上人ちらと 見 そ め 給――志賀寺の上人は、手に一尋の杖をたずさえ、眉に八字の霜を垂れ、湖水の波に水想観をで武蔵はなにげなく、その和歌の載っていた太平記の一章を、口のうちでそら読みした。

「少し忘れたな」

武蔵はそう思いながらまた、うろ覚えのまま、

が思いのふかき一端を申して、心やすく臨終もせばやと、上人杖をつき、御所へ参りて、 心も憂く、閑窓の月にうそぶけば、玉顔われに笑み給うかと迷うも浅まし。 今生の妄念ついに離れずば、往生の障りともなりぬべければ、御息女所に会い奉り、 称名のおん声だに、煩悩の息とのみ聞えたもう。暮山の雲をながむれば、 柴の庵に立ちかえり、 本尊仏にむかい奉るといえども、 会をながむれば、君が花釵かと観念の床には妄想の化の立そ 鞠まわ

いつか、牛は町の中にはいっていたのである。誰か、その時、後ろから呼ぶ者があった。「おオいっ、旅の衆、牛に乗ってゆくおさむれえ」

の坪の下に、

一日一夜ぞ立ちたりける……

問屋場の人足だった。

駈けて来て、牝牛の鼻づらを撫で、牛の頭越しに、武蔵を見あげて、

「おさむれえさん、無動寺から米なすったな」

といい中てる。

「ほ、よう知っているなあ」

「成程、

おまえが飼上か」

むれえさん、 「この斑牛は、 いくらか牛賃をおくんなせえ」 いつぞや荷を乗せて、山 の無動寺へ行った商人に、牛方なしで貸した牛だ。 おさ

ってもよろしいのか」 「よしよし、飼料をつかわそう。――だが、その賃さえ払えば、この牝牛は、どこまで曳いて参 「おれの持牛じゃねえが、問屋場の牛小屋にいる牛だあな。無賃じゃいかねえぜ」

屋に渡しておいてさえくれれば、下りのお客が荷物を積んで、いつか大津の問屋小屋へ帰えって「金さえ払えば、どこまで乗って行こうと、かまわねえさ。三百里先へ行こうと、道中の宿場問

「では、江戸表まで、いかほど払ったらよいのか」来ることになっているんだから」

「じゃあ、通り道だ、問屋場へ寄って、お名前を書いて行っておくんなさい」

すまし、まだ、早過ぎるとは思ったが、間もなく、牛の背の人となって、その問屋場から再び先 へ立って行く。 、草鞋をひさぐ店もあるし、旅の垢を落したり髪を整える備えもある、武蔵はゆっくり朝飯を問屋場は打出ケ浜の渡口場に近かった。船着きから上がる者、乗る者、ここ は 旅 人の屯なのなにかの支度にも好都合、武蔵はいわるるままにそこへ立ち寄る。

瀬田はもう程近い。

湖畔のうららかな風光を、牛の足にまかせて行っても、大丈夫、午までにはそこへ着く。

(まだ、来ていまい)

武蔵はそう思い、そして、今度お通に会うことには、なにかしら心に安んじるものを抱いてい

それは、彼女に対する彼の、安心であった。下り松の死地を乗り越える前までは、武蔵は、女

性というものに、堅い構えを持っていた。 けれど、 あの時の、お通の澄みきった態度、聡明な意思の処理を見てから、 お通に対しても同様な危惧を抱いていた。 武蔵の彼女に対す

る気持は、 一般の女性を危惧するような眼で、お通をも危惧して来た自分の小心さが、彼女に対して済ま ただの愛以上、深いものに改まっていた。

なかったように今では思う。

そういう男の気持 あれから後、胸のふかくに抱いていた。―安んじて女性にゆるしている気持―― それは同じように、 お通も、 男性

に対する信頼として、 武蔵はもう、 何も かも、彼女にゆるしきっていた。今日会ったら、 どんな事でも、 彼女の願

なら容れてやろう。

ない女性ならば、決して、男性の道に情痴な莢を横たえはしない。ていたのである。しかし、お通のような覚悟のいい、聞きわけのよ 今までは、それが恐かった。剣を、歪めない限りの事は。 ただ溺るることを誡めて、自分さえ、乱れなければ。 女の黒髪には、剣も鈍り、道も喪ってしまうものと、修行の道から堕落しない限りの事は。 えはしない。なんの足手纒いになるわけは聞きわけのよい、理性と情熱の処理を誤ら それを惧れ

揺と映えていた。 自分は城太郎を連れて、さらに高い修行の道にのぼろう。 (そうだ、江戸表まで一緒に行って、 、そんな空想に耽ってゆく武蔵の顔に、湖水の波紋の光が、幸福の笑みを投げかけるように、揺 お通には、もっと女性として学ぶべき修養の道に就かせ、 そして、或る時節が来た 6

瀬田 二十三間の小橋と、九十六間の大橋をつないでいる中之島には、古い柳の木があった。 の唐橋を、青柳橋とも呼ぶのは、その柳がよく旅人の目印にされるからであろう。

あっ、 来たよ」

さし、一方の手では茶店の床儿をさしまねいて、と、その中之島の茶店から駈け出して、小橋の欄下につかまりながら城太郎は、一方には指を

の足は雀躍りしていた。 往来の旅人も、この少年が、なにをそんなに狂喜するのかと、眼をそばだてて不審るほど、 お師匠様だっ。……お通さんお通さん、お師匠様が牛に乗って来たよ」

彼

転ぶように駈けて来て、おお、ほんに!」

お通もそこに顔を並べる一

二人して、

お師匠さまあっ」

武蔵さま」

打ち振る笠、 打ち振る手。

にこりとした武蔵の顔もはや間近であった。

んだりしていたのに、その人の側に立つと、お通はもうなにもいい得ないのである。にこと眼で 牛はやがて、柳の木に繋がれる。 ――川を隔てて遠く見た姿には、狂喜の手を振ったり名を叫

笑ったほ て。……そりゃあ、お通さんに聞いたほうが早いや。お通さんと来たらお師匠様、ほんとに勝手 痛んで歩けないので乗って来たのかと思ったよ。……え? どうしてこんなに早く来ていたかっ 「お師匠さま、もう傷は癒ったの。おいら、お師匠様が牛に乗っ笑ったほかは、すべて城太郎が一人で引きうけて喋舌っていた。 お師匠さまから手紙が来たら、この通り一遍に元気になってしまうんだもの」 お師匠様が牛に乗って来たから、

あの時

の傷がまだ

「ふム、そうか、ふム……」

なんだからね。

と武蔵も一々にこやかに頷いていたが、他に客もある茶店先、 お通のことをいわれると、

に来た聟殿のように甚だてれる。

かりぎっこ。り、この景地と生命を楽しんでいるものは独り城太郎と、そして、藤の花に噪いでいる虻と蜂ばり、この景地と生命を楽しんでいるものは独り城太郎と、そして、藤の花に噪いでいる虻と蜂ばもししてはかりいるし、武蔵も無口に固くなってしまう。ありのままに歓び、歓びのままに喋舌してはかりいるし、武蔵も無口に固くなってしまう。ありのままに歓び、歓びのままに喋舌 裏に、藤棚で掩われた小座敷がある。そこへ三名は寛いだ。といっても相変らず、 お通はもじ

かりだった。

風

オヤいけない、 石山寺の上があんなに暗くなりました。 一雨来ますよ。 もっと奥へおはい りな

すって下さい」

に、遠に咽ぶような薫いを散らして顫いている。鉛色に見え、そよ風は雨気を囁きはじめて、藤の 茶店の亭主が、 あわてて政資を巻き、雨戸を横に囲い始める。 藤の花の紫は、将に死なんとする楊貴妃の袂のようを横に囲い始める。なる程、江の水はいつのまにか

サアッと、その弱々しい花から真ッ先に目がけられたように石山颪が小雨をぶっつけてく

る。

さいよっ、座敷のほうへさ。アアいい気持だ。この雨は、ちょうどいいや! もよけいにはいり難い。 「アッ、雷さまだぞ。ことしの初雷だ。お通さん。濡れちまうよ。お師匠さまも奥へおは なにが丁度いいのやら、深い意味でいうわけでは勿論ないが、そう彼にいい囃されては、武蔵いよっ、座敷のほうへさ。アアいい気持だ。この雨は、ちょうどいいや!「ちょうどいいや」 お通も顔を紅らめて、雨に砕ける藤の花と共に、縁の端に立って濡れて いりな

「オオ、ひでえ!」 菰を被って、白い雨の中を、 に 傘みたいに飛んで来た男がある。

四宮明神の楼門の下へ馳け込むなり、ほっと、髪のしずくを撫でて、

「まるで、夕立だ」

と、迅い雲あしへ呟いた。

と思ううちに眸を断たれたように雷光を感じると、どこか近くに雷が落ちたらしかっ見るまに四明ケ岳も湖水も伊吹も乳色になって、ただ滌々と雨の音しか耳になか ただ滌々と雨の音しか耳になかった。

Г.....あっ」

に、又ハへ笑いかけた。 の音さえ聞えだした。すると、 音さえ聞えだした。すると、婀娜なすがたの女が、向う側から往来を越えて来て、用 あり げ雲が断れると、嘘のように、陽が射してきた。雨がやみ、往来も元に還って、どこかで三味線 雷ぎらいの又八は、耳の穴をふさいで、楼門の雷神の下に縮こまっていた。

見かけない女である。

「あなた、又八様と仰っしゃるのでしょう」

そういうのだ。

うで、二階からお姿を見かけ、ぜひ引っ張って米いというお吩咐けです、という。 又八が不審って用事を問うと、今、家へ上がっていらっしゃるお客様が、あなたのお友達だそ

「……御用がおありならば、直ぐお帰りになってもよござんすから」 いわれて見ると、成程、この神社の界限には、娼家らしい構えが幾軒も見える。

って来ると、他の女たちも出て、足を洗ってくれるやら、濡れた着物を脱がすやら下へも措かなと、使いに来た女は、又八のためらいなどは無視して導いて行く。そして近くの娼家へ引っ張

١,

するつもりで明かさない。

いったい、 おれの友達というお客は誰かと訊いてみても、二階へ行ってみれば分ると、 座興に

橋で約束の者が待っているはず。 何分、雨に逢って、 着物もずぶ濡れだから、一時姐家の物を借り着するが、実は今日瀬 ――で直ぐ帰るのだから、その間に衣類を乾かし、引き留めな Ш の店

「頼むぞ、いいか」

いでもらいたい。

四

「や? ……おぬしは」

女たちは、安請合いにいって、又八を梯子段の下から押し上げる。「はい、はい、よい機に、きっとお帰し申しますよ」

(二階の客とは一体誰だろうか)

いし、またこういう雰囲気の中に入ると、彼の頭のつかい方や身ごなしは、ふしぎに冴えて精彩 又八は頻りと考えてみたが思い当る者がない。けれどこういうところに場馴れない又八ではな

を発揮してくる。

「やあ、犬神先生」

いきなり先方の者からいった。人違いだったかと又八は鬩ぎわで足を止めたが、 座敷の中に坐

っているその客を見ると、満更知らない人間ではなかった。

「貴公のことさ」「犬神先生といわれたのは?」「お忘れか、佐々木小次郎を」

「おれは本位田又八だが」

って、|百面相をしてござったのを思い出したから、お犬の神様と尊称申し上げ、犬神先生と呼ん 「そんなことは心得ているが、かつて六条松原の闇で、群犬に取り巻かれ、野良犬どもの中に坐

だのでござる」

「その代りに、きょうはよい目に遭わせてやろうと思い、迎えにやったわけだが、 「よしてくれ、冗談じゃあねえ。あの時は、ひどい目に遭わせやがっ たぜし よく来てくれ

おい、そう酌して もだめだ

ぜ、きょうは飲めない」 「瀬田で、待っている者があるから、すぐお暇する。……おっと、た。まあ、坐るがいい。——おい女輩、この人に杯を酌せ、杯を」

「瀬田で、誰が待っているのか」

「宮本という、 おれの幼少からの友達で――」

「なに、武蔵が。……ウウムそうか。峠の茶屋で約束したの と、いいかけるのを引っ奪くって、小次郎は早口に、

「よく知っているな」

――。叡山の中堂でお目にかかったぞ。そしてつぶさにあの老母から、今日までの苦心を聞かさ「貴公の生い立ち、武蔵の経歴、みな詳細に聞いている。其許の母親――お杉どのといわれたな

れた」

力づけて別れた」 『えらい老母だ、見上げたもの。中堂の僧も皆、同情していた。わしも屹度、助太刀しようと、『え。おふくろと会ったって? ……実あ、きのうから俺も捜し歩いているのだが』

杯を洗って、

「さ、又八。旧怨を雪いで酌み交わそう。武蔵ぐらいな相手、恐れるな。広言ではないが、佐々

| 類を 紅 にして杯を出した。 | 木小次郎がついている」 だが又八は、手を出さない。

見栄っ張りな小次郎も、酔うと自でに、常の容態や端麗も構えから忘れてしまう。

「又八、なぜ飲まぬ」

左の手が走ると、ぐっと又八の腕くびを摑み、「もうお暇だ」

「でも、武蔵と」「いかん!」

目に身を立てるつもりだ」 「そんな争いはもうお互いに捨てたんだ。俺は、あの親友に縋って、これから江戸へ行って真面「ばかをいえ。貴様一人で、武蔵と名乗り合ったら、立ちどころに返り討ちだぞ」 「なに、武蔵に縋ってだと?

で、遅れ走せだがこれから志を立てる所存だ」い違いしている。つくづく今度はそれが分った。一 「世間は武蔵を悪くいうが、それは俺のおふくろが悪くいい触らすからだ。 同時に俺自身も悟った。おれはあの善友に習ん おふくろは武蔵を思

「アハッハハハ。わははは」

91 武蔵に悉く騙されたな」「お人好し!」おいっ、おふくろ殴もいっていたが、なるほど、貴様は世にも稀なお人好しだ。「お人好し!」おいっ、おふくろ殴もいっていたが、なるほど、貴様は世にも稀なお人好しだ。 小次郎は手を打って笑い、

Ŧi.

風

佐々木小次郎でさえ、あの老母の言葉には義憤を感じ、将来助太刀をしようとまで誓っているの「まあ、黙れ、いうな。第一おふくろを裏切って仇に加担する不孝者がどこにあろ う。他 人 の は

「なんといわれても、おれは瀬田へ行く。放してくれ。 -おい女ッ、着物が乾いたろう、おれ

の着物を出してくれ」

「出すなっ」

小次郎は、酔った眼を吊り上げて、

く得心させてゆけ。おそらくあの老母は、そんな屈辱に、合点はすまい」 「出すときかないぞ。 ――これ又八、貴様武蔵とそうなるならば、一応、おふくろに会って、よ

「その口吻は、武蔵のいった口吻に違いない。あしたになったら、わしも共に捜して遺わすかおれが一かどの人間になりさえすれば、すべての宿怨は自でに解けてしまう」「そのおふくろを捜しても見当らないので、一先ず俺は武蔵と一緒に、江戸表へ下ろうと思う。

ら、とに角、おふくろの意見を訊いた上でゆくがよい。そうして今夜は飲もう、嫌でも

が、小次郎に交際え」

はずもない。 もちろん、ここは娼家、女達も皆、そういう小次郎に加勢して、又八の着物など返してくれる

が暮れる、遂に、夜も更ける。

らふでは小次郎に頭も上がらないが、酔えば俄然又八は、とらになり得るのだ。見ていやが

送

れという気で彼は宵から飲み始めた。 酒の勢いを駆って、 小次郎を手古摺らし、さんざん鬱憤を

寝たのが夜明け、眼をさましたのは既に午過ぎ。

らし

て潰れてしまった。

小次郎はまだべつの部屋で熟睡しているという。昨日の初雷できょうの陽ざしは一倍澄んでい

階下へ降りて、着物を出させ、それを身に纒うと逃げるように戸外へ駈け出した。そして瀬田。、又八は、まだ耳に新しい武蔵の言葉を思い泛かべ、ゆうべの酒を吐き出したくなった。

の橋まで来て見た。

赤く濁った瀬田川の水に、 石山寺の残んの花もこれ限りのように流され、藤茶屋の藤のふさも

砕け、山吹も散っていた。

「牛を繋いでー ーといったが」

その牛は、小橋の袂にも、中之島にも見えなかった。

の閉まる頃までここに待ってござったが、夜に入ったので旅籠へ移り、今朝またここへ来て、し諸所を捜したあげく、中之島の茶店で聞くと、その牛に乗ったおさむらい様ならば、きのう店 渡してくれいと軒先の青柳の枝に、書いた物を結びつけて先にお立ちになりました、という。 ばらく人待顔に佇んでおられたが、やがて手紙を認めて、後からわしを尋ねて来た者があったら 見ると、なるほど、白い蛾の止まっているように、柳の枝の結び文。

「済まなかった。 ――では一足先に立って行ったか」

ソハは、蛾の翼を解いた。

咎

滝き

初夏に向ってゆく旅だ。木曾路の新緑を浴びて、 中山道を牛の足にまかせて行く。

(待っているぞ、後から追いついて来るがいい)

草津まで行っても行き会

わない、彦根、鳥居本まで来ても見当らない。柳の枝に結び文を残して行った武蔵を慕って、又八は道を急いだが、

摺鉢峠では、峠の上で、半日往来を眺めていたが、その日も無駄。「ハテ、先に来過ぎてしまったのかな?」

いたが、武蔵には、お通、城太郎の道連れがあった。 牛に乗った武士と訊いても、牛馬に騎って行く旅人は多い。それに又八は、武蔵一人と思って

「やっぱり俺は、お人好しかな?」 美濃路へ来ても知れないので、彼は、小次郎の言を思い出して、

迷い出すと限りがない。

行き会えないことになってしまう。 彼自身の惑いが、道を戻ったり、 曲ってみたりするために、当然会えるはずの者に、よけいに

だが遂に、中津川の宿場端れで、 彼は、先へ行く武蔵の姿を見つけ た。

目だろう。それは実に又八としては珍しいほどな熱意で追いついて来た目標だった。 しか

彼は、武蔵の後ろ姿を見るとともに顔色を変えて武蔵を疑った。

牛の背に乗って行くのは、武蔵ではなくて、七宝寺のお通ではない か そのお 通を乗せて

牛の手綱を持って行くのが武蔵ではないか。

かしめたものは、お通と武蔵との、陸じそうな姿だった。側にくッついてゆく城太郎の如きは、又八の眼中にはない、 問題でもない。 又八をして猜疑に

今日までのどんな場合の憎悪の嫉視よりも、このせつなほど又八は、 友の姿を悪魔に見たこと

はない。

出 Þ かけた時から今日に至るまで。 ねえぞ。野郎、 アアや っぱり、思えばおれは、 今にどうするか、覚えていろよ」 お人好しだったに違えねえ。あいつに、唆 だが俺も、こう踏みつけられちゃあ、何日までお人好し されて関ケ原

「暑い暑い。 「木曾で一番の難所、 の難所、馬籠峠へかかり出したのだ」こんなに汗をしぼる山道って初めてだ。 ここはどこ? お師匠

「おらあ、峠に飽々しちゃった。はに御坂と十曲と」。「きのうも二つ峠を越したっけねえ 通は、牛の背から、 はやく江戸の賑やかな所へ出たいなあ。 ねえお通さん」

「ちぇっ、自分は、歩かないもんだからね。——お師匠様、あそこに滝が見えるよ、滝が」 「いいえ城太さん、わたしは何日までも、こんな人のいない所を歩くのが好き」

「オオ、少し休もうか。城太郎、そこらへ牛を繋いで置け」

り、辺りには、霧に濡れた草の花が一面に咲きみだれていた。 滝の音を心あてに、細道を分け入ってゆくと、滝つぼの崖の上には、人もいない滝見小屋があ

「……武蔵様」

大小二すじの滝が、一つ渓流へ落ちている。やさしいほうが女滝とすぐわかる。歩けば休もう お通は、立札の文字を見て、その眼を武蔵に移してほは笑んだ。女男の滝とそれは読まれた。

く奔流の相を見ると、その水と自分のけじめが分らなくなったように、躍り跳ねて、崖の下へ駈休もうというくせに、城太郎は少しも落着いてはいない。滝つぼの狂瀾や、岩間にぶつかってゆ

け下りて行った。

答えないでいると、「お通さあん、魚がいるよ」

風

「石で捕れるよ。石をぶつけると、腹を出して浮くぜ」

やがてまた、しばらく経つと、

「わアあい」

と、飛んでもない方角に谺が聞え、 なかなか戻って米そうもない。

山 の端から陽が映した。霧に濡れている草の花の上に、無数の小さい虹が描き出された。

滝見小屋の陰に寄り添いながら二人は滝の音につつまれていた。

「どこまで行ってしまったんでしょう」

「城太郎か」

「ええ。ほんとに、しようのない子」

「そうでもないぞ、おれの子供時分にくらべると、まだまだ」

「あなたは、べつ者でしたもの」

「反対に又八はおとなしかったなあ。……又八といえば、とうとう彼奴、来なかったが、 あいつ

こそ、どうしたのか」

「でも、わたしは、ほっとしました。もし又八さんが来たら、 隠れてしまおうと 思って い ま し

「本位田家の母子は、すこし御気性がちがいます」「隠れる必要はない。話してわからない人間はないはずだ」

「お通さん……。おまえ、もいちど考えなおさないか」

「どういうふうに」

「思い直して、本位田家の人になる気はない かと訊くのさ」

お通はびくっと色を顔にうごかして、きっぱりいった。

「ありません!」

そして、蘭の花のように紅らんだ瞼から、 みるまに涙がこぼれそうになった。

風

おって、微かに肩を顫わせた。 て冷めたり迷ったりする女性と同視されたように思って、 蔵は、よしないことをいったと心のうちで悔いた。今更、分りきったことなのだ。 お通は心外なのであろう。 指で顔をお 時が 経

(……貴方のものです!)

い襟あしは、武蔵の目に、 そう訴えているようだった。 辺りの若楓の樹は、 浅いみどりでこ

この場所を人目から隠している。

それにここ幾日の間、宿屋の燈火の下に、らんらんたる太陽の下に、お通の肉体を種々な光でも、もっと烈しい性能を帯びて潜んでいる。つぼの狂瀾と奔流を見て、遂に駈け出して行った城太郎の本能と似たようなものが武 蔵 の 体 にとうとうと地軸を震わせている滝の音は、そのまま自分の血の音のように武蔵は思われた。滝

の胸に育てられていた。草いきれのように鬱陶しいものが、むらむらと、眸を曇らして来るのでってくる黒髪のにおいを。――年久しく、磐石の下に虐がれていた愛慾の芽はそうして、遠に彼彼は見ていた。或る時は、芙蓉の花のように汗ばんだ皮膚を、或る夜は屛風をへだてていても漂彼は見ていた。或る時は、芙蓉の花のように汗ばんだ皮膚を、或る夜は屛風をへだてていても漂だれにここ幾日の間、宿屋の燈火の下に、らんらんたる太陽の下に、お通の肉体を種々な光で あ

な心地だった。城太郎のように、暴れ出したかった。そして、まだ冬草の枯れたのが、背高く生 である。 通を置き放して、彼方の道もない草むらへはいって行った。 いと、武蔵はそこを離れた。いや逃げるようにであった。 口から炎でも吐くように、膨ちきれそうな血を、 体から少し捨ててでもしまい なにか、 突然くるしくな たい よう たの

ていた。

い茂っている静かな陽溜りを見出すと、

「ああ」

と、そこへ身を投げて坐った。

お通は、どうしたのかと疑って、すぐ追いかけて米るなり、 彼の膝に縋りつ た。 <

「どうしたんですか。武蔵様……武蔵様っ……。なにか、お気に障ったのなら、堪忍してくださて、沈黙していた武蔵の顔が恐く見えた。なにか怖ろしく不機嫌に見えておろおろした。

い、堪忍して」

武蔵様っ、もし "

死にしがみついて、揺れ騒ぐ花のように、花の気づかない香に彼を咽せ返らせた。彼が堅くなっていればいるほど――また、恐い顔をしていればいるほど、お通は お通はその胸 必

ーおいっ!」

通は白い喉首を伸ばして、声もあげ得ずに、彼の胸の中でもがいた。 武蔵はいきなりそういった。 猛然と、彼の巨きな腕はお通を抱きしめて枯草の中へ仆れた。

お

槇; Ш つつじが真っ紅に燃えている。 の樹に、 尾の長い縞鳥が、まだ少し雪のある、 ――からんとして空は青い。枯草の下には、深山すみれが匂 伊那· 山脈の空をながめていた。

風

をあげたのではないが、悲鳴に近い驚きをあげて、お通は、 が啼く、栗鼠がちらと跳ぶ、原始の地上だった。そこの一叢の枯草は深く折れていた。

栗の棘みたいに自衛して、堅く身を縮めた。いけないッ、いけませんッ、武蔵様ッ」

「そ、そんなことっ……。貴方ともあろうお人が」

と、悲しげに、彼女が、嗚咽したので――武蔵はハッとした。 焰の身に、ぞッと総毛立つよう

な理智の冷たい声を浴びて、

巻 耐え難い侮辱と感じるのだ。遣り場のないその「憤」りと恥かしさを、彼は自分へ怒るように喚い「呻きに似た彼の声こそ今にも泣き出しそうだった。誰も知らない秘密にせよ、これは男性には「なななぜだっ?」「何故だっ?」 たのだった。

観することができた。ただ分らないのはお通の心なのだ。お通の眸、お通の唇、お通のことば、お 通の全姿――あの髪の毛までが、絶えず自分の情熱を誘いかけて、きょうに至ったのではないか。 て落ちている。彼の眼は茫然と、それを見て泣きかけていた。浅ましい自己のすがたを冷たく客 である。故意ではないにしても、結果においては、愛する者を欺き、陥れ、苦しめ、恥かしめ 自分で、男性の胸に火を放けておきながら、火がつくと、びっくりして逃げてしまうのと同じ ――だが、手を放した途端に、お通はもうそこにいなかった。小さい匂い袋が一つ、紐が切れ

たことになるではないか。

「そうだ」

きょうまでの切瑳琢磨も、一敗地にまみれて武蔵は、顔を俯つ伏せて、草へ泣き伏した。

ったかと思うと彼は悲しい。童が掌の中の木の実を失ったように悲しいのだ。きょうまでの切磋琢磨も、一敗地にまみれて、すべての精進苦行も、ここに空しく崩れてしま

自分に唾したいような忌々しさから、さも忌々しげな忍び泣きを洩らして大地へ伏していた。

日輪へ対して顔を上げ得ないようにいつまでもそうしていた。

(おれは悪くない!)

自分の行為に対して、彼が心の中で頻りにそう呶鳴ってみるもののそれで心は澄んで来なかっ

珠のように顫きやすく、感じやすく、無碍なる人の手を恐れるものにしろ、それを女性の一生を強には、処女心の清純というものを、この時、可憐いと思うような余裕はなかった。たとえ白(分らないっ、分らない) みを持って、今、この時、思い遣ることはできなかった。 通じて、ある期間だけにある、最高な心情の美であるとか、尊いものであるとかで、そんな愛し

た。むくりと起ち上がった。もう先刻の充血した眼ではない。その顔はむしろ蒼白かった。 しばらくの間 --落ちているお通の匂い袋を、足の下に踏みにじって、じっと、山の声を聞くかのように俯 ――そうして俯ッ伏したまま、土のにおいを嗅いでいるうちに、彼はやや落着い

餇 いていたかと思うと、

真っ直ぐに、滝のほうへ向って歩いて行った。あの下り松の剣の中へ、身を投げこんで行く時

102

のように、濃い眉毛をがっきりと寄せて。

……鋭い小鳥の声が、劈くように翔け去ってゆく。風のせいか滝の轟きが急に耳へついて、

染の雲の裡に、陽の光も淡れて来たかのように思える。 **

れば、 臓のように、まだ強い戦慄が止まないで、体は他人のもののようだった。 苦しめたことが明らかに分ると、いまいちど、武蔵が自分の側に来てほしいと思った。さもなけ ひたと身をつけて、彼女は先刻からじいっとこっちを見ていたのである。自分が武蔵をそんなに――お通は、武蔵のいたその場所から、わずか二十歩ほどしか逃げていなかった。白樺の幹に 自分から走り寄って詫びようかとも思って迷う様子であったが、しかし、脅えた小鳥の心

四

祉. いていないお通の眼には、泣いている以上の、恐怖だの、迷いだの、悲しみだのが、搔き曇

の男性ではなかった。

この人こそと、信頼

していた武蔵は、彼女が、自分の胸の中で、

自分勝手に描いていた、

幻想

幻想の心臓の中に、忽然、 赤裸の男性を見出した彼女は、死ぬかと思うほどな愕きに打たれ

悲しくて悲しくてならなかった。

けれど、その恐怖と慟哭の中に、彼女はまだ、ふしぎな矛盾が残っていることを気づかない。 し先刻の烈しい圧迫が、武蔵でなくて、他の男性であったとしたら、彼女の逃げ 走っ た足

は、決して、二十歩や三十歩ではなかったろう。

が落着いてくるに従って、彼女の心の中には醜い人間の本能の相を、他の男性のそれと、武蔵 なぜ、二十歩ほどで足を止めて、後に心を惹かれているのか。 それのみでなく、やや動

それとは、べつな物として、考えようとさえしていた。 (……怒ったんですか。……怒らないでくださいね。あなたが嫌だったわけではありません。……

怒らないで)

烈しい行動を、醜く思ってはいなかった。他の男性のように浅ましくは思えないのであ ているのだった。 **暴風に吹き飛ばされたような独りぼっちを感じながら、彼女の胸の中の言葉は、ひたすら詫び** ――武蔵自身が、自責したり苦悶したりしているほどに、お通は、彼のなした

むしろ、ふと、

(なぜ、わたしは? ……)

自分の盲目的な恐怖が、淋しくすら考えられ、 その刹那 の火花のような血の狂いが、

ほどなにか慕わしくさえ思い出された。

(……おや? どこへ? ……。武蔵様は)

いつのまにか、そこに見えない武蔵の影に、 お通はすぐ、 自分が捨てられたのではないか

った。

恟々と、彼女は歩いて、元の滝見小屋の所まで戻って来た。(きっと、怒って。……そうだ、怒って。……あ、どうしよう?)

吹きあげられ、 そこにも、武蔵の姿は、見当らなかった。ただ真っ白なしぶきが、滝壺から霧となって山風に 満山の樹々を揺すぶって、絶え間のない滝のとどろきが、ぐわうと、耳を塞ぐば

104

か

り冷ややかに面を打って来るだけであった。

すると、どこか高い所から、

「あっ、たいへんだ。 お師匠様が滝へ身を投げたぞっ。 お通さアん!」

城太郎の声だった。

渓流を渡って、向う側の山の鼻に城太郎は立っていた。そこから男滝の滝つぼをのぞいていた

ものらしく、突然、こう時ならぬ大声を発して、お通へ急変を告げたのだった。

、ハッと急に血相を変え、深い滝道の――霧と山苔で滑りそうな断崖を――滝の響きで、よく聞き取れないらしかったが、城太郎の方から見ていると、 お通 B 何 を 見た

―岩にしがみつきな

がら下へ降りてゆく様子である。

か、

城太郎は猿みたいに、向う山の崖光から、 スルスルと藤蔓につかまって、ぶら下がっていた。

五

お通も見た。

城太郎も見つけた。

、胸の前にがっきと組み合せ、五丈余りの滝の下に、じっと、頸を垂れている裸形の者は、石帆え哮ぶ飛沫や、真っ白な霧のために、初めは、石か人間かと怪し ま れ た が、二つの手の指――滝つぼの中にである。

お通は、 此方の絶壁の道武蔵であった。 |方の絶壁の道の中途から――城太郎は、向う側の淵の岸から、それと見ると、 われ

を忘れて、

「あッ、お師匠様っ、お師匠様アっ」

「武蔵さまっーー」

声かぎりに、呼び交わしたが、その二人の叫びに挟まれても、 武蔵の耳には、もう、とうとう

と吼える滝の音のほ かは、 なにものの声も入るはずはなか った。

に咬みついてくる。千万の水魔の眼と化って、狂う渦は彼の脚を死の淵へ引きずり込 もう と し蒼ぐろい滝つぼの水は、武蔵の乳のあたりまであった。百千の銀龍と化って、水は彼の顔や肩鉛

た。

ハッと、ただ一つでも、弱い呼吸をつくか、心に弛みが起れば、途端にその踵は水苔の底を滑

って永久に帰れない冥途の激流へ送り込まれてしまうかも知れないのである。

。肺も心臓も、大馬籠の山々の下敷きになったように苦しかった。しかも、頭上から落ちて来る滝の圧力は、何干貫という重さを負わされているような感じだっ

それでもまだ武蔵は、たった今、そこに振り捨てて来たお通の面影を、熱い血の中から忘

れ去ることができなかった。

来、事を成す人間ほど、 志賀寺の上人でさえ、同じ血を持っていた。法然の弟子親鸞も、同じ煩みを持っ 生きる力の強い人間ほど、同時に、この生れながら負って来る苦しみも て いた。 古

強くそして大きい。

弱冠十七歳の村童に、 槍一本かつがせて、関ケ原の風雲へ駆け向かわせたのも、 この血

£,

あるが、

この敵は、

自己の中にあって、形がない。

この敵に向っては、

さしもの剣も、

何の用もなさないのだ。

およそ、対象は、

の血 あ った。 M ―また、下り松に行って眼にあまる敵の白刃林を駈けちらしたのもこの血があればこそである。孤剣、柳生城の伝統を攀じのぼって、石舟斎に迫ろうとしたあの気 概 もこ の 沢庵の鉄槌に感じ、法情の慈悲に泣いて、翻然と人生に薄眼を開いて志を起したのも、

底、制しきれないほど強いものとなって、狂い出し、乱れ出したのである。 本来の野性は、 だが、 その烈しいものが、 ここ数年の間に、 お通という許された対象を通して、 やっと少しばかり養い得たところの、 人間 の本能 修行や理性の力では、 12 燃えつくと、 外にあって、 彼が 到 形

武蔵は、 狼狽したのだ。明らかに彼は、 自分の心にあった大きな陥没を知って、 うろたえたの

なって、物狂わしく、滝つぼの中に、身を投じたのに相違ない。 な情熱にそれを昂め得る血を――どう処理したらいいのか。 お通へ向って、お師匠様が身を投げたと呶鳴った言葉も、そう誤りではなかったに違いない。 である。 そして、 ーお師匠様 なくても困る、あっても苦しむ、すべての人間が等しく持っている血を アっ…… お師匠様 アっし まったく、武蔵 城太郎が刹那に見た眼も、 自身で Ŕ 殊に異常 分らなく

の眼には、武蔵の生きんとする姿が、どうしても死なんとする姿にしか映らないの その城太郎は、泣き声を出して、 なおまだ叫びつづけていた。 C

あ

ろ

無数の小さい虹が、八方へ昇った。

から映して来る夕陽が、滝つぼの一端にこぼれると、武蔵のもり上がっている肩

中でも大きい一条の虹は、滝よりも高く噴いて、

空を貫

0)

内

経文のようでもあるし、自分を罵り怒っているようにも見えた。では、の武蔵の声が、やがて滝つぼの中から聞えてきた。固より何を叫んでい

のかは

分らなかった。

その証

拠には、いつもの武蔵の声が、

争っていたが、ふと向う側の絶壁を眺めると、その途中につかまってともに悲しんで い た お 通 分も いつの間にかどこにもその姿が見えなくなっていた。 ともに滝の痛みを怺えているように、ンじゃ嫌だっ、お師匠様っ、死なない 両手の指を固く組み合せ、 滝の轟きと泣き声とを

ない

で下さい

死

依然と丘丈余の瀑布の下に打ちたたかれていたが、その肩から満身へ漲って来た力― 起きようとしている姿であることが、城太郎にも、なんとなく解って来たのだった。 姿ではな うな若い生命の力は なので、お通さんも、 あらっ、 の解釈では -だがその悲しみの逸まったことは彼も直ぐ気づいた。なぜならば、滝つぼの中の武蔵、お通さんも、同じ流れの末に、身を投げたのではないかと疑ったのである。解釈では――武蔵がなんのけえな、浄・治にない。 変だっ'……お通さんも?」 かえって、大自然の苔の下から、心の垢を洗って、もっと堅実に生き直ろう、刎ねの力は――決して、鞠の坪に佇んだ志賀寺の上人のように、死を願って立っている。 い体系 のよ

「お通さアん!」 (そうだ、なにも、お通さんが安心してる位なら、おいらの心配することはない。お師匠様の気 城太郎は鮎のように飛んだ。岩から岩を伝わって、激流を渡り越え、此方の絶壁へ移って来た。

持なら、心の奥まで、お通さんが知ってる筈だもの)

絶壁を攀じて、彼は、先刻の滝見小屋から少し離れた所へのぼって来た。 牛の手綱が解けたと

みえ、それをズルズル引摺りながら、牛はそこらの草を食べていた。

誰見る者もないと思ってか、小屋の端に脱ぎ捨ててあった、武蔵の着物と大小を両手で胸に抱き しているのだろう?と疑いながら、跫音を忍ばせて城太郎が近づいて行ってみると、お通は、 ふと滝見小屋の方を眺めると、そこの廂の下に、お通の後帯だけがちらと見えた。 ――なにを

٦....٠

しめ、よよと、声を洩らして泣いていた。

をしてしまった。それに、独り泣いている様子も常とはちがい、凡ならぬことが童心にも感じら れたのであろう。声をかけずに、そっとまた、牛の遊んでいる方へ、抜き足して戻って行った。 へ当ててぼんやりしていた。お通が、胸へひしと抱えている物が物であるから、城太郎も変な顔ここにもまた、心の解らない人間がいるぞといわないばかりに、城太郎は佇んだまま、唇を指 「……いったい、こんなことしていて、何日になったら、江戸へ行けるんだろうなあ?」牛は、白い草の花の中に寝そべって、夕陽に眼やにを泛かべていた。

城太郎も仕方なしに、牛のそばへ寝ころんだ。

空の巻

賢がん

を透かして彼方に見える白い斑のものは、御岳の肌だった。「峠の凹みから、薙刀なりに走っている白い閃きは、駒ケ岳の雪のヒダであり、木曾路へ這入ると、随所にまだ雪が見られる。 だがもう畑や往来には、浅い緑がこぼれている。

仄紅い木々の芽

けても踏んづけても、若い草は伸びずにいない。 まして城太郎の胃ぶくろと来ては、いよいよ、育つ権利を主張する。この頃殊に、 季節は今、 なんでも育つ盛りなのだ。 髪の毛が 伸

びるように、背の寸法までが伸びそうに見えて、将来の大人ぶりも思いやられる風があ の苦労を舐め、どうしてもおませになるべく環境が迎えてくるので仕方がないが、近頃、もの心つくと、世間の波へ拋り出されて、拾われた手は又、流転の人であった。勢い、旅 る。 旅から 時々

あらわす生意気さ加減には、 (なんだってこんな子に、こう馴つかれてしまったのかしら) と、ため息ついて、睨んでやることもある。 お通もよく泣かされて、

しかし効き目のあろうわけはない。城太郎は知り抜いているのだ。そんな怖い顔したって、心

のなかでは、おいらが叮愛くてならないくせに一 ー と。

そういう横着と、今の季節と、飽く事を知らない胃ぶくろが、行く先々、食べ物と さ え 見 れ

ば、

「よう、よう、 お通さんてば。あれ買っておくれよ」

平せんべい」を軒並み売っていたため、とうとうそこでは、お通が根負けして、 先程、通りこえた須原の宿には、木曾将軍の四天王、今井兼平の砦の址があるところからと、彼の足を、往来へ釘づけにしてしまう。

「これだけですよ」

念を押して、買って与えたが、半里と歩かない間に、 それもぼりぼり喰べ終ってしまい、やや

ともすると、なにか物欲しそうな顔をする。

越えて、上松のあたりへかかると、 寝覚では、宿場茶屋の端をかりて、早目な昼めしを喰べたので、事なく済んだが、やがて一峠

「お通さん、お通さん。干柿が下がっているぜ、干柿喰べたくないかい?」 そろそろ謎をかけ始める。

牛の背に乗って、牛の顔のように、お通が聞えない振りをしているので、空しく、干柿は見過

ごしてしまったが、程なく木骨第一の殷賑な地、 刻頃だし、腹も減り頃なので、 信濃福島の町中へさしかかると、折から陽も八倍。

と、また始め出した。「休もうよ、そこらで――」

こう鼻で捏ってね、ね」

こう鼻で捏ね出すと、駄々に粘りが出るばかりで、歩けばこそ、テコでも動く顔つ きで はな

Ų

「よう、ようっ。黄粉餅たべようよう。……嫌かい?」

る牛の手綱は、城太郎の手に曳かれているため、彼の歩き出さぬうちは、どう焦々思っても、黄こうなっては一体、ねだっているのか、お通を脅迫しているのか、分らない。彼女の乗ってい

粉餅屋の軒先を、通り越える事ができないからである。

いい加減におしなさい」

晋

遂に、お通も意地になってしまう。城太郎と共謀して、往来の地面を嘗めまわしている牝牛の

背から、眼にかどを立てて、

「ようござんす。そんなに私を困らすなら、先へ歩いていらっしゃる武蔵様へ、いいつけて上げ

るからーー」

そして彼女は、 牛の背から降りそうな真似をしたが、城太郎は笑って見ている。 止める真似も

しないのである。

城太郎は、意地わるく、

「どうするの……?」

牛の背から降りてしまったので、お通は、仕方なしに、 彼女が、先へ行く武蔵へ、いいつけに行かない事は、百も承知の顔つきでいう。

と、黄粉餅屋の陰へ這入って行く。「さ、はやくお喰べなさい」

城太郎は威勢よく、

呶鳴っておいてから、軒先の馬繋ぎに牛をつなぐ。「餅屋のおばさん、二盆おくれ――」

「わたしは喰べませんよ」

「どうしてさ」

「そんなに喰べてばかりいると、人間が莫迦になりますから」

「じゃあ、お通さんのと、二盆喰べてしまうぜ」

「――まあ、呆れた子」

るのであろう、中途から、その木剣をぐるりと背中へ廻して、一度、むしゃむしゃやりながら往 がらにもない大きな木剣が、屈みこむと肋骨に触って、欣ぼうとする官能の邪魔になる気がすなんといわれようが、喰べているうちは、耳のないような城太郎の姿である。

賢

来へ眼を遊ばせた。

「はやく喰べてしまいませんか。 よそ見などしていないで」

「……おや?」

城 太郎は、盆に残っている一つを、 あわてて口へ抛りこむと、 なにを見たか、往来へ駈け出し

小手をかざした。

鳥目をおいて、お通りもういいんですか」

お通も後から出て来ようとすると、城太郎は彼女を床几へ押しもどして、

「待ちなよ」

「嘘」 「今、彼方へ、又八が行ったからさ」「まだなにかねだるつもり?」

お通は信じない。

「ないかあるか知らないけれども、 お通さんは気がつかなかったかい。おいらとお通さんをじっと見てたよ」 いかあるか知らないけれども、たった今、彼方へ行ったもの。――こんな所を、あの人が通るわけがないではありませんか」 編笠を被って į, た ぜ

「……ほんとに」

嘘なら呼んで来ようか

うに、顔の血がさっと退いている程ではないか。 飛んでもない事である。又八という名を聞いただけでも、彼女は又、元の病人へ帰ったよ

114 て行って、呼んで来るから」 「いいよ、いいよ、心配しないでも、もし何かして来たら、先へ歩いている武蔵様のとこへ駈け

その又八を怖れて、いつまでもここにいれば、自分たちより何町か先へ歩いている武蔵とも、

自然かけ離れてしまう事になろう。

お通は、再び牛の背に腰かけた。まだ、病後の体は決してほんとではない。ふと、今のような

事を聞いても、動悸がなかなかしずまらない。

っね ? **ふいに城太郎はこういって、彼女の褪せた唇を、思い遣りなく、牛の前から振り仰いだ。** お通さん。おいらには、ふしぎでならないよ」

んも口をきき、仲よく三人づれで来たのに、あれからこっち、ちっとも口をき かな いじゃない ―何がふしぎかっていえばさ、馬籠峠の滝つぼの上までは、お師匠さんも口をきき、お通さ

お通が答えないので、彼は又、

「どうしてなのさ、え? お通さん。 道も離れて歩くし、晩もちがった部屋に寝るし……喧

嘩でもしたのかい?」

又よけいな事を訊く。

よいが、お通と武蔵との仲を、とやかくと穿ってみたり、探ってみたり、からかって みたり す 喰べ物のことをいわなくなったと思うと、、今度はませた口で休みなくお喋舌りなのだ。それも

(子供のくせに)

と、お通は、胸に傷い所であるだけに、真面目に答える気にはなれない。

こうして牛の背をかりて旅の出来るほどには、体のぐあいも癒くなっては来たが、 彼女の病以

が、どうどうと、淙々と咽び合って、そのまま二人の喰い違った気持を百年も千年も、この心があの馬籠峠の――女滝と男滝の滝津瀬には、まだあの時の、自分の泣き声と、武蔵の怒った声上の問題は、決してまだ解決はしていない。

解けあわぬうちは、怨みに残していることであろう。 思うたびに、今でもそれが彼女の耳へ、難ってくる。

(なぜ私は?)

力で拒んでしまった事を、幾たびも、と彼女はあの折に、武蔵が自分へ迫って求めた烈しいそして率直な欲望を、 自分も又、満身の

普

へなぜか? なぜか?)

と心の底で悔いてみたり、分ろうとする努力をしてみたり、 頭から離れぬ B の となっている

が、果ては、

滝の山を越えてから、その滝水のように狂おしく烈しく胸を揺りつづけるものと変っていた。 (男というものは、誰でもあんな事を、女に強いるものなのかしら?) と、悲しくなり、浅ましくなり、年久しく独り抱き秘めていた恋の聖泉は、この旅先の女滝男

そして、もっと彼女自身、分らなくなっている事は、武蔵の強い抱擁を交わして逃 げ た く せ

その後の旅でも、こうして武蔵の姿を絶えず見失うまいとしながら、後に尾いて行く矛盾で

勿論、あれからというものは、変に気まずくなって、お互いに口も滅多にきかないし、道中も

並んでは歩かない。

に出ようといった言葉を破棄してしまう考えはないらしく、城太郎のため時々道草をして遅くな かし先へ行く武蔵の足も、後から来る牛の歩みに合せて、初めの約束の如く、江戸表まで共

た手形がものをいって、ここも難なく通り、両側の関所茶屋から眺められながら牛に揺られて来 関ケ原の戦から後は、牢人調べや女の通行がやかましいと聞いていたが、烏丸家からもらって来 **五町七辻の福島を出端れると、興禅寺の曲り角から登りになって、彼方に関所の柵が見える。っても、何処かで必ず待っていてくれた。**

と、城太郎がいきなり訊ねだした。

「ふげんて、なんだろう。——お通さん、ふげんて何のこったい?」

「普賢菩薩のことでしょう」よ。――牛に乗ったふげんみたいじゃのう……ってね」よ。――牛に乗ったふげんみたいじゃのう……ってね」「今ネ。あそこの茶屋に休んでいた坊さんだの旅の者が、 お通さんを指して、そうい っ た ん だ

「普賢菩薩のことか。じゃあおいらは、文珠様だ。普賢菩薩と文珠菩薩は、どこでも並んでいる

「食いしん坊の文珠様ですか」

と、尖った声で呼び止めた。

「泣き虫の普賢様となら、ちょうど似合うだろう」

「又!」

とお通が、嫌がって顔を紅らめると、

「文珠と普賢菩薩は、どうしてあんなに並んでるんだろう。男と女でもないくせに」

と、奇問を発する。

お寺で育ったお通であるから、それに就いてなら、説明はできるが、城太郎の執拗な反復を惧

れて、ただ手短に、

「文珠は智慧を現し、普賢は行願を現している仏様です」

といった時、いつのまにか何処からか、蠅のように牛の尻尾へついて来た一人の男が、

四

さっき福島で、城太郎がちらと見かけたという、本位田又八であった。

そこらで待ちうけていたものに違いない。

卑劣な男。

お通は彼の顔を見るや、すぐこみあげてくる侮蔑の念を、どうしようもない。

又八は又八で、彼女のすがたを見ると、愛憎交ふ、血を駆け巡って、自ら眉間に感情の錐が

立ち、まったく常識というものを欠いてしまう。

それだけに人目のない二人だけの時にはどんなに――と瞋恚の炎に燃えて邪推もされる。ずよそよそしく歩いているのも、畢竟、昼間だけ人目を憚っているに過ぎないものと見ていた。まして彼は、武蔵とお通が、京都を出てから連れ立っていた姿を見ている。その後、口もきか

口もきか

「降りろ」

命じるように、彼は、牛の背に俯向いているお通へやがていった。

7

嫁という未来の日を破棄したあげく、先頃、京都の清水寺の谷間では、刃を持って自分を追い、いが、お通には答える言葉もない。疾うに心からない人なのだ。いやもう数年も前に、先の方から許い。 危うく殺されかけた程、怖ろしい目に会わせられた人間

答えるならば、

(今になって何の用が

蔑みが漲ってくる。 という以外、挨拶がないではない かと、 黙っている眼のうちに、 いよいよ、 彼に対する憎悪と

おいっ、降りないか!」

又八は、二度さけんだ。

憤っと反感をあおられてならない。 もなんでもない彼女へ、権ペいに吩咐けがましくいうことが、今のお通には、謂なく思われて、この息子も、あのお杉婆という母親も、村にいた頃からの口ぐせを未だに持って、もう許嫁で

「なんでございますか。わたくしには降りる用はございませんが」

又八は、側へ来て、その袂をつかみ、

「なんでもいいから降りろっ。お前にはなくても、俺には用があるのだ」

声で脅すように、往来の見得もなく、そう呶鳴った。

――と、それまでは、黙って見ていた城太郎が、牛の手綱を捨てて不意に、

だっていうもの、無理じゃないか!」

又八に負けない声を出していっただけならよいが、手を出して、相手の胸いたを突いたから納

まらない。

又八は、踏み蹌いた足を、草履の緒へかけ直すと、尻込みする城太郎へ、物々しい肩を 昻 げおやっ――此奴』

て、小っちゃくなっていたくせに」 「大きなお世話だ。自分こそあの頃は、よもぎの寮のお甲っていうおかみさんに、いつも叱られ 「なんだか、見たような鼻くそだと思ったら、てめえは北野の酒屋にいた小僧ッ子だな」

これは又八に取って何をいわれるより痛かったに違いない。ましてお通をそこにおいてはであ

摑みかかる「このチビ」 みかかると、城太郎はすばやく、牛の鼻先から向う側へ逃げ廻って、

の下をぐるぐると逃げ廻ったが、とうとう襟がみをつかまれてしまい、 「おいらが鼻くそなら、自分なんか何だい。鼻の下の長い洟たれだろう」 もう勘弁ならぬという顔を示して、又八が近づくと、城太郎は牛を楯にして、二、三度、

お通

「さあ、もう一遍いってみろ」

「いうともッ」

た。

長い木剣を半分まで引き抜いた時、 彼の体は、 並木の外の藪へ、 猫みたいに抛り飛ばされてい

£.

藪の下は、畦の小川であった。城太郎は泥鰌のようになって、元の並木へ這いあがった。

「……おやッ?」

往来を見廻すと、牛は、お通を背に乗せたまま、重い体を揺さ振って、彼方へ駈出しているでは

ないか。

は、又八に相違ない。 その手綱を引っ張りながら、 手綱の一端をムチに打ち振り、共に砂を上げて、駈けて ゆ く影

「ちっ、畜生」

を他へ告げて、はやく策をとる事を忘れてしまった。 彼の血は、それを見るや、 一時に頭へのぼって、 自分の責任感と小さい力のみを奮い起し、急

贒

か無言のことばをかけているように、鮮やかに仰がれた。 宴表にある駒ケ岳は、その広い裾の一つの波ともいえる丘に足を休めている一人の旅人へ、何動いているのであろうが、白い雲の帯は、動いているとも目には見えない。

(はて。おれは何を考えていたろう?)

武蔵はふと、われに返って、わが身を見直した。

眼は山を見ながら、心はそこになく、お通の事ばかりがつき纏う。

彼には解けないのだ。

いくら考えてみても、処女ごころの真の相がわからない。

やがては、腹が立ってしまうのだった。なぜ彼女へ率直に迫ったことがいけないか。 その火を

た。すると彼女の手は、案に相違して自分を刎ね退け、自分を見下げ果てたもののように、身を自分の胸から呼び出したのは彼女ではないか。自分は、自分の情熱の相をそのまま彼 女 に 見 せ

躱してしまった。た。すると彼女の

を洗い上げたつもりであったが、 あ の後の慚愧、恥ずかしさ、遣り場もない苦い男の気持。それを滝つぼに投げこんで、心の垢 自分の愚を嘲って、 日が経つに従い、又どうにもならない迷妄がわいてくる。幾度

(女など、 振り切って、なぜ先へ行ってしまわぬか!)

武蔵は、 自己に命じてみたが、それはただ、 おろかな自分に、 言い訳の虚飾をつけてみ に過

ぎない。

江戸表に出て、貴女は好きな道を習え、自分も志す所へ邁進して――と、暗に未来の誓いを与

空

えて、こうして京都から立って米たについては、十分自分にも、 責任がある。 途中で振り捨てて

は行かれるものではないと思う。

---どうなるのだ、こうして二人は。おれの剣は!)

と対い合っていることさえ苦しくなってくる。と対い合っていることさえ苦しくなってくる。いまがいられてくる。そうして、山を仰いで、彼は唇を噛んでいた。余りにも小さい自分が恥じられてくる。そうして、 駒ヶ岳

まだ来な

耐りかねて、 ぬっと立った。

それは、もう疾うに、後から見えて米なければならない筈の、お通と城太郎へいった呟きであ

けているではないか。 今夜は藪原で泊るといってあるのに、 宮腰の宿場もまだ遙かてまえなのに、 すでに陽は暮れか

ここの丘から見ていると、十町も先の森まで、一眸に街道は見渡されるが、それらしい人影は

いつまでも見出せない。

「はてな? ……。関所でなにか暇どっているのだろうか」

捨てて行こうかとすら惑いながら、 その影が、うしろに見えなくなれば、武蔵はすぐ心配にな

って、一歩も先へは出られなかった。

そこの低い丘から彼は駈 け降 りた、この地方に多い放し飼いの野馬が、 彼の影に愕いたものの

ように、薄陽の原を八方へ逃げて飛ぶ。

「もしもし、 お侍さま。あなたは牛へ乗った女子衆の、お連れ様じゃございませんか」

「えっ、その者に、なにか間違いでもござったか」 先のことばを聞かないうちに、 彼が、 街道へ出るとすぐ、往来の一人が、そういいながら側へ寄って来た。 虫の知らせか、武蔵は早口に問い返した。

木 竹 冠 老

処かへ攫って行ったという事は、日撃していた旅人の口から伝わって、もうこの街道筋では、隠 れもない噂ばなしにのぼっている。 さっき関所茶屋から程遠か らぬ場所で、本位田又八が、 お通の牛に鞭打って、彼女ぐるみ、 何

うか。 ほども経た後の事である。 その武蔵は今、倉皇と、元米た道の方へ駈け戻って行ったが、すでに事件が伝わってから半刻丘にいたため、それを知らずにいたのはかえって武蔵一人であった。 ――もし彼女の身に何等かの危急が襲ったとすれば、間に 合うかど

123 て、こう喘ぎ声でよぶ人影に、 「亭主、 関所の柵は、六刻で閉まる。 それと一緒に、床几をたたんでいた茶店のおやじは、 後ろに立っ

と、ふりかえった。 かお忘れ物でも?」

「いや、半刻ほど前に、ここを通った女子と少年を探しておるのだが

「ああ、牛に乗った普賢様のようなお女中でございましたな」

「それだ。その二人を、牢人体の男が、無体に連れ去ったというが、その行先を知るまいか」

途々、聞きあつめた噂を綜合してみても、なんのために、何者が、彼女を拉して行ったのか、その指さす薄暮の中へ、武蔵の影はもう宙を飛んで淡れて行く。野婦之池の方へ、どんどん駈けて行ったと申しますが上り、この店の首塚のある所から横道へ曲って、「見ていたわけでは御座いませぬが、往来の噂では、この店の首塚のある所から横道へ曲って、

見当がつかない。

の

空

愁

て大津へかかる途中の峠茶屋で五年越しの誤解を解き、お互いが幼友達の昔に返って、ついて来るか、江戸表で落合うかする事にはなっているが、いつぞや叡山の無動寺から峰越えしその下手人が又八であるなどとは、彼には想像もできなかった。いずれこの道中で後から追い

と手を握り、

(きょうまでの事は水に流して)

(貴様も真面目になって、希望を持て)

と武蔵が励ませば、又八も目に涙すらたたえて、

、勉強する。 きっと真人間になって遣り直すから、 おれを弟とも思って、これからは 導い てく

l

れ ł. ど欣 h でい つ た又

そ Ō) 又 八が ? などとどうして疑われ よう か

1 1 疑えば、戦後の各地に、 人なよ らぬ者か、 道中荒らしの鼠賊か。さもなければ或は、世の中の推移に関わらず世紀地に、職を求めながら職にも就け らず世間 ず、 、剽悍なるこの地方の野武の抜け目ばかり窺っている 結局、 浮浪 の徒とよ ば るゴ n ている牢 7 0 灰 ع

か、 ので、野婦之池の方角というだけを目あてに急いで て、地上の暗さは、一尺先の足元も覚つかない。 武蔵としては、そんなふうにし か下手人を考えら さもなければ、 み n たが、 な か つ 陽が暮 たが、 それ れると、 とて閣をつ 冴え切った星空に反 か む ような

士

か。

とかいう、

でいるらしいが ゆるい傾斜に乗って、道も少しず 野婦之池とか聞 と武蔵は立ち迷い、 いたが、その池らしい所へもな つ登り気味なのを考えると、 か な か Щ て来な すでに駒ケ岳の裾野を踏 かっ た。 そし 7 H Ŕ 畑

Ŕ

「道を間違えた たな?」

と、思った。

木立ちの垣に映して見えた。 行く手を見失った 、叢の防風林に囲まれた農家から、 ようにーー そうして広い間を見まわ なにか外で焚いてい して る明りか、竈 V١ ると、 駒 竈の火か、ぼれて田の巨大・ ぼ な うと赤 壁 を 負

たはどこにも見えないが 近 づいい 無事に啼いているではない て、 そこの地内を覗いて見ると、 ――その牛だけは健在に、明りの映してい か。 武蔵に も見覚えのある斑の牝牛が る百姓家の厨の外に繋が 牝牛が――ただしお通の す

お? あの斑牛だが」

此家に、お通の乗っていた牛が繋がれほっとして武蔵は胸をなで下ろした。 っとして武蔵は胸をなで下ろした。

ているからには、

お通の身も、共にここへ連れ込まれて

いる事はもう疑う余地もあるまい。

この防風林の中の百姓家はいったい何者の住居か。——不覚に踏み込んで、再度、 お通を隠さ

で、しばらくの間、影を密めて、中の様子を窺っていると、で、しばらくの間、影を密めて、中の様子を窺っていると、れるような事になってはならないと、同時に、武蔵は戒心する。

「阿っ母、いいかげんにもう止めんかい。眼がわるい眼が悪いといいながら、そんな暗れえとこ

次の気配に耳を澄ましていると赤々と火の影の揺れているのは、厨の次の炉部屋で、その部屋薪や籾殻の散らかっている隅の暗がりから、途方もない大声でいう者がある。でいつまで、仕事してるだ」

て、すぐ仕事を片づけているものと思われた。 しかし、 かし、すぐその音が止んだのは、阿っ母と今呼んだ怖ろしく威張った息子のいうことを聞い次の破れ障子の閉まっている辺りで、微かに、糸をつむぐ糸車の音がする。

「今、足を洗うからすぐ飯が喰えるようにしといてくれえ、いいかあ阿っ母」 隅の小屋で、なに か働いていた息子は、やがてそこを閉めながら又、

と、その肩へ、斑の牝牛がのっそりした顔をつき出草履を持って、厨のそばを流れている溝際の石に る溝際の石に腰かけ、 した。 三度足をざぶざぶやっている

息子は牝牛の鼻づらを撫でながら、 いっこう返辞もない母屋の人へ向って又大きな声でいう。

も使えるし、乳も搾れる」 い物をして来たぜよ。 「阿っ母、後で手があいたら、ちょっとここへ来て見さっしゃい。 何だと思う?分るめえが、牛だよ、 しかもすばらしい牝牛だ。 おらあ今日、飛んでもねえ拾 畑に

ち囲いの一軒の入口を求め、家の横へ迫っていた。 たら、後の間違いもなかったであろうに その言葉も、外に佇んでいた武蔵が、よく耳に入れて、その人間の何者かをもっと見届けて --生憎と彼はもうあらかたの空気を察して、この木立

もない、藁屋根も苔に朽ちながら、その屋根葺の手も乏しい無人の家らしく思われた。農家としては、かなり広そうだし、壁造りを見ても、旧家に間違いないが、小作もい V١ な

てみた。 明 いている横の小窓。その小窓の下の石を踏み台にして、 武蔵は、 母屋の内をまずそっと覗

にあっていい品物ではない。 箔すら朧ろに残って見える。 なにより先に、 彼 の眼を射たのは、 尠なくも、 黒い長押に掛 かどの武将が手艶にかけた業物で、鞘の揉皮には金紋長押に掛かっている一筋の薙刀だった。めったに民間

---さては。

と、武蔵は思い合わせて、よけいに疑いを深くした。

128 るが、到底、 腰きりの野良着に、泥まみれな脚絆を穿き、一本の野差刀を腰にぶちこんでいたが、丸っこいが、到底、凡者の眼ざしではなかった。さっき、隅の小屋から足を洗いに飛び出した若い男の面がまえは、ちらと火影に見ただけであ

(こいつ曲者)といい、足腰のよく地にすわっている動きといい、一見、 顔に、そそけ立つ髪の毛を、眼尻あがりに藁でつかね、背は五尺五寸に足るまいが、胸の肉づき

卷 見えず、ただ大きな炉の中に、ばちばちと松薪が燃え、その煙は、一つの窓からむうっと外へ吐案のじょう、母屋には、百姓の持つべきでない薙刀などがある。そして、藺を敷いた床に人もと感じないでいられないものを武蔵は先に見ていたのである。 き出されてくる。 「……あっ」

の

空 「誰じゃ?」 厨の中で、老婆の声がした。武蔵が窓の下にかがみ込んでいると、炉部屋に這入って来たらしば。 武蔵は、袂で口を蔽ったが、忽ち咽んで、怺えようとする程——咳をしてしまった。

く、再びそこで、 小屋は閉めたか。乂、粟泥棒がそこらへ来て、くさめをして居るぞよ」

「権之助っ。 ——

来たら幸い。

まずあの猪男を手捕りにして、お通をどこに隠したか詮議はそれ か らの事に しよう。

も知れないが、彼さえ取ッ締めれば、 老婆の息子らしい勇猛そうなその男のほかに、いざとなれば、まだこ、二名の敵は飛び出すか 物の数ではない。

む立木の一部に身を隠していた。

武蔵は母屋の中の老婆が、権之助権之助と呼び立てると共に、

小窓の下を離れて、

この家を囲

するとやがて、

どこにっ?」

裏から大股に素ッ飛んで来て、もいちど其処で、

「阿っ母、なにがいたんだ?」と、権之助とよばれた息子は、

と呶鳴って訊く。

「その辺で、今咳声が聞えたが小窓に、老婆の影が立って、

。 の し

「耳のせいじゃないか。阿っ母はこの頃、 「そうでない。 誰か、 窓から家の内を覗き見していたに違いない。 眼も悪くなったし、 耳もとんと遠くなったからなあ」 煙に咽せた声じゃっ た

「ふうん……?」

そういえば、 権之助は、十歩二十歩、その辺を、 何だか、人間臭いぞ」 あたかも城郭でも見廻るように歩いて、

武蔵が迂濶に出なかっと、呟いた。 た理は、 闇に光る権之助の眼の実にらんらんと害意に燃えているためで

130 その棒も、そこらの麵棒やしん張棒を、有り合うまま、引っ抱えて来たものとは違い、の手裡から小脇を後ろに抜け、約四尺ばかりの丸棒をしのばせていることが分った。審に思い、何を持っているのか得物を確かめるつもりで、彼の歩み廻る影を凝視している に思い、何を持っているのか得物を確かめるつもりで、彼の歩み廻る影を凝視していると、右それと、足のつま先から胸いたにかけて、ちょっと当り難い構えを備えているので、それも不

武器としての光を持っている。 ったく二つにして一つのものとなっている。いかにこの男が、常にその棒と共に暮しているかが ――のみならず、棒と、棒を持つ人間とが、武蔵から見ると、 種

ま

分るほどなのだ。

「やっ、誰奴だッ?」

先から、やや斜めに、身を移して立った。 ふいに棒は風を呼んで、権之助の背から前へ伸びた。武蔵はその唸りに吹かれたように、

連れ人を引取りに来た」

空

「街道からこれへ誘拐して来た女子と竜を返せ。--------相手が、自分を睨めすえたまま黙っているので、 もし無事に戻して詫びるならば免じておく

が、怪我などさせてあったら承知せぬぞ」 重ねていった。

の下を、時折そよそよ忍んでくる。 この辺りの塀といってもよい駒ヶ岳の雪渓から、里とはひどく温度の差のある冷たい風が、星

渡せッ。連れて来いっ」

三度めである。

武蔵がその雪風よりも鋭い声で斬るようにいうと、逆手に棒を握って、喰い付くような眼をす

「おう、連れもない、女 童 と見くびって、これへ誘拐して来たに違いあるまい。「この馬糞め!」おれを誘拐しだと?」えていた権之助の髪の毛が、針ねずみのように、颯っと立った。 出せっ、

隠した者を」

「な、なんだとッ」

権之助の体から突然、 四尺余の棒が噴いて出た。 棒が手か、手が棒か、その迅いことは眼

にもとまらない。

四

武蔵は避けるより仕方がなかった。驚くべきこの男の練磨と技の体力を前にしては。

「おのれ、後に悔ゆるな」 警告を与えておいて、自分は数歩跳び退いたが、不可思議な棒の使い手は、

「なにを、洒落くせえ」

と喚きながら、決して一瞬の仮借もするのではなかった。十歩退けば十歩迫り、五歩躱せば五

歩寄ってくる。

武蔵は相手から跳び開く間髪ごとに、二度ほど、刀の柄へ手をやりかけたが、その二度とも、

非常 なぜならば、手を柄にかける一瞬でも、敵の前に肘を曝す隙となるからである。 な危険を感じて、遂に、抜き放つ遑すらもな

そんな危険は感じない場合と、形心する場合があるが、当面の相手が振りこんで来る 棒の 唸 は、武蔵が心で用意する行動の神経よりは遙かに迅速で、それへ無謀な勇をむりに奮って、 敵によって、 ŋ

(この七民めが何者ぞ)

圧迫から、身体のみだれをどうしようもなくなってしまう。 と、敢て誇れば、当然、棒の一撃にのめるであろうし、焦心りを持つだけでも、 呼吸にうける

それに又、 もう一つ武蔵を自重させた理由は、相手の権之助なる人間が、一体何者か、 咄嗟に、

見当がつかなくなった事である。

ほど、この泥くさい田夫の体の爪の先までが、武術の「道」にかない、そして武蔵も求めてやまて、これは立派な金剛不壊の体を為している。かつて出会った幾多の達人中にも考え出されない彼の振る棒には、一定の法則があるし、彼の踏む足といい、五体のどこといい、武 蔵 か ら 見 ない、その道の精神力に光っているのだった。

うに思われるであろうが、事実は寸秒に次ぐ寸秒で、わけても権之助の棒は、眼ばたきする間も ――こう説明してくると武蔵にも権之助にも、 していない。 お互いが敵を観る間を持って悠々構えて いるよ

おうっ。

満身から息をしたり、

えおおうッ!

待たッしゃい!

踵を蹴って来たり、 又、 りゅうりゅうと棒の攻撃を改めてかかり直して来るたびに、

「この、どたぐそ」

「かったい坊め」

するし、突きもするし、旋しもするし、片手でも使うし、両手でも使う。いや、棒に限っては、打ち込むという言葉は当らない。--それは打ち込みもするし、強ぎも とか、口汚ない方言で悪たれつきながら、打ちこんで来るのであった。

をのばすように、長くもし、短くもするのではないかと眼に怪しまれる程だった。 両端が切先ともなり、穂先ともなって、それを自由自在に使いわける権之助の練磨は、飴屋が飴又、太刀は切先と、柄の部分とが、はっきり分れていて、その一方しか活用できないが、棒は 又、太刀は切先と、柄の部分とが、はっきり分れていて、その一方しか活用できな

「権つ。気をつけいよ、その相手は、凡者でないぞ!」

不意に、その時、 母屋の窓から、彼の老母がこう叫んだ。—— 武蔵が敵に感じていることを、

「でえじょぶだよっ、阿っ母!」
老母も息子の身になって、同じように感じているのであった。

が、一颯のうなりを肩越しに躱して這入って来た武蔵の体が、権の小手をつかんだと思うと、巨権は、すぐ横の小窓から、母が案じながら見ていることを知って、その勇猛に拍車 を か け た きな石でも降したように、ずしんと地ひびきして権は背中で大地を打ち、足は高く星の空を蹴っ

て、凄まじい一声を武蔵に浴びせ、その血相は、武蔵の次の行動に思わずためらいを与えた。 わが子の一命が今や危うしと思ったか、小窓に縋っていた老母は、そこの竹格子 を 突 き 破っ

五

蔵の手は当然、次の咄嗟には、刎ね起きる権之助の真っ向へ、抜打ちに一太刀行く べ き で あっ 息子の権が投げられたことは、この老母には、非常な意外であったらしい。 その時、老母の髪の毛が逆立って見えたのは、 肉親として、さもある筈のところであろう。 投げつけた武

「おう、待ってやる」 だが、そうではなくて、

答

0

空 の顔の見えた小窓を振り仰いだ。 武蔵は、権之助の胸へ馬のりになり、 なお、 棒を離さない右の手頸を足で踏みつけたまま老母

はッと、武蔵はしかしすぐ眼を反らした。

空を蹴ったり、地へ突っ張ったり、その腰車の脚技のあらゆる努力をあげて、敗地を挽回しよう権之助は、絶えず武蔵の手を外そうともがいているし、武蔵の制圧も届かない彼の二本の脚は、 としているのだった。 なぜならば、老母の顔は、もうその窓に見えなかったからである。 組み伏せられながらも

それも決して、油断はできない上に、窓から消えた老婆の影は、すぐ厨の横からさっと走り出

て来て、敵に組みしかれている息子を罵っていうことには

何のざまじゃ、この不覚者が。母が助太刀して取らす、負くるな」

て、 わが子の助命を乞うのかと思っていたところ、案に相違して、九死一生の淵にある息子を励 窓口から待てという言葉だったので、武蔵は必ずや老母がこれへ来て、額を地にすりつけ

して武蔵の背を窺いながら、見靴を払った薙刀が星明りを吸って、後ろ隠しに持たれている。見れば、老母の小脇には、皮靴を払った薙刀が星明りを吸って、後ろ隠しに持たれている。

「ここな痩せ牢人めが、土民とあなどって、小賢しい腕立てしやったの。 ここをただの百姓家と

思うてか」

りうごいて、母に有利な位置を作ろうと、敵の下から計っている。に向き直るわけにゆかないのだ。権之助は又、背中の着物も皮膚も破れるであろう程、地上を摺 背中へ迫られることは武蔵にとって苦手であった。組み敷いているものが生き物なので、自由

「なアに、こんなもの。 ――阿っ母、心配しねえでもいい。 あんまり近寄ってくれんな。今、 刎

神きながら、権がいぬ返えしてみせる」

いうと、

焦心るでない!」

と、老母はたしなめて

「元よりこのような野宿者に負けてよいものか。 御先祖の血をふるい起せ。木佾殿の御内にも人

ありと知られた太夫房覚明の血はどこへやったぞ」

すると、権之助は、

「ここに持っている!」

いいながら、首を擡げて、武蔵の膝行袴の上から、股の肉へ喰いついた。

うるに老母の影は、薙刀の光を曳いて、背中へ背中へと狙け廻って来る。 すでに棒を離して、両手も下から働きかけ、武蔵をして何の技をする余地も与えないのだ。

加

「待てっ、老母」

遂にこんどは武蔵からそういった。争う愚が分ったからである。これ以上のことは、 斬られる

か、どっちかが死を受けなければ解決しない。

疑いに過ぎないのである。――ともあれ一応穏やかに事情を打明けてみるのがいいのではあるま それまで行っても、お通が救われるとか、城太郎が助かるとかいうならよいが、その点はまだ

空

そう考えたので、武蔵はまず老母に向って、刃を退けというと、老母はすぐおうとはいわない

「権。どうしやるか」

た。

組み伏せられている息子へ、和協の申し出でを、容れるか容れないか、 相談するのであっ

六

てあれから、話し合った末、 の松薪はちょうど燃え旺っていた。この家の母子が、そこへ武蔵を伴って米たことは、 双方の誤解が溶けたものであろう。 やが

「やれやれ、危い事ではあった。とんだ行き違いからあのような

さも、ほっとしたように、老母はそこへ膝を折ったが、共に坐りかけた息子を抑えて、

「これ権之助

「おい」

「そうだ、おれが街道から、女など誘拐して来たかと、疑われているのも残念。――お武――今外で、お訊ねをうけた女子や竜が隠してないことを、よう見届けて戴くために」「坐らぬうち、そのお侍を御案内して、念のために、この家の内を啜なくお見せ申したが よい。

武家、

れに尾いて、この家のどこでも改めてもらおう」

上がれ ――と招ぜられたまま、武蔵はわらじを解いて、 もう炉の前に席を占めていたが、

の者の共々なことばに、

いやもう、御潔白は分りました。お疑い申した罪は、 御勘弁ねがいたい」

詫び入るので、権之助も間が悪くなって、

おれも良くなかった。 もっとそっちの用向きを糺した上で怒ればよかったのだが」

と、炉べりへ寄って、 あぐらを組 ţ

けておいた斑の牝牛で、 物に与えて、城太郎に、確とその手綱を預けておいたものである。 だが武蔵としては、こう打解けたところで訊ねたい疑問がまだある。 あれは自分が叡山から曳いて来て、途中から病弱なお通のため道中の乗 それは先刻、 から見届

その牝牛が、どうして、この家の裏に繋がれているのか ?

いや、そんな理なら、おれを疑ぐったのもむりはねえ」

だが、夕方、野婦之池から鮒を網に打って帰って来ると、池尻の川に一頭の牝牛が足を突っこん権之助はそれに答えていう。――実は自分はこの辺に田を少しばかり持って百姓をしている者

で踠がいている。

飼主の姿はみえぬし、てっきりこれは何処からか盗み出して来た野盗が持ち扱って、捨てて行っ あげている様子。引き上げてやって見ると、まだ乳ぶさも若い牝牛であるし、辺りをたずねても たものに違いあるまいと――独りぎめに極めてしまった。 沼がふかいので、 もがく程、牛は沼に辷り込み、その図ウ体を持てあまして、哀れな啼き声を

ただけのものさ。飼主が分っちゃ仕方がねえ、牛はいつでも返すよ。だが、お通とか 城 太 郎 と くな孝養もできねえから、天が授けてくれたものと――あはははは良い気になって曳っぱって来 か、そんな人間の事、おらあ一切知らねえぞ」 匹あれば、ヘタな人間の半人前は野良仕事をするので、これはおれが貧乏で、阿っ母 にろ

が分ってみると、権之助なるこの若者は、 な美点からむしろ起ったものといえ V かにも粗朴な田舎漢で、最初の間違いは、その

「じゃが旅のお侍、さだめしそれは心配なことで御座ろう」

と老母は又老母らしく側から案じて、息子にいう。

りにうろついていてくれればよいが、駒ケ岳のふところへでも這入りこんだら、 権之助、 はよう晩飯を掻っこんで、その気の毒な お 連れ を一緒に探してあげい、 もう他国者の衆い、野婦之池あた

に知れることじゃない。 を喰うているそうな。 おおかたそんな無頼者の仕業であろうが」い。――あの山には、馬や野菜物さえのべつ攫ってゆく野伏りが、 たんと巣

が、 巨きな山岳の裾は、風が来たと思うと、ぐわうと草木もふき捲いて、凄い一瞬の鳴りを起すぶすぶすと、松明の先っぽに風が燃える。 止んだとなると、 ハタと息をひそめて、不気味なほど静かな星のまたたきばかりとなる。

「旅の者」

権之助は、手に持つ松明を挙げて後から来る武蔵を待ちながら-

雑木林のうしろに、猟をしたり、百姓したりしている家があるが、そこで訊いても 知れ な け れ 「気の毒だが、どうしても知れねえのう。これから野婦之池までゆく途中、もう一軒、 あの丘

「ご親切に、辱い。これまで十数軒を訊き歩いても、なんの手懸りもなければ、これは拙 者 が

悪智恵に長けているから、

滅多に追

方角ちがいへ米ているのであろう」 「そうかも知れねえ。女を誘拐す悪党などというものは、

ば、もう探しようがねえというもんだが」

つかれるような方角へ逃げる筈はねえ」

駒ケ岳の裾野――野婦村、樋口村、もう夜半を過ぎていた。 その附近の丘や林など、宵からおよそ歩き尽くしたといっ

城太郎の消息でも知れそうなものだが、誰一人、そんな者を見かけたとい う 者 もな

わけてお通の姿には特徴があるから、見た者があればすぐ知れるわけだが、どこで訊いても、

「はてねえ?」

武蔵は、その二人の安否に胸を傷めると共に、縁もゆかりもないのに、この労苦を俱にしてく と、気永に首をかしげる土民ばかりであった。

れる権之助にすまない気がしてくる。 明日も野良へ出て働かなければならない体だろう にと思

う。

「とんだ迷惑をおかけ申したのう。そのもう一軒を尋ねてみて、それでも知れぬとあれば、

がない、諦めて戻るといたそう」

お武家の召使いか、それとも姉弟たちかね」「歩くぐれいな事、夜どおし歩いた所で、何の事もねえが、いったいその女子と童というのは、

垄

「されば

まさか、その女性の方は恋人で、子供は弟子とも、答えられないので、

「身寄りの者です」

と、いうと、そういう肉親の少ない身を淋しく考え出してでもいるのか、 権之助は無口になっ

て、ひたすら野婦之池へ出るという雑木の丘の細道を先に歩いて行く。

では、この機縁を作ってくれた運命の悪戯に――たとえ悪戯であろうと感謝せずにはいられなか 武蔵は今、お通と城太郎を案じる気持で、胸もいっぱいになっていたが、その中にも心 のうち

う。そしてあの棒の秘術も見る折がなかったに相違ない。 R お 通にその災難が かかって来なかったら、自分は、 この権之助に会う機会はな か つ た ろ

災難と思うしかないが、もしこの世に於て、権之助の棒術に出会わずにしまったら、武芸の道に 流転の中で、お通と行きはぐれてしまっ た事は、 彼女の生命につつが ない限 り、 やむを得な

生涯する自分として、大なる不幸であったろうと思う。 ――で、折もあらば、彼の素姓を問い、その棒術に就いても深く糺してみたいと先刻から考え

ていたが、武道のことと思うと、不しつけに訊きかねて、つい折もなく歩きつづけていると、 「旅の者、そこに待っていろ。 あの家だが、もう寝ているに極っているから、 おれが起して

訊いて来てやる」

け、がさがさと駈け降りて、そこの戸を叩いていた。 木々の中に沈んで見える一軒の藁屋根を指さすと、 権之助はひとりで、そこらの崖藪を掻きわ

さっぱり要領を得ないが、ただ内儀さんが夕方、買物に出た帰り途、街道で見かけたというごどうも雲をつかむような返辞ばかり、ここに住む猟師の夫婦も、こちらの尋ね事に就いては、程なく戻って来た権之助が、武蔵へ向って告げる事には。 その内儀さんの話によると、もう星の白い宵の時刻、旅人の影も途絶え、並木の風ばかりが淋、ことによると一縷の手懸りといえるやも知れない。 う話

手も顔も泥まみれのままで、腰には木刀を差し、藪原の宿場の方へ駈けて行くので、内儀さんい道を、おいおいと泣き声あげながら、向う見ずに素ッ飛んでゆく小僧がある。

(代官所はどこにあるか教えておくれ)がどうしたのかと訊いてやると、

となお泣いていう。

代官所へ何しに行くかと、根を掘って訊くと、

、連れの者が、 悪者に攫われて行ったから、奪り返してもらうんだ)

との答え。

からのお吩咐けとでもあれば、てんてこ舞して、道の馬糞を取って砂まで撒くが、弱い者の訴えそれならば代官所へ行ってもむだな事だ、お役所という所は、誰か偉い人が旅で通るとか、上 誰か偉い人が旅で通るとか、上

殊に、女が誘拐されたとか、追剝にあって裸にされたとかいう小事件は、などに、どうして本気に耳をかして捜してなどくれるものか。 街道筋には朝に夕に

ある事で、めずらしくもなんともない。

に奈良井の大蔵さんというて、お百草を薬にして卸している問屋がある。その大蔵さんにわけをそれよりは藪原の宿一つ先へ越して、奈良井まで行くとよい。町の四ツ辻だからすぐ知れる所 内儀さんの言葉をそのまま、権之助は口うつしに其処まで語って、い事なら、人のために身銭を切ってなんでもひき受けてくれるから いうて頼めば、この人はお役所と反対に、弱い者のいう事ほど、親切に聞いてもくれるし、正し 「こういってやると、その木刀を差した小僧は、泣きやんで又、後も見ずに駈けて行ったという 権之助は口うつしに其処まで語って、

事なんだが ――もしや連れの城太郎とかいう子供が、 それじゃあるめえか」

「オオ、それです」

武蔵は、城太郎の姿を、見るが如く想像しながら、

「それやあ、此処は駒の麓だし、奈良井へ行く道からは、ずっと横へ入っている」「――すると、拙者が探しに来たこの方角と、まるで違った方へ行ったわけですな」

「どうせ途中になるから、おれの家へ寄って、一寝みした上で、朝飯でも喰って立つといい」――お蔭で微かながら、緒口の解れて来た心地がする」「何かと、お世話でござった。それでは早速、拙者もその奈良井の大蔵とかを、尋ねて参ろう。

「そう願おうか」

「そこの野婦之池を渡って、池尻へ出ると、半分道で帰えれる。 今、断っておいたから、 舟を借

りてゆくとしよう」

は棹を持ち、その代りに、彼の手にあった松明は武蔵が持ち、辷るように池の中央を横切って行為ぜなのか、この地方にそう見えない楊柳が、この池の周りだけには生い茂っている。権之助ろうか。駒ケ岳の影も、いちめんの星も、ありのままに、池の面に泛んでいた。そこから少し降りてゆくと、楊柳に囲まれた太古のような水がある。周囲ざっと六、七町もあ

その時、眼に見ていたのである。 か、場所も、そう遠くない所から。 水の上を行く松明の火は、暗い水に映って、一倍赤々と見えた。——その流るる焰を、 人の世の皮肉といおうか、飽くまで薄縁な二人の仲 とい おう お通

「やっ、

誰か来る」

毒と

りながら、ちょうど二羽の火の鴛鴦が泳いでゆくように遠くからは見える。水に映る火影と、小舟の中に人のかざしている火と、深夜の池心を行く松明は、水に映る火部。

つの光であ

お通がそれを知った時、「……オオ?」

に、何か事にぶつかると、臆病な持ち前はすぐ体に出してしまう。 と、狼狽ぎみに、声を出して、お通の繩尻を引っ張ったのは又八で、大それた事を やる く せ

ないが、ここで夏の早に雨を祈ると、うしろの駒ケ岳からこの野婦之池へ沛然と天恵が降るといそこは楊柳につつまれている池畔の雨乞堂であった。なにを祠ってあるか郷土の人もよく知ら「どうしよう? ……そうだ、こっちへ来い。やいっ、こっちへ来やがれ」 う事が信じられている。

お通は動くまいとする。「いやです」

出来なかった。隙があったら眼の前の池に飛びこんで、堂の棟に上がっている絵馬のように、楊 柳の幹を巻いて、呪う男を吞まんとしている蛇身になっても――と思うが、それも 出来 な かっ 3められている両手がきくものならば、及ばぬまでも、突きとばしてやりたいと思うがそれもでの裏手にひきすえられて、先刻から又八に、責め苛まれていた彼女だった。

「立たねえか」

を睨めつけていた。すると又八は、気が挫けて、好たれる程、お通は意志が強くなる。もっと打ってみろと望みたくなる。……黙って又八の顔 又八は、手に持っている篠を鞭にして、お通の背を、いやという程打った。

「歩けよ、おい」 と、いい直す。

それでもお通が起たないので、 今度は猛然と、片手で襟がみをつかみ、

八はその口を手拭で縛って、引っ担ぐように、堂の中へ抛りこんだ。 ずるずると、地を引き摺られながらお通が、 池心の火へ向って、悲鳴をあげようとすると、又

乞堂から二町ほど先の池尻の入江へ辷り込んで、松明の火もやがてどこかへ立ち去ったらしい。 そして、木連格子を抑えながら、彼方の火影がどう来るか窺っていると、その小舟はやがて雨

「……あ。いい按配」

ほっとして、それには胸を撫でたが、 又八の気持はまだ落着きを得なかった。 空

体だけを持ち歩いていることの実に大変な辛労であるということを、彼はつぶさに宵から経験し お通 の体は今、自分の手の中にあるが、お通の心はまだ自分の物となりきれない。心のな い肉

るお通である事は幼少から知っている又八なので、 の血相を見せるのであった。舌をかみ切って死のうとするのである。それくらいな事はきっとや 無理に上 ―暴力をもっても、彼女のすべてを、自分のものにしてしまおうとすると、お通

(殺しては)

と、つい盲目な力も情慾も挫けてしまう。

に、俺と武蔵はちょうどあべこべであったものを) (どうして俺をこんなに嫌い、武蔵を飽くまで慕うのだろうか。 ――以前は、彼女の心のな か

自信がどこかにある。事実彼は、お甲を始め、幾多の女に、そうした経験がある。 又八は、分らなかった。武蔵より自分の方が、女に好かれる素質を持っているのに

くいって、お通につよい嫌悪を抱かせるようにしたためにちがいない。 これはやはり武蔵が、最初にお通の心を誘惑し、手なずけてからは、 折あるごとに、

自分を悪

と、彼は木連格子に倚りかかりながら、膳所の色街でさんざいわれた――佐々木小次郎の忠言(俺は、お人好しだ。武蔵に騙られたのだ。その偽ものの友情に涙をこぼしたりなどして……)そして自分に出会えば、自分にはいかにも友情の深いような事をいって――

を今、心のうちで呼び返していた。



巻

今になって思いあたる!

(尻の毛まで抜かれるぞ) あの佐々木小次郎が、自分のお人好しを嗤い、武蔵の肚ぐろい事をさんざん罵って、

といった言葉。

それが今、彼の心にぴったりする忠言として、 甦って聞えて来る。

直して来た友情ではあるが、今度は今までの憎悪に輪をかけて、 同時に、武蔵に対しての、又八の考えは一変した。これまでも、 何度となく豹変しては又持ち

「よくも俺を……」

意力は、人を恨むことにすら出来ない質の又八であった。 人を憎んだり嫉んだりする事は、日常、人一倍烈しい質の又八であるが、呪咀するほどの強いと、心の底からわき上がる呪いとなって、唇を深く噛んだ。

た。彼と自分とは、同郷の友として育ちながら、どうしても、生涯の仇に生みづけられて来た悪 けれど今度という今度こそは、武蔵に対して、七生までの仇のような怨念が醸されて しまっけれど今度という今度こそは、武蔵に対して、七生までの仇のような怨念が醸されて しまっ

抑、、あいつが自分を見るたびに、似非君子め。——と思う。縁かのように思われて来るのだった。 手を取り合って世の中へ出ようのと、 いう口吻からして、思えば面憎い限りである。いかにも真しやかに、やれ真人間になれの、発奮しろの、

毒

お人好しを、武蔵に見すかされて翻弄されたかのように、体じゅうの血が、 その泣き落しにのせられて、 涙をこぼしたかと考えると、又八は、業腹でたまらない。 呪いと口惜しさに沸ったまらない。自分の

だ。悪人というならいえ、おれはその悪方へ廻って、一生涯、野郎の出世を邪げてくれよう)の向うに廻ってやろう。くそ勉強して、窮屈を しの ん で、そんな似非者のお仲間入りは真っ平(世の中の善人なんていう者は、みんな武蔵のような君子面した奴ばかりだ。ようし、おれはそ り立ってくる。 何事につけ、いつもよく出す又八の根性ではあったが、今度の場合に限っては、彼が生れて以

蛇になった程、変っていた。お通を押籠めた前の彼と、タメ 来胸に抱いた精神力のうちの最大のものであった。 通を押籠めた前の彼と、外に立って腕拱みして入り直して来た彼とは、わずかな間に、 ーどんと、 自でのように、彼の足は、 後ろの木連格子を蹴とばしていた。たった今、 そこへ

雨乞堂の中の暗い床を眺めやって、――ふん、泣いてやがら」 又八は、こう吐き出すように冷たくいった。

お通し

マやい さっきの返辞をしろ、

「泣いていちゃ分らねえ」

足をあげて、 蹴ろうとすると、 お通は早くもそれを感じて、 屑を躱しながら、 「よけいな口をたたくな。返辞をしろといったのは、

おれの家内になるか嫌か、

それを一言聞け

「ばかをいえ」鼻で嗤って----「あなたへする返辞などはありません。男らしく、殺すならお殺しなさい」

えと武蔵とに、復讐してやるのだ」「おらあ今、肚を決めた。てめえと武蔵とが、 俺の生涯を誤らせたのだから、 おれも生涯、

「うそをおいいなさい。あなたの生涯を間違えたのは、 あなた自身です。 それから、 お甲という

女のひとではありませんから

るのでしょう」 「あなたといい、 「何をいやがる」

お杉ばば様といい、どうして、あなたの家のお血すじは、そう他人を逆恨みす

ばよいのだ」

「その返辞ならば、 何度でもいたしまする」

「おう吐かせ」

お通は、嫌いも嫌い、身慄いの出るほど嫌いでございます」のほかに、心を寄せるお人があってよいものでしょうか。……まして貴方のような女々しい男、「生きているあいだはおろかな事、未来まで、わたくしの心に結んだお人の名は宮本武蔵様。そ

これ程にいえば、どんな男でも、殺すか、諦めるか、どっちかにするであろう。

幸

お通はそういってから、なんだか胸がすいた。そして又八に、どうされてもやむを得ないと観

念していた。

「……ウウム、いったな」

又八は、体のふるえを怺えながら、努めて冷笑して見せようとした。

おくぜ。それは、てめえが嫌おうが好こうが、俺はてめえの体を、今夜から先は、自分のものに 「それ程、おれが嫌いか。――判っきりしていていいや。――だがお通、おれも判っきりいって

してしまうということだ」

幽

「なにを顫えるんだ? ……ええおい、てめえも今の言葉は、相当な覚悟をもっていったのだろ「……?」

「そうです、私はお寺で育ちました。生みの親の顔すら知らない孤児です、死ぬことなど、いつ

「冗談いうな」

でも、そう怖いとは思っておりません」

又八は、傍へしゃがみ込んで、反向ける顔へ、意地悪く顔を持って行きながら、

「誰が殺す? 殺してたまるものか。こうしておくのだ!」

いきなり彼は、お通の肩と左の手頸をかたく摑まえた。そして着物の上から---彼女の二の腕

のあたりを、がぶっと、深く嚙みつい

身を床にもがいて暴れた。そして、彼の歯を捥ぎ離そうとするほど、彼の歯の尖を肉へ深く入――ひいイっ、お通は思わず悲鳴をあげた。

又八は、それでもなお、鰐のような唇を離さなかった。淋漓たる血しおが、小袖の下を這って、縛られている手の指先までぼとぼと垂れてきた。

て、唇を離し、そして彼女の顔の猿ぐつわを脱って、彼女の唇を調べてみた。 お 通 の顔は、 月明りでも受けているように、見るまに白くなってしまった。 又ハはぎょっとし

余りの痛さに、喪心したのであろう、鏡の曇りのような薄い汗が顔に浮いていたが、唇の中に嚙み切ったのではなかろうかと。

はなんの異常もなかった。

「……おいっ、堪忍しろ。……お通、

お通」

ふたたび体を床に転ばせて、

身を揺すぶると、お通は、 われに回ったが、途端に、

「痛い。……痛い。城太さアん、城太さあん! ……」 と、うつつに叫び出した。

「痛てえか」

れの歯型のある女に触れた奴は、おれの女響だといって歩くから」えの体に、それを手付の証印として預けておくぜ。逃げるなら逃げてもいい。おれは天下に、お 何と思う? 「血は止まっても、歯型の痣は何年も消えることじゃねえ。おれの、その歯の痕を、人が見たら 又八は、自分も蒼白になって肩で息をつきながらいった。 ……。武蔵が知ったら何と考えるか。……まあ当分の間、 Į, ずれ俺の物となるてめ

見していた者がある。 「……止せっ、いつまで、泣いてやがって。気が滅入ってしまわあ。もう苛めねえから 黙れ。 ····うむ、 梁の塵を微かにこぼして、真っ暗な堂内の床には、よよと泣きむせぶ声ばかりだった。

祭壇から土器を取って、外へ出て行こうとすると、そこの木連格子の外に立って、誰か、覗き…うむ、水をいっぺい持って来てやろうか」

四

ので、又八は猛然と、木連格子を排して、誰か? ――と恟っとしたが、堂の外に見えた人影は、途端にあわてて逃げ転んで行く様子な

「野郎っ」

華

と、追い駈けて出た。

捕まえてみると、この附近の土民らしく、馬の背に、穀物の俵を積み、夜を通して、塩尻の問

屋まで行く途中だという。そしてなお、諄々と、

「べつに、どういう心算でもなく、お堂の中に、女子の泣き声が聞えたので、不審に思って、

覗

いてみただけでござります」

「それだけか。――それだけの考えに相違ないか」 弱い者にはどこまでも強くなれる又八であるから、忽ち、反身になって、 と、言い訳して、平蜘蛛のように、詫び入るだけだった。

まるで代官のように威張っていう。

と、一方が愈ふふるえ顫くと、「へい、まったく、それだけの事で……」

て、俵のあとへ、あのお堂の中にいる女を括しつけて、俺がもうよいという所まで乗せて行くの 「うむ、それなら勘弁してつかわそう。だが、その代りに、馬の背の俵をみんな降 ろせ。そし

勿論、こんな無理を押しつける場合は、又八でない人間でも、 必ず刀をひねくり返して見せる

嫌応なしの脅しである。ことは忘れない。 又八は、竹を拾って、馬を曳く人間を撲る鞭としながら、嫌応なしの脅しである。お通は馬の背中へ括しつけられた。

「こら上民」

「街道すじへ出てはならねえぞ」

「では、どこへお越しなさるのでございますか」

「そんな事を仰っしゃっても無理でございまする」 「なるべく、人の通らない所を通って、江戸まで行くのだ」

「何が無理だ。裏街道を行けばいいのだ。さしずめ、中山道を避けて、伊那から甲州へ出るよう

に歩け」

「それやあ、えらい山路で、姥神から権兵衛峠を越えねばなりませぬで」

毒

と、馬を曳く人間へ、絶えず鞭を鳴らして、一越えればいいじゃねえか。骨惜しみすると、

「飯だけはきっと喰わせてやるから、心配せずに歩け」

百姓は、泣き声になって、

「じゃあ旦那、伊那までお供いたしますが、伊那へ出たら放しておくんなさいますか」

又八は、かぶりを振った。

「やかましい。俺がいいという所までだ。その間に、変な素振りをしやがると、 ぶッた斬るぞ。

俺の要り用なのは、馬だけで、人間なぞは、かえって邪魔くせえ位なものだ」 道は暗い、山にかかるほど、嶮しくなってゆく。そして馬も人も疲れた頃、やっと姥神の中腹

馬の背にしがみついたまま、一言も物をいわずにきたお通も、朝のまでかかり、足もとに、海のような雲の波と、朝の光を微かに見た。 朝の光を見ると、それまでの間

に、もう心をすえてしまったかのように、

て下さい。――いいえ、私は逃げはしませぬ。 「又八さん。後生ですから、もうそのお百姓さんを放してやってください。この馬を返してあげ ただ、そのお百姓さんが可哀そうですか

又八はなお、 疑ぐっていたが、再三再四、お通が訴えるので、遂に、彼女を馬の背から解いて

降ろした後、

「じゃあきっと、素直に俺について歩くな」

と、念を押した。

「ええ、逃げはしませぬ。 逃げても、蛇歯型が消えないうちはむだですから- ゆうべも

一の腕の傷みを抑えながら、 お通はそういって、唇を嚙んだ。

星の中

_

しかしその時間は、至って短かった。 かなる場所でも場合でも、武蔵は、寝ようと思う時にすぐ眠り得る修養と健 康 を 持って い

権之助の家へ戻って来てから、着のみ着のまま、一間を借りて横になったが、小鳥の声がし始

子も疲れているだろうし、老母もまだ眠っているに違いない。――そう察しられるので、武蔵は けれど昨夜、野婦之池から池尻へ出て、ここへ戻って来たのがもう夜半過ぎであった。める頃は、もう眼をさましていた。 あの息

小鳥の声を耳にしながら、寝床の中で、やがて雨戸の音のするのをうつらうつらと待っていた。

――すると。

ている者がある。 「……おや?」 隣の部屋ではない。 もう一間ほど先の襖らしかった。そこで誰やら、しゅくしゅくと啜り泣い

に慟哭して、耳を澄ましていると、泣いているのは、 どうやらあの精悍な息子らしく、時々、子どものよう

阿っ母、それやああんまりだ。おらだって、口惜しくねえ事があるものか。お **(7)** ほう

が、阿っ母よりも、どんなに、 と、言葉も、とぎれとぎれにしか聞き取れない。 口惜しいか知れねえけれど」

「大きななりをして、何を泣く

こう三ツ児でもたしなめるように、慥乎りした声で――しかし静かに叱っているのは、かの老

母に間違いなく、

「それ程、無念と思うなら、この後は心を戒めて、一心に道を究めて行くことじゃ。涙など

「はい。……もう泣きませぬ。昨日のような不覚なざまをお目にかけました罪は、どうかこぼして、見苦しい。その顔を拭きなされ」 お行し

下さいまし」

――とは叱りましたが、深く思うてみれば、下手と上手の差。又、無事が続くほど、人間は鈍

「そう阿っ母にいわれるのが、なによりおらあ辛い。平常も朝夕に、お叱りをうけながら、昨夜るという。そなたが負けたのは、当り前なことかも知れぬ」 のような未熟な負け方。あんなざまでは、武道で立つなどという大それた志も、吾れながら恥ず かしい。この上は、 生涯、 百姓で終るつもりで、武技を磨くよりは鍬を持ち、阿っ母にも、

と楽をさせまする」 何事を歎いているのかと、 初めは武蔵も他事に聞いていたが、どうやら、母子の対象としてい

1 武蔵は、憮然として、寝床のうえに坐り直した。る者は、自分以外の他人ではないらしい。

――なんというつよい勝敗への執着 だろう

て、武蔵に負けたという点を、ここの母子は、今もって、飽くまで不覚な恥辱として、涙にくれ昨夕の間違いは、もうお互の間違い事と、心に済ましているのかと思えば、それは そ れ と し

「……怖ろしい負けず嫌い」

るほど無念がっているのである。

室の内を、隙間からそっと覗いてみた。 武蔵は呟いて、そっと次の部屋へかくれた。そして夜明けの薄い光の洩れているその又次の一

している。 「なんじゃと、……これ権之助、今、なんといやったか」 武蔵が、ふすまの陰から見ているとも知らず、老母はその時又、何が気に障ったのか、 見ると、そこは、この家の仏間であった。老母は仏壇を背にして坐り、息子はその前 ――あの逞ましい大男の権之助が、母の前には他愛もなく顔をよごして泣いている。 に泣き伏

ふいに、声を励まして、息子の襟がみをつかんでいた。

子のことばが――気に添わないのみか、かえって、老母の心を怒らせたものの如く、 「なに。百姓で終るとか」 年来の志望であった武道を捨てて、明日からは、生涯百姓で終るつもりで孝養するといった息

息子の襟がみを膝へ引き寄せると、三ツ児の尻でもたたくように、彼女は、歯がゆそうに、権

之助を叱るのだった。

に泊っておる。眼をさましたら改めて手合せを望み、その挫けた気持に信念を取り戻 し た が よ「不覚を取ったら、なぜその恥をそそごうとは思わぬか。幸いな事には、あの牢人はまだこの家 老母は、ここまでいうと、子の襟がみを抑えたまま、声も嗚咽になってしまって――に書を読ませ、武道を励まし、稗栗に細々生きてまで、露命の糸をつむいで来ようぞ」 で、世に望みを繋いでいたものを、このまま、草屋に朽ち終るほどなら、なんで幼少からそなた 「どうぞして、そなたを世に出し、まいちど家名を興させたいものと願えばこそ、母もこの年ま

「阿っ母、それが出来るほどならば、おらが何で弱音を吐くものか」権之助は、やっと顔を上げたが、間が悪そうに、

けていたが、どうしても、打ち撲る事ができなかった」 「ゆうべも、半夜のあいだ、あの牢人を連れ歩くうち、絶えず、一撃ちくれてやろうと、 「常の其方にも似あわぬ事。どうしてそのように意気地のうなりやったか」

「そなたが、怯みを抱いているからじゃ」

駄目だと思ってしまうのだ』 も自分では思ってみるが、あの牢人の姿を見ると、どうしても、手が出ねえだ。手を出す先に、 かけ、夢想の中に、杖の使い方を悟ったこの権之助だ、なんで名もない牢人ずれに 「いいや、そうでねえ。おらの体にも木曾侍の血は流れている。御岳の神前に二十一日の祈願を

160 巻 競ってみるがよい。それでも敗れたら、お前の気の済むように、杖を折って、志を断つもよかろ 限って敗れたのも、思いように依っては、そなたの慢心を、御岳の神がお叱りなされて下された より、きょう限り、杖を折って、一枚の田でもよけいに耕したほうがいいとおらあ考えただが」 どうして、一流を興す事などできるものか。そのために貧乏して、阿っ母に飢じい思いをかける「でも、よくよく考えてみると、今日までの事は皆、おらの独りよがりだった。あんな未熟で、 のかも知れぬが、そなたが杖を折って、わしに不自由なくしてくれても、わしが心は、美衣美食 で楽しみはせぬ」 「今まで、多くの人々と手合せしても、一度として、負けたという事のないそなたが、きのうに 「杖をもって、必ず一流を立てますると、御岳の神に誓ったそなたが そう論してから、老母はなおもいうのだった。奥のお客が眼醒めたら、改めてもう一度、技を

(さて、困ったことが……) と、当惑しながら、そっと去って、ふたたび自分の寝床のうえに坐りこんだ。 ふすまの陰で始終の事を聞いてしまった武蔵は、

どうしたものだろう?

試合えば、自分は、きっと勝つ。 やがて、自分が顔を見せれば、必ず母子の者から、試合を求められるに違いない。

(おい、達者で暮せよ)

武蔵はそう信じる。

けれども、今度も亦、自分に敗れたなら、 あの権之助は、 今日まで誇っていた杖の自信を失っ

て、ほんとに志を断つであろう。

又、わが子の達成を、唯一の生きがいとして、貧困の中にも子の教育を忘れずに今日まで来た

あの母親の身になったら、どんなに落胆するだろうか。

「……そうだ、この試合は、外すに限る。だまって、裏口から逃げ出そう」

はぐれて此家へ拾われて来た牝牛が、今日は今日の陽を豊かに浴びて、そこらの草を喰べていた。 もう朝の陽が木々の梢から薄白くこぼれている。ふと納屋のある片隅を見ると、きのうお通に 緑の戸をそっと開けて、武蔵は外へ出た。

そんな気持がふと牛に向ってもわくのであった。武蔵は防風林の垣を出て、 もう大股に歩いていた。 駒の裾野 の 畑 道

足元から払われて行くと、ゆうべからの疲れも焦躁も颯っと遠方のものになってしまう。 片方の耳はひどく冷たいが、 今朝は鮮らかに企姿を見せている駒の、頂、から落ちてくる風に、

仰ぐと、雲が遊んでいる。

ちぎれちぎれな無数の白い綿雲、 各~が、各~の相を持ち、気儘に自由に屈託なく、

がもの顔に戯れてゆく。

い城太郎にも、弱いお通にも、幼ければ幼いなりに、弱ければ弱いなりに、世間の中の 焦心るまい、余りこだわるまい。会うも別 れるも、天地 の何ものかが させている力だ。幼

空

炛

昨日から迷れかけた――いや、馬籠の女滝男滝からずっと外れがちに彷徨ってばかりいた武蔵が神だともいえる――-善性の人の加護があるであろう」 が 城太郎は? 太郎は? ――とか、そんな眼の傍の事のみでなく、死後の先までかけている生涯の道の――ふしぎにも今朝は、自分の歩むべき大道へ、確乎と返っている心地だった。お通は?

午刻過ぎごろ。

行く手がこの朝 彼には見えていた。

獣皮を懸け並べた百獣屋だの、木質櫛の店だの、ここの宿場もなかなかの雑鬧。彼の姿は奈良井の宿場の中に見かけられる。軒先の檻に生きた熊を飼っている熊の胆屋だの、 その熊の胆屋の一軒。 なんの意味か「大熊」と看板に書いてある角店の前に立って、

「ものを訊ねたいが」 と武蔵がのぞく。

後ろ向きに釜の湯を、 自分で汲んで吞んでいた熊の胆屋のおやじが、

「はあ、何でござりますか」

「奈良井の大蔵殿というお人の店はどこであろうか」

「ああ、大蔵殿のお店ならば、これからもう一つ先の辻で――」

帰って来たとんば頭の丁 と、湯吞み茶碗を持ったまま、おやじは、店頭まで出て来て道を指さしたが、折ふし、 稚の顔を見かけると、 外から

っと分らんによって、前まで、お連れ申して来う」 「これこれ。こちら様はの、大蔵様のお店を尋ねて行かっしゃるという。 あのお店構えは、 ちょ 中

て権之助から聞いていた言葉も思い合せて、奈良井の大蔵という者の徳望のほどが偲ばれた。 丁稚は、頷いて、先にてくてく歩いてゆく。武蔵は心のうちで、その親切にも感じたが、かね いいつけた。

四

お百草の卸問屋といえば、軒並みにある旅人相手の店の一つのようなものかと思って来たとこ

ろ、見れば、まるで想像は外れている。

「お侍さん、ここが奈良井の大蔵様のお宅でございますよ」

ちょっと億劫なほど、大きな老舗の奥ふかさを持っている。がつづき、その他は高塀で取り繞らしてある。入口には、蔀、障・子が下りていて、訪れるにも、店と聞いていたが、暖簾も看板も懸けてはない。渋で塗った三間の出格子に、二た戸前の土蔵と思われる――目の前の大家を指さして、すぐ走り戻って行った。 案内してくれた熊の胆屋の丁稚は、なる程、側まで連れて来て貰わなければそれとも分るまい

「御免」

武蔵はそこを開けていう。

中は暗い。そして、醬油屋の土間のように広くて、冷たい日陰の空気が顔に触れた。

「どなた様で-

「それがしは宮本と申す牢人者ですが、連れの城太郎 と、帳場簞笥の隅 から程 なく立って来る者がある。武蔵は、 漸く十四歳ほどの童が、 後を閉 めて、 昨日 か

とによると今朝あ たりー 御当家を頼って来たように途中で聞いて参りました。 もしや御当家の

世話になってはおりますまいか」

武蔵のことばが終らないうちに、番頭の顔には、 ああその子供か――という頷きが漂い

「それはそれ

叩きましてな――ちょうど手前どもの主人大蔵様には旅立ちの立ち振舞いで、まだ賑やかに大勢 「それは、残念な事をいたしましたわい。その子供なら、 と、丁寧に敷物をすすめたが、辞儀をした後の返辞は、 武蔵を失望させるものだった。 ゆうべ夜半に、ここの表戸をどんどん

老舗の奉公人の常として、実直すぎて前措きも諄々しいが、つづまる所、その城太郎という子供が、門に立っておりましたようなわけで」 して起きておりました折なので――何事かと開けてみますと、ただ今、あなたのお訊ね遊ばした

要旨は、

次のような

4

空

んで来たところ、主人の大蔵がいうには、と、武蔵も誰かに教えられた通り、城太郎も亦、 と、武蔵も誰かに教えられた通り、城太郎も亦、お通を攫われたわけを告げて、此処へ泣きこ(この街道の事なら何でも奈良井の大蔵さんの所へ頼みに行け)

らすぐ分るが、旅の者が旅の者を誘拐した事だ。いずれ往来の街道を避けて、間道へ出てしまっ(そいつは容易くないぞ、念のため、手配はしてやるが、この近くの野武士や荷持人足の仕業な たにちがいない)

とおり、なんの手懸りも得られなかった。 そう見込みはつけたが、つい今朝方まで、 八方へ人を派して、捜索したけれど、大蔵の予言の

愈以 別れないとなると、城太郎は又、ベソを掻き出したが、ちょうど今朝は、大蔵が旅立ち

の日なので、

た、ひょいと、武蔵とかいうお前のお師匠さんに会えない限りもないからなあ) (どうだ、おれと一緒に歩かないか。そうしたら、途々も、そのお通さんとやらを探せるし、

——一方もそれではと、急に連れて行く気になって、旅の空へ立ったばかり——という番頭の話 のである。 慰め半分に、大蔵がいったところ、城太郎は地獄で仏に会ったように、ぜひ一緒に行くとい

それも、時間にすれば、わずか二刻ばかりの違いなのに一 いかにも気の毒そうに、繰返していった。

Б.

二刻の差があっては、いくら急いで来たところで、間に合わなかったことは確実だが、それに

「して、大蔵殿のお旅先は、いずれで御座ろうか」しても――と武蔵は残念な気がする。

訊ねると、番頭の答えは又、甚だ漠としたもので、

ましてな――今度も、多分、善光寺から、越後路を見物して、江戸へ這入るのではないかとは思聞があれば神社仏閣に詣でたり、湯治に日を暮したり、名所を見たりするのが道楽なのでござりに、仕入れた荷を背負:て「詣臣・彳RF—— に、仕入れた荷を背負って、諸国へ行商に出てしまいまする。それゆえ、主人は閑の多い体で、「御覧の通り、手前どもの店は、表を張っておりませぬし、薬草は山で製り、売子は春秋の二回

いますがし

「とんともう、判っきりと、行く先をいって出た例のないお方で」「では、お分りにならぬのか」

それから、 番頭は

「まア、お茶をひとつ」 と、一転して、店からそこまで、 歩くにもかなりかかるような奥へ茶を取りに這入って行った

が、武蔵は、ここに落着いている気にもなれない。

やがて、茶を運んで来た番頭に向い、 主人の大蔵の容貌や年配を訊いてみると、

「背丈は」 髪に、少々ばかり薄禿が見えまするで」 髪に、少々ばかり薄禿が見えまするで」 は、どちらかといえば角で赭ら顔のほうで、それに痘瘡の痕がいっぱいござりましてな、右いございません。お年は五十二におなりでございますが、どうして、まだ屈強な骨ぐみで、 「はいはい、道中でお会いなされましても、てまえどもの御主人なら、一目でお分りになるに違 右の小

「並の方とでも申しましょうか」

「衣服は、どんな物を」

「これは、今度のお旅には、堺でお求めなされたとかいう唐木綿の縞を着て行かれ ました。

は珍しいもので、まだ世間一般には着ているお方も稀でございますから、主人を追っておいで遊 ばすには、何よりもよい目印になろうかと存じまする」

彼の人柄はそれであらまし分った。なおこの番頭を相手にして話をしていたら限り も あるま

のうちに、峠まで登って待ちかまえていれば、その間に、二刻の道程は追い越し、やがて夜明け明るいうちにはもう難かしいかも知れないが、夜を通して、洗馬から塩尻の宿場を過ぎ、今夜い。折角なので、茶を一喫するとすぐ武蔵はそこを出て、先へと急いだ。 と共に、後から奈良井の大蔵と城太郎が通りかかるに極っている。 のうちに、峠まで登って待ちかまえていれば、その間に、

との燈火が、森の晩ながら、贄川、洗馬も過ぎて、麓の 「そうだ。先へ越えて、彼処で待てば ら、なんともいえない山国の佗しさを瞬いている。麓の宿場までかかると、すでに陽はかげって、夕煙の這う往来に、

だそう更けぬうちに、いの字ケ原の高原に立ち、ほっと息をつきながら、身を星の中に置いて、 しばらく恍惚となっていた。 そこから塩尻峠の頂までは、 なお二里以上はある。武蔵は、息もつかず登りつめた。 そしてま

争の杖

武蔵はふかく眠った。

そこは高原の一部から、瘤のように盛り上がっている岩山の上で、この塩尻峠では、さし当っ今、彼の眠っている小さい何の廂には、浅間神社という額が見える。

恣 0

ばらく合れを忘れ、ただ、

て、ここより高い所は見当らない。

きなり眩い暁雲に眼を射られたが、人影は見えないで、はるか彼方の墵の海に、真っ赤な富士のふいに耳元で入声がしたので、祠の縁に手枕で寝ていた武蔵は、むっくりと起きあがって、い「おおうい。登って来いよ。富士山が見えるで」

すがたを見出した。

ああ、富士山か」

武蔵は少年のように驚異の声を放った。絵に見ていた富士、胸に描いていた富士を、眼のあた

りに見たのは、今が生れて初めてなのだった。

しかも寝起きの唐突に、それを自分と同じ高さに見出して、対い合ったのであるから、彼はし

「――ああ」

尘

何を感じたのであろうか、そのうちに武蔵の面には涙の玉が転びはというため息を胸の中に曳いて、瞬ぎもせず眺め入っていた。 しっている。拭こうともし

ないで、その顔は朝の陽に灼かれて涙のすじまで紅く光って見えた。

――人間の小ささ!

武蔵 明らかに彼の胸を割れば、 は衝たれたのである。宏大な宇宙の下にある小なる自己が悲しくなったのであった。 一乗寺下り松で、吉岡の遺弟何十名という数を、まったく自己の一

(世の中は甘いぞ)

剣の下に征服

してからは、いつのまにか彼の胸にも、

でもあるまいという慢心が首を擡げかけていた。と、ひそかに自負の芽が萌していた。天下の剣人と名乗る者は数あっても、 およそ何程のもの

たとい剣に於いて、 望むがごとき大豪となったところで、それがどれほど偉大か、どれほどこ

の地上で持ち得る生命か。

立っていることが恐くなった。 より偉大なるものが厳然と自己の上にある。それ以下の者が人間なのだ。武蔵は、富士と対等に 畢竟、人間は人間の限度にしか生きられない。自然の悠久は真以ようとて真以られない。武蔵は、悲しくなる。いや富士の悠久と優美を見ていると、それが口惜しくなってくる。 人間は人間の限度にしか生きられない。自然の悠久は真似ようとて真似られない。自己 彼はいつのまにか地上にひざまずいていた。

そして合掌していた。

小なりに偉くなりたい――と自己の希望をも心のそこで祈った。 の無事を祈った。また神の天地のごとく、偉大なるわけにはゆかないが、人間として、小ならば 合わされたふたつの掌を通して、彼は母の冥福を祈った。 国土の恩を感謝した。 お通や城太郎

なお、 彼は掌をあわせていた。

すると、

ばか、なぜ人間が小さい。

いう声がした。

170 るのだ。だから、人間こそは、最も巨きな顕現と行動をする――しかも生きたる霊物 で は な い――人間の眼に映って初めて自然は偉大なのである。人間の心に通じ得て初めて神の存在はあ

合掌のうちに、武蔵がそんな閃きを胸に享けていると、で、達人、名人の域にも遠い者といわなければなるまい。 る三尺の刀を通してすら届きうるほど近くにあるのだ。いや、そんな差別のあるうちはまだだめ おまえという人間と、神、また宇宙というものとは、決して遠くない。おまえのさしてい

「なアる程!よく見えらあ」

その町人たちの中にも、山を単なる山としている者と、神として仰ぐ者と、自らふたつあった。下から這い上がって来た四、五名の旅人たちが、手をかざして、ここの景観を称え合っていた。 「お富上様が、このように拝める日は、すくのうござりますよ」

_

ら登って来るにちがいない。 祠の裏へ廻って、武蔵は、その道を見張っていた。――やがて奈良井の大蔵と城太郎が、禁瘤山の下の高原の道には、もう西と東から行き交う旅人の影が、蟻のように見下ろされる。 やがて奈良井の大蔵と城太郎が、麓か

なぜならば、彼は入念に、この岩山の下の道ばたに、板切れを拾って、それへこう書いて目に

そしてもし此方で見つけ損ねても、

先方があれを見落す気づかいはあるまい――と安心してい

つく崖に立てかけて置いてあるからである。

奈良井の大蔵どの

御通過のみぎりは

上の小祠にて、おお会い申したく、 お

待ち申しおり候

城太郎の師 武 蔵

通らないし、彼の立ててきた札を見て、下から声をかける者もない。 ところが、 往来の多い朝 の一刻を過ぎ、高原のうえに陽の高 くなる頃まで待っても、 似た人も

と、怪訝らざるを得ない気持に囚われてしまう。「おかしいなあ?」

「来ないわけはないが?」

と、どうしても思う。

この高原の嶺を境にして、道は甲州、 中山道、 北国街道の三方にわかれているし、 水はみな北

へ駛って、越後の海へ落ちてゆく。

奈良井の大蔵が、 たとい善光寺平へ出るにしても、 中山道へ向うにしても、ここを通ら な ع

いう理窟は考えられない。

変えたか、 世間のうごきを、理窟 まだ手前の麓に泊まっているか で推り してゆくと、 もしれない。腰に一日の用意は提げているが、 とんだ間違いが往々に起る。 何 か急に、 朝飯と 方角を

午飯をかねて、麓の宿場まで戻ってみようか? 「……そうだ」

武蔵は、岩山を降りかけた。

その時である。

岩山の下から、

「あッ、いたっ」

と、ぶしつけな呶鳴り方をした者がある。

と思いながら武蔵が岩につかまりながら下を覗くと、果たせるかな、声を投げて仰向いている眼 その声には、殺気があった。おとといの晩、いきなり身をかすめた棒の唸りに似ていた。はっ

はあの時の限であった。 「――客人、追って来たぞ」

こう呼ばわる者は、駒ケ岳のふもとの土民権之助で、見ると、あの百姓家にいた母親までを連

れている。

その老母を牛の背にのせ、権之助は、例の四尺ほどの棒と手綱を持って、武蔵の姿を睨めあげ

ていうのだった。

つもりだろうが、それでは俺の立つ瀬がねえ。もういっぺん試合をしろ。おれの杖をう けて み「客人!」いい所で会った。だまって俺の宿から逃げ出したのは、こっちの肚を察して、躱した

猿

降りかけた足を止めて、武蔵は岩と岩の間の急な細道の途中で、しばらく、 岩に縋ったま

下を見ていた。

「阿っ母、ここで見ていさっしゃい。なにも、試合するには、平地と限ったこたあねえ。降りて来ない、と見たか、下なる権之助は、

登って

行って、あの相手を、眼の下へたたき落してみせる」 母の乗っている牛の手綱を放し一 ――小脇の杖を持ち直して――やにわに岩山の根へ取りつこう

とすると、

「これ!」 彼の母はたしなめた。

「いつぞやも、そのような粗忽が不覚の因ではないか。いきり立つ前に、なぜよう敵の心を読ん

でおかぬのじゃ。もし上から石でも落されたらどうしやる」

なお何か、母子のあいだで、交わしている声は聞える。しかし意味は武蔵の所までは聞きとれ

ない。

その間に、 武蔵は肚を決めていた。 やはりこの挑戦は避けるに如くはないという考えであ

すでに自分は、勝っているのだ。彼の杖の技倆もわかっている。 改めてなお勝つ要はさらにな

のこるような試合はすべきでない。益は少なくて、まちがえば、天命を縮めてしまう。 と、愈ら、負けずぎらいな母子の恨みの程が怖ろしい。吉岡一門を敵とした例を見ても、 のみならず、あの一敗を口惜しがって、母子してここまで自分の後を慕って来たところを見る 怨みの

それに又、武蔵は、子を盲愛するの余り人を呪う無知な老母の恐ろしさは、身にも骨にも沁み

て、一日一度は必ず思い出すほどだった。

あの又八の母親 ――お杉ばばの影を、

何を好んで、また人の子の母から、呪いを買おう。どう考えても、これは逃げるの一手、ほか

に当り障りなく通る道はなさそうに思われる。

恣

で、彼は無言のまま、半ばまで降りて米た岩山を、又ふたたび上へ向って、のそのそと登りか

けた。

の

「――あっ、お武家」

垄

その背へ、下からこう呼んだのは、気の荒い息子の方ではなく、今、牛の背を降りて地上に立

った老母の方であった。

声の力にひかれて、武蔵は足もとを振りかえってみた。

見ると、老母は、岩山の根の辺りに坐って、じっと自分を見上げている。武蔵の眸が下へ振向

たと知ると、老母は両手をついているのである。

なんの礼ものべずに裏口から逃げ出してしまってこそいるが、この長上から、地へ両 手 を つ い 武蔵はあわてて、向き直らずにいられなかった。一夜の恩にこそ預かっているが、そして、

て、辞儀される事は何もしていない。

(お老母、勿体ない、 お手を上げてください)

そういいたそうに、武蔵は思わず、伸ばしていた膝を屈めてしまった。

かい馴れて、師もなく、友もなく、又よい相手に巡り会わぬこの伜を、不愍と思し召して、もううござりまする。しかし……遺恨の、自惚れのと、思い募るのではございませぬ。年頃、杖をつ 「――お武家、さだめし、我のつよい者、他愛ない奴と、お蔑みでございましょうの。恥 かしゅ

一手のお教えをうけたいのでござりまする」

葉には、耳を洗って聞かなければならない真がこもっていた。 蔵はなお、無言であった。けれど老母が、届きかねる声を一心に張って、こう下からいう言

だたる武門であった御先祖に、どう顔向けがなりましょう。意趣ではございませぬぞ。敗けるに を伜に叱って連れて参りました。――どうぞわしの願いをかなえて試合ってやって下されい。 のようなお方から、なにも得ずに過ぎては、それこそ口惜しい限りでございます。 しても、あれではただの土民がねじ伏せられただけのものでござります。折角、巡り会うた貴方 やらどうやら。 「このままお別れ申しては、どうにも残念でござります。ふたたび貴方のようなお相手に会える ――なおなお、あの見苦しい敗れ方のままでは、この子も、この母も、以前は名 わしは、それ

顣 い申しまする

い終ると、老母は、 武蔵の踵を拝むように、又、大地へ両手をつかえていた。

四

空

176 えるとして」 「権どの、手綱を持て、歩きながら話そう。 武蔵は黙って降りて来た。そして道傍の老母の手を取って、牛の背へ押しもどし、 ――試合うか、試合わぬかは、わしも歩きながら考

と、いった。

次に彼は、黙々と、その背を母子の者に向けて歩いて行く。話しながら歩こうといったのに、

その沈黙は変らない。

ている。 いる。そして一歩でも距つまいとするもののように、遅い牛の脚を叱咤しながら尾 い て 行っ武蔵が何を迷っているか、権之助にはその肚が酌めないのである。疑いの眼を彼の背へ光らし

応か。 嫌というか。

牛の背の老母もまだ不安そうな顔に見えた。そして、十町か二十町も高原の道を歩いたかと思

う頃、先に歩いていた武蔵が、

と独り返辞をしながら、くるりと、踵をめぐらし、「ウム!」

「――立合おう」

権之助は手綱を捨て、と、いきなりいった。

「承知か」

即座にもと思ったらしく、もう足場を見まわすと、武蔵は、意気ごむ相手を眼の外に措いて、

「じゃが

牛の背へいうのである。

「万が一のことがあってもよろしいか。試合と斬合とは持ち物がちがうだけで、紙一重ほどの相

違もないが」

念を押すと、老母は初めてにこと笑って、

この母も、恨みにはぞんじませぬ」 を断っては、生きるかいもないといいやる。さすれば、打たれて死んだとて当人も本望である。 お、年下のあなたに負けるような伜であったら、武道に思いを断つがよい。——その武道に望み 「御修行者、お断りまでもないことを仰せられる。杖を習び出してからもう十年。それ でも な

「それまでにいうならば」

と、武蔵は、眸を一転して、権之助の捨てた手綱をひろい、

いの字ケ原のまっただ中に、枯れかけている一本の巨きな落葉松が見える。あれへと指して、「ここは往来がうるさい。どこぞへ牛を繋いで、心ゆくまで、お相手いたそう」

「権どの。支度」

武蔵はそこへ牛を導き、

と、促した。

手を静かに見た。 待ちかねていた権之助は、おうと武蔵の前に棒をひっ提げて立った。武蔵は直立したまま、相

武蔵には木剣の用意がない。そこらの得物を拾って持つ様子もなかった。肩も張らず、二本の

手は柔かに下げたままである。

「支度をしないのか」

今度は権之助からいった。

武蔵は、

「なぜ?」

と、反問した。

「得物を把れ、何でも好む物を」権之助は、憤っと、眼から出すような声で、

「持っておる」

「無手か」

「いいや……」

首を振って、武蔵は、左の手をそっと忍ばすように、刀の鍔の下へ移して、

「此処に」

といった。

「なに! 真剣で」

答えは、唇の端に歪めた微笑を以てした。低い一声、静かな呼吸の一つも、もう徒らに費やす

ことはできないものになっている。 落葉松の根元へ、濡れ仏のように、べたっと坐り込んでいた老母の顔は、からな。

途端にさっと蒼ざめ

た。

Ŧī.

——真剣で。

武蔵がいったために、 老母は急に動顚したのであろうか。

「ア。待って賜も」

ふいに横からいった。

だが、武蔵の眼、権之助の眼、そう双つのものは、 もうそれ位な制止では、 針程 も動かなか 0

た。

うに、じっと小脇に含んで構え、武蔵の片手は、 の眼光を突っこむような眼をしているのである。 権之助の棒は、この高原の気をみんな吸って、 鍔の下に膠着したまま、相手の眼の中へ、一撃の唸りにそれを噴き出そうとするもの 相手の眼の中へ、自分 のよ

するのである。 上に相手を斬る。 もう二人は、内面に於て、斬り結んでいるのである。 まず眼を以て斬り伏せてから、棒か刃か、どっちかの得物がはいって行こうと。而に於て、斬り結んでいるのである。眼と眼とは、この場合、太刀以上、棒以

老母は、また叫んだ。「待たッしゃれ!」

何か?」

卷

と、答えるためには、武蔵は四、五尺も後へ身を退いていた。

「真剣じゃそうな」

「いかにも。 ―木剣でいたしても、真剣でいたしても、 拙者の試合は同じことですから」

「それを止めるのではないぞえ」

「お分りならばよいが、剣は絶対だ……手にかける以上、五分までの、七分までの、そんな仮借で

があるものではない。 --- さもなくば、逃げるかがあるばかり」

事を悔やんではと-「元よりの事。 わしが止めたは、それではない。これほどな試合に、後で名乗り合わなんだ ふと思い寄ったからじゃ」

「うむ、いかにも」

「怨みではなし、しかし、 どちらから見ても、会い難きよい相手、 この世の縁。 権よ、そな

たから名乗ったがよい」

「はい」

権之助は、素直に一礼して、

覚明は木曾殿の滅亡後、出家して、法然上人の室に参じておりますゆえ、その一族やも知れませ「遠くは、木曾殿の幕下、太夫房覚明と申し、その人を家祖といい伝えております。なれども、 念におもいまして、母と共に誓いをたて、御岳神社に参籠して、必ず、武道をもって世に立つこ とを神文に誓ったのです。――そして神前に於て、会得したこの杖術を、自ら夢想流と称し、人 年久しく、七民として今、私の代に至りましたが、父の世の頃、或る恥辱をうけ、それを無

をしてーー。

はてまえを呼んで、夢想権之助といってお ります」

にさすらう以上は、たとえこれに於て、其許の杖の下に、敢なく一命を終ろうとも、毛骨のお手一子、同苗武蔵であります。さして、有縁の者もおりませず、又、元より武辺に身をゆだねて世「拙者の家は、播州赤松の支流、平田将監の末で、美作宮本村に住し、宮本無二斎とよぶもののイント 彼が口を結ぶと、武蔵も礼儀を返して、

と、いった。そして、

数などは御無用な業です」

と、立ち直ると、

権之助も杖を把り直して、

「では」 と、応じた。

松の根もとに坐りこんだ老母はその時、息もしていないように見えた。

自若としているのだ。万人が何といおうが、自分だけは深く信じるところがあるもののような姿今、白刃の前に立たせている。――常人には到底考えられない心理の中に、しかし、この表長に 白刃の前に立たせている。——常人には到底考えられない心理の中に、しかし、この老母はけりかかった災難とでもいうならば兎も角、われから求めて、追いかけて来てまで、わが子を

182 生み、幾人の子を亡くして、貧苦の中に耐えてきた肉体か、その姿はいかにも小さい。そして萎べたんと、坐ったまま、肩をすこし前へ落し、行儀よく両手を膝にかさねている。幾人の子を みきっている。

――だが今、武蔵と権之助とが、何尺かの土の間に対峙して、

「では」

と、戦端を切ったせつなに、老母の眸は、天地の仏神が皆集まってそこから覗いて いる

な、巨大な光を発した。

巻

助はもう自分の運命がわかったような気がして、体がさっと冷たくなった。 彼女の子は、すでに武蔵の剣の前に、その運命を曝していた。武蔵が鞘を払った瞬間に、 権之

(はて、この人間は?)

の

と今、観えて来たのである。

空

覚ったのである。 がせにしない、武蔵の楷書の体を見て、自分が敵を量るに、意外なまちがいを抱いていたことを らば、彼は、草書の武蔵を見て、武蔵の人間を律していたが、きょうの厳粛で、一点一画もゆる いつぞや、 わが家の裏で、不用意に闘って感得した敵とはまるでその体が違う。 文字でいうな

ø, 又、それが覚れる権之助であるから、いつぞやは自信にまかせて、滅多打ちに振り こん だ 杖 きょうは、頭上へたかく振りかぶったまま―― まだ一打の唸りすら呼び起すこと ができな

「......

0 ケ原の草靄 は、 かかるあいだに薄 ッすらと霽れかけてい た。 遠くかすんでい る Щ の 前

を、 一羽の鳥影が悠々 と横ぎってゆ

はまた、杖が空気を搏ったのか、剣が大気に鳴ったのか、 ぱッと、二人のあいだの空気が鳴っ た。飛ぶ鳥も落ちるような見えない震動であ いずれともいえないこと は、禅でい る。 それ

――のみならず双方の五体と得物の一如なうごき方は、とても肉眼に依って見て取ることはでう、隻手の声は如何というのと同じことである。 かしい。はっと、視覚から脳へそれが直感する一秒間の何分の一かわからない一瞬に、すでに眼

に映る二人の位置と姿勢はまるで変っている。

けて薙ぎ上げた刃は、権之助の体の外とはいいながら権之助が振り落した一撃は、武蔵の体の外を搏ち、 権之助の体の外とはいいながら、殆ど右の肩から小鬢の毛をかすめるくら一撃は、武蔵の体の外を搏ち、武蔵が小手を翻して、中位から上位へ向

に関い てい た。

0) まで行くと、 地獄となるところであった。 同時に、この場合も、武蔵の刀は、彼のみの持っている特質として、相手の身を外れて行く所 ヒラと、すぐ松葉形に切先を返して来た。この返す切先の下こそ、いつも彼の相手

ために、第二撃を、敵に与える湿もなく、権之助は杖の両端を持って、武蔵の刀を、頭上で受ために、第二撃を、敵に与える湿むなく、権之助は杖の両端を持って、武蔵の刀を、頭上で受

け

そうなものだが、 かんと、 彼の額の上で、杖は鳴った。 刃が斜めに米ない限り、 白刃と杖とのこんな場合、杖は当然両断になっている。 決して切れるものでない。従って、受ける方にも、そ

らば、杖と刀とが、彼の頭上で、がっきと十字に嚙み合ったせつな、杖の先と武蔵の胸のあいだた。しかし武蔵の刃はたしかに止まったが、その捨て身な迅業は、成功しなかった。――なぜなやや高く折り曲げて、咄嗟、武蔵のみずおちを、杖の突端で突かんとしながら受けたものであっの手心があって、権之助が頭上へ横に翳した杖は、敵の手元へ深く左の肱を突っこみ、右の肱を には、惜しくも、ほんの一寸ほどな空間を残していたからである。

引きもならない。

これが、刀と刀との場合ならば、つば競りというのであろうが、一方は刀でも、一方は杖であ無碍にそれをやろうとすれば、忽ち、焦心だつほうが敗れるに極まっている。押してもゆけない。

る。

杖には鍔がない、刃がない、又、切先も柄もない。 けれど、丸い四尺の杖は、その全部が刃であり、切先であり、

って、これを上手に使われると、杖の千変万化なことは、到底、剣の比ではない。 剣の六感で、

又、

柄であるともいい得る。従

(こう来るな)

短槍と回じ働きもするからである。 というような測定をもったらとんだ目にあう。杖は、時によって、刀のような性格を持って、

た。

十文字になった杖と刀の上から、 武蔵が刀を引けない理由は、 その予測がゆるされ な いか

あった。

の体であった。――引くはおろか、もし、満身の気魄を、権之助の方はなおさらである。彼の杖は、武蔵の刀を、 びくとでも弛めたらば、 頭上に支えているのであるから、

(得たり)

と、武蔵の刀は、 そのまま一押しで、彼の頭を砕いてしまうであろう。

御岳の夢想をうけて、杖の自由を体得したという権之助も、今はどうすることも 出 来 な かっ

T.....

頭上に受けとめている杖と刀の十字が波を打ってくる。

その下に、権之助の息が刻々に荒くな

限じりから脂汗がねっとりと流れ出す。見ているまに、彼の顔は蒼白になって 彼の顔は蒼白になって行った。下唇へ前歯がめりこんでいる。 吊るしあが った

---すると³

っていた。

その権之助以上、蒼ざめた形相となって、松の根がたから凝視していた老母が、

「権ッ」

と、さけんだのである。

の腰を自分で強かに打ちながら、権---と絶呼した瞬間に老母はわれを忘れていたに違いない。坐っていた腰を伸び上げて、そ

186 と罵って、そのまま血でも吐いたのか、前へのめってしまった。腰じゃわえ!」

み合ったせつなよりも凄まじい力を持って、ぱッと離れた。 武蔵も権之助も、ふたりとも石に化るまで離れそうにも見えなかった杖と刀が、とたんに、嚙

退いたのも、二尺や三尺ではない。右か左か、どッちかの踵が、上を掘ったような勢いであっ武蔵の方からである。

た。その反動、彼の体は七尺も後ろへ移っていた。 しかし、その距離は、権之助の飛躍と、四尺の杖に、すぐ迫られて、

――あッ」 と、武蔵は辛くも横へ払い退けた。

逆立てた武蔵の眼の前に、明らかに、空いている背中を曝してしまった。 いで、だッと、前へのめった。そして、強敵に会った「隼」が、死にもの狂いとなったように、髪死地から攻勢に立ったとたんに払い捨てられたので、権之助は、頭を大地へ突っこむような勢

権之助はなお、ととととと、三足ほど歩いてそのまま仆れ、武蔵も片手でみずおちを 抑 え な が一本の雨のような細い閃光が、その背を切った。――うううっと、仔牛のように唸きながら、 ら、草の中へ、どたっと、腰をついて坐ってしまった。

――負けた!」 と叫んだ。

そして、

権之助は声もない。武蔵がである。

!

削 のめりに仆れたまま、権之助はいつまでも動かなかった。 ―それを見入っているうちに、

「みね打ちです」
老母も喪心してしまった。

武蔵は、老母へ向って、こう注意を与えた。それでもまだ、老母が起って来ないので、

「はやく、水をおやりなさい。御子息には、何処も怪我はない筈だ」

「……えっ?」

老母は、初めて顔を上げ、やや疑うように権之助の姿を見ていたが、武蔵のいうとおり、 血に

まみれてはいなかったので、

「オオ」

体を揺り動かすと、権之助は息をふき返した。 次には、踉めいて、いきなりわが子の体へ、 縋りついた。水を与え、名を呼んで、老母がその ――そして茫然と坐っている武蔵を見ると、

「怖れ入りました」

いきなりその前へ行って土に額ずいた。武蔵はわれに還ると共に、慌ててその手 を 握 り 取っ

て、

「いや、敗れたのは、其許ではない、拙者の方です」

「杖の先が、赤い痕になっているでしょう。もう少し入ったら、恐らく拙者の生命はなかったにして、襟元を披いて、自分のみずおちを、二人へ見せた。

は。 いないし

いいながらも、武蔵はまだ、茫然としているのである。どうして敗れたかを理解し 切る まで

同 じように、権之助も老母も、彼の皮膚にある一点の紅い斑点をながめて、 口もきけなかっ

か。

9

港

ためか。 |めか。あの場合、権之助殿の腰構えに、抑、どういう虚を見出されて、あんな声を発しられた武蔵は襟を合わせて、老母に訊ねた。――今、二人が試合のうちに、腰!||と呼んだのは何の

すると、

と

は

、

٠<u>/٢</u>

逆上っているので更に気がつかぬようじゃったが、あの体のまま、手もそのまま、ただ腰を落し刃に心のすべてを奪われていたから縛りに会ったのじゃ。手を引こうか、手をもって突こうかと、 さえすれば、自然に杖の先が、相手の胸元へどんと伸びる……そこじゃと、思うたので、何を叫 から見ておるうち、はっと、武術も何も判らぬわしにすら見えた虚がある。それは―― えておりました。退いても危ない、突いても危ない、絶体絶命の縛りに会っての。 「お恥かしい事じゃが、せがれはただ、あなたの刀を 杖 で支えるに 必死 となって、 だのやら思わず口走ったのでござりました」 ――それを横 両足を踏ま あなたの

と、いう。

武蔵はうなずいた。よい教えを受けたと、この機縁に感謝した。

0) 神の夢想ではない、眼の前に、子が斬られるか生きるかの境を見て、現実の母が、愛の中から 黙然と、権之助 も聞 V ていた。 彼にも何か会得するところがあったに違いない。 これは、 御統括

摑み出した「窮極の活理」であった。

曾の一農夫権之助、 後に、夢思権之助と称して、夢想流杖、術の始祖となった彼は、その伝

書の奥書に、

それはそうと、この母子の多幸を祈って別れ、いの字ケ原を去って、武蔵が上諏訪の辺りまでいない。彼は生涯、武蔵に負けたと人にも語り、その負けたことを尊い記録としていた。 なる秘術を誌して、 けの大愛と、武蔵との試合を審らかにしているが「武蔵に勝つ」とは書い

行き着いたかと思わるる頃、

た

「この道筋を、武蔵という者が通らなかったであろうか。 馬子の立場だの行き交う旅人に、途々試合わせながら、後を慕ってゆく一名の武家があっ 慥に、 この道へ来たわけだが

夕の恋

どうも痛む……。

麓か、上諏訪のあたりに足をとめて、城太郎の姿を探し、お通の消息を知らねばならぬと思うみずおちの中心を外れて少し肋骨にかかっている。夢想権之助からうけた杖の痛みである。

のであったが、 なんとなく気が冴えない。

彼は、下諏訪まで足を伸ばした。下諏訪まで行けば温泉がある。そう思ってから急に真っ直に

歩いたのである。

空

は往来傍にあって、誰が入浴ろうと怪しむ者はない。 湖畔の町は、町屋千軒といわれていた。本陣の前の屋根のある風呂小屋が一ヵ所見えたが、後

武蔵は、 着物を立木の枝に懸け、大小を括り付けた。そして、野天風呂の一つに体を浸けて、

「ああ」

と、石を枕に、眼をふさいだ。

るような快さが血管を繞ってくる。 今朝から革ぶくろのように硬ばっていたみずおちを、そうして湯の中で揉んでいると、眠くな

陽が傾きかけている。

皆湯のように感じられる。 漁師の家でもあろうか。 湖畔の家と家の間から見える水面には、茜色の淡靄が立って、それも 二、三枚の畑を隔てたすぐそこの往来には、馬や人間や車の行き交う

物音が頻繁であった。

と――その辺の油や荒物を売っている小やかな店先で、

「草鞋を一足くれぬか」

よくは知らないと見えて、問われた者から、服装や年頃などを反問されると、 ではめずらしい、よい試合ぶりをした男だ。確かに通ったに違いないが、気づかなかったかの」 「うわさはこの辺へも聞えておろう。京都一乗寺の下り松で、吉岡方の大勢を一身にうけ、近頃 塩尻峠を越えると間もなくから、往来を訊いて歩いている例の武家であった。そのくせ、そう と床几を借りうけて、足拵えを直している侍がいっているのである。

「さあ、その程は」

と、あいまいなのである。

しかし、何の用があるのか、 熱心は熱心で、そこでも見かけないという返辞を聞くと、ひどく

落胆して、

「何とか、会いたいものだが……」

と、草鞋の緒をくくり終えても、まだ愚痴のように繰返している。

自分の事ではないか。

武蔵は、 畑越しに、湯の中からその武家を篤と見ていた。 が、

武者面のほども偲ばれる骨柄である。裸にしたら鎧ずれや具足だこで鍛え抜かれている体だろう笠の紐癖でそそけているのかも知れないが、小鬢の毛が荒く立って、これが戦場に立ったら、旅焦けのしている皮膚――四十ぐらいな年配――牢人ではない主持である。 一年人ではない主持である。

「はて……覚えがないが」とも思われる。

考えている間に、武家は立ち去ってしまった。吉岡の名を口にしたところから見て、事によっ

たら、吉岡の遺弟ではあるまいかなどとも思ってみる。

あれだけの門下のうちだ。気骨のある人間もいよう、好計をめぐらして、復讐しようとつけ狙

っている者がないとはいえない。

体を拭き、衣服を着けて、武蔵がやがて往来へ姿を現すと、何処からか出て来た最 前の 武 家

「お訊ね申すが」

ふいに彼の前に会釈して、しげしげと顔を見ながらいった。

「もしや尊公は、宮本殿ではござるまいか」

__

不審顔に、武蔵がただ頷くと、彼を糺したその武家は、

「やあ、さてこそ」

と、自分の六感に凱歌をあげて、又、さもさも懐かしげに、

「とうとうお目にかかることが出来、大慶至極。……いや何かしら、今度の旅では、何処かでお

目にかかれるような気持が、初めからいたしておった」

と、独りで欣んでいる。

乗り申すが、奥州青葉城の主、伊達政宗公の臣下で、石母田外記という者でござる」は、供の者十四、五名は連れ、乗り換え馬の一頭も曳かせて歩く身分の者でござる。念のため名 「さりとて、決して不審な者ではござらぬ。こう申しては、鳥滸のようなれど、いつ も 道 中 に そして武蔵が、何を問う遑もなく、とにかく今夜はご迷惑でも同宿ねがいたいとい

とつけ足した。

意にまかせて伴われてゆくと、外記は湖畔の本陣に泊りを定め、 通るとまず、

「風呂は」

と、自分で訊ねながら、すぐ自分で打ち消して、

「いや、尊公はもう、野天風呂でおすみじゃな。では失礼して」

と、旅装を解き、気軽に手拭を持って、出て行ってしまう。

おもしろそうな男ではある。 しかし武蔵にはまだ分っていない。 一 伙 何であんなに自分の後

を尋ね、自分に親しみを持っているのか?

おつれ様も、お召替えなさいませぬ か

と、宿の女が、どてらを出して彼へすすめる。

「わしは要らぬ。都合によっては、ここへ泊るか泊らぬか、まだ分らぬのだから――」 「おや、左樣でございますか」

開け放してある縁へ出て、武蔵はようやく暮れてきた湖水へ眸をやり、その眸に、又ふと、

「どうしたか?」

と、物思わしく、彼女の悲しむ時の睫毛などを、描いていた。

さざ波は、見ているうちに濃藍から真っ暗になってゆく。うしろで女中が膳をすえている物音が静かにする。やがて燈火が背から映す。そして欄の前のうしろで女中が膳をすえている物音が静かにする。やがて燈火が背から映す。そして欄の前の

「……はてな、この道へ来たのは、方角を取り違えたのではないか。 お通は誘拐されたという。

女を誘拐す程な悪い奴が、こんな繁華な町へさしかかるわけはない」

意だと達観していながら、すぐ居ても立ってもいられない心地がしてくる。 そんな事を考えたりしていると、耳に彼女の救いをよぶ声が聞えるような気がする。 何事も天

石母田外記が戻って来た。「いや、どうも、大きに失礼を仕った」

「さ、さ」

と早速、膳の前へ、着座をすすめたが、 自分だけのどてら姿に気づいて、

「尊公も、どうぞ、お着替えくだされい」

と、強っていう。

と、外記は膝を叩いて、

の姿、歩くにもこのままの姿、それでなかなか寛げもすれば窮屈でございませぬと答えると、 「いや、それよ」 それを武蔵も、強って固辞して、常に樹下石上のおきふしに馴れている身、寝るにもこのまま

「政宗公のお心がけは、行住坐臥、やはりそこに御座る。かくもあろう人とは思っていたが、ウ

ウムさすがは」

と、燈火を横にうけている武蔵の顔を、穴のあく程、見惚れているのだった。

そして我に返ると、

「いざ。おちかづきに」

る。

辞儀だけして、手は膝においたまま、武蔵は初めて訊ねた。

と、杯を洗って、これからの夜を心ゆくまで楽しもうとするもののように、 慇懃に一献 向け

は?

改まって、何のために? と武蔵から訊かれると、外記は初めて、自分の独りのみ込みに気づ

に、路傍のそれがしが路傍の尊公に、かくまでも親しみを持つかと問わるるならば 「いや成程、ご不審はごもっともじゃ。——しかしべつだん意味はないので、強いて、何のため

――一言で申

いたらしく、

と、いって又、

さば――惚れたのでござるよ」

「あははは。男が男に、惚れたのでござるよ」

「外記殿。これは一体どうしたご好意でござり ますか。路傍の 拙者を 迫って、このお親しみ

「母田外記は、これで十分、「、いい重ねる。

自分の気持を説明したつもりらしいが、武蔵にとっては、少しも

惚れる程な男に会った経験がな

柳

説明された事にはならない。

男が男に惚れるということはあり得よう。けれど武蔵はまだ、

惚れるという対象に持つには、沢庵は少し恐すぎるし、光悦とは住む世の中が隔たりすぎ、

生石舟斎となるともう余りに先が高すぎて、好きな人とも呼びかねる。

かくて過去の知己を振向いてみても、男が惚れる男などが、そうある筈のものではない。

恣

それをこの石母田外記は無造作に、

(あなたに惚れた)

0

空

お追従であろうか。そんな事を軽々しくいう男はよほど軽薄と思ってもよい。と、自分へいう。

けれど外記の剛毅な風貌から見ても、そんな軽薄な徒ではないことは、武蔵にも何だか分る気

がするのである。

そこで彼は、

「惚れたと仰っしゃるのは、いかなる意味でございましょうか」

真面目に、こう問い直すと、外記はもう次にいうことばを待っていたように、

おったのじゃ」

-実は、一乗寺下り松のお働きを伝え聞いて、失礼ながら、今日まで、見ぬ恋にあこがれて

「ではその頃、京都に御逗留でございましたか」

何気なくいつも参る烏丸光広卿をお館にたずねてゆくと、そこで種々な尊公の噂。お館は一度、「一月より上洛して、三条の伊達屋敷におりましたのじゃ'あの一乗寺の斬合いがあった翌日、 られ、どうかして一度、会いたいものと念じていた願いかなって――今度の下向に、計らずも尊 尊公とも会ったことがあると仰せられ、お年ばえや、閲歴なども承って、愈ゝ思慕のおもいに駆 公が、この道を下っているということを――あの塩尻峠に書いておかれた立札で承知したのでご

「立札で?」

ざる」

「――されば、奈良井の大蔵とかをお待ちになる由を、 札に書いて、 道ばたの崖へ立てて置かれ

たであろう」

「ああ、あれを御覧になられたのですか」 武蔵はふと世 の中の皮肉をおぼえた。 此方で探し求める者とは巡り会わずに、 かえって、

思いがけない無縁の人にこうして探し当てられているとは

ないが、あの事件は、相当世間の耳目を聳動して、うわさの波を天下に拡げているらしい。といい一乗寺の血戦といい、武蔵にとっては、むしろ慚愧な傷心が多く、誇る気もちなどは毛頭だが、外記の心を聞いてみれば、この人の衷情は身に過ぎて勿体ない。三十三間堂の果し合い いや、それは面目ないことです」

ないと思うのであった。 武蔵は、 心からいった。そして心から恥ずかしかった。こんな人に惚れられる資格など自分に 空

人上手も少なくない。したが、尊公のようなのは稀でござろう。末たのもしいというのは尊公の ような若者じゃ。まったくそれがしは惚れました」 「百万石の伊達武士のうちにも、よい侍はずいぶんいる。又、こう世間を歩いてみるに、剣の達ところが外記は、

と、称揚して熄まない。――そして又、

分、我儘をいってもらいたいのじゃ」 「で、今夜は、それがしが一夕の恋を遂げた訳。ご迷惑でも、どうか一献お過ごしあって、存

四

と、手の杯を洗い直した。

「雪国の侍は、みな酒が強うござるよ。――政宗公がおつよいので、勇将の下、弱卒なしで」 武蔵は心を開いて杯をうけた。そして例のごとくすぐ赤くなってしまう。 と、石母田外記は、まだなかなか酔うほどに行っていない。

酒を運ぶ女に、幾度か、灯を剪らせて、

「ひとつ今夜は、飲み明かし、語り明かそうではないか」 武蔵も腰をすえて、

「やりましょう」

と、笑みを含み、

外記殿は最前、 烏丸のお館へはよく参ると仰せられたが、光広卿とご懇意でご ざ い ま す

かし 「ご懇意という程でもないが――主人の使いなどで、しげしげ参るうちに、あのように御気さく

似あわぬ、快活な御気性と見うけました」 「本阿弥光悦どののお紹介わせで、私もいちど、柳町の扇屋でお目にかかりましたが、公卿にもなので、いつのまにか、馴々しゅう何っておるので」

「快活? ……それだけで御座ったかの……」

と外記はすこしその評に不満らしく、

「もっと長く話してみたら、必ずあの卿が抱いている情熱と智性でもお感じになった で あろう

「では、あの方の、ほんとの相はどこにあるのですか」「なる程、それではあの卿が、世間を化かしている姿しかお見せなさるまい」 「何分、場所が、遊里でござりましたゆえ」

何気なく、武蔵が問うと、外記は坐り直して、ことばまで改め、

「憂いの中にあるのでござる」

と、いった。

そして、なお、

――その憂いは又、 幕府の横暴にあるのでござりまする」

と、いい足した。

湖水のゆるい波音のあいだに、白々と燈は揺れていた。

「武蔵どの。 こんな質問は、受けたことがない。武蔵は率直に、 ――尊公はいったい、誰のために、剣を磨こうとなされるか」

「自分のために」 と、答えた。

「ム。それでいい」 外記は大きく、

と頷いたが、又すぐ、

と、たたみかける。

「その自分は、誰のために」

「それも自分のためか。 まさか尊公ほどな精進を持つ者が、小さな自己の栄達だけでは、ご満足

分の話したい本心を披き出したといったほうが適切かも知れない。 話は、こんな緒口から始まったのである。いやむしろ外記がこんな緒口を自分でつくって、自がなるまいが……。

見えるが、いったい、ほんとに民のために幸福な世の中が出来たろうか。 彼の話によると、今、天下は家康の手に帰して、一応、 四海万民みな泰平をたたえているやに

だけを考えて来たのが、頼朝以後の武家政道―――それを倣った、今日の幕府制度では ある ま いである。皇室は利用され、民は値なき労力のみにこき使われ―――両者のあいだにただ武家の繁栄 北条、足利、 織田、豊臣――と長いあいだに亙って、いつも虐げられてきたものは、民と皇室 ――両者のあいだにただ武家の繁栄

ŋ く専横時代がやって来るのではなかろうかと、世の趣く先が案じられる――。 は、飽くまで徳川家中心で、ふたたび庶民の幸福も皇室も犠牲にして、幕府ばかり肥え太ってゆ 信長は、ややその弊に気づき、大内裡を造営して見せたり、秀吉も後陽成天皇の行幸を仰いだ 一般を賑わし楽しませる庶民の福祉政策を取ったりもしたが、家康の政策が本意 と する 所 わが上君伊達政宗公より他にはござらぬ。

と、石母田外記は、いうのであった。

して公卿では烏丸光広卿などで」

「それを案じている者は、天下の諸侯中でも、

\overline{H}

自慢というものは元より聞きづらいものだが、 主人の自慢だけは聞いていても悪い 気 は

た皇室へも、心から直な心をよせている者は、政宗を措いて誰もいない――というのである。わけてこの石母田外記は、主人自慢であるらしかった。今の諸侯の中で、心から国を憂い、 ま

「……ははあ」

武蔵はただそう頷く。

変したが、 (世の中がだいぶ変ったな) 彼には、 正直なところ、そう頷くだけの知識しかなかった。 関ケ原の以後、 天下の分布図は

空

の眼は、改めて向けてみた事もないし、それらの常識は、至って浅かった。 つあるか、 と思うだけで、秀頼方の大坂系大名がどう動こうとしているか、徳川系の諸侯が何を目企みつ 島津や伊達などの惑星が、その中にどう厳存しているか ――などという大きな時勢へ

持っているが、伊達などというと、もう漠として、 それも加藤とか、池田とか、浅野、福島などといえば、武蔵にも、二十二歳の青年並の観察は

(表高は、六十余万石だが、内容は百万石以上もある陸奥の大藩)

だから、ははあと、頷くばかりで、時には疑い、時には、 という以外、これぞという知識も持ち合せていない。

と、聞き入るのであった。(政宗とは、そんな人物か)

外記は、数々な例証をあげて、

も、その伝献の荷駄について上洛いたしたので、無事お役を果したので、帰り途だけ閑暇を賜わ――どんな戦乱の年でも、この伝献を怠られたことはござらぬ。――今度、自分が都へ上ったの って、ひとり見物がてら仙台までもどる途中でござる」 「わが主人政宗は、一年二回は必ず国内の産物を挙げて、近衛家の手より禁中へ献上なされる。

といい、又――

御所の改築の折、 とも質素なもので、主人は朝夕、遠く仰拝する室としているばかりでござるが、武家政道の歴史 「諸侯のうちで、城内に、帝座の間を設らえてあるのは、 古材木をいただいて、遠く船で運んで来たものとか申しまする。 わが青葉城があるばかりでござろう。 とはいえ、い

に鑑みて、一朝、見るに見かねる暴状でも世に行われれば、 て、武家をあいてに戦うお心を抱いておられるのじゃ」 つ何時でも、 朝廷方の御名をかり

外記は、そういってなお、

「そうじゃ、こういうお話もある。それは、 朝鮮御渡海の時

の功名などで戦い申そうか。又、一太閤のために働き申すのでもない。この日の丸の旗を故郷のわれた時、公はこう仰せられた。――いやしくも海外に兵をひっさげて参った政宗は、一伊達家 宗公のお態度はどうであったか。朝鮮陣中で、背に日の丸の旗差物をさして戦われたのは、 公おひとりで御座ったぞよ。お家の御紋もあるに、何故に左様な旗差物をお用いあるかと人が問 しるしと見て身を捨て申す覚悟――とお答えになったとか 「あの役の折には、小西、加藤など、各~が功名争いして、」と、話しつづける。 武蔵は、何しろ興味ふかく聞いていた。外記は杯を忘れている。 いかが わしい聞えもござっ たが、

が冷えた」

もう十分です。 外記は手をたたいて女を呼んだ。そしてなお、 私は湯漬を頂戴いたしたい」 酒をい いつけそうなので、武蔵はあわてて、

固辞すると、

゙……何の、まだ」

と外記は、残り惜し気に呟いたが、相手の迷惑を思ったか、急に、

「では、飯を貰おうか」

と、女へいい直した。

せられたものは、政宗公という一箇の武辺を中心として、伊達藩の者がこぞって、 湯漬を喰べながらも、外記はまだ頻りと主人自慢を話しつづけている。中で武蔵が心を傾けさ

(如何に武士たるべきか)

てて、今では太刀を持つ人間の間に、かつての古い士道さえ見失われてしまっている。 はあった。けれど漠としたままそれは古い道徳となり、乱世のつづくうちに、その道義も乱れ果 今の社会に、「士道」はあるかないか、といえば、武士の興った遠い時代から、漠とした 士 道 と――武士の本分を、「士道」というものを、磨き合っている風の旺んなことだった。

(武士だ)

そしてただ、

空

の

(弓取りだ)

てはゆくが、そうかといって、真に「士道」を研いて、自国の富強の根本としてゆこうと自覚し田夫や町人にも劣る下劣なのが見かけられる。勿論、そういう下劣なる武将は、自ら滅亡を招い が、新しい士道は立っていない。従ってその武士だ、弓取りだと自負する者のうちには、屢ゝ、 ている程な将は という観念だけが、戦国のあらしと共に強まっているのみである。新しい時代は来 つ つ ある ―まだ豊臣系や徳川系の諸侯を見わたしても極めて少ないのではあるまいか。

かつて。

は姫路城の天主の一室へ、武蔵が、沢庵のために、三年のあいだ幽閉されて、陽の目もみ

ずに書物ば かり見ていたあの頃である。

という題簽がついていた。不識庵とは、いうまでもなく、上杉謙信のことである。な不識庵様日用修身巻で議論と記念があります。一冊の写本があったことを覚えている。それには、あの沢山な池田家の蔵書の中に、一冊の写本があったことを覚えている。それには、 書物の内容

は、謙信が自身の日用の修身を書きならべて、家臣へ示したものであった。

それを読んで武蔵は、謙信の日常生活を知ると共に、あの時代、越後の富国強兵な謂われを知

った。——けれど「士道」というものにまではまだ思い至らなかった。

われて来るのみでなく、伊達一藩には、この乱麻の世の中にあって、いつのまにか、幕府権力に所がこよい、石母田外記の話をいろいろ聞いていると、政宗はその謙信にも劣らない人物と思 も屈しない「士道」を生み、それを磨き合っている風が勃々として、ここに在る、石母田外記一

人を見ても、分る気もちがするのであった。

もお越しなさらぬか。主人は至って無造作なお方でござる。士道のある侍なら、牢人 で あ ろ う と、誰であろうと、お気易くお会いなされる質じゃ。それがしから御推挙もいたそう。ぜひおい でなされ。 「いや、思わず、それがしばかり勝手なことを喋舌ったが……どうじゃな武蔵殿。いちど仙台へ ---ちょうどこうした御縁の折、何ならば、御问道申してもよいが」

床にわかれた。 膳を下げてから、外記は、熱心にこうすすめたが、武蔵は一応、「考えた上で」と答えて、臥 つな部屋へわかれて、枕についてからも、武蔵は眼が冴えていた。

空

----そう心に決定をつかんでから、武蔵はふかく眠りに落ちた。

206 じっと、そこに、思索をあつめているうちに、彼は、忽然と、それを自己の剣に 省み て悟っ

剣術

それではいけないのだ。

||剣道。

心と立命の境地へ達し得るか、得ないか。行ける所まで行ってみよう。その完成を志して 行こ がある。自分は、それを、人間的な内容に、深く、高く、突き極めてゆこう。小なる一個の人間 というものがどうすれば、その生命を托す自然と融合調和して、天地の宇宙大と共に呼吸し、安 飽くまで剣は、道でなければならない。謙信や政宗が唱えた士道には、多分に、軍律的なもの 剣を「道」とよぶところまで、この一身に、徹してみることだ。

銭だ

眼をさますと、武蔵はすぐ思い出す。 --お通はどうしたろう。又、 城太郎はどこを歩いてい

るだろう。

「やあ昨夜は」

と、朝の膳で、石母田外記と顔をあわせる。忘れるともなく話に紛れて、やがて旅籠を立ち出と、朝の膳で、石母田外記と顔をあわせる。忘れるともなく話に紛れて、やがて旅籠を立ち出

ると、この二人も、中山道を往還する旅人の流れの中に交じって行く。 武蔵は、その行き来の流れに、絶えず無意識のうちにも眼をくばっていた。

似た人の後ろ姿にも、はっとして、

(もしや?)

と、すぐそれかと思う。

「誰方か、お連れでも、お探しかの」外記も気がついたのか、

と、訊く。

「さればです」

行きたいから、ここでべつな道を取りたいと、それを機に、夜来の礼をのべて別れかけた。と、武蔵は掻いつまんで事情を話し、江戸へ参るにしても、途々、その二人の安否を心がけて

外記は、残念そうに、

「折角よい道連れと存じたが、それではぜひもござらぬ。——したが、昨夜も諄々お話 しし た

「忝う存じます。——折もあらば又」が、ぜひ一度、仙台の方へお越しください」

「伊達の士風を見ていただきたいのじゃ。さもなくば、さんさ時雨を聞くつもりでおざれ。歌も

卷 O

る。

いやならば、松島の風光を愛でに渡らせられい。お待ち申すぞ」

をも知れぬ天下の風雲である。諸国の雄藩は頻りと人物を求めている。路傍からよい人物を見出 れる姿だった。そして武蔵は心のうちで、いつか、伊達の藩地を訪ねてみようとその時思った。 して行って、主君へ推挙することは、家臣として、大きな奉公の一つだからであった。 その時代、こういう旅人に出会うことは、武蔵ばかりでなかったろう。なぜならば、まだ明日 そういって、一夜の友は、すたすたと和田峠の方へ一足先に行ってしまった。何となく心ひか

「旦那、旦那

後ろで誰か呼びかける。

山道のわかれに立って、思案にくれていると、その姿を見かけて来た宿場人足たちの声なのであ 一度和田の方へかかりながら武蔵が乂、足を回らして、下諏訪の入口へもどり、甲州街道と中

꺌 めて原始的な山駕の駕かきもいる。 宿場人足といっても、荷持もあれば馬曳きもあるし、これから和田へかけては登りなので、極

一何か?」

と、武蔵はふり返った。

お

「旦那あ。さっきからお連れを探している様子だが、お連れは別嬪ですかえ。それともお供でも あんなさるかね」 その姿を、無作法に眼で撫で廻しながら、人足たちは木像蟹のような腕を拱んで近づいて来た。

持たせる荷物もないし、山駕を雇う気もない。

武蔵はうるさく思って、

「いや……」

と、首を振ったのみで、黙々と、人足たちの群を離れて、歩みかけたが、 彼自身まだ、

(西せんか? 東せんか?)

心に迷っている姿だった。

一度は、何事も天意にまかせて、自分は江戸表へと、心に極めたが、やはり城太郎 を ふと 考

え、お通の身を思うと、そうも行かない。

(そうだ、きょう一日だけでも、この附近を尋ねてみよう。……もしそれでも知れなければ、

先ず諦めて先へ立つとして)

彼の考えが極まった時、

して遊んでいるので御座いますから、お指図なすっておくんなさいまし」 「旦那、もしや何か、お探しになる事でもあるなら、どうせあっしらは、こうして陽なたぼッこ

「駄賃なんざあ、いくらくれとは申しません」 又、寄って来た人足の一人がいうと、他の者も、

「一体お探しになっているのは、お女中でござんすか、御老人ですかえ」 余りいうので、武蔵も、

と仔に

と仔細を話して、誰か、そんな少年と若い女を、この街道筋で見かけた者はないかと訊くと、

「さあ?」

と、彼等は顔を見合わせ、

らでなけれやあ分らねえ穴がございますからね」 所を越えてゆく筈はなし、そこは蛇の道はヘビってもんで、訊き廻るにも、土地に明るいこちと訪塩尻の三道にかけて、探すとなれやあ造作アありませんぜ。誘拐された女子だって、道のねえ 「誰もまだ、そんなお人は、見かけねえようですが、なあに旦那、こちとらが手分けをして、諏

「なるほど」

焦躁するよりは、こういう輩を使えば忽ち、二人の消息は分るかも知れない。 武蔵はうなずいた。大きにそれは理窟がある。上地にも不案内な自分が、徒らに歩いてみたり

「――では頼む、ひとつ其方たちの手で、探してくれまいか」

率直にいうと、人足たちは、

「ようがす」

と、一斉にひき受けてから、しばらくがやがや手分けの評議をしていたが、やがて一名の代表

者が前へ出て、揉手をしながら、

べておりません。夕方までにゃあ、きっと、お尋ねのお人を突き止めますから、半日の日雇い賃 「ええ、日那え。エへへへ、寒に申しかねますが、なにしろ裸商売、こちとらあまだ、朝飯 わらじ銭とを、ちっとばかりやっておくんなさいませんか」

「おう、元よりの事」

武蔵は当然に思って、貧しい路銀をかぞえてみたが、彼の要求する額には、その全部をはたい

ても足りなかった。

は、 日までの流浪生活の常であった。 かり暮しているから。——しかし武蔵は又、金に執着を持ったことがない。それは、孤独の彼に 武蔵は金の貴重なことを人よりも身に沁みて知っている。なぜならば、孤独である。又旅 なければ喰べずにいても、そう痛痒には感じない。――そのうちに何とかなって来たのが今誰を扶養する責任もない。その身一つは、寺に宿り、野に臥し、時には知己の清 浄 を 恵 ま

丸家から莫大な路銀を恵まれ、それをもって、道中の経済をしていた上、武蔵へもなにがしかの 考えてみると、ここまで来た道中の費えも、 一切お通が見ていてくれたのだった。 お通 は、

金を頒けて、

(お持ちになっていらっしゃいまし)

と、渡してくれたものだった。

そのお通からもらった全部を、武蔵は人足たちに皆渡して、

「これでよいか」

といった。人足たちは、掌へ銭を頒け合って、

くんなさい。晩までにゃ、 「ようがす。負けておきましょう。 と、蜘蛛の子みたいに散らかって行った。 きっと、古いお報らせをいたしますから」 ――じゃあ旦那は、諏訪明神の楼門でお待ちなすっていてお 恣

空 内へ来てみると、楼門の辺にも、まだ誰も来ている様子がない。 「ああ、疲れた」 気づかれというのか、こんな呟きが、嘆息のように出ることは滅多にない。呟きながら、彼は楼門の石段へどっかり腰をおろした。 だが、その両方ともに、大した収穫もなく、 やがて黄昏頃、人足たちと約束した諏訪明神の境

の頭には、絶えず、この辺の地勢とか、水型とか、又、誰か聞えた武術家などはいないかなどと

そのほうへ頻りと心が動く。

お通と城太郎の消息を尋ね歩いていると、武蔵は、こうして暮れてゆく一日が惜

で、武蔵は武蔵で、高島の城下から、諏訪一円を歩き暮した。

八方、人手を分けて、探しているとはいえ、この一日を、

空しく待っているのも智慧がないの

しか

った。

誰も来ない。 まだ約束した人足は一人も見えていなかった。 やや退屈を感じて広い境内を、一巡りして又戻って来た。

中に に返るような眼をみはった。 た物音は、神馬が床を蹴って暴れる音だった。 闇 ある一棟の小屋を窺ってみると、その中には、白い神馬が繋がれているのだった。耳につい の中で、時々、憂つ、憂つ、と何か蹴るような響きがするので、武蔵は、 ―それが気にかかるらしく、楼門の石段を降りて、ふかい木蔭の 時々、はっとわれ

馬に飼糧をやっていた男が、武蔵の影を振问いて訊ねた。「御年人、なんじゃ」

「何ぞ、社家に御用事でもあるのか」

咎めるような眼つきでいう。

そこで武蔵が、わけを話して、一応怪しい者でないことを弁明すると、 白丁を着ているその男

は、

「あははは。 あははは」

憤っとして武蔵が、何を笑うかとい腹を抱えて笑い止まないのである。

が、何を笑うかというと、その男はなお笑って、

銭を取って、正直に一日中、そんなお人を探して歩いているものか」 「あんたは、そんな事で、よう旅が出来なさるの。なんであの道中の蠅みたいな悪人足が、先に

いうのであった。

武蔵が糺すと、こんどはむしろ気の毒になったように、その男も真顔になっていった。「では、手分けをして、探すといったのは嘘であろうか」

間 間から車座になって、酒をのみながら博奕などしておった。おおかた、その連中であったかもし「お前さんは、騙されたのじゃ。――道理で、きょう十人ばかりの人足が、裏山の雑木林で、昼

られる屢らの実例を幾つも挙げて、 それから、その男は、この諏訪塩尻あたりの往還で、旅客が人足の悪手段にのって路銀をせし

と、空になった飼糧桶をかかえて、彼方へ行ってしまった。わたる世間も同じ事ですよ、これからはよく御用心なさるがよ

武蔵は、茫然としていた。

何か、大きな未熟を自己に発見したような気持で。

剣を持っては、隙がないと自負している自身も、世わたりの俗世間に立ち交じる、無智の宿場

人足にも翻弄される自分でしかなかった――と明らかに世俗的な不鍛錬が分ってくる。

「……仕方がない」

武蔵はつぶやいた。 口惜しいとも思わないが、この未熟は、やがて三軍を動かす兵法のうえにも現れる未熟である。

これからは謙虚になって、もっと俗世間にも習おうと思う。 ----そして彼は又、楼門の方へ足を返して来たが、ふと見ると、自分の去った跡へ来て、 誰か

一人立っている。

四

「オ。旦那」

いった。

「お探しになっているお人の、一方だけ分りましたから、お報らせに参りましたんで」 楼門の前で辺りを見廻していたその人影は、武蔵の姿を見つけると、石段を降りてきて、

武蔵はむしろ意外な顔して――よく見るとそれは、今朝、 半日の駄賃をやって、 八方へ手分け

して走らせた宿場人足の中の一人であった。

(騙されたのだ)たった今、

と分って、それが先ず、欣しかった。(世間の全部が、詐欺師ではない)(世間の全部が、詐欺師ではない)に、同時に彼は、自分から半日の駄賃と酒代を詐取した十幾人もの人間が世間に満ちてはいるが、と、神馬小舎の前で嘲われて来ただけに、武蔵は、意外だったのである。

「一方が分ったとは、城太郎という少年の方か、お通の方が知れたのか」

「その城太郎っていう子を連れている、奈良井の大蔵さんの足どりが分ったのでございます」

「そうか」

武蔵は、それだけでも、ほっと心の一面が明るくなった。

直者の人足は、こう話した。

行ったという事を、中食をした旅籠屋の女中から聞きました――というのである。れないが、奈良井の大蔵さんなら、ついきょうの午頃、諏訪を通って、和田の山越えにかかって 仕事を怠けて、博奕に耽っているが、自分だけは、御事情を聞いてお気の毒だと思い、一人で塩 から洗場まで行って、立場立場の仲間に、尋ねあるいてみると、 今朝、駄賃をせしめた仲間の手輩は、元よりそんな者を探すつもりは毛頭ないので、皆、 、お女中衆の消息はさっぱり知

空

立ち去った。

みると、路銀はみなほかの狡い連中に取られてしまったので、考えてみると、今夜の飯代しか残 「よく知らせてくれた」 武蔵は、この人足の正直と功労に対して、酒代を酬いたいと思ったが、ふところに手を当てて

っていない。

(——でも、何 かやりたい)

と、彼はなお、考えた。

のぐと極めて、 ぐと極めて、一度の飯代にと残しておいたわずかな銭を、革巾着の底を払って、皆、その男にしかし、身につけている物で、値のある物などは何一つもない。彼は遂に、今夜は食べずにしる。

与えてしまった。 「ありがとう御座います」 正直者は、当然な事をして、

過分な礼に会ったので、銭を額に押しいただくと、

ほくほくして

もう一箇の銭もない。

に暮れた気持になった。空腹はもう夕刻から頻りに迫っていたのでもあるし――。武蔵は、無意識の中に、銭の後ろ姿を見送っていた。与えながら、与えた後は、 ちょっと途方

われるにちがいない。それからあの男は、正直に酬われる事を知って、明日も亦、街道へ出て、けれど、あの銭が、あの正直者に持ち帰られれば、自分の空腹をみたす以上、何かよい事に專 ほかの旅人へも正直に働くだろう。 何かよい事に費

「そうだ……この辺で一宿の軒端を借りて朝を待つより、これから和田峠を越えて、先へ行った

という奈良井の大蔵と城太郎に追いつこう」

武蔵は忽ち思い立って、やがて諏訪の宿場を出外れ、久しぶりに暗い道を、独りすたすたと夜旅今夜のうち和田を越えておけば、明日は何処かでその人と城太郎に出会うかも知れない。―― の味を踏みしめて行った。

Ŧī.

――独り夜を歩む。

武蔵は好きだった。

聞 いて真っ暗な夜道を、黙々と歩いていると、すべてをわすれて、楽しいのであった。 人中の賑やかな中にいると、彼のたましいはなぜか独り淋しくなる。淋しい暗夜を独り行く時 これは彼の孤独な生来から来るものかも知れない。自分の踏む跫音をかぞえ、耳に天空の声を

は、その反対に、彼の心は、いつも賑わしい。

他人を見るように、冷静に観ることができた。 なぜならば、そこでは、人中では心の表に現れないさまざまな実相が泛んでくる 世俗のあらゆるものが冷静に考えられると共に、 自分の姿までが、自分から離れて、あかの から であ

「……オ。燈が見える」

しかしー

行けども行けども闇の夜道に、ふと一つの燈を見出すと、 の住む燈! やはり武蔵もほっと思う。

に問うている遑もなく、 夜露にぬれた狭をすこし乾かしてもらおう。

れに返った彼の心は、人恋しさや、なつかしさに、顫えるほどだった。

もうその矛盾を自分

稗粥なとあらば無心して」一焚火をたいているらしい。 あ 腹 b

と、足は自ずとその燈へ向って急いでいる。 もう夜半であろう。

は越えたが、まだ先に和田の大峠と大門峠が、星空に重なっている。 諏訪を出たのは脊だったが、落合川の渓橋を越えてからはほとんど山道ばかりだった。

打ち込んであり、この山中のしかも深夜に、まだ客があるのか、 はぜる音に混じって、粗野な人声が洩れてくる。 近づいてみると、たった一軒の立場茶屋だった。廂の先には「馬繋ぎ」と呼ぶ棒杭が四、五本その二つの山の尾根と流れ合っている広い沢の辺りに、ポチと、燈が見えたのである。 土間のうちからパチパチと火の

けにはゆかない。 くれるであろうが、 ただの百姓家か木樵の小屋でもあれば、暫時の休息も頼めるし、稗粥の無心ぐらいはきいてもと、当惑した顔つきで、武蔵はその軒端に立ち迷った。 旅人を相手に商売している茶店では、一ぱいの茶も、茶代をおかずに立つわ

る煮物のにおいは、彼の飢えをつよく思い山させて、もう到底、去り得ないほどだった。 どう考えても、 金はもう一枚の鐚も持っていないのだ。しかし、 温かそうな煙に混じって洩れ

「そうだ、仔細をいって、彼品でも、一飯の値の代りに取ってもらおう」 そう思いついた抵当の品というのは、背に負っている武者修行包みの中の一品だった。

いた連中には、まったく唐突な姿だったに違いない。 彼がそこへ入るまでには以上のような当惑やら苦心のあげくであったが、中でがやがやいって

「……ごめん」

の客が三人。――老爺は後ろ向きのまま今、漬物か何か刻みながら、その客たちと、馬鹿ばなしそれを肴に、樽や床几へ腰かけて、酒壺を灰へ突っこみながら、茶碗を廻していた野武士ていには、猪の肉と大根がふつふつ煮えていた。土間の真ン中に大きな自在鉤が懸っている。土足のまま囲めるように炉は土へ掘ってあり、鍋びっくりしたように皆、黙ってしまった。そして彼の姿を、いぶかしげに見まもった。 でもしていたらしい。

「なんだ?」

老爺に代って、そういったのは、中でも眼のするどい、五分月代の男だった。

大

くなった。 猪汁のにおいや、この家の暖かい火の気につつまれると、武蔵の飢渇は、 いた。 もう一刻もしのべな

居合せた野武士ていの男が、何かいったが、 それに答えもせず、 ずっと通って、 空いている床

几の隅を占め、

「おやじ、湯漬でもよい、はやく飯を支度してくれい」

亭上は冷飯と猪汁を運んで来て、

「仮どおしで、峠をお越えなされますか」

「ウム、夜旅じゃ」

武蔵はもう箸を取っている。

猪汁の二杯目を取って、

「きょうの昼間、奈良井の大蔵という者が、一名の童を連れて、峠を越えて行かなかったであろ

うかし

「さあ、存じませんなあ。――藤次どのや、他の衆のうちで、そんな旅の者を見かけた者はござ

いませんか」

おやじが、土間炉の鍋越しに訊ねると、首を寄せて、酌ぎ合ったり囁いたりしていた三名は、

廖もなく皆、顔を振った。 「知らねえ」

武蔵は満腹して、一碗の湯をのみほし、体も温まると共に、さて食事の価が気が か りに

うしよう。

乞うつもりでもないので、先に腹を拵えてしまったが、もし亭主がきき入れてくれなかったらど 最初に、事情を告げて、それからにすればよかったが、他に三名の客が飲んでいるし、慈悲を

心を頼むわけではない、此方が持ち合せておる品物を、その値として取っておいてくれまいか」「おやじ、寒に相済まぬ頼みだが、実は、鳥目を一銭も持ち合せておらぬ。――と申しても、無その時には、刀の「笄」でも――と思い極めて、 いうと、案外気やすく、 無

「ええ、よろしゅうござりますとも。 ――したが、そのお品とは、 なんでございますなこ

「観音像じゃ」

「いや、某の作と「え、そんな物を」

た小さい坐像の観世音。一飯の値には足らぬ 背に負っている武者修行包みの結び目を解きかけると、炉の向う側にいる三名の野 武 士 た の作というような品ではない。拙者が旅のつれづれに、梅の古木へ小刀彫りで彫っ かもしれぬが……。まあ、 見てくれい」 ち

物 武蔵は、包みを膝にのせた。それは雁皮の紙縒に渋汁を引いた一種の糸で、袋のように編は、杯を忘れて皆、武蔵の手を凝視していた。 物である。武者修行して歩く者は皆、その袋へ、大事な物を押し籠めて負っているが、武蔵の包 編袋の一方を持って、武蔵はそれと長り切りしこ。こうに、コートでは入っていなかった。なぎるの中には、今彼のいった木彫の観音と、一枚の肌着と貧しい文房具しか這入っていなかった。の中には、今彼のいった木彫の観音と、一枚の肌着と貧しい文房具しか這入っているか、直蔵の気 が ある。 土間へ転がった

「……やっ ?

足元へ眼を落したまま、 これは、茶屋のおやじと又、炉の向う側にいた三名の口 ただ啞然たる顔でしかない。 から山た声だった。 武蔵は自分の

慶長小判や銀や金色のかねが、金の包みである。

そこらまで散らばった。

代義は、らう一変で四人も、そう疑ぐっと、武蔵は思った。(――誰の金?)

武蔵は、もう一度武者修行袋を振ってみた。すると、金の上へ、さらに又、一通の書面がこば 四人も、そう疑ぐっているらしく、息をのんで、上間の金へ、眼を奪われていた。

オナ

ł

怪しみながら披いてみると、 それは石母田外記の置手紙であった。

当座の御費用に被成べく候それもたった一行、

としか書いてない。

外記

にこれは、伊達政宗ばかりでなく、諸国の大名がやっている一つの政策である。 けれど少なからぬ金である。この一行が何をいっているか。武蔵にはわかる気もする。要する

れはという人材は極めてない。 を要望している。関ケ原くずれの浮浪人は、路傍に満ちて、禄を漁りあるいているが、さて、こ 有為の人材を常に召し抱えておくことはむずかしい。しかし時代の風雲は、愈ゝ、有為な人材 あれば忽ち、家の子郎党の厄介者付きでも、何百石、何千石の高

禄で、すぐ売れ口がついてしまう。

恩恵を売っておく。或は黙契をむすんでおく。 を、今は各藩で血眼に探しているのだ。そして、これはと思う人物には、何らかの方法で、必ずいざ戦*****という日でも、集まる雑兵はいくらでも集まるが、求めても容易く来ないような人物

知である。九度山に引籠っている真田幸村へ、年ごとに、大坂城からどれほどな金銀が仕送りさその、大物どころでは、大坂城の秀頼が、後藤又兵衛に捨て扶持をやっていることは天下の周

れているかぐらいなことは -関東の家康でも調べ上げている所であろう。

は又、零細な幾千人の生活費になってゆくのである。そこには、戦のある日まで、遊んで暮して閑居している佗び牢人に、そんな生活費のいるはずはない。しかし、幸村の手から、その金銀 る沢山な人間が町に隠れていることはいうまでもない。

うごかした事は当然すぎる。 乗与下り松のうわさから、 ----既にこの金が、明らかに、外記の底意を証拠だてていると見て 後を追いかけて来た伊達家の臣下が、すぐ武蔵の人物に、食指を

間違いはない。

費えば恩を買う。――困った金である。

なければ?

(そうだ、金を見たから、惑うのではな 武蔵はそう思って、足もとに落ちている金を拾い集め、 いか。 なければ、 元通りに武者修行袋へつつみこんで、 ないでもすむもの

自分の手すさびに彫った木彫の観世音をそこへ出すと、茶店の老爺は、今度は甚だしく不平顔「――では亭主。これを飯の代に、取っておいてくれい」

「いけませんよ口、那、これやあ、 お断りしますべ」

と、手を出さない。

武蔵がなぜ?というと、

が……見ればないどころか、持て余している程、お金を持って御座らっしゃるではねえか。どう 最前から、酒の酔をさまして、固唾をのんでいた三名の野武士は、おやじの抗議を、尤もだとか、そんなに見せびらかさねえで、お金で払っておくんなさいまし」 「なぜって、旦那は今、持合せが一文もねえと仰っしゃるから、観音様でもいいといったのじゃ

いうように、後ろでうなずいていた。

自分の金ではない――というような弁解をしてみるのも、この場合は、 愚の至りである。

「そうか……では仕方がない」

「はて、剰銭がないが。……旦那様、もっと細かいお鳥目で下さいませ」 武蔵は、やむなく一箇の銀片を出して、おやじの手に渡した。

武蔵は又、金を調べてみた。しかし包みは慶長小判と、それがいちばん小さくて安い銀片であ

「剰銭はいらぬ、茶代に取っておくがいい」った。 **「それは、どうも」**

這っているばかり。

おやじは急に打って変る。

もう手をつけた金なので、武蔵はそれを腹巻へ巻いた。そして、 茶店のおやじから嫌われた木

彫の観音像を、元のように、武者修行袋に入れて背中へ背負う。

「まあ、あたって行かっしゃれ」

と、おやじは薪をくべ足したが、武蔵はそれを機に、戸外へ出た。

夜はまだ深い。けれど腹ごしらえもまずできた。

原は、 は、石楠花やりんどうや薄雪草も数あるらしいが、夜はただ渺として、真綿のような露が地を夜明けまでに、この和田峠から大門峠まで踏破してしまおうと思う。昼ならば、この辺りの高

花といえば、空こそ、星のお花畑とも見える。

「おおオいっ」

立場茶屋を離れておよそ二十町も米た頃である。

今の旦那あ、お忘れ物をなされたぞよ

さっき茶店に居合せた野武士ていの中の一人であった。

側へ駈けて来て、

「早いお脚だの、あんたが出て行ってから、 しばらくしてから気づいたの じゃ。 さの お 金

掌に、一粒の銀片をのせて、武蔵に見せ、それを返そうと追いかけて来たのだという。、あんたの物じゃろうが」 やそれは自分の物ではあるまいと武蔵はいったが、野武士ていの男は、かぶりを振って、 確

にあなたが金包みを落した時、この一片が土間の隅へ転がったものに違いない、 と押し戻して

来る。

数えて持っている金ではないので、そういわれてみると、そうかも知れないと武蔵は思うほか

なかった。

で、礼をいって、それを袂に納めたが、武蔵は、この男の正直な行為が、 なぜか少しも自分の

感激に触れないことに気づいた。

「失礼じゃが、あんたは、武道を誰に習びなされた」

用がすんでからも、男は要らぬ話をしかけて、側へついて歩く。それもおかしい。

「我流ですよ」

と、武蔵は、投げっ放しな語調でいう。

「わしも、今は山に籠ってこんな業をしておるが、 以前は侍でな」

「ははあ」

いが、この山刀一腰に、ぼろ鎧を纏っても、名ある大名の陣場を借りて、日頃の腕を振うつもりり、この山で、薬草採りなどして生計をたてているが、時到れば、鉢の木の佐野源左衛門じゃな「さっき居合せた者も皆そうじゃ。蛟龍も時を得ざれ ば 空 し く淵に潜むでな、みな木樵をした

じゃが」

「大坂方ですか、関東方でございますか」

「どっちでもいい。まずやはり旗色を見て加わらぬと、 一生を棒にふるからなあ」

「はははは、大きに」

「そういえば、後のお二人は、どうなされましたか」

武蔵は、まるで相手にしない。 なるべく足も大股に努めてみたが、男もそれにつれて大股にな

るので何の効いもない。

これは、心ある者は最も忌むところの、抜討ちを仕かける時の姿勢である。 そしてなお、気になる事には、自分の左側へ左側へと、男は好んで寄り添ってくるのだった。

九

だが武蔵は兇暴な道連れの狙っているその左側を、わざと空けて、甘んじて相手に窺わせ

ておいた。

-----この和田峠の先には、大門峠がある。夜明けまでに越えるというても、道馴れない者にはど うして大変だ。これから先は、道も嶮しくなるばかりだし」 「どうじゃな修行者。もし嫌でなかったら、おれたちの住居へ来て、今夜は泊ってゆかない か。

「ありがとう存じます。おことばに甘えて、泊めて戴きましょうかな」

「元より、体さえ横たえれば、それでいいのでございます。して、お住居は」「そうするがいい、そうするがいい。――だが何も、もてなしはないぜ」

「えらい山中にお住いですな」

「この谷道から、左の方へ五、六町ほど登った所さ」

りして、あの者たちと三人して暮しているのじゃ」 「さっきもいった通り、時節の来るまで、世から隠れて、薬草採りをしたり、猟師の業をまねた

るとすぐ谿川の河原だ、 おれと極まっているが、 まだ立場で飲んでいるじゃろう。 あぶないから気をつけろよ」 今夜は、面倒なので置いて来た。 いつも彼家で飲むと酔 ……おッと、 いつぶれて、 修行者、そこの崖を降り 小屋まで担いで行く役が

「彼方へ、渡るのですか」

「ム……その流れの狭い所の丸木橋を渡って、谿川づたいに、 左へ登ってゆく……」

武蔵は、振向きもしない。

男は低い崖の途中に立ち止まっている様子だった。

٢,

そして丸木橋を渡りかけていた。武蔵は、振向きをしない。

恣

姿を、激流の中へ振り落そうとして、持ち上げたが、 崖の中途からぽんと跳んだ男は いきなり武蔵の乗っている丸木橋の端に手をかけて、 彼の

「何をする?」

0

垄

と、河の中の声にぎょっとして首を上げた。

武蔵の足は、橋を離れて、飛沫の中の岩の上に、鶺鴒が止まったように立っていた。

「――あッ」

怯者を斬り撲っ 拠り 中 り出 の鶺鴒はぱっと跳んで返って、いわゆる抜く手も見せない間髪に、狡智に長けたその卑した丸木橋の端が、白い飛沫を途端に散らした。その水玉の傘が地まで落ちないうち た。

に、 彼の剣は、 彼の剣は、もう次の何ものかを待っている。彼の髪は、鷲の逆毛のように立って、満山皆敵―こんな場合、武蔵は、斬った死骸には眼もくれなかった。死骸がまだ蹌めいて いる うち

と観るもののようであった。

果たして、ぐわあん! いうまでもなく、猟銃の弾である。弾は正しく、武蔵の在った位置を、ぴゅんと通りぬけ、果たして、ぐわあん! と谷間の撃けるような音が渓流の向う側からとどろいた。

後

ろの崖土の中へ潜った。

弾が土の中へ入った後から武蔵も同じところへ仆れた。そして対岸の沢を見ていると、 螢の火

みたいな赤いものがチラチラする。

――二つの人影が、そろそろと河べりまで這い出して来る。

いったが、先へ廻って、待ち伏せの手ぐすね引いていたのである。 一足先に冥土へ立った卑怯者は、後の二人の仲間は、立場の居酒屋でのみつぶれていると嘘を

それも、武蔵の考えていた通りであった。

猟師だとか、薬草採りだとかいっていたのは勿論うそで、この山に巣喰う賊であることは疑ぐ

ってみるまでもない。

けれど、さっき、

、時節が来るまで)

と、途々いった言葉は、ほんとであろう。

合戦となると、これが皆、一かどの錆槍とボロ鎧をかついで、陣借りして、真人間に生き甦るのとしての世渡りに、諸国には今、山賊と野盗と市盗が急激にふえつつある。そして、いざ天下の どんな盗賊でも、子孫まで盗賊でやって行こうと考えている者は一人もあるまい。 乱世の方便

している雅懐はないのである。だ。――ただ惜しいかなこの手輩は、雪の日、客に梅を焚いて、時節を待ちながらも時節を度外だ。――ただ惜しいかなこの手輩は、雪の日、客に梅を焚いて、時節を待ちながらも時節を度外

空 の 巻

な

お疑って、

山焚た

もう一人は、身を屈めて、こっちを見ている。対岸の崖の下へ、武蔵の影が仆れはしたが、火繩を口に咥え、一人は二度目の弾込めをしているらしい。

鉄砲を持ち直したのが、と囁いているのだった。「……大丈夫か」

「手応えがあった」と、うなずいて、「確かだ」

という。

それで安心して、二人は丸木橋を頼って、武蔵の方へ渡って来ようとした。

「おうっ」

ŧ 太刀しろ」

なったものか、

を呼んだ。

引金に懸けた指は、

もちろん、

正確を失っていた。どうんと、

弾は空へ走って、ただ大きな谺

ーーあッ」

鉄砲を持った方の影が、

丸木橋の中ほどまでかかって来ると、

武蔵は起き上がった。

「やいやい、逃げる奴があるものか、相手はひとり、この藤次だけでも片づくが、引っ返して助

ばらばらっと、二人は引っ返して、谿川添いに逃げ出した。武蔵が追いかけてゆくと、業腹に

呼び返されて子分か分らぬが、もう一名の賊は、それに励まされて、 自分で藤次と名乗っているし、物腰から見ても、これが山寨に住む賊の頭目であろう。 鉄砲を持たない方がけなげにもこういって立ち止まった。

に多少筋がある。 武蔵はすぐ感じた。これはそう根からの野武士ではない。 と答え、火繩を抛りすてたと思うと、鉄砲を逆手にして、 、これも武蔵へかかって来た。 わけても、 山刀を揮って来た男の腕

った方の男は、完全に肩から袈裟にふかく割りこまれて、渓流の縁から、だらんと半身落ちか 程もなく、 だが、彼のそばへ近づくと、賊の二人とも、一撃に刎ね飛ばされたように見えた。鉄砲を 藤次と名乗った賊の頭目は、 小手の傷を抑えながら、逃足早く、沢から上へ駆け

苍 0

空

上ってゆく。

一叢の山毛欅につつまれた家があった。その家も亦、山毛欅の丸太で組み建てたような巨きな山つがらい。ここは和田と大門峠の境で、山毛欅が多いままぶな谷と呼ばれている。沢を登りつめた所に、 ざざざ、と土の落ちてくる後を辿って、武蔵も何処までも、追って行った。

小屋に過ぎない。

ボッと、そこに燈が見えた――

家の内にも明りが映しているが武蔵の限に見えたのは、その家の軒先に、 誰か、 紙燭を持って

立ってでもいるらしい燈であった。

すると、狭で燈をかばいながら、戸外に立っていた影が、 と呶鳴った。

「どうしたのさ」

と、いった。

女の声であった。

「まあ、ひどい血になって――'斬られたのかえ。今、谷の方で鉄砲の音がしたから、もしやと

思っていたら? ……」

「ば、ばかっ。はやくその燈を消してしまえ。家の中の燈も」 賊の頭目は、うしろから迫る跫音に、振向きながら、

かたく閉まっていた。 やがて武蔵が、その前へ来て立った時は、家の中の明りも洩れず、手をかけてみても、戸は

と、息を喘って、

又呶鳴った。

土間の中へ転げ込むと、

女の影も、

燈をふき消して、

、あわてて姿を隠して しまっ

た。

武 蔵は怒っていた。

のような鼠賊と思いながら、社会的に免しておけない気持がする。いわゆる公憤なのである。だが、この怒りは、卑劣だとか偽かれたとか、対人的に怒っているのではない。元より虫けら

「開けろっ」 いってみた。

当然、開ける筈は ない。

人間のすべき業ではない。手をかけて叩いたり、がたがた試みたりするような不用意は、武蔵でなくとも、多少心得のある手をかけて叩いたり、がたがた試みたりするような不用意は、武蔵でなくとも、多少心得のある 足で蹴っても破れそうな雨戸だが、万一を惧れて、武蔵は戸から四尺ほど離れている。それ

開けないか」

なお、

武蔵は抱え易い程度の岩を両手に持った。いきなりそれを戸に向って拋りつけたのである。戸の中は、なお、しんとしている。 .の継ぎ目を狙ったので、二枚の戸が内側へ仆れた。その下から山刀が素っ飛び、続いて、

234

人の男が、這い起きて、家の奥へ逃げ転んでゆく。

あっ、免せっ」武蔵が跳びかかって、その襟がみを摑むと、

ある。最初から武蔵も感じていたとおり、賊の頭目だけに、この男の小手技には、かなり鋭いとそのくせ、平蜘蛛になって、謝るのではなく、間断なく隙を狙って、武蔵へ肉闘してくるのでと、悪人が悪事に失策ると、決まって吐ざく脆い声をあげた。

ころがある。

その小手技を、 ぴしぴし封じて、武蔵が許す気色もなく、捻じ伏せかけると、

「く、くそっ」

猛然、この男は、 生来の暴勇をふるい起し、短刀を抜いて、突っかけて来た。

引っぱずして、

かったのであろう。 かったのであろう。朽ち竹の折れる響きと共に、炉の口から、火山のような白い灰 が 噴 き 騰っと体を抄い込み、どんと、次の部屋まで投げつけると、その脚か手が、炉の上の自在鉤へぶつ「この鼠賊」

どを、所きらわず投げつけてくる。 武蔵を近づけまいとして、その濛々と煙る中から、 釜のふただの、薪だの、火箸だの、 土器な

強く打ちつけたとみえて、柱の下に長く伸びているのである。 やや灰が落着いたところで、よく見ると、それは賊の頭目ではない。彼はすでに、どこか

焚 史

き

らしい女であった。 畜生、畜生」 と、必死になって、手当り次第に、 それなのになお、

武蔵は、すぐその女を組み敷いた。 -女は組み敷かれながらもまだ、髪の 笄 を逆手に抜い

物を取っては、武蔵へ向って投げつけて来るのは、

賊の妻

「畜生」

と、突きかけていたが、その手を、武蔵の足に踏まれてしまうと、

と、歯がみをしながら、もう気を失っている賊の良人を、無念そうに、叱咤していた。――お前さん、どうしたのさ! - 意気地のない、こんな若僧に」

「……あっ?」

短刀を拾って、再び、武蔵へ斬りつけて来たが、 武蔵は、その時、思わず身を離した。女は男以上に勇敢だった。刎ね起きざま、良人の捨てた

「……おっ、おばさん?」

武蔵が意外な言葉を与えたので、賊の妻も、

ーえっ?」

「あっ、おまえは? ……。オオ武蔵さんじゃないか」息をひいて、喘ぎながら相手の顔をしげしげと――

今もまだ、 幼名の武蔵を、そのまま自分へ呼ぶ者は、本位田又八の母のお杉ばばを措いて、誰

があろう?

怪しみながら、武蔵は、そう馴々しく自分を呼んだ賊の妻を見まもった。

「まあ、武さん、いいお武家におなりだねえ」

囮に、京都で遊び茶屋をしていた、あの後家のお甲であった。 らもさも懐かしそうな女のことばだった。それは、伊吹山のよもぎ造り一 後には娘の朱実を

「どうして、こんな所にいるのですか」

「……それを訊かれると恥ずかしいが」

「では、そこに仆れているのは……あなたの良人か」

「おまえも知っておいでだろう。元、吉岡の道場にいた、祇園藤次の成れの果てですよ」

「あっ、では吉岡門の祇園藤次が……」

啞然としたまま、武蔵は、後のことばも出なかった。

家の傾く前に、藤次は、道場の普請にと集めた金を持って、 お甲と駈落ちしてしまい、 侍に

あるまじき卑劣者と ――当時京都で悪い噂を立てられたものだった。 しくならずにいられなかった。 武蔵も、小耳にはさんでいる。その成れの果てがこの姿か――と、他人の身の末とはいえ、淋

「おばさん、早く介抱してやるがよい。あなたの亭主と知ったなら、そんな目に遭わせるのでは

い様子。

なかったが」 お甲は藤次のそばへ寄って、水を与え、

「穴でもあったら這入りたい気がする」

傷口を縛り、そしてまだ半ばうつつな顔つきへ、武蔵

との縁故を話した。

「えっ?」

「じゃあ其許が……あの宮本武蔵どのか。——ああ、と、藤次は、活を入れられたように白眼を上げて、

――ああ、面目ない」

さすがに恥は知っている。藤次は頭を抱え、それへ詫び入ったまま、 しばらくは上げる面もな

武門を落ちて、山沢の賊となって生きてゆくのも、大所から観てやれば、流々転相の世の中の

炉ぶちを拭いて、薪を新たにくべ足した。 武蔵はもう憎む気もちを忘れていた。夫婦の者は、時ならぬ賓客を迎えたように、塵を掃き、

「何もございませぬが」

と、酒など燗ける様子に、

「もう、山の立場で、腹はできておる。かもうてくれるな」

「――でも、久しぶりに、山の夜語り、わたしの心づくしを喰べてくださいませ」 お甲は、炉の上に鍋などかけ、酒壺を取ってしきりにすすめる。

空

「伊吹山のふもとを思い出しますなあ」 外は、ごうごうと、峰の夜あらしであった。 閉めきっても、炉の焰は、 黒い天井へめらめらと

背を伸ばす。

「もう、いうて下さいますな。 ・・・・・それよりも、 朱実はその後、どうしたでしょうか。 何か 噂を

聞きませんか」

叡山から大津へ出る途中の山茶屋で、 数日、わずらっていたそうですが、 連れの又八の持物を

奪って、逃げてしまったとその折ちょっと耳にしたが……」

「では、あの子も」

お甲は自分の身にひき較べて、さすがに、暗い面を伏せた。

四

らないといい、他日、世に出た時は、必ず元の祇園藤次になってお詫びするから、どうか今夜の お甲だけではない。 祇園藤次もふかく恥じ入った様子で、今夜の事は、まったく出来心に他な

所は、・ 水に流して見のがしてくれという。

山賊まがいの藤次が、以前の祇園藤次に返ったところで、大した変りばえもないが、それだけ

道中の旅人は明るくなれよう。

強いられた酒に少し酔って、武蔵がこう意見すると、お甲も、 あなたも、もう危ない世渡りは、よした方がいいで

「なあに、あたしだって好きこのんで、こんな事をしているわけじゃないけれど、 京都落ちを極 虫

ŧ

銀までみんなはたいてしまい、やむなく、元のもぐさ採りから思いついて、ここで薬草を採ってめ込んで、御新開の江戸で一稼ぎと来る途中、この人が、諏訪で博奕に手を出して、持物から路 町へ売っては喰べるような始末になってしまったのさ。……もう今夜に懲りたから悪い出来心は

の送りの柩を目がけても跳びついてくる。が、これを山に放つと、暗夜にも爛々と光る眼の持主となって、行路病者の生きた肉へも、野辺が、これを山に放つと、暗夜にも爛々と光る眼の持主となって、行路病者の生きた肉へも、野辺もう幾歳だろうか。この女に年齢はないようである。猫は家に飼うと人間の膝に媚 態 を 作 る相変らず、この女は、酔うと以前の婀娜な調子が出る。

お甲はそれに近い。

「……ねえ、お前さん」

商売の思案もあろうというものだし……」 をして、もう少し人間らしい暮しをしようじゃありませんか。あの娘でも捕まえれば、又何とか 「今、武蔵さんから聞けば、朱実も江戸へ行ったらしい。わたし達も、何とか、人中へ出る算段と、藤次を顧みて、

「うむ、うむ」

と藤次は、膝を抱えて、生返辞を与えていた。

悔を、もう抱いているのではあるまいか。 この男も亦、この女と同棲してみて、先にこの女から捨てられた本位田又八と、同じような後

武蔵は、藤次の顔が気の毒に見えた。そして又八の身を憐れみ――やがては自分も一度この女

の招く魔の淵に誘われたことなども思い出されて、ふと肌がそそけ立つ思いがした。

「――雨ですか、 あの音は」

武蔵が、黒い屋根を仰ぐと、お甲はほんのり酔ったながし眼で、

うものは、夜になると、何か降らない晩はない。 たり、山土がぶつけて来たり、霧が降ったり、滝の水がしぶいて来たり」 「いいえ、風がつよいから、木の葉や、木の小枝が、折れては降って来るんですよ、山の中とい ――月は出ても、星は見えても、木の葉が降っ

「おいし

藤次は、顔を上げて、

巻

「――もうじきに夜が白んで来る頃だ。おつかれだろうから、あちらへ寝道具をのべて、おやす

みになるようにしたらどうだ」 「そうしましょうかね。武蔵さん、暗いから気をつけて来てください」

の

「では、朝までお借りしようか」

空

武蔵は起って、お甲の後から暗い縁を尾いて行った。

Ŧi,

が、おそらく床下は、 彼の寝た板小屋は、 すぐ千仭の谷底へ通じているのではあるまいか。 谷間の崖に建てた丸太の上に支えられていた。夜なのでよくわ から ない

滝水が吹きつけてくる。 霧が降ってくる。 虫 焚 ŧ

「……寝たか」 炉の火を見つめて、考えこんでいた藤次が、するどい眼を振向けて、 と、問う。 ――お甲は、白い足を、簀の子にしのばせて、そっと、前の炉部屋へもどって米た。ぐわうという度に、寝小屋は、船のようにうごいた。

「呼んで来い」 「どうする、え?」 「やるかえ」 「寝たらしいよ」 と藤次の耳へいう。 お甲は、側へ膝を立てて、

もなる」 「あたりめえだ。慾ばかりじゃねえ、彼奴を殺ってしまえば、吉岡一門の仇を取ったという事に

「じゃあ、行って来るよ」

どこへ行くのか。 お甲は、裾を端折って、戸外へ出て行った。

る髪の毛とは、 髪の毛とは、魔性の猫族でなくて何であろう。深境である。これである。真っ暗な風の中を、驀しぐらに駈けてゆく白い足と、うしろに流れてのである。真っ暗な風の中を、驀しぐらに駈けてゆく白い足と、うしろに流れ 大山の皺に棲むものは、鳥獣ばかりとは限らない。彼女が駈け歩いた峰や沢や山畑の遠方此方

しかもその行動には、

ら、忽ちにして、簇り集まって来た人間は、二十名以上もある。

訓練があった。地を掃いて米る木の葉よりも静かに、

藤次の小屋の前に

集まると、

巻

「金は寺ってるのかっ」。「武士か」

などと密々囁き交わし、指真似や、限くばせで、各~、いつも通りの部署につくべく分れて行金は持ってるのか」

から絶壁を下りて、確か、谷底へ廻ったらしい。 猪突き槍や、鉄砲や、大刀を持って、その一部は、寝小屋の外を窺い、又、半分は小屋のわき

なお、その中から、べつに二、三人の賊は、崖の中途を這って、ちょうど武蔵の眠っている小

| 準備は出来につである| |屋の下へ辿りついた。

空

安眠剤であって、元より彼等の職業は、薬刻みや、薬草を乾すことではない。 んな薬草の乾草を積み、薬研や製薬の道具などわざと置いてあるが、それはここへ入れる人間の ったい疲れが出て来たが、山で生れ、山で育った武蔵には、この谷間の懸出し小屋に、 谷間へ懸出してあるこの小屋は、つまり彼等の罠なのである。その小屋は、莚を敷き、たくさ準備は出来たのである。 けないものがあった。 武蔵も、そこへ横になると、、快い薬草のにおいに、眠りを誘われて、手足の先にまで、

囁くと、お甲は眼に手助わせて、

「ははあ」

枕元には、薬研台の上に、錆びた鉄の灯皿がおいてある、その微かな燈心の揺らぎで見返して鬱蒼と雑木の枝をかぶって、しかも滝しぶきの来るような所に、乾小屋は持っていない。自分の生れた美作の山々にも、薬草採りの小屋はあるが、薬草はすべて湿気を忌う。こんな、 に見える。そして継ぎ目と、木の肌の新しい所とが一、二寸ずつ喰い違っている。 も――又合点のゆかないふしがある。 それは、 四隅の材木と材木との継ぎ目である。 鎹付けになっているが、その鎹の穴がやたらタヤがスプ

彼の寝顔は、苦笑をうかべた。しかしまだ彼は木枕に顔をつけていた。 としとと霧の音につつまれるように、ふしぎな気配をうつつに感じながら。

六

「……武蔵さん。……寝たんですか。 「ここへ、お水を置きますからね」 障子の外へ、そっと摺り寄っていうお甲の小声であった。 寝息を聞きすますと、すうと其処をあけて、お甲は、武蔵の枕元まで忍び寄り、 母屋を闇にして、待っていた祇園藤次が、 わざと、寝顔へ断りながら、盆をおいて、 もうお寝みかえ」 又静かに、障子の外へもどって行った。

「ぐっすりだよ……」

空

巻

る火繩をチラチラ振って見せた。 藤次は、しめたというように、縁先から裏へ飛び出して、谷間の闇を覗きこみ、手に持ってい

それが合図であった。

うーんと凄い音をたてながら、棟も板も、乱離となって、千仭の底へ吞まれてしまった。 武蔵の眠っている一棟の板小屋は、それと共に、崖の中途で、支えている床柱を外され、

如く思い思いに、谷底へ辷り降りて行った。鳴りをひそめていた賊は、もう仕止めた猟人が姿を見せるように、公然と、声をあげて、鳴りをひそめていた賊は、もう仕止めた猟人が姿を見せるように、公然と、声をあげて、

骸から安々と、目的の物を奪り上げていた。 手に余る人間と見れば、彼等はいつも、こうして寝小屋もろとも、旅人を谷へ落して、その死

等は、骨に跳びつく犬のように、それへ集って、武蔵の死骸を求め始めた。 谷底にも一群の賊が、先へ廻って待っていた。寝小屋の板や柱がばらばらに墜ちて来ると、彼そして簡単な寝小屋は又、次の日のうちに、絶壁へ懸出して組むのであった。

「どうした?」

上の人数も降りて来て、

「あったか」

と、共に探しまわる。

「見えねえぞ」

き

何

がし

維

かいう。

死骸がよ」

゙ばかあいえ」

しかし又、やがて同じあぐねた声が放たれた。

誰よりも血眼に藤次が呶鳴りつけた。いねえや、はてな?」

「そんな筈はねえ。 途中の岩にぶつかって、刎ね飛ばされているのかも知れねえ。

もっと、

ちも探してみろ」 その言葉の終らないうちに、 彼の見廻している谷間の岩も水も雪崩の草も、 いちめんに夕焼け

ーあっ?」

色にぱっと明るく染まった。

「――おやっ?」

居は、棟、障子、窓、四方から真っ赤な焰を噴き出しているではない **賊は皆、顎を空へ振り上げた。およそ七十尺もある絶壁である。その上に乗っていた藤次の住**

「あれえっ。 あれえっ。来ておくれよっ」

ただ独りで、気も狂わんばかりな悲鳴をあげているのは、

お甲にちがいない。

大変だ、行ってみろ」

道を攀じ、藤づるを攀じ、 賊は又、 上へ這い上った。断崖の上の一軒屋、 焰と山風にはよい弄

り物だった。 お甲はと見れば、火の粉をかぶりながら、近くの樹の根に後ろ手を縛りつけられて

いつの間に、どうして抜けたろうか。逃げたという武蔵が、賊には何だか信じられなかった。

「追っかけろ、これだけいれば

藤次はいう勇気もなかったが、武蔵を知らぬ他の賊はそのままではいる筈もない。旋風になった。

てすぐ後を追った。

卷 に熟睡でもしているのか、そうこうする間に、美しい山の火事の中に、和田峠も大門峠も、 と朝の姿を見せていた。 けれども武蔵の影はもう見当らなかった。道のない横道へ外れたのか、樹の上で今度はほ 白々 んと

交戦地であった軍用路を、そのまま後の旅人が往還しているだけで、従って、裏街道も表街道も 甲 そ の 告-州街道には、まだ街道らしい並木も整っていないし、駅伝の制度も、 ―というほど遠くもない、永禄、元亀、天正へかけての武田、 上杉、北条、その他の 頗る不完備であった。

ありはしない。

ところが、笹子、初狩、岩殿あたりの草深いそんな旅籠屋でも、この頃の客の混みあう様は、藤原朝時代の原始的な慣わしを、今でもやっているという風。とつ拵えさせても、餅を笹の葉で巻いた物とか、飯をいきなり柏の乾葉でくるんで出すとか――上方から来た者が、もっとも弱るのは、旅舎の不便で、一例をいえば、朝立ちの際に、弁当ひ

凡事とも思えない。そしてその多くが上りよりも、下りの客だった。

きょうも通る――」

これは観物と、道傍で迎えていた。と、小仏の上で休んでいた旅人たちは、今、 自分たちの後ろから登って来る一団の旅の群を、

若い女郎衆だけでも、およそ三十名ぐらいはいよう。 やがて、がやがやとそれへ来た人数を見ると、成程、これは大変。 子守ッ子みたいな禿ばかりでも五人、中

年増や婆さんや、男衆など合せると、総勢四十人からの大家族である。

その他、荷駄には、 つづらや、長持や、一方ならぬ荷物を積み、この大家族の主人と見える四

「草鞋まめができたら、草履に代えて、緒を縛ってあるけ。十がらみの男は、 なに、 もう歩けないと、何をいう。

子どもを見なさい、子どもを」

と、坐りぐせのついている女郎衆を歩かせるのに、口を飾っぱくしている。

(今日も通る)

てゆく先は、新開発の江戸表である。 と路傍で声のするように、こうした上方女郎衆の輸送は、三日にあげず通った。 もちろん流れ

米でいっぱいで、こういう女郎衆の行列などは不便をしのんで、中山道や甲州筋を選ぶほかなか て行った。東海道や船路のほうは、為にほとんど、官用の輸送や、 新将軍の秀忠が江戸城に坐ってから、いわゆる御新開の膝下へは、急激に上方の文化が移動 建築用材の運搬や大小名の往

甚内という者だった。 て、自分ばかりでなく、他の同業者にもすすめて、続々と、女を西から東へ移動させている庄司なって、目端や才覚も利くところから、伏見城の徳川家へ手づるを求め、江戸移住の官許を取っ った。 きょうこれまで米た女郎衆の親方は伏見の人で、どういう了見か侍のくせに、遊女屋の主人と

「すこし早目だが、ついでに、弁当をつかってしま小仏の上まで来ると、甚内は程よい所を見つけ、「さあ、休め休め」

をくばっておくれ」 ついでに、弁当をつかってしまおう。 お直婆さん、女郎衆や禿たちに、

ちは、思い思いにわかれてそれへ貧りつく。 荷駄の上から、 一行李もある弁当が下ろされて、乾葉巻の飯が、一つ一つ渡されると、女郎た

もなく、ぽそぽそと、舌つづみ打っている姿には、行末は誰が肌ふれん紅の花 どの女の皮膚も黄いろく、髪は、笠や手拭をかぶっても、みな白っぽく埃になっている。 -などという色

「アア、 親が聞いたら、涙をこぼすであろうような声を出して、しんから叫ぶ。 お美味かった」

すると中の妓の二、三が、折ふし通りかけた旅すがたの若衆を見つけて、

「あら、いい恰好だ」

「ちょっとしてる」

などと囁き合っていると、べつな妓は又、

「あの人なら、わたしゃあよく知っているよ。吉岡道場の門人衆と、たびたび来たことがあるお

客だもの」 といった。

上方から関東といえば、関東の者が、みちのくを思うより遠かった。

(これからどんな土地で店を張るのやら)

と、心細い気持に囚われている彼女たちは、稀ふ、伏見で馴染の客が通ると聞いて、

「どの人さ」

と、忽ち姦しい眼をそばだてた。「どの人さ?」

「大きな刀を背中へ懸けて、威張って歩いて来る若衆だよ」

「アアあの前髪の武者修行」

「そうそう」

「呼んでごらん、名前はなんていうの」

思 いがけぬ小仏峠の上などで、自分がこんなに 大勢の 女郎衆に注目されているとは知らず、

佐々木小次郎は、手を振って、荷駄や人足の間を通り抜けた。

すると、黄いろい声で、

「佐々木さん、佐々木さん――」

それでもまだ、まさか自分とは思わず、 振向きもしないで行くと、

「前髪さん――」

荷駄の脚元に坐りこんで、弁当をつかっていた庄司甚内は、妓たちを叱りつけて、と、来たので、これは怪しからぬ事だと、眉をしかめて振り向いた。

「何じゃ、御無礼な」

といって、小次郎の姿を仰ぐと、これはいつか、 吉岡の門人達が大勢して、伏見の店へあがっ

た時、挨拶に出た覚えがあるので、

「これはこれは」

空

と、草をはたいて立上がり、

「やあ、角屋の親方どのか。わしは江戸へ下向するが、問いたい「佐々木様ではございませんか。どちらへお越しなさいますか」 わしは江戸へ下向するが、問いたいのは、 おぬしたちの行く先、大

層な引っ越しじゃないか」

「あまり澱んでいる水には、腐えた物ばかり湧いて、水草は咲きません」「なぜあんな古い廓を捨て、まだどうなるかも知れない江戸表へなど移るのだ」「てまえどもは、伏見を引払って、江戸の方へ移りますので」

御新開の江戸へ行ったところで、城普請だの与鉄砲の仕事はあろうが、まだ遊女屋などの、悠

長な商売は成り立つまい」

「ところが、そうじゃございません。 灘波の葦を拓り開いたのも、 太閤様より妓の方が先でござ

いますからね」

「何よりも、住む家があるまいが」

から下さいました。 から下さいました。――でもう他の同業者が、先へ行って地埋めをしたり、普請をいたしており「今、どしどし家を建てている町中の、葭原という沼地を、何十町歩と、私たちのために、お上へ

ますから、 路頭に迷うような心配はございません」

なに、徳川家では、おぬしのような者にまで、何十町歩という土地をくれているのか。

「たれが、葭の生えている沼地など、金を出して買うものがございましょう。れは無料か」 それば か りで な

く、普請の石材木なども、多分にお下げくださるので」

「ははあ……なる程、それでは上方から、世帯を担いで、皆下るはずだ」

「あなた様も、何か、御仕官の口でもあって」

心地ともなることだから、見学をしておかねばならない。 『いいや、わしは何も仕官は望んでいないが、新将軍の膝下となり、新しく天下へ政道を布く中 もっとも、将軍家の指南役になら、

ってもよいと思っているが……」

黙ってしまった。

世間の裏、景気のうごき、 人情の種々相にくわしい彼の眼から見て、剣術は上手かどうか知ら

252

今の口吻では、語るに足らないと思ったのである。

「さあ、ぼつぼつ川かけようかな」

染さんか。ああそこに、二人ともいるね。おかしいねえ、誰だろう?」 「おや、女郎衆の頭数が一人足らないじゃないか。 「no)、ケ事衆の頂敗が一人足らないじゃないか。いないのは一体誰だえ。——几帳さんか、墨小次郎を他にして、一同へこう促すと、女郎衆の人数を読んでいたお直という奉公人が、 「

巻

の

で歩き出したが、後に残った角屋の大家内は、一人の落伍者のために皆其処を立ちかねて、 「つい、その辺まで、私たちの中に、姿が見えていたのに」 まさか、江戸へ移住して行く女郎衆の同勢と、道連れになる気もないので、 小次郎は先へ一人

「どうしたのであろ?」

垐

「ひょっと、逃げたのではあるまいか」

その噪ぎに、小次郎へわかれを述べて、此方へ顔を向けた親方の甚内は、などと頻りにうわさしては、二、三の者は、わざわざ探しに道を戻って行

「おいおいお直、逃げたとは、誰がいったい逃げたのだ」

「朱実という女でございますよ。……ほれ、親方様が、木曾路自分の責任でも問われたように、お直と呼ばれた年よりは、 親方様が、木曾路で見かけて、 女郎にならぬかとい

って、お抱えになった、旅の娘っ子で」 「見えないのか――その朱実が」

戸まで連れて行ってくれろというし、容貌も踏める玉だから抱えようと約束したまでの事。ここ「あの娘なら、何も証文を取って、身代金を貸したわけじゃなし、女郎になってもよいから、江「逃げたのじゃないかと、今、若い者が麓まで見つけに行きましたが」 までの旅籠代が少しばかり損は損だが、まあ仕方がない。そんな者は拋っておいて、出かけよう

少しは、夜にかかっても、其処まではと、親方の甚内は、急き立てて先に立つ。 今夜八王子泊りとなれば、あしたは江戸に入ることができる。

すると、道の傍らから、

「皆さん、どうもすみません」

と、探しぬいていた朱実が姿をあらわして、もう歩き出している一行の中へ交じって、自分も

と、お直は叱るし、「どこへ行っていたのさ」共に尾いて歩きだした。

と、朋輩の女郎たちはいかに心配したかという事を、さも大仰にいって、たしなめる。「おまえさん、黙って横道へ行っちゃいけないよ。逃げるつもりならいいけれど」

「でもネ……」

253 れてしまったの。そしたら、下が崖で、この通り辷っちまって……」 「わたしの知った人が通ったから、会うのは嫌でしょう、だか と、朱実は、叱られても、怒られても、笑ってばかりいた。 5 後ろの藪の中へ、 あわてて隠

着物を破いた事だの、肱をすりむいた事ばかりいって、済みませんとはいっているが、少しも

済まないような顔つきはしていない。

先に歩いていた甚内は、ふと小耳にはさんで、

「おい、娘っ子」

「ああ、朱実といったっけな。覚えにくい名前だな。ほんとに女郎衆になる気なら、 「わたしですか」 もつ

びいい名にしなくちゃ困るが、おめえほんとに遊女になる覚悟か」

遊女になるのに、覚悟なんているでしょうか」

恣

の

「どうせ、わたしなんか、女の大事な生命ともいうものを、男の奴に、滅茶苦茶にされたんです女になったら、客の求める事は嫌応はいえないのだ。それだけの決心がなくちゃあ困る」「ひと月勤めてみて、いやになったら、やめるというような理にはゆかないからなあ。何しろ遊

いはしないから」

垐

く考えておくがいいよ。……なあに、途中の小遣いや旅籠銭ぐらいは、何も返してくれとは、「だからといって、もっと滅茶苦茶にしていいという法はない。江戸へ着くまでのあいだに、

火で 戯さ

ゆうべ高雄の薬王院に草鞋を解いた何

と、黄昏れ頃、薬王院の玄関へ立った者である。参詣は明日とし、お宿にあずかり申したい」 下男に挟み筥を担わせ、もう一人、十五ぐらいな少年を供に連れ、 処かの御隠居が ある。

H. 今朝は夙く起きて、供の少年を連れ、一山を巡って午近くに帰って来たが、ここ も 上 杉、武 北条以後、戦乱に荒れ果てているのを見て、

「御修理の屋根葺き料にも」

と、黄金三枚を寄進して、すぐ草鞋をはきかけた。

薬王院の別当は、この奇特な人の少なからぬ寄進に驚いて、 倉皇と見送りに出、

「お名前をどうぞ」

と、訊ねたところ、他の僧が、

「いえ、宿帳にいただいてございます」 と、それを示した。

恣

見ると、 木曾御岳山下百草房

奈良井屋大蔵

とあるので、

あああなた様がし

奈良井の大蔵という名は、全国到る所の神社仏閣の寄進札に見かける名であった。 と別当は見上げて、ゆうべからの粗略を、かえすがえす口惜しげに詫び入った。 必ず黄金何

名か、まったくの奉公心か、本人以外に分らないが、とにかく、今の世の中に変った奇特家とし 枚ずつか―――或る霊場には、黄金何十枚という寄進をしている所もあった―――それは道楽か、売

――で、遠に、ひき止めてみたり、宝物を御覧にと、すすめたりしたが、大蔵はもう供の者とて、別当も夙にその名を聞いているものとみえる。

門を出て、 「しばらく江戸におるつもりですから、又そのうち拝観に出ましょう」

垄

と、辞儀して去る。

「では、山門まで、お送り申しあげましょう」

と、別当は従いて米て、

「今夜は、府中でお泊りなされますか」

「いや、八王子でと思うているが」

「八王子は今、誰方の所領でござりますな?」「それならお楽に参れまする」

「ついこの頃から大久保長安様の御支配になりました」

「佐渡の御金山奉行も、御支配だそうで」「ああ、奈良奉行から移った――」

「えらい才人だからの」

山を下りると、陽の高いうちに、大蔵以下三人は、もう繁華な八王子二十五宿の往来に姿を見

「城太郎、どこへ泊ろうかな?」

と、巾着のように、腰へ尾いて歩いている彼を振向く。

城太郎は、直ちに答えた。

「おじさん、お寺は止そうよ」

そこで、町の中でも一番大きな旅籠と見える家構えを選んで、

「ごやっかいになるよ」

大蔵の人品もよし、挾み筥まで担がせて歩いている旅客なので、

「おはやいお着きで」

中庭を隔てた奥の間へ通して、下へも措かない扱いである。

だが、やがて陽も暮れて、どやどやと客の混む頃おいになると、主人と番頭が顔を揃えて来て

いうには――

お騒がしゅうございましょうから、ひとつ二階へお部屋更えを……」 「まことにご無理なお願いでございますが、よんどころのない大勢の相客で、下座敷はかえって

恐縮して、頼むのだった。

ああ、いいとも。ご繁昌で結構だ」

れ交いに、ここへ入って来たのは角屋の女郎衆の同勢であった。 大蔵は、気軽に承知して、手廻りの荷物を持たせ、急に二階へ引っ越しとなったが、それと入

「さてさて。とんだ旅籠へ泊りあわせたものだて」

大蔵は、二階へ来てから、こう愚痴めいて、自分の落着きを見まわ

巻

の

やっと、食事が来たと思うと、こんどはそれを退げに来ない。時ならぬ混雑に、いくら呼んでも、召使は来ない。お膳も来な

それに、どたばたと、階下も二階も忙しげな跫音が絶えなかった。 腹も立つが、

ああして目を

まわしている雇人も気の毒と思うと、怒りもされないのである。

空

「助市」「助市」「助市」「助市」に首を擡げ、に首を擡げ、上げる。「おいった」に首を繋げ、「おいった」という。「おいった」である。「おいった」という。「おいった」という。「おいった」という。「おいった」という ふと、何か思い立ったよう

と、下男を呼んだが、 見あたらないので、

「城太郎、城太郎」

と、呼び直して坐る。

その城太郎も亦、何処へ行ったか、影が見えないので、部屋を出てみると、中庭を 下 へ 臨 ん

その中に交じって、城太郎も一緒になって階下をのぞいていたのを見出し、座敷を見おろしながら、何やらわいわい騒いでいるのであった。 で、ここの縁の欄干には、まるで花見でもしているように、二階の客が揃いも揃って、階下の奥

と、抓んで来て、

「何を見ているのだ」

と、大蔵が眼で叱ると、城太郎は、家の中でも離さずにいる長やかな木剣を、畳につかえて坐

りながら、

「だって、みんな見てるんだもの―

と、尤もな事をいう。

「みんなは、何を見ているのだい」

「何って……あの、階下の奥へ泊った、沢山な女の人を見ているんだろ」大蔵も多少、興をひかれていないわけでもない。

「それだけか」

'それだけだよ」

「何がそんなものおもしろい」

城太郎は、有体に首を振る。つわからない」

大蔵を落着かせぬ原因は、雇人の跫音よりも、階下へ泊り合せた角屋の女郎衆よりも、むしろ

「町へ行くなら、おいらも連れて行っておくれよ」 「わしは少し、 町を歩いて来るからな、なるべく、部屋にいなくてはいけないよ」 それを上から覗いている、二階の客どもの騒ぎにあった。

「いや、晩はいけない」

「なぜ」

「いつもいっている通り、 わしの夜歩きは、遊びではない」

「信心だ」 「じゃあ、 何さ?」

「信心は昼間しているからたくさんじゃないか。 神様だって、お寺だって、晩は寝てるだろ」

「社寺をお参りする事ばかりが信心ではない。ほかに祈願もあることでな」

「その挟み筥から、わしと、相手にしないで、

わしの頭陀袋を出したいが、開くか」

かない」

「階下へ行ったぜ、さっき」「助市が鍵を持っているはずじゃ、 助市はどこへ行ったな」

「階下で、女郎衆の部屋をのぞいてたよ」「まだ風呂場か」

「あいつもか」

と、舌打ちして、

戱

「あしたはもう、歩けんがなあ」 何しろ、賑やかを通り越して、姦しいこと一方でない。男たちは、帳場寄りの部屋に、女郎たちは、中庭の向うの部屋に。四十人からの同勢である。旅籠の下座敷は、ほとんど、角屋の連中で占めている。四十人からの同勢である。旅籠

大蔵は、そういって、帯を締め直しにかかった。

-呼んで来い、早く」

と、大根のような白い足に、大根おろしを摺って、足の裏の火照りに塗ってもらっている傾城

被いで、壁に向って寝こんでいる。 元気なのは、破れ三味線を借りて来て爪弾きをしているし、皮膚の青白いのは、もう夜の具を

と、喰べ物を引っ張りっこ。――又、行燈とさし向いで、上方の空に残して来た契り ある 男「おいしそうだね、あたいにも、よこしなよ」

へ、筆を走らせている苫界の後ろ姿もある。

「あしたはもう江戸とやらへ、着くのかえ」

「どうだかね。ここで訊けば、まだ十三里もあるってえもの」

「勿体ないね、夜の灯りを見ると、こうしているのは」

「おや、たいそう、親方思いだね」

空

た下男の助市は、湯ざめをするのも忘れて中庭の植込み越しに、いつまでも、見惚れていた。 「だって……。ああじれったい、髪の根がかゆくなった。 釵 をおかし」 こんな風景でも、京女郎衆と聞くからに、男の眼はそばだったのであろう。風呂場から上がっ すると、後ろから耳を引張って、

「いい加減におしよ」

ア痛し

と振问いて、

「なんだ、この城太郎め」

「助さん、呼んでるぞ」

「誰が」

「おまえの主人がさ」

「うそいえ」

「うそじゃないよ。又、歩きに出かけるんだとさ。あの小父さん、年がら年中、歩いてばかりい

るんだな」

「あ、そうか」

助市の後から、城太郎も駈出して行こうとすると、庭木の陰から思いがけなくも、

「城太さん――。城太さんじゃないの?」

と、呼ぶ者があった。

はっと、城太郎の眼が、真剣になって振顧った。何もかも忘れ切って運命に尾いて歩いている

恶 戱

かのようでも、彼の心のどこかには絶えず、見失った武蔵とお通の身を気にとめているらしかっ

今、呼んだのは、若い女の声であった。もしや? ――とすぐ胸がどきっとしたもの とみえ

る。じっと、大きな八ツ手の陰をすかして、

「……誰?」

おずおず寄ると、

「わたし」

と、木陰の白い顔は、葉の下を潜って、城太郎の前に立った。

「なアんだ」

がっかりしたように、城太郎がいい放ったので、朱実は舌うちして、

「なあに、この子はまあ」

火

と、自分の寄せかけた感傷のやり場を失って、憎そうに、城太郎の背を打った。

「ずいぶん久し振りじゃないの。どうして、お前、こんな所へ来ているの

「自分こそ、どうしたのさ」

「あたしはネ……知ってるだろ。よもぎの寮の養母さんとも別れちまって、それからいろんな目

に会ってね」

「あの……大勢の女郎衆と、一緒なのかい」

「でも、まだ、考えてるの」

「何をさ」

「傾城になろうか、やめようかと思って」

こんな子供にと思っても、朱実には、こんな嘆息を、ほかに聞いてもらう人はなかった。

垄 の

恣 かりに、

「……城太さん、武蔵様は今、どうしていらっしゃるの?」 やがて、そっといったが、彼女が初めから訊きたい事は、むしろそれだけらしかった。

四

武蔵の消息を訊かれると、 城太郎は、そのことなら、此方から訊きたいところだと、いわぬば

「知らないよ、おいらは」

「なぜ、あんたが知らないのさ」 「お通さんとも、 お師匠様とも、途中でみんな、迷れてしまったんだもの」

「お通さんてー 一誰?」

朱実は、急に、彼のことばに、注意をかたむけ、そして、何か憶い出したように、

「……ああそうか。……あのひとは、いまだに武蔵様の後を追いまわしているのね」 と、呟いた。

、いくら想いを懸けたところで、届き難い心地がして、同時に、自分の荒びかけた境涯も顧み朱実が常に想像している武蔵は、行雲流水の修行者であった。樹下石上の人だった。それゆえ

(所詮、 かなわぬ恋) られ、

という弱気な諦めにつつまれてしまうのだった。

けれど、その武蔵の生活の影に、もうひとり、べつな女性の影が重なっていると想像する ح

「城太さん、ここじゃ、他の人の目がうるさいから、戸外へ行かない?」 朱実の諦めは、到底、灰をかぶせられた埋め火のままではない。

「町へかい」

旅籠の庭木戸をあけて、ふたりは宵の往来へ出る。出たくて耐らなかった折なので、そう誘われると、一も二もない。

つつまれて、人間の聚楽を賑わしていた。博労の声だの、機屋のおさの響きだの、問屋場役人の呶鳴る声だの、町芸人の佗しい音楽だのがが、どっぷり町の西北を囲ってはいるが、ここに纏まっている宵の燈には、酒のにおいだの―― 二十五宿といわれる八王子の燈は、今までの何処よりも繁華に見えた。秩父や甲州境の山の影

「あたし、お通さんていうひとのことは、又八さんからよく聞いてたけれど、いったい、どんな

朱実は、ひどくそれが、気になり出したらしい。

、燃えるようなものが、焦々、立ちはじめていた。武蔵の事は、ひとまず胸の隅へあずけておいて、彼女の胸には、 お通という者に対して、何

「いいひとだぜ」

と、城太郎がことさらに

「やさしくって、思いやりがあって、綺麗でサ――。おいら、大好きだ、お通さんは!」

空

けれど、そういう脅威は、どんな女性でも決してあらわには顔色に出さない。反対に、彼女 と、いったので、朱実の胸はよけいに、或る脅威を感じてきた。

ほほ笑むのであった。

「そう、そんないいひと」

「ああ、そして、何でもよくできるよ、歌もよむし、字もうまいし、笛も上手だしね」

「けれど、大和の柳生の大殿様でも、誰でも、お通さんのことは賞めるぜ。……ただおいらにい「女が、笛なんか上手だって、なんにもなりやしないじゃないの」

わせれば、いけない事がひとつあるけれど」

うわべに出しているか、おしとやか振って、うまく包んでいるかの違いしかありやし な い も の 「女には、誰にだって、いけない性分が沢山あるものよ。ただそれを、あたしみたいに、正直に

「そんな事ないよ。お通さんのいけないのはたった一つしかないよ」

「どんな性分があるの」

「すぐ泣くんだよ。泣虫なのさ」

「泣くの。……まあ、どうしてそう泣くんでしょう」

「武蔵様のことを思い出しちゃあ泣くんだろ。一緒にいると、それだけが、 陰気になって、おい

ら嫌いさ」

にも、朱実の胸はおろか、全身を嫉妬の火で焼きかねないほど――無邪気を通り越していた。 ――もう大概に、相手の顔いろを見て喋ればいいのに、城太郎はおかまいなしに、まだこの上

戱

訊きたがった。 眸の底にも、皮膚にも、蔽いきれない嫉妬のいろをたたえながら――なおなお、 朱実は求めて

「いったい、お通さんて、幾歳なの?」

Ŧi.

「同じぐらいだろ」「城太郎は、見較べるように、彼女の顔をながめて、

「わたしと?」

「だけど、お通さんの方が、もっと、綺麗で若いよ」

そのくらいでこの話題が打切れればよかったのに、朱実の方から又、

お通ってひとは、泣いて男の気持をひきつけようとする―― お通ってひとは、泣いて男の気持をひきつけようとする――角屋の女郎衆みたいなひとに違いな「武蔵様は、人なみ以上、武骨だから、そんな泣虫のひとは嫌いだろう。そうだよきっと、その

って反対に、 どうかして、 お通を、城太郎にだけでも、好く思わせまいと努めるのであったが、結果はかえ

「そうでもないぜ。 お師匠様も、うわべは優しくしないけれど、ほんとは、お通さんが好きらし

いんだよ」

とまで、いわせてしまった。

凡ならぬ顔いろはもうとうに通り過ぎている朱実であった。歩いている側に河でもあれば、す

ぐ飛びこんで見せてもやりたいような火の塊りが胸へこみあげてくる。

これが、子供相手でもなければ、もっといってやりたい事はあるけれど、城太郎の顔いろを見

巻 ては、その張合いもない。 「ア、居酒屋じゃないか、そこは」

ふいに、彼女は、町の辻から横町の赤い燈を見て、引っ張った。 城太さん、おいでし

「そうさ」

「女のくせにおよしよ」

「何だか、急に飲みたくなったのよ。ひとりじゃ間がわるいから―

「おいらだって、間がわるいや――」

の

空 目になって、中へ這入るなり、 「城太さんは、何でも喰べたいものを喰べればいいじゃないか」 覗いて見ると、幸いにも、ほかの客はいないらしい、朱実は、河へ飛び込むよりもっと強い言

「……お酒を」

と、壁へ向っていっ

それから彼女は矢つぎばやに酒を体に容れた。城太郎が恐れて止めた頃には、 もう城太郎の手

におえなかった。

うるさいね、 と、肱で振払って、 何サ、 この子は 旗

「いけないよ、やっちゃあ」 「もっと、お酒を……お酒をくださいな」 城太郎が、間に立って、心配そうに断ると、 そのくせ、もう焰のような顔して、俯っ伏しながら、 息もくるしげなのである。

「いいよ、お前はどうせ、お通さんが好きなんでしょ。……あたしはね、 泣いて男の同情を買う

ような、そんな女、大っ嫌いさ」

「おいら、女のくせに、酒なんか飲むやつ、大っ嫌いだ」

「わるかったね。……お酒でも飲まなけれやいられないあたしの胸は……おまえみたいなチンチ

クリンには分りません――だよ」

「はやく勘定をお払いよ」 「ないのかえ」 「おかねなんて、あるかとさ」

「そこの旅籠に泊っている、京の角屋の親方さんから貰っておくれ。どうせもう売った体……」

「アラ、泣いてら」

「わるいかえ」

「あたしの涙は、あのひとの涙とは、涙がちがいますよ。 「だって、お通さんの泣虫を、さんざん悪くいった癖に、自分で泣くやつがあるもんか」 ――アア面倒くさい、死んで やろう

かし ዹ いに身を起すと、戸外の闇を目がけて駈け出したので、城太郎は、びっくりして 抱 き 止 め

た。

空

者が、むっくり酔眼をさまして見送っていた。 こういう女客も、稀にはあるとみえて、居酒屋の者は笑っていたが、ふと、隅に寝ていた年人

「朱実さあん。朱実さあん) 死んじゃいけないよ」

城太郎は追いかけてゆく。

朱実は先へ走ってゆく。

暗い方へ、暗い方へと。

先が闇であろうと、沼であろうと無鉄砲に駈けているもののように見えるが、 朱実は、

城太郎

が泣き声だして、後ろで呼んでいることを知っている。

じられて――住吉の海へまっしぐらに駈けこんだ時には、ほんとに、死の彼方まで行く気であっひそかな芽生えを乙女の胸にもちながら、その芽を、あらぬ男に――あの吉岡清十郎にふみに ひそかな芽生えを乙女の胸にもちながら、その芽を、 今の朱実には、その口惜しさだけがあっても、それまでの純真さはすでにない。 みに

(誰が、死ぬものか)

と、自分へいいながら、ただわけもなく、城太郎が後ろから駈けて来るのが面白くて、世話を

やかせてやりたいのだった。

あっ、あぶない 城太郎は、呶鳴った。

彼女の先に、濠の水らしいものが、闇に見えたからであった。 たじろぐ彼女を後ろからひしと抱き止めて、

「朱実さん、およしよ、およしよ。死んだってつまらないじゃないか」

引きもどすと、よけいに、

あたしは、死んでこの胸に、武蔵様を抱いてゆく。……そして添わせるものか、あんな女に」 「だって、おまえだって、武蔵様だって、みんなあたしを、悪者のように思ってるじゃないか。

「どうしたのさ。何が、どうしたのさ」

「さあ、その濠の中へ、あたしを突きとばしておくれ。……よ、よ、城太さん」

城太郎は、その姿を見て、ふしぎな恐さに取り憑かれていた。自分も泣きたくなったらしく、 そして両手を顔に当て、さめざめと、泣きぬくのであった。

「……ネ。帰ろう」 と、宥めると、

「ああ、 会いたい。城太さん――探して来ておくれ。武蔵様を」

「だめだよ、そんな方へ歩いてゆくと」

―武蔵様」

あぶないッたら」

を繞らした屋敷の角から、嗅ぎ寄るように歩いて来て、この二人が居酒屋の横町を駈け出した時から、すぐ後を尾けて来た牢人者は、その時、この二人が居酒屋の横町を駈け出した時から、すぐ後を尾けて来た牢人者は、その時、 狭い家

「こら、子ども。……この女は、おれが後から送り届けてやる。

お前は帰ってもいい」

空

身丈のすぐれた三十四、五の男である。かなつぼ眼に青髯のあとが濃い。関東風というのか、と、朱実の体を、いきなり小脇に抱きしめて、城太郎を突き退けた。

江戸へ近づくに従って、ひどく眼につくのが、着物や裾の短いことと、刀の大きい事だった。

「おや?」

に歪んでいる。 見上げると、下顎から右の耳へかけて、刀の切先で撫であげられた古傷が、桃の割れ目のよう

(強そうなやつだぞ) と思ったのであろう。

城太郎は生唾をのんで---

朱実を連れ戻そうとすると、

「いいよ、いいよ」

「みろ、この女は、やっと虫が納まって、いい気持そうに、おれの腕の中に締められて寝てしま

った。おれが連れて帰ってやる」 「だめだよ、おじさん」

「帰れっ」

· · · · · · · · ·

「帰らないな」

るように踏んばって、 悠っくり、手をのばして、城太郎の襟がみをつかむと、城太郎は、 羅生門の綱が鬼の腕に耐え

「な、なにをするのさ」

「この餓鬼め、溝の水を喰らって帰りたいか」

「なにをっ」

この頃は、体以上の木剣も、やや手について、ひねり腰に抜くがはやいか、牢人の横腰をなぐ

りつけた。

どこか、そこらの石にでもぶつけたらしく、ううむと唸って、それなり動きもしなかった。 —しかし、自分の体も途端に、あざやかなもんどりを宙に打って、溝へは落ちなかったが、()

Ł

つかると、素純なたましいは、この世とあの世の境を、つい弾みでも、超えてしまうの で あ ろひとり城太郎に限らず子供というものはよく気絶する。大人のような遅疑がないので、事にぶ

「おーい、子どもう」

火

「お客さん」

「子ども……ウ」

耳元で、かわるがわるに呼ばれて、城太郎は、 大勢の中に介抱されている自分を、 ばちぱち見

まわした。

「気がついたかい」

「これこれ、お前と一緒に出た女子はどうした」皆に問われて、城太郎は、間がわるそうに、自分の木剣を拾うが早いか、歩き出した。

宿屋 そう訊かれて、彼は初めて、この人々が、奥に泊っている角屋の者と、 の手代は、 あわてて彼の腕をつかまえた。

旅籠の雇人たちで、朱

誰が発明したのか、重宝がられて上方でも流行っている「ちょうちん」実を探しに来たものと知った。 と呼ぶ物が、 もう関東

にも来ているとみえ、それを持った男だの、棒切れを持った若者などが、

「おまえと、角屋の女子が、 ……何処へ行ったかおまえは知っているだろうが」 侍につかまって、難儀をしていると、知らせてくれた者

があ る の

城太郎は、首を振って、

「知らない。 おいらは、 何も知らない」

「何も? ······ばかをいえ、何も知らぬことがあるものか」

恐かったのと、もう一つの理由は、相手に拋りつけられて、気絶してしまった不覚を、大勢の前端、城太郎は、とかく返辞をいいしぶった。関り合いになって、後で奈良井の大蔵に叱られる事が 「何処か、彼方のほうへ、抱えて行ったよ。それきりしか、 知らない」

でいうのが、 間がわるいのであっ た。

「どっちだ。その侍の逃げた方は

指さしたのも、 いい加減であったが、 それっと、 大勢が駈け出すとすぐ、

提燈や棒が駈け集まってみると―いたと、先で叫ぶ者がある。 朱実はしどけない姿を農家の藁小屋らしい陰に 曝 してい

「行こうッ

戱

Ų,

わらや乾草だらけになって、起き上がっていたが、襟はひらいているし、帯はだらりと解けその辺に積んである乾草の上に押し仆されていたものとみえ、人の跫音に驚いて、髪も着物

ているーー

「まあ、どうしたのじゃ」

なく、犯行者の牢人者を追うことも忘れていた。 提燈の明りに、それを見た人々は、すぐ或る犯行を直感したが、さすがに、 口へいい出す者も

「……さ、お帰り」

きじゃくった。 手をひくと、その手を払って、彼女は小屋の羽目へ顔を当てたまま、 よよと、 声をあげて、泣

「酔っているらしいね」 「何で又、戸外で酒など?」

に描く事はできなかったが、彼はふと、朱実とはまるで縁のない過去の或る体験を思いだしてい 城太郎も、遠くからその様子を覗いていた。彼女がどんな目に遭ったのか、 人々は、しばらく、彼女の泣くにまかせて、見まもっていた。 彼には判っきり頭

ろさを味わった-わらの中で、抓ったり、かじりついたりして、ただ狆ころのように、人の跫音を恐れるおもしそれは、大和の柳生の庄のはたご屋に泊った時、はたごの小茶ちゃんという少女と、馬糧小屋 あの経験であった。

行った魂を、 すぐ、 つまらなくなって、城太郎は駈けだした。 この世に遊ばせて歌いだした。 駈けながら、たった今、 あの世のてまえまで

金ぼとけ野なかの、野中の

十六娘をしらないか

迷った娘を知らないか

訊いても、カーン

打っても、

カーン

草纹 /予ひ 二字は

雀り

帰る旅籠は、分りきったつもりでいたらしいが、向う見ずに飛んで来るうちに、帰る旅籠は、分りきったつもりでいたらしいが、向う見ずに飛んで来るうちに、

「おや、違ったかな?」

城太郎は初めて、自分の駈けている道に、疑いを抱き、前や後ろを見まわして、

「米る時には、こんな所は歩かなかったぞ」 やっと気がついたような顔つきである。

されて、ひどく壊されたまま荒れているが、この辺には、古い砦の蹟を中心に、一廓の 一廓の武家町がある。 一部を修復して、今ではこの地方を支配する大久保 砦の石垣は、かつて他国 の軍に占領

長安の役宅か住居になっている模様である。 し、従って城壁も見えない。唐橋もない。 戦国以後に発達した平城とちがい、極めて旧式な--ただ、漠とした一面の藪山であった。いて旧式な---土豪時代の砦なので、濠も繞らしてない

郎が見ていると、 その沼と田圃の端れからすぐ、嶮しい藪山の裏が、生えたように急に聳え立っていそして一方は、田圃と沼であった。――城太郎が佇んでいた道の片側は、砦の下を繞っている侍屋敷の塀であった。「あっ? ……誰だろう……あんな所から人間が?」 道もないし、 石段も見えないから、恐らく、この辺は砦の搦手であろう。 その藪山の絶壁から、 綱を垂らして、降りて来る人間がある。 だのに今、 . る。 城太

綱の先には、 カギがついているとみえて、その綱の端まで降りてくると、足の先で、岩や木の

根を探り、下から振ってカギを外し、またさらに下へ綱をのばして、スルスルと降りて来る。 そして遂に、 田圃と山の境まで下がって来ると、その人影はいったん其処らの雑木藪の中

なんだろ?」

に見えなくなってしまった。

った。 城太郎の好奇心は、自分の身が宿場の灯から遠い所へ迷って来ていることをも忘れさせてしま

巻 空 0

> が 彼の期待は外れなかった。ずいぶん時経ってからであったが、やがて、畦道からのそのそと此て田圃の畦を渡って、自分の前へ来そうな気のする――先刻の人影を待ちぬいていた。それだけに又、彼の好奇心は、そこを去りかねた様子で、往来の樹陰にひたと身をつけて、や だがもう、彼がいくら眼をまるくしていても、 何も見えて来なかった。

「……なんだ薪拾いか」方へ来る人間が見える。

驚くべき事実を眼のあたりに見せられて、彼の好奇心は、満足を通り越え、恐怖の顫えに襲われか。もしそんな書たったら――と堀太郎はふとつまらない待ちくたびれを感じた。しかし再び、 他人の山の薪を盗む土民は、 一背負いの薪のために、夜を選んで、随分あぶない崖 b 越 える

知らず、 Ш 悠々、 圃 の唯 彼の側を通って行ったが、そのせつな、城太郎はよくも、 か ら往来端 へ上がった人影は、 彼の小さい影が、 樹の陰にへばりついているとも

あっ!」

なぜなら、それは慥かに城太郎が先頃から身を託している奈良井の大蔵に違いない か ら で あという声を出さなかったものである。

る。

「いや、人間違いだろ?」けれど彼は又すぐ、

と、自分の眼で見た瞬間のものを、 打ち消そうとした。

そして背中には、なにやら重たげな包みを確乎と背負っている。その頑健な肩といい、腰ぼねば、黒い布で顔をつつみ、黒い膝行袴や脚絆もはいて、足も身軽なわらじ穿きではないか。そう打ち消してみると、間違いかとも信じられた。――彼方へすたすたと行く後ろ 姿 を 見 れ といい、どうして、丘十を越えた奈良井の大蔵であるものか――と、思われぬでもなかった。

_

見ていると、先へ行く人影は、又、往来から左の丘の方へ向って、曲がって行く。

べつに深い考えもなく、城太郎も後に尾いて歩いていた。

かに道を問う人影はなし、漫然、その男の後に尾いて行ったら、宿場の燈火が見えて来るだろうどっちにしても、彼も、帰る方角をきめて、歩き出さなければならない場合にあったので、ほ ―ぐらいな思案にすぎなかったのである。

ところが。

先の男は、横道へ這入ると、担いでいた嚢のような物を、重そうに、道標の下におろして、石

の文字を読んでいた。

「あら? ……変だな……やっぱり大蔵様に似ている人だ」

それから城太郎は、いよいよ不審を増して、今度はほんとに、見え隠れに、その男を尾行てみ

当塚の松 男が、もう丘の る気になった。

男が、もう丘の道を登っているので、後から、道標の碑の文字を読んでみると、

このうえ

と、彫ってある。

「ああ、あの松か」

その梢は、丘の下からも仰がれた。

後からそっと行ってみると、先に着いた男はすでに、

松の

根方に腰をおろし、煙草をつけて喫っている。

「いよいよ、大蔵様にちがいないぞ」

と、城太郎は呟いた。

なぜならば、その頃、ここらの田舎の人や町人が、滅多に煙草など持っているはずがない。

草の味を教えたのは、南蛮人だそうであるが、日本で栽培するようになってからでも、高価なの

まだ喫煙の害に馴れないので、眩いを起したり、泡をふいたりする者が多いので、美味いけれで、上方あたりでも、よほど贅沢な者でなければ喫わない。値だんばかりでなく、日本人の体は

祐筆の御日常書によると、だから、奥州の伊達侯などは、六十余万石の領主であり、 大の煙草の好者といわれているが、

ど、魔薬であると考えられている。

夕、御四ふく朝、お三ぷく

御寝、ご一ぷく

などと誌されてある。

そんなことは、城太郎の知ったわけのものでないが、城太郎にも、滅多な者が喫うべきもので

審には思わなかったが、今、首塚の松の下で、スパリスパリと喫っている螢火ほどな煙草の火に っていたことも見ていた。もっとも大蔵が喫っているのは、木曾一の大家の主人であるから、不ないことは分っている。――又、それを奈良井の大蔵が、日常時をきらわず、陶器製の煙管で喫 は、恐ろしい疑念がわいた。

「何をしてるんだろ?」

彼は、冒険に狎れて来て、 いつのまにか、 かなり近くの物陰まで、這い寄ってながめていた。

やがての事。

ので、顔もよく見えた。やはり奈良井の大蔵なのである。 悠々と、煙草入れを仕舞うと、男はぬっくと起ち上がった。そして被っている黒い布を脱った

挺の鍬を持っている。、一周りぐるりと巡ってあるいた。そしてどこから拾い出したのか、手には、いつのまにか、予語。

····?·

気づいた。この丘は、町場のある本宿と、砦や屋敷ばかりの住宅地との境になっている丘であっ 鍬を杖に立てて、大蔵はしばらく夜の景色でも眺めるように突っ立っている。 城太郎もそれで

「うむ」

のあった下を目がけて、ざくと、一鍬入れはじめた。 大蔵は、独りでうなずいた。そしてやにわに、松の根の北側にある一個の石を転がし、その石

巻

は、 ·····? 鍬を振りだした大蔵は、わき目もふらずに、土を掘りのけた。 みているうちに、人間の体が立ったままであらかた這入るぐらいな穴になった。 腰の黒い手拭で、ひと汗拭いた。

がいないと見てはいるが、それでもまだ、自分の知っている奈良井の大蔵とは、人がちがう気が してならなかった。世の中に、奈良井の大蔵という者が、二人いるような気がして 来 る の だっ 「……よし」 草むらの石の陰に、石みたいになって、限をまろくしていた城太郎は、その人間が、大蔵にち

自分を埋めて、上を被るつもりなら、止めなければならない――と城太郎は考えていたが、そ穴の底を、足で踏み固めているのだった。 大蔵は、穴の中に這入って、地面から首だけ出して、そういった。

んな心配はいらなかった。 ウードとうことに、 (E) 「・※、 穴から跳び出すと、彼は松の木の下に置いてあった嚢のような重い物を、 穴のそばまで、ずる

包んである物を開けると、驚くべき黄金の海鼠があらわれた。二つ割りの竹の節のあいだに、熔風呂敷かと思ったら、それは革の陣羽織であった。陣羽織の下に、もう一重、幕みたいな布で ずる引き摺って来て、竇の首を括ってある麻の紐を解いている。

かした黄金を流したもので、竹流しの竿金ともよぶ地金で、それが何本もあった。 それだけかと思っていると、彼はこんどは帯を解いて、腹巻だの、背中だの、体じゅうから、

慶長判に鋳き上げてある金を、何十枚となく振りこぼした。それを手早く掻き集めて黄金の地金 といっしょに、陣羽織にくるむと、穴の中へ犬の死骸でも蹴込むように、ずしーんと落した。 上を彼せる。

足で踏みつける。

そして十徳を着、十徳の胸へ、雲水の掛けているような頭陀袋をさげ、草腹まで穿きかえると、草鞋や脚絆や、不用になった物は、鍬にくくし付けて、人の這入らない藪の中へ投げこんだ。の枝などを撒きちらし、こんどは、自分の身装を、平常の奈良井の大蔵に変えているのだった。そして石を、元のとおりな位置へすえ、新しい土塊れが、そこらに目立たぬように、枯草や木 「アア、 一骨だった」

呟いて、丘の彼方へ、さっさと降りて行ってしまった。

したらしい痕は残っていない。彼は魔術師の掌を見つめるように、大地を見ていた。 その後で、城太郎はすぐ、生き埋めになった黄金のあとに立ってみた。どう見ても、 掘りかえ

「……そうだ。先へ帰っていないと、変に思われるぞ」 町場の燈火が見えているので、もう帰り途の見当はついている。

彼は、

大蔵とちがう道をえら

んで風の子みたいに丘から駈けだした。

だ大蔵は戻っていない。 何喰わぬ顔をして、旅籠の二階へあがり、自分たちの部屋へ入ってゆくと、いいあんばいにま

ただ、行燈の下に、下男の助市が、挾み筥へ倚りかかって、孤影悄然と、よだれをたらして眠

っていた。

「おい、助さん、風邪ひくよ」

わざと、揺り起すと、

「あ。城太か……」

助市は、限をこすって、

「こんな遅くまで、御上人様へも無断で、 わりゃあ何処へ行っていたのだ」

「何いってんだい」

城太郎はやり返して、

「嘘をつけ。わりゃあ、角屋の妓を引っぱり出して、外へ行ったという じゃねえ か。――「おいらはもう、とっくの昔に帰っていたじゃないか。寝ぼけて、知りもしないくせに」

分か

ら、そんなまねしやがって、末恐ろしいやつだ」

間もなかった。

坚

そこへ奈良井の大蔵が、

「今もどったよ」

障子を開けて入って来た。

四

どう歩いても、十二、三里はある。陽のあるうちに江戸へ着こうとすれば、よほど早立ちをし

雀

なければならない。

角屋の一行は、まだ暗いうちに八王子を立った。奈良井の大蔵の組は、 悠々、朝飯をしたた

と宿を立ち出でたのが、もう陽のたかい時分。

挟み筥の下男と、城太郎とは、例によって、お供に従いていたが、 きょうの城太郎は、ゆうべ

の事実があるので、何となく、大蔵に対する気ぶりが違っていた。

「城太」

大蔵はふり向いて、浮かない彼の顔つきへ、

「どうした、きょうは」

「へ? ……」

「どうかしたのか」

「ひどく、きょうに限って、むっつりしているじゃないか」 「どうもしません」

「はい……、大蔵様。実は、こうしていてはお師匠様にいつ行き会えるか分らない か Ď, お ٧N

ら、おじさんと別れて捜そうと思うんだけれど……いけないかな」 大蔵は膠なくいった。

いけないな」

すると城太郎は、いつものように、馴々しく縋りかけたが、急に手を引っ込めて、

「どうして」

と悔々いう。

「一ぷくしよう」

大蔵はそういって、武蔵野の草に腰をおろした。そして挟み筥を担いでいる助市へ、先へ行け

と手を振って見せる。

「おじさん、おいら、どうしても、 お師匠様をはやく捜したいもの。だから自分一人で、歩いた

ほうがいいと思って――」

いけないというのに」

難かしい顔を示しながら、大蔵は陶器の煙管で、すぱりとくゆらしながら、

「お前は、きょうから、おれの子になるのだ」

と、いった。

空

問題が重大なので、城太郎は唾をのんだ。だが、大蔵はもうにやにや笑っているので、冗談を

いわれたのだと解して、

「いやなこった。おじさんの子になんかなるのは嫌だ」

「どうして」

「おじさんは、町人だろ。おいらは武士になりたいんだもの」

「奈良井の大蔵も、根を洗えば、町人ではない。きっと、偉い武士にさせてやるから、わしの養

子になれ」

どうやら本気らしいので、城太郎は身ぶるいを覚えながら、

ら、彼の耳へ、唇をつけて、小声にいった。 「なぜおじさんは、急にそんなことをいい出すのだい?」 ――すると大蔵は、いきなり城太郎の手を引き寄せて、ぎゅっと、羽交締めに抱き込みなが

「見たろう!」

「……な、なにをさ」

「ゆうべ、おれがしたことを」

「なぜ見た!」

「なぜひとの秘密を見る!」

れ。それが嫌なら、叮愛い奴だが、殺してしまわなければならぬのだ。 「大きな声を出すな。もう見てしまった事だから、叱言はいわぬ。その代りに、わしの 子 に な「……ごめんよ、おじさん、ごめんよ。誰にもいわないから」 ----どうだ、どっちがい

Ŧi.

ほんとに殺されるかも知れないと思った。生れて初めて恐いというものに出会った気持であっ

「ごめんよ、ごめんよ。殺しちゃ厭だい。死ぬ のは厭だい」

死の手が圧し被さってくるように惧れもするのであった。抑えられた雲雀のように、城太郎は、大蔵の腕の中で軽くもがいた。大きく暴れると、すぐに抑えられた雲雀のように、城太郎は、大蔵の腕の中で軽くもがいた。大きく暴れると、すぐに

そのくせ大蔵の手は、決して、彼の心臓がつぶれる程、 強い力で締めつけているのではない。

やんわりと、膝のなかへ抱えこんで、

と、まばらな髯を城太郎の頰へ摺りつけていう。「じゃあ、おれの子になるか」

その髯が痛い。

0

巻

そのやんわりとした力がとても怖ろしい。大人臭いにおいが体を縛ってしまう。

度も出会っているし、それに対しては、むしろ向う見ずな性質なのに、声も手も出ないで、嬰児どうしてだろう。城太郎にも分らなかった。危険というだけなら、これ以上あぶない目には何 のように、大蔵の膝から逃げることができなかった。

空

「どっちだ。どっちがいい?」

「おれの子になるか、殺されたほうがいいか」

「これ、はやくいえ」

「……う、うん」

「うむ」

雀 だ。きっといい武士に仕立ててやる」 て小鼻のそばに溜っている。 「なにを泣くか。おれの子になれば、倖せじゃあないか。武士になりたければ、 「だって……」 「はっきりいえ」 「おじさんは……」 「だってなんだ」

太郎はとうとうベソを掻き始めた。

汚い手で顔をこするものだから、涙が黒いしずくになっ

なおさらのこと

「焦れったい奴。男というものは、もっと何でもはっきり物をいうものだ」「でも」 「……だってね……おじさんの商売は、泥棒だろ」

違いないが、その膝が深い淵のように、起つこともできなかった。 もし大蔵の手が、軽くでもかかっていなければ、途端に彼は、雲をかすみと駈け出していたに

「あはははは」

「だから、おれの子になるのは、嫌だっていうのか」大蔵は、泣きじゃくる背を、ぽんとたたいて、

290

「おれは、天下を盗む者かもしれないが、けちな追剝や空巣ねらいたあ違う。家康も秀吉も信長城太郎がうなずくと、彼は又、肩をゆすって笑いながら、 みな天下を奪った人間じゃないか。 ――おれに従いて長い目で見ていると、今にわかって来

る

「じゃあおじさんは、泥棒でもないの」

「そんな割の合わない商売はしない。 もう城太郎の思案では、どう答えていいか、背が足りなかった。 ――おれはもっと太い人間さ」

大蔵は、 膝の上から、ぽんと彼を離して、

をひとに喋舌るな。 「さあ、泣かずに歩け。 **喋舌るとすぐ、その首を捻じ切ってしまうぞよ」** きょうからはわしの子だ。可愛がってやる代りに、 噯にも、ゆうべの事

分の人々

「こんな草原や葭の多い沼地へ――なんで又こんなに家が建つのじゃろ?」 気候は、めっきり暑くなっていた。ことしは空梅雨か、ひと粒の雨水本位田又八の母が、江戸表へ来たのは、その年の五月末頃であった。 ひと粒の雨も見えない。

江戸へ来て、彼女の第一印象は、そんな呟きであった。

をとって来たものらしく、途中では、持病やら信心詣りやら、道草も多いので、都をば霞ととも京の大津を出てから約二ヵ月近くもかかって、彼女はやっと今、着いたのである。道は東海道

に出でしかど――という歌どおり遙けくふり返られる。

しに通るのと、人家の普請や、埋地の土運びなどで、足もとも悪く、雨もふらない の で、濛 々市街の幹線道路なので、わりあいに歩きよいが、それでも、石や材木をつんだ牛車がひっきりな と、白い埃が立っている。 高輪街道には、近頃植えた並木や、一里塚もできていた。 。汐入から日本橋へゆく道は、新し

「――ア、なんじゃ?」

彼女は、目角を立てて、 普請中の新しい民家の中を睨めつけた。

中で笑う声がした。

左官屋が壁を塗っているのである。こての先から飛んできた壁土が、彼女の着物をよごしたの

であった。

|田家の隠居で通った権式ぐせが、とたんに憤っと出るのである。| 年は老っても、こういう事には我慢のならない婆であった。ついこの年頃まで、郷里では、本年は老っても、こういう事には我慢のならない饕

に流れて来て、荒い土をこねている左官屋職人は、こてをうごかしながら鼻で笑った。 「往来の者へ、壁土をはね返しながら、詫びもせず、笑うているという法があろうか」 なんだって。 郷里の畑でこういえば、小作や村の者は、慴伏したものであった。しかし、御新開の江戸へ建た 変なばばあが、なにか、ぶつぶついってるぜ」

「今、笑うたのは、いったい誰じゃ」

お杉婆は、いよいよ怒って、

「なんじゃと」

「みんなだよ」

空

かけながら、

巻

格がそれではすまなかった。

年がいもない――よせばいいのにと、足を止めた往来の者は、

はらはらしていたが、ばばの性

ばばが肩をいからせる程、職人たちは笑っていた。

黙って、彼女は土間の中へ入って行った。そして左官たちが、足場にして乗っている板へ手を

「おのれであろうが」 と、板を外した。

刎ね起きると、左官たちは、ひと摑みにしてしまいそうな権まくで、お杉ばばの 前に 立った「こん畜生」 左官たちは、漆喰板の泥を浴びて、板の上からころげ落ちた。

「さあ、外へ出い」

婆は、脇差に手をかけて、少しも年よりらしい怯みは見せない。

すがたや言葉づかいから考えて、侍のおふくろである事は知れて いる し、へたな真似をしては その勢いに、職人たちは、気をのまれてしまった。こんな婆さんがあろうかと意外であった。

――と、急に惧れをなした顔いろである。 「この後、今のような無礼をしやると、承知せぬぞよ」 これでいいのだ、ばばは気がすんだとみえて、往来へ出て行った。往来の者は彼女のきかない

すると、かんな屑を泥足にひきずった左官屋の小僧が、ふいに普請場の横から駈け出して行っ気らしい後ろつきを見送ってちらかった。

7

「この、ばばめ」

いきなり、手桶のへどろを、彼女の体へぶちまけて、隠れてしまった。

_

))

振り向いた時は、もう悪戯の下手人はいなかった。「何するかっ」

自分の背に浴びた壁上に気づくと、彼女の顔は、無念そうな中に、泣き出しそうな 顔を 顰 め

「何を笑う?」

宥ろうとはせず、捏ね土を浴びせたり、歯をむいて嘲笑うたりするのが江戸の衆の人情か」ぬしらも、やがては年を老るのじゃぞ。はるばると遠国から越えて来たこのとしよりを、親切に 「げらげらと、何がお と、こんどは、笑っている往来の者へ向って、いいちらした。 かしゅうて、笑い召さるのじゃ。老いぼれは、 わしのみではないぞえ。お

294

罵るために、往来はよけい足を止め、又愈´ヘ、笑い声を増すことが、

お杉婆には分 ら

K)

らし

かり。おまけに人情はすすどうて、人がらの下品ていることは、京から西 に は 見 ら れ ぬ こ ととじゃ、来てみれば、山を崩し、葭沼を埋め、堀を掘っては 海 の 洲 を盛っている慌だしい埃ば「お江戸お江戸と、日本じゅうでは今、この上もない土地のように、偉いうわさじゃが、何のこ

これで、婆は少し胸がすいたとみえる。なお笑う群衆を捨てて、忌々しげに、脚をはやめて行

巻

9

れない土の下から、葭や蘆の根が枯れて喰み出している。乾いた牛の糞は、眼や鼻に這入る気が町はどこを見ても、木口も壁も新しくて、ぎらぎらと眼を射るし、空地へ出ると、まだ埋めき

「これが江戸か」

するのであった。

空

彼女は、事々に、江戸が気に入らなかった。新開発の江戸の中でいちばん古い物が、自分の姿

のように思われた。

売りも、歩卒も部将も、すべてが若かった。若い者の天地だった。 人も若いし、騎馬で歩いている役人も、編笠を抑えて大股に過ぐる侍も、労働者も、工匠も、物 実際、ここの土に活動しているものは、悉くが若い者に限られていた。店舗を持っている主

「尋ねる者でもない旅なら、こんな所に、一日とて、居てくれるのではないが……」

ぶつぶついっているまに、婆は又、足を止めた。ここも亦、堀を掘っているので、道を曲がら

な け n ば なら な た。

で、もっと、江戸城の周囲に寄れば、太田道灌以後、天正の御入国以来のまとまった大名小路やここらは以前の千代田村と日比谷村のあいだを通っている奥州街道の田圃道が開けて いる のたり、酒を売ったり、生薬の看板をかけたり、呉服反物を積みあげていたりしていた。 から、 でいない。 屋敷町もあって、多少、城下としての落着きもあるのであったが、婆はまだ、そこへは足を踏ん 掘り出 大工は家を組み、 した土の山は、 、大工の這入っているうちに、もう白粉の女が、暖簾の陰で眉を刷いていて、どんどんと、土車で運ばれてゆく。そうして、葭や蘆が埋ってゆくそば

そして、昨日今日、急拵えにできかかっている新開地を見て、江戸の全体を考えているので、

で、削ぎ竹を抑えに打ち、入口にのれんを掛けて、そこから一本の小旗が出ている。堀りかけている空堀の橋のたもとに、ふとみると、一軒のほったて小屋がある。四ひどく落着かないのであった。

四方は蓆張り

見ると、

と書いてある。

濯物の下にほそい脛をかかえて、往来をながめていた。 った。竿を借りて、 こ。产を借りて、抓み洗いをした着物を小屋の横に干し、水楽のびた銭一枚を、湯番にわたして 、洗いをした着物を小屋の横に干し、それの乾くあいだ、襦袢一枚で、洗湯番にわたして、ばばは、湯にはいった。 汗をながすのが目的ではなか

巻

時々、干竿の着物を手で触ってみる。陽が強いのですぐ乾きそうに思われたが、なかなか乾か

ないのである。

往来から見えないように、銭湯小屋の陰に、いつまでも縮まっていた。 襦袢一枚に、湯巻の上へ帯を巻いたきりで、これを待っているので、見得を知らないばばも、

すると、往来の向う側で、

「幾坪あるのだい、この地所は ――安けれやあ相談に乗ろうじゃないか」

「高いなあ。すこし、べら棒じゃないか」 「総坪で、八百坪からござんすよ。値だんは、申し上げたより負かりません」

「どういたしまして、土盛りの人足賃だって、安かあございません。——それにサ、もうこの界

隈には地所はありませんぜ」

空

坪だってありませんや。——もっとも、ずっと隅田川の河原寄りなら幾らかありやすがね」 「ところが、葭の生えているうちから、みんなあばき合いで、買手を待っている地所なんざ、「なあに、まだ、あの通り埋立てているじゃないか」

「ほんとに、八百坪あるのかい、この地面は」

「だから念のために、繩を引いてごらんなすって」

その値だんを、往来ごしに聞いて、お杉ばばは、眼をまろくした。田舎なら米のできる田が何 四、五名の町人どうしで、頻りと、 土地売買の取引をしているのだった。

は、随所に見られるのであったが、 十枚という値が、ここの一坪か二坪の値だった。 かって行った。 「米も実らなければ、町中でもない地面を、 「――おやっ?」 江戸の町人のあいだには今、熱病のように、土地売買の思惑が行われているので、こんな風景 と、彼女には、不思議でならなかった。

そのうちに取引の相談がまとまったのであろう。埋地に立っていた人影は、手打ちをして散ら

どうしてここらの衆はあんなに買うのか」

で、ばばはその手を摑んで、ぼんやりと、そんな物を見ているうちに、 誰か背後へ来て、自分の帯へ手を入れた者があるの

「泥棒っ」

と、さけんだ。

小出しの財布はもう帯の間を抜けて、土工か駕かきらしい男の手に摑まれたまま、 往来の方へ

飛んでいた。

-泥棒じゃっ」

自分の首を持って行かれたように、ばばは追 心に縋って、 男の腰へしがみつい

「うるせえっ」 一つや二つ、顔を撲っても、容易にばばの手が離れないので、持て余した掻っ攫いは、 来てくだされッ。往来の衆ッ。盗人じゃっ

「――やっ?

いいながら、足をあげて、ばばの脾腹を蹴とばした。

れたものの、それと共に、襦袢一重になっても差していた小脇差を、抜きざまに酬いて、相逆だいていの老婆と心得たのがその小泥棒には不覚であった。うむうっ――と呻いてばば 相手の は仆

足くびを斬っていた。

「ア痛ててて」

財布を持った小泥棒は、 ちんばを曳いたままそれでも十間ばかり逃げたが、 夥 しい血がこぼ

れるのを見て、貧血して、往来へ坐ってしまった。

今、埋地で土地の手打をして、一人の乾児と共に歩いていた半瓦の弥次兵衛は、

そいつあこの間まで、部屋にごろついていた甲州者じゃねえか」

「そうのようです。財布を握っていますぜ」

半瓦は、そういうと、逃げかけるちんばの襟がみを抓んで、螽でも叩きつけるように、ている。甲州者はおれが捕まえているから、あの老婆を労って来い」「泥棒という声が聞えたが、部屋を出ても、まだ手癖がやまねえな。 ……おお彼方に老婆 ……おお彼方に老婆が仆れ

方へ拠り出した。

四

「財布はおれが奪り返して預かっている。 「親分、 そいつが、 婆さんの財布を持っている筈ですが」 としよりはどうした」

「たいして怪我もございません。気を失っていましたが、気がつくとすぐあの通り財布財布と喚



いております」

「そいつに、脾腹を蹴とばされたんで」 坐っているじゃねえか。起てねえのか」

「丑。杭を打て」半瓦は、小泥棒を睨めつけて、乾児の男へいいつけた。

「親分、それだけは、どうぞご勘弁を。以後は改心して、よく働きますから」 杭を打て――と聞くと甲州者の小泥棒は、刃物を当てられたより顫えあがって、

「ならねえ、ならねえ」

ひれ伏して、拝んだが、半瓦は首を振って、

その間に、走って行った乾児は仮橋普請をしている大工を二人連れて来て、

「この辺へ打ってくれ」

と、空地の中ほどを足で示して大工へいう。

ふたりの大工は、そこへ一本の杭を打ちこんで、

「半瓦の親分、これでようがすか」

「よしよし。野郎をそこへふん縛って、頭の上のあたりへ、板を一枚打ってくれ」

「そうだ」 「なにか、お書きになるので」

大工の墨つぼを借りて、それへ差尺筆で、

一ツ 泥棒一ぴき

ざらし、七日七晩きゅうめいさせ置候ものなり。 せんだって迄、半瓦の部屋の飯食い者、再度悪事のかど之有り候につき、雨ざらし陽

大工町

弥 次 兵 衛

墨つぼを返して、「ありがとう」

と、橋普請の大工や、近くで働いている土工たちへ頼んだ。「すまねえが、死なねえ程に、弁当飯のあまりでも、時々エサをやっといてくれ」

一同は口を揃えて、

「承知いたしました。たんと笑ってやりやしょう」

と、いった。

戦争ばかりしていて、民治や刑法がゆき届かないために、町人社会はそれ自体の秩序のために、 笑ってやるという事は、町人社会でさえ、この上もない制裁であった。年久しく武家は武 家と

こういう私刑の方法を持っていた。

職制や民治が体をなしかかっていたが、民間の旧習というものは、 余風が革まるものではない。 制や民治が体をなしかかっていたが、民間の旧習というものは、上ができたからといって、逮新興の江戸政体には、もう町奉行の組織だの、大庄屋制度をそのまま厳めしく延長したような

けれど、私刑の風などは、新開発の半途にある混雑な社会には、まだ当分あってもよいものと

302

「丑、そのとしよりへ、財布を返してやれ」

して、町奉行でも、べつにこれを取締ることはしなかった。

「かあいそうに、この年して、ひとり旅の様子じゃねえか。 半瓦は、それをお杉ばばの手へ戻してから、又、 ……着物はどうしたんだ」

「風呂小屋の横に、洗濯して、乾してありますが」

「じゃあ着物を持って、としよりを負ぶって来い」

「家へ連れて帰るんで?」

「そうよ、盗っ人だけ懲らしたってこのとしよりを捨てておいたら、又どいつかが悪い量見を起

さねえとも限るまい」

去ると、往来につかえていた人垣も、ぞろぞろと東西へ崩れだした。 生乾きの着物を抱え、彼女を背なかに負ぶって、乾児の男が、半瓦のあとに尾いてそこを立ち

五

日本橋は、竣工てからまだ一年も踏まれていなかった。

れ、そこにまだ新しい白木の欄干が架かっていた。後の錦絵などで見るよりも、そこの河幅はずっと広くて、両岸から新しい石垣の築出しが築か

「……痛い。うう痛い」 『がわいわいと市を立てている。 鎌倉船や、小田原船が、橋の際までいっぱいに這入って行った。その向う河岸に、魚くさい人

半瓦は、乾児の背から、時々聞える呻きをふり向いて、ばばは、乾児の背なかで、顔をしかめながらも、魚市県 魚市場の人声に何事かと、 眼をみはっ

生命に別条があるじゃなし、余り唸りなさんな

もう直きだよ、辛抱しねえ、

往来の者が、頻りと振向くので、こう注意したのである。

鍛冶町だの、槍町だの、紺屋町だの、畳町だの、職人色に町がわ それからは、おとなしくなって、ばばは嬰児みたいに、乾児の背へ顔を寝かせていた。 かれていた。大工町の半瓦の

二、三年前の大火以後、町の家は板屋葺になったが、その以前は、草葺屋根がおおかたであっ家は、その中でひどく変っていた。屋根の半分が瓦で葺いてあるのが、誰の眼にもついた。

弥次兵衛は往来に向った方だけ、瓦で葺いたので、

(半瓦、半瓦)と、それが通り名になってしまい、自分も得意だった。

うになり、又、土地の売買をやったりして、今では「懐」手をして「親分」という特殊な敬称をうで、人を御すのが上手、町人になって、屋根請負いを始め、やがて、諸侯の普請人足を請負うよ「江戸へ移住して来た初めは、弥次兵衛はただの牢人者だったが、才気と俠気が備わっているの

けている。

「親分」とよばれる特殊な権力家は、新しい江戸には今、彼のほかにも、簇生してきた。しかし

彼はその中でも顔のひろい「親分」であった。

武家の下風にある自分たちの味方の者としていた。 の者は、武家をさむらいと尊敬するように、彼等の一族をも「男伊達」と敬称して、むしろ

この男伊達も、江戸へ来てから、 風俗だの精神は大いに変化したが、江戸の町から発生した生

え抜きではない。足利の末の乱世には、もう茨組などという徒党があって――勿論それは男伊達

などとは敬称されなかったが、「室町殿物語」などによると、 巻ムズトシメ、黒革ノ脚絆ヲシ、同行常ニ二十人バカリ、熊手、「鉞」ナド担ウモアリテ……柄ハー尺八寸ニ巻カセ、二尺一寸ノ打刀モ同ジニ仕立テ、頭ハ髪ヲツカミ乱シ、荒繩ニテ鉢ソノ装束ハ、赤裸ニ茜染ノ下帯、小王打チノ上帯ハ幾重ニモマワシ、三尺八寸ノ朱鞘ノ刀、

(当時聞ゆる茨組ぞ、あたりへ寄るな、そして群集はそれを見ると、 物いうな)

その茨組は、 口には王義を唱えながら、時には、

と、怯じ怖れて、道をあけて通したほどな威勢であったとある。

(物奪り強盗は武士の慣い)

ぎに落ち、性骨のある者は、新開発の江戸という天地を見つけて、ここに起りかけてある文化になると、武家からも民衆からも追われてしまい、素質の悪いのは、山野に封じこめられて追剝稼む出かけ、市街戦の時には、乱破に化けて、敵へも味方へも節操を売りなどしたため、平和に、

(正義を骨に、民衆を肉に、義と俠の男らしさを皮にして---)

「帰ったぞ、どいつか、 新興男伊達なるものが、いろいろな職業や階級の中から今、名乗りをあげているのだった。 半瓦は、自分の家に入ると、大まかな町屋造りの奥へ向って、こう呶鳴った。 出て来ねえか。 ――お客さまをお連れ申しているのだ」

喧 河 原

よくよく居心地がよいとみえ、 お杉ばばが半瓦の家に起き臥しを始めてから、 月日はいつか

年半も巡っている。 その一年半の間、ばばは何をしていたかというと、体が、

(思わず長いお世話になりましたわいの。もうお暇をせにゃならぬ) がっしり癒ってからは、

と、今日は明日はと、いい暮して来たに過ぎない。

しかし、暇を乞おうにも、主人の半瓦弥次兵衛とは、めったに顔を合わすこともない。

いたと思えば

ず心がけているのだから、追っつけ、武蔵の居所をつきとめ、ばば殿に、助太刀しようというて いるのに) (まあまあ、そう気のみじかい事をいわずに、ゆるりと、敵をさがしなされ。身内の者も、絶え

初めのうちは、およそ江戸という土地がらや風俗を、忌み嫌っていた彼女も、この半瓦の家にそういわれると、彼女も亦、ここの軒から立つ気も失せる。 年半も過ごすうちに、

(江戸の人の親切さ)

を身に沁みて、

何という、気儘な暮し)

と、目を細めて、この土地の人間を眺めるようになっていた。

、親の金を蕩尽して逃げて来た極道者も、おととい牢屋から出て来た入墨者もいるが――それわけても、半瓦の家はそうだった。ここには百姓出の怠け者もいるし、関ケ原くず れの 牢 人

Ŕ

が弥次兵衛という戸長の下に、大家族式な生活を営み、ざッかけない、粗っぽい、極めて不しだ

らなー ―中にも整然たる階級を持って、

(男を磨きあう)

この六方者道場には、親分の下に兄哥があり、兄哥の下に乾児があり、その乾児のうちにも古という事を御神灯に立てて、一種の六方者道場を世帯としているのだった。

参新参の区別がやかましく、他の客分格だの、仲間の礼儀作法も、誰が立てたともなく、非常に

厳密であった。

と、弥次兵衛にいわれたところから、お杉ばばは、一間にあって、沢山ながさつ者の 洗濯 と(ただ遊んでござるのが退屈だったら、若い者の世話などみてくれると有難い)

か、縫物などを、お針子を集めて来ては、整理してやっている。

又、それが六方者道場の風紀を正すうえに役立った。 (さすがに、土の御隠居だ。本位田家とやらも、相当な家風を持った家筋とみえる) がさつ者は、噂し合った。お杉ばばの厳格な起居と家政ぶりは、ひどく彼等を感嘆せしめた。

こじりを突っ張って歩く男だての姿から来た町の綽名なのである。六方者ということばは、無法者にも通じる。柄の長い大小を突出し、 二本のから脛と、二本の

「宮本武蔵という侍が立ち廻ったら、すぐあのばば殿へ知らせてやれ」

半瓦の身内は、等しくこう心がけていたが、すでに一年半からになるが、その武蔵の名は杳と

してこの江戸には聞かなかった。

る。で、彼の持った武蔵観は、当然、お杉ばばの武蔵観であった。半瓦弥次兵衛は、お杉ばばの口から、その意志や境遇を聞いて、 甚だしく同情を抱いたのであ

「えらい婆殿だ。憎むべき野郎は武蔵とやらだ」

乾児が、彼に訊ねた。挨拶に出たりして、賓客に仕えるように、このばばを大事にした。 そうして彼は、お杉ばばのために、裏の空地へ一室を建ててやったり、家にいる日は、

「お客を大事になさるのはいいが、親分ともあろう者が、どうして、そんなに鄭重になさるんで

すかえ」

すると、半瓦はこう答えた。

んなに、自分の死んだ親には、親不孝だったか分るだろう」 「この頃おれは、他人の親でも年よりを見ると、親孝行がしたくなるんだ。……だから俺が、ど

町中の野梅は散った。 江戸にはまだ桜はほとんどなかった。 9

空

特家があって、まだ若木ではあるが、ことしはだいぶ蕾を持ったという。わずかに、山の手の崖に、山桜が白く見られる。近年、浅草寺の前に、桜の並木を移植した奇 「ばば殿、きょうは一つ、浅草寺へお供しようと思うが、行く気はないか」 「おう、観世音は、わしも信仰じゃ。ぜひ伴れて行ってたも」 半瓦の誘いに、

と、いうので、お杉ばばも加えて、乾児の菰の十郎に、お稚児の小六の二人に弁当など持たせ

て、京橋堀から舟に乗った。

生れつきに出来ているような小男で、櫓はうまい。 お稚児といえば優しげに聞えるが、これが向う傷のある肉のかたじまりな、いかにも喧嘩早い

堀から隅田のながれへ漕ぎ出すと、半瓦は、重筥を開けさせて、

と、杯を持って、「舷」から手をのばし、大川の水を杯洗にしてさっと雫を振って婆へ酌した。遊山のつもりで、一献飲りましょう」ので、浅草寺へでもお詣りして、何か一つ、今日は善い事をして帰ろうと思うのだ。……だから 「おばあさん、実は今日は、わしのおふくろの命日なのです。墓詣りといっても、故郷は遠国な

お杉はふと、自分にもやがて来る命日を考えた。それはすぐ、又八を考える事でもあった。 少しは飲けるでしょう。水の上だが、わしらがついているから、安心して酔うておくんな

「そうか。……それはそれは優しいお心がけじゃな」

「久しゅう、酒も飲まなんだ。――酒はたべても、このように、暢々とはのう」「六方者は、噓や飾りの儀式が大嫌い。それに此方人は、門徒だから、物知らず「御命日なのに、酒をのんでも、悪いことはござりませぬか」 「久しゅう、酒も飲まなんだ。 物知らずでいいのです」

お杉は、杯を重ねた。

た森が折り重なり、河水に樹の根の洗われている辺りは、水もまっ蒼な日陰の瀞になっている。隅田宿の方から流れてくるこの大河は満々として広かった。下総寄りの岸の方には、鬱蒼とし

が啼きぬいて」

「梅雨頃には、昼間も、昼ほととぎすが啼きぬくが……まだ時鳥は」

「そう、欣んでくれると、わしも有難い。さあ、もっと重ねぬか 「ご返杯じゃ。……親分様、きょうは婆もよい供養のおこぼれにあずかりましたわえ」

すると、櫓を漕いでいるお稚児が、羨ましそうに、

「親分、こっちへも、少し廻してもらいてえもので」

「てめえは、櫓がうまいから連れて来たのだ。行きに飲ますとあぶねえから、帰りにはふんだん

に飲め」

「お稚児、あそこで網を打っている船へ寄せて、肴を少し買い込め」「我慢は辛いものだ、大川の水がみんな酒に見える」

心得て、 お稚児が漕ぎよせて、漁師にかけ合うと、なんでも持って行きなされと、 漁師は船板

を開けてみせる。

山国で老いたお杉ばばには、 目をみはるほど珍しかった。

えびや鯰もある。船底にバチャバチャ生きている魚を見ると、鯉、 **鰤がある。すずき、鯊にくろ鯛がある。手長**

半瓦は、白魚をすぐ醬油につけて喰べ、彼女にもすすめたが、

「生ぐさは、よう喰べぬ」

と、ばばは首を振って、おぞけをふるった。

堂の茅葺屋根が見えた。かは間もなく、隅田河原の西へついた。河原を上がると、 波打ち際の森の中に、 すぐ浅草観音

巻

の

人々は河原へ降りた。ばばは少し酔っている。年のせいか舟から足を移すのに、 よろめく気味

であった。

空

「あぶない、手をとろう」 半瓦が手をひくと、

「なんの、止めてくだされ」

婆は手を振る。

するとその河原の石ころを起して、蟹でも捕まえているらしい子供が、稀く、から従いた。河原は渺々として眼の限り石ころと水であった。年より扱いが元から嫌いな性なのである。乾児の菰の十郎とお稚児の小六は、 舟をつないで後

河から上がった

珍しい人影を見て、

「おじさん、買っとくれ」

「ばばさん、買っとくれよ」

と、半瓦とお杉のまわりに集まって来て、うるさく強請む。

「なんだ蟹か。蟹なんざいらねえよ」

子供が好きとみえて、半瓦の弥次兵衛はうるさがりもせず、

子供等は、一斉に、

「蟹じゃないよ」

「矢だよ、矢だよ」

「なんだ、鏃か」 と争っていう。

「ああ、鏃だよ」

「浅草寺のそばの藪に、人間や馬を埋めた塚があるよ。お詣りする人は、そこへこの鏃を上げて

拝むよ。おじさんも上げてくれよ」

「鏃は要らない。だが、銭をやるからいいだろう」

家から、子供たちの親が出て来て、銭だけを取り上げて行った。 半瓦が、銭を与えると、子供たちは又、散らかって、鏃を掘っていたが、すぐ附近の藁屋根の

「ちぇっ」

半瓦は、嫌な気がしたとみえ、舌打ちして、眼をそらしたが、ばばは恍惚と、広い河原の眺め

と、着物の裾をふくろにしたり、ふところに入れたり、手に持っている物を示して、

に見惚れていた。 「この辺から、 あのように鏃がたんと出るところを見ると、この河原にも、 合戦があったのじゃ

ろうのうし

くは、天正の頃、太田道灌の一族だの、千葉氏の一党が、幾たびも興り、幾度も亡んだ跡が新田武蔵守が小手指ケ原の合戦から駈け渡って、足利方の矢かぜを浴びたのもこの辺だし― 「よくは知ら 源頼朝が、伊豆から渡って、 ぬが、荏土の庄といわれていた頃、戦がたびたびあったらしいな。 関東の兵をあつめたのもこの河原。 ――又、南朝の御世の頃、たらしいな。遠くは、治承の 近

この先の石浜の河原だそうな」 話しながら、 歩き出すと、菰の十郎とお稚児のふたりは、もう浅草寺の御堂の縁へ行って、

巻

の

に腰かけている。 見れば、寺とは名のみの、ひどい茅葺堂が一字と、僧の住むあばら屋が、 堂の裏にあるだけに

先

過ぎない。

空

「……なんじゃ、これが江戸の衆がよくいう金龍山浅草寺かいな」

ばばは、一応失望した。

その喬木を仆す斧の音が、 ひたひたと寄せていた。 「やあ、 奈良京都あたりの古い文化の遺跡を見た眼には、余りにも原始的であった。 大川の水は、洪水の時、 御堂を囲む木は皆、千年も年経ったような喬木であった。 森の根を洗って浸るとみえ、御堂のすぐ側まで、平常で 怪鳥でも啼くように、時々、コーン、コーンとひびく。 , A 支れ水が 何処かで

おいでなされ」

頭の上で、挨拶する声が聞えた。

と驚いて、ばばが眼をあげてみると、御堂の屋根の上に坐って、茅で屋根の修繕をしている観

音堂の坊主たちであった。

半瓦の弥次兵衛の顔は、こんな町の端れにも知られていると見える。下から挨拶を 返 しな が

5

「ご苦労様。きょうは、屋根でござりますかな」

は、巣へ持って行ってしまうので、雨漏りがして弱りますわい。 「はあ、この辺の木には、巨きな鳥が棲んでおりますでな、繕っても繕っても、茅をついばんで おやすみ下さいませ」 ……今降りますゆえ、 しばら

四

或 被 悪 人 逐如 日 虚 空 住のように、昼の明りが洩れてみえる。 神燈をあげて、堂の中へ坐ってみると、成程、これでは雨も漏ろう、壁からも屋根裏からも星

観念 音澗 毛力油

刑遭即 欲養王

まるにつれて、顔の形相も、 初めは低声であったが、そのうちに半瓦や乾児がいることも忘れ果てた有様で、朗々と声の高半瓦と並んだお杉は、袂から、数珠をとり出し、もう無想になって、普門品を称えていた。 ――衆中八万四千衆生、皆発無等々、阿耨多羅三藐三菩提心。巻を誦み終ると、打ちふるえる指に数珠を押し揉み、 段范観 々だ音 壞º力 物に憑かれたように変ってしまう。 南無大慈大悲観世音菩薩

それから又、遽に、声も体も沈せたまえ。武蔵を討たせたまえ」 「又八めが、よい子になり、本位田家の栄えまするよう」 声も体も沈めて、ひれ伏しながら、

なにとぞ、ばばが一念をあわれみたまい、

一日もはやく、武蔵を討たせたまえ。武蔵を討た

彼女の祈りが終った様子をさし覗いて、堂守の僧が、

「あちらへ、湯を沸かしておきました。渋茶などお上がり下さいまし」

半瓦も乾児も、 ばばのために、 しびれをさすりながら起ち上がった。

乾児の十郎は、

「もう、ここなら、飲んでもようございましょう」

許しをうけると早速、堂裏にある僧の住居の縁側に、 弁当をひろげ、 舟で買い求めた魚などを

焼いてもらって、

「この辺に、桜はねえが、花見に来たような気がするぜ」

た。

寄進の多くは、今彼がつつんだ程度の金か、それ以下の額であったが、中にたったひとり、ず

黄金十まい

ば抜けた篤志家がある。

しなの奈良井宿 大 蔵

「お坊さん」

ゴはいし

「さもしい事をいうようだが、黄金十枚といっちゃ当節大金だ。 いったい奈良井の大蔵というの

は、そんな金持かな」

「よう存じませんが、昨年、 年の暮に、ぶらりと御参詣なさいまして、関東一の名刹が、 このお

相はいたましい、 御普請の折には、 お材木代の端に加えてくれといって、置いて行かれましたの

「気持のいい人間もあるものだな」

のは、 があった。 枚も献納したということでございますが、世には、ふしぎな奇特人もあるもので……」 た。神田の明神へは、あれは平の将門公を祠ったもので、将門公が謀叛人などと伝えられている「ところが、だんだん聞きますと、その大蔵様は、湯島の天神へも、金三枚御寄進な さい ま し と――その時、河原と寺内との境の森を、向う見ずに、ばらばらと駈け込んで来る狼藉な跫音 甚だしいまちがいだ。関東が開けたのは、将門公のお力もあるのに――といって黄金二十

五.

「童どもっ。遊ぶなら河原で遊べ、寺内へ入って来て乱暴するじゃないっ」

「たいへんだよ、お坊さん」 駈け込んで来た子供らは、目高の群れのように、その縁側へと集まって来て口々に、番僧は、縁側に立って、こう呶鳴った。

「一人と四人で」 「何処かのお侍さんと、何処かのお侍さん達が、河原で喧嘩してるよ」

「刀を抜いて」

「はやく行ってごらんよ」

番僧たちは、 聞くとすぐ草履へ足を下ろして、

「又か」

と、呟いた。

すぐ駈け出そうとしたが、半瓦やお杉たちを顧みて、

なんぞというと、果し合いの場所になったり、誘き出しだの、撲り合いだの、絶えず血の雨のふ「お客様方、ちょっと失礼いたします。なにせい、この辺の河原は、喧嘩には足場がよいので、 る所でしてな。 子供たちはもう、河原の森の際へ行って、なにか声をあげて昻奮している。所でしてな。――その度に、お奉行所から始末書を求められますので、見届けておかぬと」

斬合か」

嫌いでない半瓦の乾児二人も、その半瓦も、駈けて行った。

おそかったので、彼女がそこへ出てみた時は、なにも、それらしい者は見えなかった。 お杉ばばは、一番後から森を抜けて、河原境の樹の根に立って見渡した。

-だが、彼女の足が

の際や木の間がくれに、しいんと、生唾をのんでしまって、声一つ立てる者がない。又、あれほど躁いでいた子供も、駈け出した大人も、その他この界隈の漁村の男女も、皆、森

·····?

婆はいぶかしく思ったが、すぐ彼女も、同じように息をひそめ、ただ凝視の眼を、じっとすえ

ていた。

の影が、その天地を独り自由に翔けている。見わたす限り、石ころと水ばかりな広い河原であった。 水は澄んだ空と同じ色をしていた。燕

体がひどく派手やかであった。そして、かくも大勢の眼に、木陰から見られているのを、 見ると今、そのきれいな流れと、石ころの道を踏んで、彼方から澄ました顔をして歩いて 知って

「……ア。 7

と、その時、ばばの近くにいた傍観者が、低い声をもらした。

か知らずにいるのか、いっこう無関心らしく、ふと、立止まった。

ばばも、はっと、眼をひからした。

りふせられていた事がわかった。喧嘩の勝敗はもうそれでついていたのである。四人に対して、 ところが、まだその四人のうちには、薄傷の程度で、多少呼息のある者があったとみえ、一人の若い武者羽織の方が、決定的に、勝ちを占めたものらしい。 牡丹色の武者羽織が立ちどまった所から、約十間ほど後に、四つの死骸が、算をみだして、斬

色の武者羽織が、ハッと振向くと、そこの死骸から、 人魂のように、血まみれな一箇が、

「まだッ、まだッ。勝負はまだだっ。逃げるなっ」 と、追いかけて来た。

武者羽織は、向き直って、尋常に待ちかまえていたが、火の玉のような負傷が、

「まだ、お、お、 おれはまだ、生きてるぞっ」

喚いて、斬りかかると、此方は、一歩退いて、相手を泳がせ、

「これでも、まだかっ」

ないほどな技であった。「物干竿」とよぶ長剣であったが、肩越しに、柄を持った手も、斬り下げた手元も、眼には見え「物干竿」とよぶ長剣であったが、肩越しに、柄を持った手も、斬り下げた手元も、眼には見え 西瓜を割ったように、人間の顔が斬れてしまった。斬った刀は、武者羽織の背中に負っていた。

刀を拭っている。

それから、流れで、手を洗っている。

にも、凄愴なものに打たれて、中には観ているだけで、蒼ざめてしまった者もある。 度々、この辺で、斬合を見つけている者でも、その落着きぶりに、嘆息をもらしたが、又余り

とにかく誰も、その間、一語を発しる者もなかった。

手を拭いた牡丹色の武者羽織は身を伸ばして、

|岩国川の水のようだ。……故郷を思い出すなあ」

ていた。 と、つぶやいて、しばらく、隅田河原のひろさや、水をかすめて飛び翻る燕の白い腹を見送っ

―やがて彼は、急に足を早めた。もう死骸が追いかけて来る憂いはなかったが、後の面倒を

319 一河原の水瀬に、彼は、一艘の小舟を見つけた。櫓も付いているし、考えたらしい。 ろう。それへ乗って、繋いでいる綱を解きかけるのであった。 恰好な乗物と思ったのであ

半瓦の乾児の、菰の十郎とお稚児の小六の二人だった。

こう木の間からいきなり呶鳴って、河原の水際へ駈け出して行き、

「やいっ、侍」

卷

9

がこびりついていた。 と、咎めた。

「その舟を、どうする気だ」

「あたりめえだ。これは、俺たちの持舟だ」解きかけた繋綱を放して、その顔がにっと笑うと、「……いけないのか」 武者羽織の体には、近づくとまだ血腥いにおいが感じられた。袴にもわらじの緒にも、

返り血

空 児や菰の口を借りて、関東の勃興文化がいうのである。新将軍の威勢や江戸の土がい うの 「そうか。……駄賃をやったらよろしかろう」 「ふざけるな、俺たちは、船頭じゃあねえ」 たった今、そこで四人を一人で斬り捨てた侍に対して、こういう口がきける気の暴さは、お稚

であ

る。

悪かったとはいわない。

河原を下流の方へ歩き出した。 しかし、牡丹色の武者羽織も、 それに横車は押せなかったと見え、小舟から出ると、黙って又

「小次郎どの。 ――小次郎どのじゃないか」

お杉はその前に迫って立っていた。顔を見あわすと、小次郎は、やあといって、初めて凄愴な

青白さを、顔から捨てて笑った。

「いつであったか、そうそう、叡山でお目にかかった折、江戸へと聞いていたので、会いそうな「身を寄せている半瓦の主や若い者と、観世音へ参詣にの」「いたのか。こんな所に。——いや、その後は、どうしたかと思うていたが」

ものと思うていたが、こんな所でとは」

と、振りかえって、呆気にとられている菰やお稚児を眼でさしながら、

「では、あれが婆殿の連れの者か」

「そうじゃ、親分というお人は出来ている人間じゃが、若い者たちは、ひどくがさつ揃いでの」 ばばが小次郎と馴々しく立話しを始めたことは、衆目をそばだたせたばかりでなく、半瓦の弥

次兵衛も、意外であった。

で、半瓦はそれへ来て、

「なにか唯今、乾児の者が、不作法を申しあげたらしゅうございますが」

と、丁寧に詫び、

「てまえどもも、もう帰ろうとしている所、何ならば、お急ぎの先まで、舟でお送り申しましょ

と、すすめた。

かんな 骨

__

帰りの小舟の中。

同舟という言葉があるが、ひとつ舟に身を託すとなれば、いやでもお互いに心の溶けあうもの

である。

新鮮な魚鱗もある。

それに、婆と小次郎とは、 以前からふしぎに、気心も合い、その後の話も積もるほどあって、

「相変らず、御修行かの」

と、ばばがいえば、

「そちらの大望はまだか」

と、小次郎が訊く。

んと知れないので――といえば、小次郎が、 ばばの大望とは、いうまでもなく「武蔵を討つ」事にあるが、その武蔵の消息が、この頃はと

「いや、昨年の秋から冬頃までの間に二、三の武芸者を訪れたうわさがある。まだ多分、江戸表

にいるにちがいない」 と、小次郎が力づける。

半瓦も口を出して、

「実は、手前も及ばずながら、ばば殿の身の上を聞いてお力添えをしておりますが、武蔵とやら

の足どりが今のところ皆目、分らねえので」

と、話は婆の境遇を中心としてそれからそれへ結びつき、

「どうぞ、これからご懇意に」

と、半瓦がいえば、

「わしからも」 と、小次郎は、杯を洗って、彼のみでなく、乾児たちへも、順々に廻して酌ぐ。

敬をはらった。又、半瓦の弥次兵衛は、自分の世話している婆の味方というので、肝胆を照らし 小次郎の実力は、たった今、河原で見ているので、打ち解けると、お稚児も菰も、無条件に尊

合うところがあり、婆は婆で又、多くの後ろ楯に囲まれて、

な老いさらぼうた者を、ようして賜もる志……何というてよいやら。これも観世音の御庇護でが「渡る世間に鬼はないというが――ほんに小次郎殿といい、半瓦の身内の衆といい、わしのよう

と、洟をかまないばかり、涙ぐんでいうのだった。

話がしめっぽくなりかけたので半瓦が、

時に小次郎様。 最前、 あなた様が河原で討ち果しなすった四人は、 あれはどういう人間ど 空 巻 の

もでござりますな」 と、訊ねると、待っていたように、小次郎が、それからの得意な雄弁であった。

「アア、 あれかーー」

さらば隅田河原に来い、幾名とでも立対って、巌流が秘術と、物干竿の斬れ味を見せて進ぜるとおると、いつも横合から口をさし挿み、軍学上の事ばかりか、剣に就いても小賢しくいうので、「あれは、小幡の門に出入りする牢人で、先頃から五、六回ほど、わしが小幡を訪れて議論して あれは、小幡の門に出入りする牢人で、先頃から五、六回ほど、と、先ず最初は事もなげに一笑して、

いったところ、今日五名して待つというので出向いたまでです。……一人は立合うとたんに逃げ

と又、肩で笑う。

おったが、いやはや、江戸には、口程もないのが多くて」

「小幡というのは?」 と、訊ね返すと、

「知らんのか。甲州武田家の御人小幡入道日浄の末で一 今では秀忠公の軍学の師として、門戸を張っておる」 勘兵衛景憲。 大御所に拾い 出さ

「アアあの小幡様で」

そして心の裡で、 と、半瓦は、そういう名だたる大家を、まるで友達のようにいう小次郎の顔を、 見まもった。

(いったいこの若い侍は、 と、思った。 まだ前髪でいるが、どんなに偉いのか?)

てである。 六方者は、 単純である。市井の事々は複雑だが、その中を、単純に生きようというのが、男だ

半瓦はすっかり、小次郎に傾倒してしまった。

(この人は偉い)

と思うと、こういう持前の男だては、一本槍に惚れこんでゆく。

「いかがでしょう一つ」

と、早速にも、相談であった。

「てまえどもには、しょッ中、ごろついている若い奴らが四、五十人はおります。裏には空地も

あるし――そこへ道場を建ててもよろしゅうございますが」

と、小次郎の身を自宅で世話をしたいらしい意嚮を漏らすと、

おるが、その方の義理もあるから、急に身を移すわけにもゆかぬ。 れて、弱っているのだ。自分は、千石以下では奉公せぬ所存で、まだ当分は 1て、房っているのだ。自分は、千石以下では奉公せぬ所存で、まだ当分は──今の邸に遊んで「それは、教えてやってもいいが、わしの体は、三百石での、五百石でのと、諸侯から袖を引か ――そうだな、 月に三、 四度

と、いう。

ぐらいならば、教授に出向いて遣わそう」

単純でない伏線で自己宣伝が潜んでいるが、それを嚙みわけないのである。 それを聞くと、半瓦の乾児は、いよいよ小次郎を大きく買った。小次郎のことばには、常に、

「それでも結構です。ぜひ一つお願い申したいもので」

辞を低くして、

「又、お遊びに」

と半瓦がいえば、お杉ばばも、

「待っていますぞよ」

と、小次郎のことばをつがえた。

小次郎は京橋堀へ舟が曲る角で、

「ここで降ろしてくれ」 と、陸へ上がった。

小舟から見ていると、牡丹色の武者羽織は、すぐ町中の埃にかくれてしまった。

「たのもしい人だ」

「あれが、真の武士じゃろう。あのくらいな人物なら、五百石でも、大名の口がかかりましょうと半瓦はまだ感心していたし、ばばも、口を極めて、

わえし

と、いった。

そして、ふと、

「せめて又八も、あの位に、人間が出来てくれれば……」

と呟いた。

それから五日程後、小次郎はぶらりと、半瓦の家へ遊びに来た。

四、五十名もいる乾児が、代る代る彼のいる客間へ、挨拶に出て来た。

「おもしろい生活をしておるものだな」

小次郎は、そういって、心から愉快になったらしい。

「ここへ、道場を、建てたいと思いますが、ひとつ地所を見てくださいませんか」

と、半瓦は、彼を誘って、家の裏へ連れ出した。

そこには、紺屋があって、染め上げた布を、たくさんに干していた。その地所は、二千坪ぐらいの空地だった。 半瓦が貸し

ているので、いくらでも広く取れるというのである。

「ここなら、往来の者が、 立ちもすまいし、道場などは要るまい。野天でいい」

「でも、雨降りの日が」

る。それをよく承知しておいてもらわんと困るが……」 は、柳生や町の師匠などより、うんと手荒いぞ。 「そう、毎日は、わしが来られないから、当分、野天稽古としよう。……ただし、わしの稽古 ――下手をすれば、片輪もできる。死人もでき

「元より、合点でございます」

半瓦は、乾児を集めて、承知の旨を誓わせた。

伊達者の中にまた一倍の伊達者が加わった」権古日は、月三回、三の日と極めて、その日になると、半瓦の家へ小次郎の姿が見えた。

その小次郎が、枇杷の長い木太刀を持って、と、近所では噂した。小次郎の派手姿は、何処にいても、人目立った。

次!」

と、呼ばわりながら、紺屋の干場で、大勢に稽占をつけている姿は、 なおさら、目ざましかっ

ず、片肌ぬぐと、眼を奪うような桃山刺繍の襦袢を着、掛け襷にも、紫革を用いて、いつになったら元服するのか、もう二十三、四歳にもなろうというのに、相変らず前髪を捨て

「枇杷の木で打たれると、骨まで腐ると申すから、それを覚悟でかかって来い。

それに稽古とはいえ、この指南者は、少しも仮借しないのだ。きょうまでにこの空 地の 道場身装の艶やかなだけに、言葉の殺伐なのが、よけい凄くひびく。 身装の艶やかなだけに、、、来ないか」

は、稽古初めをしてから三回目だが、半瓦の家には一人の片輪と、四、五人の怪我人ができて、

奥で唸って寝ている。

「――もう止めか、 誰も出ないのか。 止めるならわしは帰るぞ」

例の毒舌が出始めると、

「よしっ、一番おれが」

と、溜りの中から、ひとりの乾児が、口惜しがって立ちかけた。

たばってしまった。 小次郎の前へ出て来て、木剣を拾おうとすると、 ぎゃっと、 その男は、 木剣も持たずにへ

小次郎は、そういって、周りにいる三、 剣法では、 油断というものを最も忌む。 四十人の顔を見まわしている。皆、 ――これはその稽古をつけたのだ」

生唾をのんで、彼

の厳しい稽占ぶりに顫いた。

へたばった男を、 井戸端へ担いで行って、

水をかけていた乾児たちは、

「だめだ!」

「死んだのか」

「これ位な事に恐れるようでは、剣術の稽古などはしないが 後から駈け寄る者もあって、がやがや騒いでいたが、小次郎は、 見向きもしなかった。 お前らは、六方者だの伊達者

だのといわれて、ややもすると、喧嘩するではないか」 草足袋で、空地の上を踏んで歩きながら、彼は講義口調でいう。

まうのだろう。女出入りや意地張りの、ツマらぬ事には生命も捨てるが、大義に捨てる勇を持た触ったといってはすぐに抜き合うがだ――いざ、改めて、真剣勝負となると、体が固くなってし 「――考えてみろ、六方者。おまえらは、足を踏まれたからといっては喧嘩をし、刀のこじりに ----なんでも、感情と鼻っぱりで起つ。 ----それじゃあいかん.

小次郎は、胸を伸ばして、

沈み込み、不意を襲った男は前へもんどり打った。 「やはり修行を経た自信でなければ、ほんものの勇気でない。さあ、起ってみろ」 その広言を凹ましてやろうと、一人が後ろから撲りかかった。しかし、小次郎の体は地へ低く

巻レ

3。

叫んだままその男は坐ってしまった。枇杷の木剣が、

腰の骨に当った時、がつ

んといっ

-痛えっ」

「――もう今日は止め」

ぶざぶと手を洗っても、死人には、気の毒という一言もいわなかった。——そして、肌を入れる た乾児が、井戸の流しに、こんにゃくみたいに白っぽくなって死んでいたが、その顔の側で、ざ小次郎は、木剣を拋り出して、井戸端へ手を洗いに行った。たった今、自分が木剣で撲り殺し

今夜案内せぬ 「近頃、たいへんな人出だそうだな、葭原とやらは。……お前たちは皆、明るいのだろう。 カ 誰か

と、笑っていった。

空

Д

街いとも見えるが、率直だともいえる。小次郎のそういう気性を、生遊びたい時は、遊びたいというし、飲みたい時は、飲ませろという。

る、 いとも見えるが、率直だともいえる。小次郎のそういう気性を、半瓦はいい 方 に買ってい

「葭原をまだ見ねえんですか。そいつあ一度は行って見なくちゃいけねえ。手前がお供をしても と、弥次兵衛は乾児のお稚児と菰の両名に金を預けて、いが何しろ死人が一人出来ちまって、そいつの始末をしてやらなけれやなりませんから――_

「ご案内してあげ

と、小次郎に付けて出した。

出かける際、彼等は親分の弥次兵衛からくれぐれも、

といわれて来たが、門を出るとすぐ忘れて、「今夜は、汝たちが遊ぶんじゃねえ。先生のご案内をして、よく観せてお上げ申すのだぞ」

「なあ兄弟、こういう御用なら、毎日仰せつかってもいいなあ」

「先生、これから時々、葭原が見てえと、仰っしゃっておくんなさい」

と、はしゃいでいる。

「はははは。よかろう、時々いってやる」

小次郎は先に歩む。

っと夜は明るいが―――と江戸へ来て一年の余になる小次郎でも、まだ足元が不馴れだった。 陽が暮れる途端に、江戸は真っ暗だった。京都の端にもこんな暗さはない。 奈良も大坂も、

「廓へ提燈なんぞ持ってゆくと笑われますぜ。先生、そっちは堀の上を盛りあげてある土手だ。「ひどい道だ。提燈を持って来ればよかったな」

下をお歩きなさい」

「でも、水溜りが多いではないか」 今も葭の中へ辷って、草履を濡らした」

堀の水が、忽然と、赤く見え出した。仰ぐと、川向うの空も赤い。一廓の町屋の上には、

「先生、あそこです」

のような晩春の月があった。

「ほう……」

眼をみはった時、三人は橋を渡っていた。 小次郎は渡りかけた橋をもどって、

と、杭の文字を見ていた。

「この橋の名は、どういうわけだな」

「おやじ橋っていうんでさ」

「それはここに書いてあるが、どういうわけで」

「庄司甚内ってえおやじがこの町を開いたからでしょう、鄭で流行っている小唄に、こんなのが

ありますぜ」 拡の十郎は、

廓の灯に浮かされて、

低い声で唄い出した。

その一節のなつかしやおやじが前の竹れんじ

おやじが前の竹れんじ せめて一夜と契らばやおやじが前の竹れんじ

いく世も千代も契るもの

ちぎるもの……

仇にな引くな

「先生にも、貸しましょうか」 切 n ぬ袂を

屑

「何を」

と、お稚児と菰のふたりは、茜染の手拭を払って、頭から冠った。「こいつで、こう顔を隠してあるきます」

「なる程」

と、小次郎も真似て袴腰に巻いていた小豆色の縮緬を、 前髪のうえから被って、顎の下にたっ

ぷり結んで下げた。

「伊達だな」

「よう似合う」

橋を渡ると、ここばかりは、 往来も燈に染まり、 格子格子の人影も、 織るようであった。

五

客が割って入ると、鈴の音を聞いて、遊女たちが、窓格子まで寄って来た。茜染の暖簾や、紋を染めぬいた浅黄の暖簾などもある。或る楼の暖簾には、暖簾から暖簾へ、小次郎たちはわたり歩いていた。 鈴がついていて、

「先生、隠したってもうだめですぜ」

「なぜ」

「初めて来たと仰っしゃいましたが、今、這入った楼の遊女の中で、先生の姿を見ると、声を出 て好風の陰へ、 **菰もお稚児も、そういうが、小次郎には覚えがなかった。** 顔をかくした女があった。もう泥を吐いておしまいなせえ」

垄

恣

「空恍ぼけたって、もういけません。登楼りましょう、今の楼へ」「はてな。どんな女が……?」 「まったく、初めてだが」

"登楼ってみれば分るこってさ」

今出て来たばかりの暖簾の内へ、二人はもう引っ返している。大きな三ツ柏の紋を三つに割

つ

て、端に、角屋としてある暖簾であった。

三人が通ったのは、往来に向いた二階の広座敷であったが、前の客の残肴やら鼻紙などが、る。なんの煤みもなければ床しさもない。家具も襖も、すべてが目に痛いほど新しかった。柱も廊下も、寺のように大まかな建築だが、まだ縁の下には枯れない葭が埋まっているので であ ま

だ掃きもせず散らかっている。

寄が来て、毎晩、寝る間もない忙しさで、こんな事が三年も続いたなら死ぬかも知れませんとい 下働きの女たちは、まるで女の労働者のように、ぶっきら棒にそれを片づける。お直という年

「これが遊廓か」 と、小次郎は、 夥しい天井のふしだらけなのを眺めて、 ##ただ

「いや、殺伐な」

ざいますよ」 「これはまだ仮普請で、いま裏の方に、伏見にも京にもないような本普請にかかっているのでごと、苦笑した。するとお直は、

と、弁解する。そしてじろじろ小次郎を見ながら、

「お武家様には、どこかでお目にかかっておりますよ。そうそう昨年、 私たちが伏見から下って

米る道中で」

甚内が、ここの主という事も分って、小次郎は忘れていたが、そういわれて、 小仏の上で出会った角屋の一行を思い出し、その庄司

「そうか。……それは浅からぬ縁だ」

と、やや興に入る。菰の十郎は、

と、揶揄して、その遊女をはやくここへ呼んでくれとお直へいう。「それやあ、浅くねえわけでしょう。何しろ、此楼には、先生の知っている女がいるんだから」 こんな顔の、こんな衣裳の、と菰が説明するのを聞いて、

「ああ、わかりました」

みると、なんとなく楼内が躁がしい。お直は立って行ったが、いつまで待っても、 連れて来ないのみか、旗とお稚児が廊下まで出て

「やいっ、やいっ」

「いないんでございますよ。あなたが呼べと仰っしゃった遊女が」 二人が手をたたいて、お直を呼び、どうしたのだと極めつける。

「おかしいじゃねえか、どうしていなくなったんだ」

「今も、親方の甚内様と、どうもふしぎだと、話しているのでございます。以前も、小仏の途中 お連れのお武家様と甚内様が話していると、その間に、あの娘の姿が見えなくなってしまっ

た事があるんでございますからね」

棟上げをしたばかりの普詣場であった。屋根は葺きかけてあるが、壁もない、羽目板も打って結合

-花桐さん、花桐さん」

遠くのほうで呼ぶ声がする。 山のように溜まっているかんな屑や、材木の間を、 何度も、

を探しまわる人影が通った。

老

の

朱実はじっと息をころして隠れていた。 花桐というのは、角屋へ来てからの自分の名である。

"……いやなこった。誰が出てやるものか」

空

初めは、客が小次郎と分っていたので、姿を隠したのであるが、そうしている間に、憎らしい

ものは、小次郎だけではなくなった。

清十郎も憎い、小次郎も憎い、八王子で、酔っている自分を馬糧小屋へ引きずりこんだ牢人者

(似ている人でもいい)

る。武蔵のような男を一 それはみんな男というものだ。男こそは仇だと思う。同時に彼女は又、男を探して 生 き て い毎夜のように、自分の肉体をおもちゃにして行く遊客たちもみな憎い。 ―である。

屑 は、小次郎たち三名の姿も見えている。

だが、遊客の中に、そんな者は見つからなかった。 「花桐っ……。 花桐」 もし似ている人に出会ったら、愛の真似事をしても、 彼女は思った。

求めつつ、恋しつつ、だんだんにその人から遠くなるばかりな自分が朱実にはわかっていた。

慰められるだろうと朱実は思っていた。

酒はつよくなるばかりだった。

普請場とすぐくっ付いている角屋の裏口で、
 親方の甚内の声が近く聞え、 やがて空地の中へ

た。多分、あきらめて帰ったものと見える。朱実は、ほっとして、顔を出した。 さんざん詫びをいわせたり、文何をいったあげく、三名の影は空地から往来の方へ 出て 行っ

台所働きの女が、頓狂な声を出しかけた。 ――あら花桐さん、そんな所にいたのけ?」

「.....叱っ」

「冷酒でひと口くれないか」 **失は、その口へ手を振って、 大きな台所口を覗きながら、

「……え。お洒を」

337 「ああ」

共に、白い面を仰向けにのみほした。 彼女の顔いろに怖れをなして、かたくちへ満々と注いでやると、朱実は、眼をつむって、器と

「うるさいね、足を洗ってあがるんだよ」 「……ア、何処へ。花桐さん、何処へ」 台所の女は、安心して、そこを閉めた。けれど朱実は、

土のついた足のまま、

有合う草履に足

をかけて、

「ああいい気もち」

赤い灯影に染まっている往来を、たくさんな男ばかりの影が、ふらふらと、往来のほうへ歩み出した。 ぞめき合ってながれていた。 朱

実は呪うように、

恣

0

なんだいこの人間たちは」 と、唾をして、そこを走った。

すぐ道は暗くなった。白い星が堀の中に浮いている。 ---じっと覗きこんでいると、後ろのほ

「……あ、角屋の提燈らしい。ばかにしてやがる、あいつらはあいつらで、ひとが路頭に迷ってうから、ばたばたと駈けて来る跫音がする。

垄

が、普請場の材本になりゃあ世話あないや。……誰がもう帰ってやるものか」 いるのをいい気になって、竹まで削らせて稼がせる気なんだろう。 ---そしてあたい達の血や肉

去った。髪についていたかんな屑が一ひら、闇の中にひらひら動いて行った。世間のあらゆるものが敵視されるのであった。朱実は、まっしぐらに、的もなく闇の中へ駈け

梟

したたかに小次郎は酔っていたのである。もちろん、その程度に、どこかの揚屋で遊びぬいた

挙句に違いない。

『肩……肩だおい……』

「両方から肩を貸せというのだ――・まっど、どうするんで? 先生」

た。 - 菰の十郎とお稚児の小六の肩にすがって、汚れた夜更けの色街を、蹌踉ともどって来るのだっ「両方から肩を貸せというのだ――‐もう、あるけない」

「およしなさい」 「あんな楼に、泊れるか。……おい、もういちど、角屋へ行ってみよう」「だから、泊ろうと、おすすめしたのに」

「だって、逃げ隠れするような女を、むりに、つかまえて、遊んだって……」 「……む。そうか」 「な、なぜ」 奴らを蹴落してみせる」

「惚れているんですか、 先生はその女に」

「ふ、ふ、ふ、ふ」

「何を思い出しているんで」

「おれは、女になど、惚れたことはないな。 ……そういう性格らしい。もっと、大きな野望を抱

いているから」

「先生の望みってえのは?」

「いわずとも知れている。剣を持って立つ以上、剣の第一人者にならずには措かない。

には将軍家の指南になるのが上策だが」

「治郎右衛門……あんな者が。……柳生とて惧るるには足らん。……見ていろ、わしは今に、彼 「生憎と……もう柳生家があるし……小野治郎右衛門という人も近頃、御推挙されましたぜ」

もう廓の灯は、後ろだった。「……あぶねえ。先生、自分の 「自分の足元の方を、気をつけておくんなさいよ」

土に柳の木が半分も埋まっているかと思うと、一方は低い蘆や葭の水たまりがまだ残っていて、通う人影もとんとない。行きがけにも悩んだ掘りかけの堀端へ出て来たのである。盛り上げた

い星の影が更けている。 りますぜ」

この堤から下へ、厄介者を担いで、菰とお稚児が降りかけた時だった。

叫んだのは、 小次郎であったし又、その小次郎に、突然、 振り飛ばされた両人でもあった。

「何者だっ」

と、小次郎は、堤の腹へ、仰向けに身を伏せながら、再び呶鳴った。

勢に踏み外して、これも、 その声を、びゅっと、虚空へ斬りながら、背後から不意を襲った男の影は、自分の足先を、 あっ――といいながら下の沼地へ飛びこんでしまった。 余

「わすれたか、佐々木」

と、何処かでいう。

「よくもいつぞやは、隅田河原で同門の四名を斬りすてたな」

べつな者の声である。

「おうっ」

の中、十人以上の人影が数えられた。 小次郎は、堤の上へ跳ね上がって、 彼がそこに立ったと見ると、すべてが、むらむらと刃を向そこらの声を見廻した。――見ると、土の陰、木の陰、蘆

けて、足元へ寄りつめてきた。

何名が死にたいのだ。望みの数だけ斬ってやろう。......卑劣者めッ、来いっ」 「――さては、小幡の門人どもだな。いつぞやは、五人で来て四人を失い、こん夜は何名で来て 小次郎の手は肩越しに、背なかの愛剣、物干竿の柄に鳴った。

平河天神と背なか合せに、 森を負っている屋敷だった。 旧家の草葺屋根へ、新しい講堂や玄関

342 勘兵衛は元、

を継ぎ建てて、 武田家の家人で、甲州者の中でも武門の聞えの高 小幡勘兵衛景憲は、 軍学の門人を取っていた。 い小幡入道日浄

田の滅亡後久しく野に隠れてい たが、 勘兵衛の代になって家康に召出され、 実戦にも出た の流れである。

が、 病体だし、もう老年なので、

(願わくは、年来の軍学を講じて、 余生を奉じたい)

今の所へ移ったのである。

幕府は、彼のためにも、 下町の一区画を宅地として与えたが、 勘兵衛は、

(甲州出の武辺者が、華奢な邸宅が軒を並べている間に住むのは、 と、辞退して、平河天神の古い農家を屋敷構えに直し、 いつも病室に閉じこもって、近頃は、 不得手でござればー

講義にも滅多に顔を見せない。

泉が多くいて、昼間 も梟の声がする程なので、 勘兵衛は、

隠士梟翁なは、

空

と自ら名乗り、

(わしも、あの仲間の一羽か)

わが病骨を、さびしく笑ったりしてい

病気は今でいう神経痛のようなものであった。 発作が起ると、 坐骨のあたりから半身が猛烈に

痛むらしい。

つも彼の側には、 先生、 少し はお 北条新蔵という弟子がつき添っていた。 よろしくなりましたか。 水でも一口 お あが りなされては」

子となって、少年の頃から、薪を割り水を担って、苦学して来た青年だった。 新蔵は、北条氏勝の子で、父の遺学を継いで、北条流の軍学を完成するために、 勘兵衛の内弟

「……もうよい。……だいぶ楽になった。……やがて夜明け近くであろうに、さだめし眠たかろ

う。やすめ、やすめ」

勘兵衛の髪の毛は、まっ白であった。体は、老梅のように痩せて尖っている。

「お案じくださいますな。新蔵は、昼寝しておりますから」

「いや、わしの代講ができる者は、そちの他にはない。昼間も、なかなか眠る間もあるまい……」

「眠らないのも、修行と存じますれば」

新蔵は、師の薄い背中をさすりながら、ふと、消えかける短檠を見て、油壺を取りに起った。

……はての?」 その顔に、灯が冴えた。 枕に俯つ伏していた勘兵衛が、ふと肉の削げた顔をあげた。

新蔵は、油壺を持ったまま、

「何でござりますか?」

と、師の眼を見た。

「そちには聞えないか……水の音だ……石井戸の辺りに」

オオ……人の気配が」

|今頃、何者か。……又、弟子部屋の者どもが、夜遊びに出おったのかもしれぬ| おおかた、そんな事かと存じますが、一応見て参りまする」

344

「よく、窘めておけ」

「いずれにせよ、お疲れでございましょう。先生は、おやすみなされませ」 夜が白みかけると、痛みもやみ、すやすや寝つく病人であった。新蔵は、師の肩へ、そっと寝

具をかけて、裏口の戸を開けた。

見ると、石井戸の流しで、釣瓶を上げて、二人の弟子が、手や顔の血を、洗っていた。

北条新蔵は、 それを見ると、はっとしたらしく眉をひそめた。革足袋のまま石井戸の側まで駈

「出かけたな! と、いった。 貴様たちは」

の

苍

け出して、

その言葉には、 あれほど止めたのに――と叱っても今は及ばないものを見た嘆息と驚きがこも

っていた。

涳

石井戸の陰には、 二人が背負って来た深傷の門人が、もう一名、今にも息をひきとりそうに、

呻いていた。

「あっ、新蔵殿」

手足の血を洗っていた同門の二人は、彼の姿を仰ぐと、男泣きに泣き出しそうな皺を顔に刻ん

で、

「……ざ、残念です!」

弟が兄に訴えるような、 甘えた嗚咽と、歯がみをして叫んだ。

撲らないだけがまだいい新蔵の声だっ「馬鹿っ」

「馬鹿者っ」

もう一度つづけて、

貴公たちに討てる相手ではないから止せと、再三再四、わしが止めたのになぜ 出 か け た

「でも……でも……。ここへ来ては、病床の師を辱しめ、隅田河原では、 同門の者を四名も討っ

も抑え、手も抑えて、黙って怺えていろと仰っしゃる新蔵殿の方が、ご無理というものです」 ―あの佐々木小次郎ずれを、何でそのままに置けるものでしょうか。……無理ですっ、意地

「何が無理だ」

年こそ若いが、新蔵は小幡門中の高足であり、師が病床にあるうちは、師に代って弟子達に臨

んでいる位置でもあった。

て来て、病床の師に、無礼な広言を吐きちらしたり、われわれに対しても、傍若無人な小次郎と いう男を、わしは怖れて捨てて措いたのではないぞ」 「貴公たちが出向いていい程なら、この新蔵が真っ先に行く。—— 先頃からたびたび道場へ訪れ

「けれど、世間はそうは受けとりません。――それに、小次郎は、師の事や、又兵学上の事まで

も、悪しざまに、各所でいいふらしているのです」

「いわせておけばいいではないか。老師の真価を知っている者は、 まさか、あんな青二才と論議

負けたと誰が思うものか」

「いや、あなたはどうか知りませんが、 われわれ門人は、 黙っていられません」

「では、どうする気だ」

「彼奴を、斬り捨てて、思い知らせるばかりです」

ために敗れて帰って来たではないか。――恥の上塗りというものだ。老師の顔に泥をぬるのは、 「わしが止めるのもきかずに、隅田河原では、四人も返り討ちにあい、又今夜も、かえって彼の

小次郎ではなくて、門下の各~たちだという結果になるではないか」 「あ、あまりなお言葉。どうして吾々が、老師の名を」

「では、小次郎を討ったか」

だ。成程、小次郎という者は、年も若い、人物も大きくはない、粗野で高慢な風 できない彼の実力だ。見縊ったら大間違いだぞ」れど彼が持っている天性の力――何で鍛え得たか――あの物干竿とよぶ大剣をつかう腕は、否定れど彼が持っている天性の力――何で鍛え得たか――あの物干竿とよぶ大剣をつかう腕は、否定 「今夜も、討たれたのは、恐らく味方ばかりだろう。……各~にはあの男の力がわから もあ る。 な しけ

喰ってかかるように、門下の一人は、そういう新蔵の胸いたへ不意に迫って来た。 ―だから、彼奴に、どんな振舞いがあっても仕方がないと仰っしゃるのですか。 あなたは、 小次郎が怖ろしいのでござるかっ」 それほ

「そうだ。そういわ れても仕方がない」

新蔵は、頷いて見せながら、

――すると、地に呻いていた深傷の男が、彼と二人の友の足元から苦しげに訴えた。「わしの態度が、臆病者に見えるなら、臆病者といわれておこう」

「水を……水をくれい」

「お……もう」

二人が、左右から搔い抱いて、釣瓶の水を掬ってやりかけると、 新蔵があわてて止めた。

「待て。水を遣っては、すぐこときれる」

二人がためらっている間に、負傷は首をのばして釣瓶にかぶりついた。そして水を一 口 吸う

と、釣瓶の中に顔を入れたまま、眼を落してしまった。

朝の月に、梟が啼いた。

新蔵は、黙然と立ち去った。

家に這入ると、彼はすぐ師の病室をそっと窺った。勘兵衛は昏々とふかい寝息の中に ある。 ほ

っと胸をなでて、彼は自分の居間へ退がった。

| 机の前に、腕を拱んで、新蔵は思わず太い息をついた――自分を措いて今、誰が老いたる師の坐って、自分の体に回ると、同時に夜ごとのつかれが一時に思い出された。 読みかけの軍害が机のうえに開いてある。害に親しむ間もない程、毎夜の看護である。そこへ

病床を見る者があろう。

空

張り、武を談じ、 道場には幾人かの内弟子もいるが、 孤寂な老師の心情をふかく酌んでいる者は少ない。 武骨な軍学書生である。 門に通う者はなおさら、威を ややともすれば、 ただ外部

ર્વ

との意地や争闘にのみ走りやすい。

すでに今度の問題にしてもそうであ

室へ彼を拉して、その不遜をなじると、かえって小次郎は大言を放ち、 僭越な議論をしかけて、勘兵衛をやりこめるために来たかのような口吻なので、弟子たちが、別ので、門人が彼を師の勘兵衛に会わせたところ、教えを乞いたいといった小次郎が、かえって、 自分の留守のまに、 佐々木小次郎が、何か兵書の質疑で、 勘兵衛に糺したいことが そのうえ、 あるという

(いつでも相手になる)

と、いって帰ったとかいうのが原因なのである。

小幡の軍学は浅薄なものだとか、甲州流などというが、あれは古くからある楠流や唐書の六韜を 直して、 原因は常に小さい、 よけいに感情が悪化したせいもあるが、 でッち上げたい しかし結果は大きなことになった。 かがわしい兵学だとか、世間で悪声を放ったのが、門人の耳に伝わっ それというのも小次郎がこの江戸で、

生かしてはおけぬ

北条新蔵は、その議が持ち上がると、最初から反対した。 と、小幡 の門人がこぞって、 彼に復讐をちかい出 したのであった。

- 題が 小 事
- 師が病中にある事。

- 相手が軍学者でない事。

それからもう一つ、老師の子息の余五郎が旅先にいることも理由として、

(断じてこちらから喧嘩に出向いてはならぬ)

会い、又、それにも懲りず衆を語らって、ゆうべも、小次郎を待ちぶせ、 って、約十名のうち生きて還ったのは幾人もない様子なのである。 と、戒めて来たのであった。 ---にもかかわらず、 小次郎を待ちぶせ、かえって手酷い目に遭先頃は新蔵に無断で隅田河原で小次郎と出

「……困ったことを」

新蔵は、消えかける短繁へ、何度も嘆息をもらしては、又、腕ぐみの中に面を沈めていた。

Ŧî.

方 7の事が、それと共に、頭にはっと"甦"った。ふと醒めると、何処かで騒がしい人声が幽かに聞える。すぐ門弟たちの寄合だと分った。机に肘をのせて俯つ伏したまま、北条新蔵はうとうとと眠ってしまった。 明け

――だが、声のする所は遠かった。講堂を覗いても誰もいない。

新蔵は、草履を穿いた。

て、同門たちに、ゆうべの惨敗を告げているのだった。 明け方、石井戸で傷を洗っていた二人は、白い布で腕を頸に吊っている。そして蒼白な面を並 見るとそこに、大勢してかたまっているのは、案のじょう、小幡軍学所の門下生たちだった。 裏へ出て、若竹のすくすくと青い竹林を越えると、垣もなく、平河天神の森へつづいてゆく。

「……では何か、上名も行って、小次郎一人のために、その半分までも返り討ちになったという

一人が問うと、

「残念だが、何分、彼奴が物干竿と称んでいるあの大業刀には、どうしても、刃が立たんのだ」

「村田、綾部など、ふだん剣法にも、熱心な男なのに」

「かえって、その二人などが、真っ先に割りつけられ、後もみな深傷薄傷。与惣兵衛など、ここ

まで気丈に帰って来たが、ひと口、水をのむと、井戸端でこときれてしまった……。かえすがえ

す無念でならぬ。……御一同、察してくれ」

いうものを、あれは歩卒の習ぶもので、将たる者の励む事ではないように思っている者が多かっ 暗然と、皆、 口をつぐんでしまう。平常、軍学に傾倒しているこの派の人々は、いわゆる剣と

坚

くの同門が返り討ちになってみると、痛切に、ふだん軽蔑していた剣法に自信のないのが悲しま それが端なくこんな事態を生じて、一人の佐々木小次郎に出会を仕掛けながら、二度まで、多

れてきた。

「……どうしたものか

と、そのうちに誰か呻く。

重い沈黙の上に、きょうも、梟、が啼いている。――-と、突然、名案が泛かんだように一人がい

「おれの従弟が、柳生家に奉公している。 柳生家へご相談して、お力を借りてはどうだろう」

「ばかな」

と、幾人もいった。

「そんな外聞にかかわることができるか。それこそ、師の顔に泥を塗るようなものだ」

「じゃあ……じゃあどうするか?」

ち伏せるなどという事はもうしない方がよい。いよいよ、小幡軍学所の名折れを増すばかりだ」 「ここにいる人数だけで、もう一度佐々木小次郎へ、出会い状をつけようではないか。暗闇で待

「では、再度の果し状か」

「たとい、何度敗れても、このまま退くわけにはゆくまい」

「元よりだ。……だが、北条新蔵に聞えると又うるさいが」

墨を借り、すぐ書面を認めて、誰か一名、小次郎の手許へ使いに立つとしよう」 「勿論、病床の師にも、あの秘蔵弟子にも、聞かしてはならない。――では、社家へ参って、筆

不意に、あッと口走って、身を退いた。 腰を上げて、大勢がひっそりと、平河天神の社家のほうへ歩みかけると、先に歩いていたのが

「……やっ?」

誰の足も皆、とたんに棒立ちに竦んでしまった。そして眼は一 ―一様に平河天神の拝殿の裏に

あたる――古びた廻廊の上へ、うつろに注がれた。

て、佐々木小次郎は、先刻から、森の集まりを見ていたのであった。陽あたりのよい壁に、青梅の実のついた老梅の影が描かれていた。 かれていた。 そこの欄に、片足をのせ

大勢の顔は、一瞬、胆を奪われて、蒼白い腑抜けになっていた。

そして、自分たちの眼を疑うように、廻廊の上に小次郎を見あげ、声を出すのはおろか、呼息

も止まったように、身を硬め合っている。

小次郎は、傲岸な微笑を含んでその人々を見下しながら、

返しがある筈と、卑怯者の後を慕って、この平河天神へ来て夜明けを待ちあぐねておった」 合しておられたな。――使いの世話には及ばん事だ。わしは昨夜の血の手も洗わず、いずれ揺り 「今、そこで聞いていれば、まだ懲りもせず、この小次郎へ果し状を付けるとか付けぬとか、談

の音も出ないので、又――例の壮烈な舌を呵して、一気に小次郎はこういったが、それに気を呑まれて、大勢の顔からぐ

「それとも小幡の門人らは、果し合いをするにも、大安とか仏滅とか、暦と相談でなければ出来 いのか。昨夜のように、相手が酩酊して帰る途中を待ち伏せして、暗討ちをしかけなければ刃

物はぬけないと申すのか」

て、背後を見せるような武芸者ではないぞ」 るもよし、佐々木小次郎は、汝らごときが、たとい鉄甲に身を固め、鼓を鳴らして襲せて来たと 「なぜ黙っている。生きている人間は一匹もおらぬのか。一人一人来るもよし、束になってかかー

T.....

うし

「どうしたっ」

「果し合いは、見合せか」

安の秘奥をきわめて、自ら厳流とよぶ一流を工夫した小次郎であるぞ。――書物ので聞け。よく耳に留めておけ、刀法は富田五郎左衛門が歿後の弟子、抜刀の技は、「聞け。よく耳に留めておけ、刀法は富田五郎左衛門が歿後の弟子、抜刀の技は、 って、六韜がどうの孫子が何といったのと、架空な修行しておる者とは、この腕が違う、胆が違 「骨のある奴はいないのか」

書物の講義ばかり齧び

片山伯耆守久

衝いて、敵の荒胆を挫ぐという――この行き方が、つまり軍学の極意と申すもの」 お、生きのびて逃げるを追い、突然、敵の本拠に現れ、足下らが善後策を講じる間もなく不意を げて、今朝あたりは、思い出してホッとしておる所だ。 が、ゆうべのような暗討ちに出会えば、たとい勝っても、大概な者なら逸早く安全な場所へ引揚 今、その実際を汝らに、身をもって教訓してつかわしたのだ。――なんとなれば、広言ではない 「貴様たちは、平常、小幡勘兵衛から何を学んでいるか知らぬが、 ――それを、斬って斬って斬り捲り、な 兵学とは何 ぞ や?

「佐々木は、剣術家ではあるが軍学家ではない。それなのに軍学の道場へ来てまで、小癪をいう

ろうも知れん。……ああ喉が渇いた。おい小六、十郎、気のきかぬ奴だ。水で も一杯 持って 米代講をしてしまった。この上、商売ちがいの蘊蓄を傾けては病人の小幡勘兵衛が挟持ばなれにな かりでなく、軍学にも達している事が、よく分ったろう。……あはははは。これはとんだ軍学の などと、誰やら何日か此方を罵倒した者もいたが、これで佐々木小次郎が、天下の剣豪である。

振向いていうと、拝殿の横で、へいと威勢のよい答えがする。蕉の十郎とお稚児の小六の二人

土器へ水を酌んで来て、だった。

「先生。やるんですか、やらねえんですか?」 小次郎は、飲みほした土器を、茫然としている小幡の門人達の前へ投げつけて、

「あははは。なんてえ面だ」「訊いてみろ。あのぼやっとした顔に」

小六が罵ると、十郎も、

て来られる面はないじゃア御座いませんか」「ざまあ見やがれ。意気地なしめ。……さ先生、行きましょう。どう見たって、一匹でも、蒐っ

で――物陰から北条新蔵は見送っていた。 ふたりの六方者を連れた小次郎の姿が、肩で風を切って、平河天神の鳥居の外へ消えてゆくま

「……おのれ」

新蔵はつぶやいた。

それと共に、苦汁をのむような堪忍の顫えが体のなかを廻った。 しかし今は

「今に見ろ」

と、念じて措くよりほか彼にはなかった。

出鼻を逆に衝かれて、拝殿の裏に立ち竦んでしまった大勢の者は、まだ一語を洩らす者もなく

しんと白けたまま、かたまっていた。

小次郎が弁じ立てて行ったように、まったく、彼等は小次郎の戦法に乗ぜられ て し まった の

一度、

同時に、心頭に燃えるほどだった彼等の怒りも、女々しい灰になってしまったらしい。誰あっ一度、臆病風に吹かれた顔に、最初の活気はもう甦って来なかった。

て、小次郎の後ろ姿へ向って、

(おれが)

そこへ、講堂の方から、仲間が駈けて来て、今、町の棺桶屋と、進んで追って行く者もなかったのである。 か ら棺桶が五つも届いて来ました

が、そんなに棺桶を注文したのでしょうか――と訊ねて来た。

口をきくのも嫌になったように皆、 それにも答える者がない。

「棺桶屋が、待っておりますが……」

と仲間の催促に、初めて一人が、

「まだ取りにやった死骸が届かぬから、 よく分らぬが、多分、 もう一つぐらい要るだろうから、

と、重たい口吻でいった。後のも頼んで、届いたのは、 物置へでも一時仕舞っておけ」

やがて棺桶は、 物置の中にも積まれ、 各人の頭の中にも、その幻影が、 個ずつ積まれた。

講堂で、通夜が営まれた。

病室へは知れぬように、極めてそっと送ったが、 勘兵衛もうすうすわけを知ったら < 見え

る。

芯

の

も臆病者に見えていた北条新蔵のひとみには、もう我慢ならないといったようなものが常に底に 激していた人々は、その日から殆ど啞みたいに黙って暗鬱になり、誰よりも消極的で、誰からそこへ佇いている新蔵も亦、何も告げなかった。しかし、何も訊かないのだ。

燃えていた。

空

そうして彼は独り、

(今に、今に)

と、来る日を待っていた。

梟が止まっているのを見つけた。その待つ日の間に、彼はふと、 或る日、 病師の枕元から見える巨きな欅の木の梢に、 沙 0)

その梟は、いつ眺めても、同じ所の梢にとまっていた。

夏を越えると、秋ぐちから、師の勘兵衛の病は篤くなった。余病が出たのである。昼間の月を見ても、どうかすると、その梟は、ほうほうと啼くのであった。

(近い、近い)

「無断で立ち去ります罪は、どうぞお宥し下さいまし」師の子息余五郎がここへ着くという前夜、遺書を残して 人の着くのが早いか、死の迎えが早いか――と憂えられていたこの四、五日であった。 どっちにせよ、北条新蔵には、自分の決意を果す日が近づいたのであった。彼は、もう明日は 勘兵衛の一子余五郎は旅先にあったが、変を聞いて、すぐ帰ると書面でいって来た。 と、梟の声が、 師の死期を知らせるように、新蔵には、聞えてならない。 遺書を残して小幡軍学所の門にわかれを告げた。

する 私も亦、 が、果たして、小次郎の首級をさげて、御生前に、再びお目にかかれるや否や。……万一にも、 「もはや明日は、 樹陰から、老師の病間へ向って、彼はいんぎんな挨拶を残して行った。 小次郎の手にかかり、返り討ちになった時は、一足先に死出の山路でお待ちしておりま 御子息余五郎様が御帰宅ゆえ、ご病間の事も、安心して去りまする。---

Document generated by Anna's Archive around 2023-2024 as part of the DuXiu collection (https://annas-blog.org/duxiu-exclusive.html).

Images have been losslessly embedded. Information about the original file can be found in PDF attachments. Some stats (more in the PDF attachments):

```
"filename": "NDA0NzcyMzUuemlw",
"filename decoded": "40477235.zip",
"filesize": 13475702,
"md5": "7678101369cc0fafae84a0034b070135",
"header md5": "516a28ee5467a5296576f16d53c5be55",
"sha1": "89888f39cadaefe84383f608ba8d70ff9ffc620b",
"sha256": "8217eae01bbb372b7eefddc10950405f1bed3545530de02be8f3c42d9748a815",
"crc32": 571581959,
"zip_password": "",
"uncompressed_size": 13579960,
"pdg_dir_name": "\u00eem\u2592\u255b\u256c\u03a3\u2569i 5_40477235",
"pdg main pages found": 357,
"pdg_main_pages_max": 357,
"total_pages": 360,
"total_pixels": 711431506,
"pdf_generation_missing_pages": false
```